

りしひとり京傳は原より潤筆をとれり作者稿本を書肆に與へ其冊子の幸にして行はれ書肆の利を得たるものは求めざれども先方より其禮謝として絹一疋或は縮緬一反など贈りおこせしものとぞ後は作料といふものを定めて作者の方へとる事となり戯作をもて營世とするもの出來たれば高金を取に至れり猶當りものある時は當り振舞として其書肆は作者畫工を伴ひ或は戲場見物に至り或は遊船に出る事もありぬ是稗史の流行盛にして板元の利を得る事百倍なる故也と三馬みづからの話なり雪丸おもへらく近會はかつて當り振舞といふ事を聞ず是全く稗史の行るゝ事中古よりは遙に衰たる故なるべしまた冊子の發市は吉日をえらみてするが常也此日書坊は蕎麥を出して作者畫工をはじめ刻摺製本の人々をもてなせり

○大人に二代目芝全交になるべしと勸る人ありければも業に拙して古人の名を汚さんもいかゞとて止けるよしをきけり著述の樂室通および馬笑が作の節節要に「式亭三馬儀古人芝全交の遺言につき此度より二代目の全交と可相成筈に候へ共いやしき妄作を以て古人の高名をけがすは恐れ有と存いまだ改名は不

仕差控罷在候猶不相替全交御と思召御一笑奉希候と記せり

○式亭常に詠する所の狂歌狂文視聽したるをいさゝか左に擧ぐ

早春鶯
のとなら婆鶯の聲よかんめり
よかんにめりてはらぬ一ふし

吉原花
わけのぼる花の吉野もよし原も
山口よりぞ咲はじめける
古今集序にいでまする聲色は
うたにかけあふ蛙鶯

首夏
おそ櫻ちり／＼ちりつまた／＼と
いふまに夏はちよいときなさい

鶯
汝か春をまちえしよりも鶯よ
我待得たる初音うれしな

月
村雲よ邪魔がしたくばかけぬけて
月の入べき山にふさがれ

山水
瓢もて飲たる胸のうちよりも
耳に涼しき山水の聲

仲の町うかるゝ客は大名氣

藝者もついの先箱で來る

人とは息をもいとへ白玉か

なんぞといふてきたがる露

深川雪

初といふ名ざしのありてあくるまでに

跡つけかぬる雪の中道

傾城にまことなしとはいけいせいに

うそいふ客やいひはじめけん

買込になる子は一の富が岡

こぼんの客にあたるのもあり

吉原秋夕

さびしさのいつこはあれと吉原に

うしろを見する秋の夕ぐれ

焚ものにそのたましひのかへるとき

いつきなんすはいはぬ傾城

ひとつ家のいにしへ五丁まちの今をおもへ

ば

日はくれて野にはといはで宿からば

浅草寺のうしろ也けり

ゆふへの雪の初馴染つもるを愛る傾城あれ

ばあしたの空の乙雪にうらやくそくの客も
あるらん

吉原雪

吉原の雪にばかりは夜もすがら

ふられて嬉し居つゞけ日和

福祿壽助六に相扮繪の藝

三芝居に花さく頃七福神の月の宴たはふれ

遊ふ君なく／＼しんぞ命も長いきの福祿さ

ん其鉢巻はへ

おつふりの長うたならで福祿壽

横鉢巻にひねる江戸おし

福祿壽

福祿壽などゝお名をばまをさすと

あたまでしれと長いきの人

朝顔

種ありて数はさまざまかはり咲

いく品玉かあさがほのはな

三味線にうかれた恵比須イヨありが

鯛の濱焼やくしや聲色

草摺をひきちぎり見よしもちを

ついたかげんのこしのつよよ

いけかたはさても妙法蓮華經

うつはに水のたいふだぶく

色も香もさてありがたし普賢像

小町櫻にまさる粧ひ

女給の装

ありがたいものはお真向様よりも

横むき様の外面如菩薩

同

木々もみな目に立田山ひとしほに

おにはを染て猶色まさりけり

同

世の中にたえて女のなかりせば

男の心のどけからまし

同

見たところ如才内儀がかこひもの

そが袖なひか袖なし羽折

同

家と子を守り袋ぞあらたなる

氏神よりもうちの神さま

奥女中

お宿下り親の病氣といひたてに

椎茸たばをだしに遣へり

女子の歌かるたをとる書に

おさへたをふりはらひけり歌がるた

とりてやはらのやはらかな手に

彩色をのちともいはず繪のことは

素人をちを専らにせよ

富士筑波武藏下總繪と文字と

狂々酒に酔たるを自身番の介抱する狂歌の装

番人のあふむはよく大屋殿の口まねすれど

も下戸の狸々酒中の趣をしらす

生酔に所をきけば狸々は

能ものいへどわからざりけり

菖蒲

池水にふせる菖蒲の草枕

なかねを風のひきおこすらん

洗濯におちたあかさか奴風

たらいのなかでふりだせく

吳竹によつや齋も鷹なりき

四十八たか風にはつたか

長いきの壽の字に猶も輪をかけて

長いきを吹萬年の龜

名歌をそねみし黒主が心の鬼の角だらひに

小町もさそふ水をや汲らん

いひかけしうそは雙紙の文字とくもに

あとかたもなくあらはれにけり

所作事の数は七色蒔絵

みなそれくにかはる味ひ

唐猫の人なれたるはあやしうなつかしき物
になんはべると常に愛たまひしは六條の院
の姫宮なり白猫の飼つけたるは馬からしい
程に可愛ざんすと毎になづけたりしは三浦
屋の薄雲なるべし

白黒の色になづむは鼠とる

思案の外の猫の妻戀

湘川路考にがほの聲
年はまだ若の浦浪なみならぬ

鼠負友呼ぶ濱村千鳥

かあいとなくはきぬくの明がらすにくい
と呼ぶは待宵のらうか齋かあいにくいは間
夫と客ま事とうそのうら表有と思へばなし
ないとおもへばある是則色則是空空色是色
奥山に鳴鹿よりもきく時ぞ

秋はかなしき猿丸が聲

如何祖師西來意九年面壁はなんざんす苦界
十年お客を壁とにらみ破る身は蘆の葉の夫
ならぬうきふししげき川竹の流に立る眞實
は色客への操にして不立文字のきれ文あれ
ば直指人心のゆびきり有以心傳心の格子頭

達摩さん腰から下は乍摩生

女をたらす一物もなし

同 片岡山に沓をとめて臥せる旅人客をあや
なし中の町に駒下駄を進めてあはれ親なし
の禿をいたはる晝座の座禪の床には壁にむ
かふの人をよばひ蘆のひと葉の猪牙船にう
かれよりくる浮虚の客には面壁九年十年の
苦界の悟を開しむるともあけ行觀法の闇の
中ふられた客はいかるがや富の緒川の流れ
の憂身を什麼さん察しておくんなんし

さとれかし客と密夫との戀の海

よしあしの葉に渡りくさべん

あらかいなお猿に賛なあらかいな

とんだ趣向が有田歌右衛門
しかれども山土のことをわすれてか

とかくはねたる獸の炭
浮虚の風は見通におとづれ口舌の雨は棧橋に
みなぎるまつよひの心いきを潮來節にいほせ
きぬくの恨を八幡鐘にかこつにくいくの
廊下蔭に背泊のきいたふうあればかあひくの
の明烏に朝直しのちんくあり密夫もはじめ
はお客だよ客また密夫となる事は必お近いう
ちに有べし

七代目三升が助六の初役をよめる
助六の入りはあまりし木戸口を

またくわりまたくゝる見物
梅屋敷土産は竹の皮づゝみ

香はつゝみまで送る木下川
新梅が屋
枝うつり目うつりもして梅になく
聲をきくうが庭のうぐひす

曲亭馬琴肖像



曲亭馬琴

名解字瑣吉瀧澤は氏也通稱清右衛門といひて元飯田町中坂下の本頭也其を聲に譲り名をも與へて男宗伯(松前侯醫師明神下同朋町)と同居す文政七年の頃剃髮して篁民といふ後四ッ谷信濃坂の上に住居す嘉永元戊申年十一月六日没す年八十二

法號
辭世

世の中のやくをのがれてもとのまゝ
かへすはあめとつちの人形

○馬琴寛政のはじめ京傳の門人となり京傳より大榮山人の號を贈らる是深川永代寺門前出生故永代寺の山號をもて戲名とす寛政三辛亥年芝神明前和泉屋市兵衛より出板の二冊物あり外題は

廿日余盡用而二分狂言 京傳門人
大榮山人作とあり

是戲作の最初也寛政五癸丑年より馬琴と改む此年發市せしを左にあぐ

淨世御茶漬十二因縁三冊 荒家天狗鼻祖三冊
街道御茶漬十二因縁三冊

花團子食家物語
寛政五癸丑年より嘉永元戊申年まで五十六年の著作

數多故略す

黄表紙合巻物當り少し書入讀本に手柄多し
○翁が剃髮の年は「傾城水滸傳」翁自作 卷の八花から
の阿達か剃髮のところに入して

吳竹の世をすつるにはあらねども鬢の毛あきれた
ふさはそりて元結のとゝきかぬるを油こちたく物
するがいといぶせくも煩しさにいぬる早月のはじ
めつかたかうべをなん剃まろめて雪にのるこゝち
もおのが白髪もそりすてしより夏はすみよきと口
號みてひとり笑へりをこがましきわざながらこゝ
の繪組にとりあはせて書入のうめくさとすあなか
しこゝ

斯あれば文政七年にこの稿本をなしつるにて其年剃髮の證とすべしさて原は武辨の家なりしが翁は多病の故に市人となれり後年栗山先生(柴彦輔)を師として學び學力の長せし事他の稗官者流の及ぶ所に非ず常には兒戲の小冊子編むといへども翁が素意こゝに非ず故に先年著述するところの「燕石雜誌」および「支同放言」のごとき有用の書にして大方もこれを閱て其説ところを是とすべし今年(天保戊戌)七十二歳

にて精力衰へず益盛なり稿を草するとき俗にいふぶつ、け書にして綴りゆく文章水の流るゝがごとく少も淀むことなく文體一家をなす殊に讀本の著述多し就中世に聞へたるものは「椿説弓張月」「朝夷巡島記」「里見八犬傳」の類也「俠客傳」「近世説美少年録」の二書は近年の發行にていまだ物語の半に至らず編を嗣て佳境にいたらば評判ますゝ高かるべしまた近頃合巻にて「傾城水滸傳」あり大に世に行はる八犬傳は今九輯に至りて満尾するに近しと聞ぬ此編の行るゝ事古今雙ぶ物あるべからざるゆるゑに近年浪華にて狂言になしつるよし聞えて浪速の畫工が畫きたる大錦繪數枚書賣文深堂の藏するを見るまた江都にて狂言にせしは天保七丙申の夏木挽町森田座にて名題「八犬傳評判樓閣」として興行す狂言作者金井由輔實田壽助三升屋四郎等也予も一時墨春亭梅麿に誘引れてこの狂言を見物せしかば其役割のひとつふたつを爰にいはん犬塚信乃二やくあぼし左母二郎三役犬村角太郎四役鳴神上人の犬山道節五役どたの七太郎六役犬田小文吾右市川海老藏つとむ犬塚毛野二役白雲三やく糠助四役藏人五役山林房八六役犬飼現八右市

川九藏つとむ濱路二やく雛衣三やく伏姫の靈の雲妙間右瀬川菊次郎つとむ莊官蟻六二役馬加大記三やく文五兵衛右大谷友右衛門つとむ在村二やく船虫三やく黒雲四やく額藏右市川壽美藏つとむ龜篠二やく成氏三やく飛番太右市川升五郎つとむ梶九郎二やく氷上官六右市川一友つとむ犬江親兵衛市川團十郎つとむさのみ當りにてはなかりしが狂言は面白く芳流閣の場尤よしその中にて予熟市川白猿がそれゝの役に打扮すかたを視るに惡狽どたの七太郎がこしらへ馬琴が八犬傳のクチャエに在しにちとも違はず絞染の御迄故人柳川が畫たるに一點たがはず彼が衣裳に至るまで精細に心を用ること斯の如しと獨りたんそくしたりき其後には今年天保九戊戌年閏四月より市村座にて名題「成歳里見熟梅」として興行せしが是もまたはかゝしき評判はなかりし然るに讀本を芝居の狂言にまで仕組ませてせらるゝは京傳と馬琴子がこよなき面目といふべきのみ天保七丙申年翁が齡古稀に及びぬ諸人すゝめて年賀の書畫會筵をひらくべしと有しに初めは許諾ざりしが秋にいたりて繼にそのすすめにまかせて八月十四日柳橋萬八樓上に諸人を集

會せしむこの日甚盛會なり予もかねて知己なるのみならず當時は瀟玄鳥栖傘雨談前集發市にて前後二編ともに序文を翁の書れたる因深かりければ他人をもすゝめ誘引して出席す其以前書賣文深堂翁が孫興邦を將て予が家に訪來て自祝の賀歌をものせし齋執あるはふくさなどを送らる其賀歌を左にのす

盡せしな齡はさわれ石龜の

よろづよもぎが鳥をおふまで

名にしおはし出よ千とせの友にせん

かくれみの龜かくれ笠松

賀筵の當日予初めて東里山人に面會す先醒にとて扇子を出しけるに辭退ありしがせちにすゝめければ書れて送りぬ

馬琴叟が七十の賀筵をことほぎて

七十はおろか百でも二百でも

御氣儘次第いきな爺さま

○翁近きころは老眼やうやくに病衰し終に盲となりぬ然れども著述をやめず婦をして筆をとらしめ口授して草稿を代寫せしむ

八犬傳九輯五十三の下

回外剩筆

(上畧) 徳而寛政二年の冬創て戲墨の書策子二巻を編て書肆甘泉堂が刊行せしより今に至て(天保十二年丑秋八月)五十二年刊行の雜書物の本共に二百九十餘口に及べり這他刊布せざる筆記雜纂或は二三葉の小紙子多かるを數へ盡すべうもあらず

(下畧)

同 (上畧) 否とよ酒家は昔より戲墨に門人と云者なし三四十年前以前吾戲作なる書策子に門人魁番子(又作傀儡子)などいふ名號を書したるもあれど开は未生の人にて一時の戲れのみ實に其人あるにあらず然を文政文化の年間に生狂才ある壯俊等が吾弟子にならまくほつして由縁に就き紹介の人を求め漸次に訪來ぬる者八九名ありしかど吾一人も是を許さず(中畧)そが中に入門御辭退の儀はちから及ばずいかで戲作に琴字を許し給へといふ琴字をもて名號に做す者は吾のみならず昔も今も儒者に琴所琴臺など有ことは各位の隨意たるべしといふに皆歡びて或は琴雅又琴梧或は琴川又琴魚など告

る者五六名なりしかどもそれも一兩稔の程にして
風く胡越の如くなりけり今おもへば三十餘年の
昔なれば其人猶生るや死せりやいまだ知らず是等
の中に樸亭琴魚は同じからず是は吾知吾の友伊勢
人篠齋の弟にて窓盤餘譚青砥石文などいふ物の本
の作者なりしに惜むべし四十餘歳にて身故にき
(下略)

○東岡舎羅文は馬琴子が兄也性俳諧の發句を嗜み吟
る所多し諱與旨稱臺右衛門といふ寛政十戊午年八月
十二日没す予時歳四十深光寺に葬る法號深譽勇遠羅
文といふ墳墓の臺石に病中の吟を馬琴子が書たるを
彫付たれども歳月を経たれば石面滅て讀取安からね
ばこゝに漏しつ

○八犬傳終に全局を結び訖しとき「あはれとは見る
人おもへ八重すたれかゝるやみ目にあみはたす書」
「ながらふるかひこそなけれ見えすなりし書卷川に
猶わたる世は」筆捨の松のふる葉も言の葉も子等に
をしへてかゝするぞ憂き」

○文政八己酉年九月二日初めて翁と知己になりぬそ
のゝち文政十一子年八月二十六日再び出會なかりし

がその時翁が初めて著述せられたる冊子を問に翁か
たりて云寛政二戌年深川にて何やらん開帳のありけ
る時京の壬生狂言來り大に行れたれば其事よりおも
ひ起して遺果而二部狂言といへる二冊物をあむ豊國
の畫にて芝の甘泉堂が翌亥年發板しそれよりうま續
き新作せり是まで自作の冊子一ツも漏さず所藏せし
が飯田町に在しころ一年の夏二階の物干にて虫拂の
爲冊子を風にあてたるとき外へ吹やりけん文化三丙
寅年出板せる武者修行木齋傳一部をいづこへか失ひ
つさる間其のちは骨董舖上などにてこのものあら
ば買とらん事をおもへど近會は歩行自在を得ねば杖
を沙庭の外に曳す遺憾さはこの事のみと語られける
に予答ていふ在下勤のいとま有日は市中を俳個せり
故にもし彼木齋傳の骨董舖上に在こと有ば償とりて
進せんことたへつゝ常にそのことを心にしめしに凡
間三とせを隔て約せし時より五年目にして天保三壬
辰年月日は忘れたれど量らず彼雙紙の手に入たれば
日を経ず閏霜月三日翁の許を訪て懐にせし木齋傳を
與へければ翁悦ぶ事大方ならず約せし言を違給はず
この賜物は何にもまして忝なしおん心の切なるより

全くおん手に入たる物ならん長く秘藏し侍る也是に
て拙作の藏書闕ざる事を得たりとて欣喜色にあらは
れぬ

○翁が齡とし天保六乙未年六十九歳なればいぬる
明和四丁亥年の生れにて二十四歳のとき初作の二部
狂言の草稿成りて二十五歳の時新板となりたるもの
なり

○一日翁とむかしの雙紙の物語におよべるときかた
りて曰黄表紙の行れしものは喜三二が文武二道萬石
通またその後三和が天下一面鏡梅鉢也此ころより雙
紙の改むづかしくなりたる也又洒落本と稱ふる物に
ては京傳が世世界錦之裏也と語られたり予もみな此
草紙どもを閲したりしが當時の禁忌の事なきにしも
非らず石翁の物語につき思ひ出せる事あり文壽堂
(丸屋文右衛門)いまだ書肆なりしころかの家の老母
予に語ていふむかし京傳が作の天下一面鏡梅鉢(作
は三和なれども京傳といへるは老母がおぼえたがへ
るなり)大に行れて板元は耕書堂寫重なりしがその
頃はいまだ新吉原揚屋町に住居してかの草紙の賣た
る事夥しく問屋仲間はいふも更也諸方小賣店の者ま

でも吾もくくと買とらんとて日毎に門前に市をなし
草紙の製本間にあはず摺本のまゝを車に積て挽いて
るを途にてそのまゝ買とらんと争ふものもある程に
て右の摺本へ表紙綴糸をそへてつかはすと懇望のも
のは悦びてもち返り先にて仕立賣物にせし也然るに
憚べき事あるによりて終に絶板を命せられたりと語
りぬ

○翁が著述の讀本はじめにもいふごとく里見八犬傳
也この八犬傳と朝夷巡島記とを評判して犬夷評判記
と名號け黒表紙をかけて摺本三卷となし自笑役者評
判記に擬へて文政元申年六月刊行しつ批評は三枝園
主人答述は馬琴考訂は樸亭琴魚也難波と東都との書
買連名にて發市しぬかゝれば世人の評にもあづかれ
るは翁が名譽といふべし文政十二己丑年卯月するの
七日溪齋英泉子が家に訪來て物語のついでにいはい
在下いぬる日曲亭翁が許にいたりし時翁の申さるゝ
は昨日何人にて有けん家製の奇應丸一包買ふものあ
り一封を遣し是を先生のおん目にかけて給はれとい
ひ捨て歸りたり其一封を披閱らるゝにこの春出板せ
し近世説美少年録卷の三縁巽亭の條下および五の卷

二賊相殺の趣向をもいたく褒て後に傾城水滸傳をソ
シリたりとなん其一封の書もの深齋もまのあたり見
たりといふ又是より前に深川に住居する書師何がし
といふもの一封を投じたり披き見れば右のごとく水
滸傳の著述をあしざまに誹難して原唐山の事を日本
の事に取直したる書ながら蒙汗藥の事をいれしはい
かにぞや日本には言ところの藥なしとあるよし翁こ
れを笑ていはくしびれ藥は原本水滸傳の作者がこし
らへ物にて宋の代にもなきもの也いはんや吾朝にお
いておや然るをさる不穿鑿をもて人をそしるは笑ふ
に絶たりと翁のいはれしとて深齋ものがたりき

十返舎一九肖像



國貞

十返舎一九

重田氏名貞一通稱與七といふ駿河の産にして居を橋
町又深川佐賀町に占め竟に通油町(書肆仙鶴堂の裏)
に移住せり

○墨川亭曰一九幼き時市九と呼ぶ故に市を一に作り
雅名とす弱冠の頃東都に出或侯(一説に小田切君江
都尹にておはせし時その館にて注簿たりしといふ)
に仕へそのうち大坂へ登り彼の地に住て志野流の香
道に稱譽あり十返舎の號は黃熟香の十返をとりて然
よぶといへり其頃のことによ並木千柳若竹笛躬と俱
に木下蔭の線戯曲を編述したる由後故ありて自ら香
道に遊ぶ事を禁ず寛政六寅年復び東都に來りて始て
稗史兩三部を著述して耕雲堂が梓に上せて發市せり
天保二辛卯年病て没す淺草土富店善龍寺(俗にぬけ
寺と云)地中の東陽院に葬る(墓所は惣亂塔裏門方よ
り二側目にて東三軒目)
辭世

此世をばどりやおいとまにせん香と
ともにつひには灰左様なら

十返舎一九

墓碑面

開示院妙入日忌信女 文化二乙丑 八月十七日
心月院一九日光信士 天保二辛卯 八月十七日
心覺院妙智日壽信女

院ノ字漆喰ニテ埋テアリ是御改
革ノ節ニ斯クセンナルベシ

重 田

(文朝云木下蔭狭間合戦作者連名に若竹笛躬、近松
余七、並木千柳、此余七とあるが一九なるべし。活
東子云然り)
(活東子云ハイトとはこの假字たがへりされどをか
しき歌なり)

○文化十癸酉年予稗史通と標題して戯作者浮世書師
の小傳并に印譜自筆の摸など書集めて二卷となし
人に見すべき心もなく秘置しがある日吾師墨亭月磨
に密に見せしを先醒笑て曰足下素人の上にしては能
くこそ書集られたれ誤れる事多けれどもこはその筈
也とて邊近く住たる長亭五菜をまねきて拙著をもて
さし示さるゝに長亭感ずること甚しく一覽の上其身

の小傳なる印譜所へ所藏の印をことごとく押などせりそれより彼方こなたと人手に傳へて式亭をはじめ或は筆耕晋米なども一覽するに至りて終に十返舎もかの拙著を披閱せりとぞ然るに卷中なる大人が小傳に或人曰一子漂泊の内寺の門番にもなりたることありと書るを實に然ること有て世に知らしむるに似たるを惡めるかまた實事ならざることを書乘せて露にするに似たるを惡めるか心中に此事を怒りふくみ居たりと覺て翌甲戌の春即墨亭が書畫會遊を油町北新道若菜屋の樓上に開れし節十返舎が紺屋町なる一丸と兼て親しかりしかば一丸は亡妻の一周忌の佛事に招れ酌酌の歸路師が會席へ來りしが兼て予とは師が許にて出會し去年酉の春より知己なりければ予を傍にまねきて曰卒爾ながらさきつ頃貴君が書給へるものを見たるに僕の傳に寺の門番にもなりたることありと見えたるがその事はいかなる人より傳へ聞て書れしにかと問ふ予はさるかたより聞て其人の名は慥に知居たれども斯問かけられては後いかなる事をいひ出さるゝも知ざればたゞ世の風説を聞たるまゝに書たりと答ふ其時十返舎はすこしく氣色

を變ていふ様世の浮説を擧て世上へ弘むるは迷惑也僕は戯作をもて業とすさることを弘められては生業の妨ともなりぬれば貴君が上をも惡ざまに書なして俸祿にも拘はるべき程の事を書んと思へり其心を得給へといふ予答て云ふいはるゝ所理にはあれども拙著は己れ一個にて樂み秘篋にのみ藏て人に見せんとの業にも非ず又梓に上て世に公にするにもあらぬ隨筆もの也原より家々に秘する隨筆には高貴紳家の忌諱の事をも書留おくは尋常の事也こゝをもて何憚る事なく書とめし也今度密に師に見せたるより漏て爾か看にもあづかりしなれば自今狼に他人には見すまじければ宥し給へかしと詫つれども一丸は醉を帶たるころにて高聲に以前の條をもて繰回し〜いひ罵にぞ傍の人も氣毒げに集ひ合兎角あつかひぬれど猶言やまず予も相手は酌酌のうへに何時までも果しなれば後日の論に及ぶにしかじと思へば當日の會主なる師に此由を微細に告しかばまづおのれにまかせて爾は歸るべしといふによりて予は歸りぬそのち師月麿十返舎に對ひてかねて信友なるにさる道理を言んとならば平生の上にあらんを吾會席にもて出

て言ひ罵るはおとなしからず吾にも遺恨を合よしの有てする事なるやなど腹立ていふを日來むつまじき朋友の人々とかくとなだめて其日の事は納まりしとぞさるに十返舎と予との間そのまゝになしをきがたく幸三五日を隔て予が同門式麿が書畫の會ありければ此日たがひに出席して和睦をすることよからめと式麿らがはからひにて自ら予が方へ訪來ていぬる日の事は十返舎も全く酔中の事なれば聊まをし過たる事もあれば御心さへられず異日在下が催しの日に和睦して給へかし師をはじめとして餘の朋友も兎角その事のみ願ふなりと懇にいひなだむるにぞ予は素より事を好むにあらねばともかくもよきに計ひ給へと答てそのち式麿が會遊に出で別席において十返舎を專として其餘この事にかゝはりたる人々の集會と和睦の盃をめぐらして終に波風は納りぬ彼の稗史通二卷は墨亭に置けるを師より奥の八戸侯の御隠居畔李君へ奉れりこれ復び右のごとき障れる事のあらんをおもひて也

○文化十一甲戌年發市せる十返舎が著したる膝栗毛發端とよぶ一冊は錦森堂永壽堂文金堂らが梓行する

ところ也右の卷中口繪半丁にかくあり近頃雪麿なるもの稗史通と題して新古稗史作名畫工の出所事跡を記したるを閱したるに悉く齟齬して實に勞して功なき稗史不通の書といふべし予は膝栗毛八編にして終るとのみ雪麿が書たるは續編の出たる事をしらざるなるべし既に當年續五編に至れば其ことわりをしるし畢ぬまた同年同じ人の撰たる續膝栗毛五編(二冊)の卷卷末に書賣が業のごとくとりなして十返舎が小傳を作上の小傳略りたる文の尾に或人稗史通と表題して新古稗史の作名畫工の出所事蹟等を摸寫せしを閱したるに一九その事に至りて甚だ謬誤あり依て是を誌し畢ぬ 西村永壽堂識とありおのれつら〜按るに續膝栗毛五編ならびに同發端ともに發行の前年癸酉年草稿成して適拙著の稗史通を十返舎の披閱せる頃にて憤念盛なるをりなれば斯のごときこともかきたるならんされば翌年前條の如き風波おこりてとかく有ての後はいと睦しく成たるもをかしく予はなか〜に是によりて粗人に名も知

られたれば右兩編に記したる事を削去すべき念もな
くてやみつ

○例の書畫帖に大人の染筆を乞たるに
陰陽のふたはしらといへども陽には柱ありて陰
には柱なし川柳點の柳だるに神子を見てふとし
くたてる宮はしらといへるは是陽のはしらなり
されどこゝには
みやしろの大黒はしらなりけらし

大あなむちの神子の愛敬

常に口吟する所のされ歌かつは發句のひとつふたつ
をのす

戀
はづかしや君にふるるゝ錫杖の

かたちよりして生れたる身は

近戀
板塀のうちみるはかり近ければ

はりのをれなる文もやられず

吉例春興
賣ものにかざれる花の枝ぶりも

つくり下手なる梅の赤本

柳の畫に
菫の玉柳とて地にとやく

枝は砂をもはらひこそすれ

羅蘭の畫に
唐にては人參といふもことわりや

是大根のくすりなりけり

天の原ふりさけ見れば目の上に

かゝる霞や遠山の眉

ものひとへへだて、聞けば十七の

鬼のひくとは見えぬ琴の音

ことわざ酒はうれひの玉はつき

はくまでものむ跡引上戸

鉢たゝきの賛

是も身をたつるためとてすぎはひに

大原女の賛

茶せんを賣て空也寺の僧

遊女の賛

さしたる梅は花のかんざし

孤拳の畫の賛

あたりかまはぬてつぼうのけん

生酔が三人よればさわがしく

柳亭種彦肖像



柳亭種彦

姓源名知久愛雀軒と號し足薪翁と號す又該紫櫻の號
は田舎源氏大に行はれたるに依て也通稱高屋彦四郎
といふ麾下にて食祿二百俵賜る原横手氏にして甲州
の士也淺草堀田原に第宅あり初め 門に入りて
漢書を學び後俳諧の古調を好み又川柳が諷風を嗜み
秀吟多し天保十三壬寅年七月十八日卒す行年六十赤
坂一ツ木平河山浄土寺に葬る
法號 芳寛院殿勇譽心禪居士
辭世

ちるものにさだまる秋の柳かな

源氏の人々のうせ給ひしも大かた秋なり

とありて

我も秋六十帖をなごりかな

○柳亭種彦と戯名せしは幼きころ疝氣強くとにかく
に腹たち怒りしかば尊父の教訓して一句をつくらる
「風に天窓はられて睡る柳かな」と是より身を慎みし
とぞ又天明風の狂歌を嗜みて狂名を柳の風成とし後
改めて心の種俊とす是大和歌は人の心を種としてと
いへるをとりて然せし由其頃下谷邊に三彦と唱へら

る、(他二人不知)者あり種彦先生も其一人にて初め柳の風成といへるによりて柳亭と號す俗名を彦四郎といへるをもて種としの彦とよばるゝゆゑ俊の字をはぶきて種彦と戯名を付られしと云ふ又三ッ彦の印は先生壯年の頃は戯場を好みて殊に故人坂東秀佳(二代目三津五郎今三津五郎父也)の藝をよく寫され素人狂言又茶番所作事杯にも三津五郎其まゝに見るがごとくなる故茶番連中にて三ッ彦三ッ彦といひけるをもて如斯戯印を用ひし也一時先生の咄に戯作者も俳優者も傾城に齊し譬へばけいせい顔のみ美しとて張も意氣地もなくまた髪飾り衣裳の倚羅なれば客つかず又戯子も男つきよく藝も未熟ならずとても是も衣裳の倚羅と諸人愛敬を専らとせざれば見物よろこばず人にくみて最負の客なし此理に似て戯曲作者も全體は上手にてよく綴るといへども拙き書工に及がゝれ悪き彫工の手にかゝり外題ともに悪しければ榮なくして賣れず當りをとる事かたかるべしされど後に上手と人といはるゝものは未熟なる初より其器あらはるゝ也爰に一つの噺有むかし名人とよばれし俳優人元祖中村仲藏(秀鶴後中山小十郎)初

めは藝道も未熟にて俗に云はいくにて顔を赤く隈どり藏衣裳の素袍にて並び大名に出しが粘強き麻素袍なれば二日三日にのりけおちて皺多く見苦しきを樂屋に入て後外の同位の役者は人手にのみかけて疊みもやらず其まゝに衣裳棚へ上げ置て又明る日其場來たれば前の素袍を著て出るゆゑにいと見苦しかりしに秀鶴一人は衣裳を人手にかけず自ら其素袍を水のしして能疊み日毎にかくのごとく丁寧になしおきしかば翌日著て舞臺へ出て列座の戯子と立並びし時一際勝れて立派にいかにも上手らしく見え看官の目にもたちければ戯場中の役人も目をつけて彼は一と器量ある者也後の狂言には夫々の役相當ならんと其役をさせて試んと衆の中より拙て役割を附たるに案に違はず其役をも相應に勤めたれば次第くによき役を勤め位も昇り終に名人となり今にその譽れを殘せり天下に名を轟かす者は初より其器量衆にこえたり戯作も此秀鶴が心懸にて常に心を用ひ一句一章たりともおろそかに書まじきもの也丁寧反復してつづまやかに筋の通る様に書たけれ書わりにも工風をこらすべきかと予に物語られき此事は墨川亭にも噺

されしとぞ又常に用ふる所の硯は茄子の形したる也其蓋に自詠の狂歌を彫らせたり其歌

名人になれ〜茄子とおもへども

とにかくへたははなれざりけり

(活東子云茄子とおもへどもにては意通せずされどかゝる事は私に引直すべきにあらざればそのままになしおく)

烏亭馬馬肖像



鳥亭焉馬

中村氏名英祝號を談洲樓といひ別號を桃栗山人柿發齋といふ狂歌に野見てうなごんすみかねの名あり和泉屋和助と稱して本所相生町に住居す原大工の棟梁也戯作の古老にして安永天明寛政年間まで一枚摺物或は洒落本又は淨るりの作あり且久しく廢れたる落し咄を再興し又戯場に遊ひて狂言の作を補助せり草ざうしを著作せしは寛政五年の初也とぞ文政五年午年六月二日没す年八十北本所表町牛寶山最勝寺(天台宗)に葬る

法號 三樂院壽德焉馬

辭世

おもひきやかたみの花を今ぞしる

□る□の敷島の道

著述 歌舞妓年代記(半紙本五篇迄二十冊)

北齋肖像



北齋

北齋號を錦袋舎といふ初め春朗といひて勝川春草か門人也俗稱鐵五郎後年破門せられてより勝川を改め叢春朗といふ其後俵屋宗理か跡を續て二代目宗理となる後故ありて名を家元へ歸し北齋辰政(寛政十年ころ)と改む其名を門人に譲りて雷信と改め再門人に與へて載斗と改め是をも門人にあたへて爲一とあらたむ本所の産にして住居數多かわれり御用鏡師中島伊勢が男也作名を時太郎可候といふ又是和齋といひ魚佛ともいふ嘉永二己酉年四月十八日に没す年九十淺草六軒寺町誓教寺に葬る

法號 南照院奇譽北齋信士

辭世

人魂でゆくきさんじや夏の旅

豊國肖像



一陽齋豊國

豊國號を一陽齋といふ歌川豊春が門人也芝神明前三島町の産にして人形師の男也俗稱倉橋熊吉といふ初め芳町に住し後堀江町に居す又榎町油座に移る歌舞妓役者の似顔繪の名人也又讀本草ざうし合巻の類枚舉にいとまあらず文政八酉年正月七日没す年五十七三田聖坂功蓮寺に葬る
法號 得妙院實彩麗毫信士
辭世

燒筆のまゝかおぼろの影法師

國貞肖像



五渡亭國貞

國貞號を五渡亭といひ後香蝶樓といふ俗稱角田庄五郎本所五ツ目の産也後龜井戸に住す豊國の門人にして師名を續て今二代目豊國と改む役者似顔繪の名人にして出藍の譽れあり天保四巳年高谷の畫齋高陵の門に入りて英一蝶とも號す現存也

御急ぎにまかせ草稿のまゝ人に寫さしめ不遂一校候間いと齟齬遺漏おほかるへしあやまり有之候はば速に可被仰聞候以上

東紫様

活東子

後見草序

古語に後見今亦猶今見古といへり此頃龜岡石見入道宗山が書置る明曆中火災の記を其むま子伊豫と云るものより借受て寫し侍りぬ是宗山が弱年の時目のあたり出合し事をありのまゝに記せし書なり世に行る武藏鏡といふ物とことにして誠の私記なるもの也其文質にして今猶其時を見るがごとく人をして恐怖せしむるに至らしむといふべし余寶曆十年より今年天明七年に至るまで見聞侍りし天變地妖私記せし二ツの卷あり明曆より下つた寶曆に至る迄の事を記置侍る人もありぬべけれどいまだ其記を見ず因て宗山が記と余が記を合して後見草といふ三ツの卷となす是所謂後見今亦猶今見古と云意にならひて此書に名付しあらましを述てこれが序となす

鵠齋主人撰

後見草上 一名明曆懲愆錄

龜岡石見入道宗山書置

正徳五未の年より五十九年前酉の年正月十八日十九日江戸大火事書置の年前申の十月十六日吳服町火元大市と申者家より出火父久兵衛類火に逢申候三年目亥の年冬御本丸御普請御作事御出來御移徙迄の事

正徳五未年より六十年前申の年十月十六日の夜吳服町大市と申町人子細ありて家に火を付自害して果申候折節北風強く中橋鍛冶町邊迄燒る此時父久兵衛居宅中橋南横町類火此屋敷二年前に悉く作事出來數寄屋書院恰好能出來書院の次の間三間梁に四間此座敷舞臺になり橋懸も三間風呂屋三階の亭高く海手迄見ゆる玄關式臺廣き料理の間居間奥の部屋とも内證は惣二階隨分勝手よき住居に出來いたし候初ての御客岡部美濃守殿父久兵衛生國和泉故其時の御地頭たるによつてはしめて申受候御相伴は三代先の桑山主水殿朝茶の湯にて朝六半時に入せられ御相伴勝手より

後見草上

森田庄兵衛(後休音)萬野九郎兵衛(後家貞)出御挨拶被致候木村謙庵老(後登壽院)勝手見廻り茶の湯過候て兼て支度の能七番有之中入夕御膳出七ツ時濟此時能番組

小銀治 小野清太夫 ワキ 梶木庄兵衛

忠度 十太夫 後淨木

井筒 同人 大 九郎兵衛 庄兵衛 小 小左衛門

三輪 久三郎 田中作兵衛 大 庄九郎 小 清次郎

富士太鼓 十太夫 子方 弟子

春榮 久三郎 子方 吉三郎 庄三郎

養老 清太夫 春藤市右衛門

濟後祝言謠にて濟

右之通なる大振舞致し候ても滞なき程の住居の作事大藏も二ヶ所有之色々諸道具此大藏に詰置此時迄穴藏と申類は無之この藏に古法眼耕作の屏風徽宗皇帝應の掛物雪舟の類は數々瀬戸口廣肩つき茶入も燒る此茶入は鐵砲洲父下屋敷へ堀田加賀守殿初て御茶湯に入せられ候時大猷院様より御拜領の茶入に候とて則久兵衛に加賀守殿より御持參被成下候加賀守殿御

出被成候時御相伴船越三四郎殿(後伊豫守)牧野織部殿内田玄勝老にて候樋口かた付の譯此處に書出し候父久兵衛所持真宗五拾枚中脇差も此大藏にて焼る漸父子手廻道具長持七掉葛籠少々唐物箆等土藏に入残り下人共持出相殘申候鐵炮洲舟待町久兵衛橋際父屋舖の作事は酒井修理太夫殿被成下候此屋敷にも二間半梁六間の土藏ありて常に不用の道具能裝束類尙信探幽右京杯畫候屏風類七八双も入置此火事に殘る鐵炮洲屋敷は京間表三拾一間裏行四拾三間の所書院數寄屋小座敷舞臺居間小書院玄關二間に五間勝手ともによき住居酒井修理太夫殿被成下候間隨分何方も宜有之候申の十月十六日夜中橋居座敷類火に逢候得共就も鐵炮洲に來り不自由の事共覺不申然其來酉の正月御本丸御修復御用鐵炮洲よりの通ひ遠く候に付年内中橋に移りてと燒屋敷へ急に小屋掛申付出來致し極月中頃中橋へ移り申候小屋住居不自由なる年を取候酉年正月二日父久兵衛同道にて未明より年頭御禮登城仕候御白書院帝鑑の間邊に相詰居申候御表へ出御御禮はしまり五半時頃俄に騒敷御本丸近所糺町御堀端松平越後守殿上屋敷より出火と申内はや烟り

火の粉御庭の内へ來る然共御禮御構なく御請相濟上下騒外の年頭禮勤致さす宿へ歸り申候類火は無之候得共昔造りの普請の大屋敷内へ終日燒申候晚七ツ時過漸く鎮申候御本丸にも丙正月十一日御所始親子相勤申候來る二十一日より御普請御取付小屋場御渡百人御番所の前二丸御門の外の溜りに二間梁長八間の石切のみ燒鍛冶小屋十六日にかけてせ申候十八日御前貸金五百兩御金藏より四ツ時過手代請取參る十七日より惡敷風立申候此節まではさのみ火事の氣色も不仕なり

正月十八日本郷御弓町に御臺所方鈴木喜右衛門殿組に居申候仁治郎兵衛と申もの岡田七右衛門伯父料理能被致候に付兼々此所と約束いたし右七右衛門小足長兵衛と申太鼓打と三人運にて料理被下に參り候朝より大風立芥ふき立前後見分がたく道の内迷惑ながら罷越座敷少々物語など致し候内俄に騒しくどよめく下々いさかひにても有哉と存候得は亭主出被申候に近所本妙寺の寺内より出火仕候と被申候少の内に治郎兵衛宅へ烟り參庭へ火の粉きたる勝手へ參見候得は膳立出來汁など盛かけ有之庭に長火鉢を置杉大

板のかまぼこへ焼目を當る様子客三人にてこれを懷に入れ膳棚の菓子盆に見事なる枝柿蜜柑鉢に積てあり是をも懷中してはや此家に火かゝり候ゆへ亭主に暇も告ず客三人表に出申候供は返し三人連にて烟りの中を筋違橋の方へ足をはかりに參る漸筋違橋迄來り跡を見候得ばはや神田明神御社宮へ火かゝり燒口幾所ともなく下谷の方駿河臺に飛火して燃あがる是はたいごとにあらずとおもはれ段々跡より火に逐はれ漸日本橋際に付申候江戸橋の方は伊勢町より火川を越はや茅場町邊又は四日市本材木町向屋敷同心町八丁堀邊火先飛行日本橋の上は車長持さし詰橋の中は一足も行がたく連兩人申合欄干をとらへ一足づゝ欄干の外幅一尺程の所を漸に歩行南の橋臺に渡り付危きめに渡り是より西河岸吳服橋の方へ廻り候得は風の吹廻煙薄御堀端を通り中橋の宿へ七半時頃歸付ぬ母初め自分無事に歸り候を悦び申され船町の親類石川方は疾焼申候父久兵衛は六兵衛方心元ながり下人共召連疾より見廻被申さだめし小舟町より娘など連何方へ退申され候哉心元なきこと限なし夜明の沙汰に淺草橋御門枳形内には牢屋のもの共入置申に

より御門通し無之大分此邊にて諸人燒死候沙汰承候然る所昨晝父久兵衛召連候下人一人走り歸りまづ御怪我も無御座孰も危き御命御助りと申にてよろこび申候此下人の嘶に柳原大手門南寺町彌勒寺法善寺誓願寺雲光寺杯寺中まで舟町石川一家の女中共行先々火につゝまれ十方なく雲光院のらんとこの内少し廣き水溜堀あり此池へ女中共這入上へ濡漣濡疊など覆ひ水を掛け火の粉を拂ひ漸に命助り夜明て漸小舟町屋敷燒跡土藏へ歸候て夫より父久兵衛も中橋へ歸り昨日昨夜先々にてさまゝの苦しみの嘶ども被致候昨十八日八ツ時前本郷丸山日蓮宗本妙寺々中より出火致し火先幾つにもなり下谷の方又は神田明神社前より駿河臺御茶の水邊へ飛火應匠町燒神田橋内へ飛火同心町八丁堀邊佐久間町より柳原不殘濱町靈巖島靈巖寺新堀稻荷橋を越鐵砲洲崎迄不殘燒船待町下屋敷土藏へ火入色々諸道具此所にて燒失す鐵砲洲八左衛門島の間入津の本船とも沖へ出しかね百艘も燒失此船火事にて佃島へ飛火神田橋御門常盤橋御門吳服橋御門御番所とも不殘燒所々橋々燒落申候中に風吹廻能候哉一石橋計一ヶ所燒殘角の後藤原左衛門北

西の角長屋長十二三間も相殘申候西河岸より吳服町南大工町檜物町上横町迄焼夫より横切小川町本材木町へ焼出し今日は父久兵衛留守致居候處宅相殘申候本材木町より金六町水谷町紀伊國町木挽町不殘燒芝網場迄燒十九日朝五ツ時迄の火事也

同十九日もきのふに増て強く風立燒ほこり吹立くらやみのごとし晝九ツ時過牛込邊より又出火致し火先方々に別れ市ヶ谷より御堀を越市ヶ谷御門の御番所へ火移小石川傳通院前水戸様御屋敷西南燒飯田町焼留り田安御門内代官町竹橋内大名旗本屋敷不殘燒西の土手際久世大和守殿屋敷一ヶ所残り御本丸へも火懸り可申と相見申候に付父久兵衛申候は二の御丸口百人御番所前此間取立候鍛冶小屋板屋根にて火の粉心元なく候罷越早く打こぼつべしと申候見廻に參りし手元のもの七人手代兩人召連自分は馬にて出る其節母餅を澤山にいそぎやかせ紙に包上下ともにたまはる殊の外用立申候下馬より馬を返し大手橋前は藤堂大學殿御固め鐵炮のもの數百人其外長柄のもの數々御譜代大名中御堀端透間もなく諸馬の建場も無之火事沙汰には不相見驚申事のみ也橋上に御目付喜多

見久太夫殿世話やき居られ候鍛冶小屋こはし申度と申候得は尤なる心付はや／＼參候へと御申罷通内下馬橋より番所前にて坂部三十郎殿に逢急ぎ參り鍛冶小屋少の内に打潰し大手の方に出べくとこゝろ掛候へどもはや酒井雅樂頭殿屋敷へ火移出がたく見合居候所に御城中次第にくらくなりいまだ晝八ツ時前の頃より高提燈にて皆行通ひいたし所々鐵炮藥に火移り候哉天地ひゞき御矢倉の燒落る音すさまじく言葉にもおよひ不申烟の中火先むら／＼見え八半時頃と覺候頃上様蓮池御門の方へ被爲成候と相見え足音夥敷女中も皆々御あと先へ西御丸の方へ參らるゝ體なり御本丸二の御丸に相詰の上下皆々行先御成次第に西の御丸へ罷越自分も人數つれ先西の御丸御臺所御門下まで罷越候御本丸南方の御多門富士見橋に火移り大廣間迄燒候節は中々堪がたきあつさにて得たまり不申坂下御門外に先出見候所此所にも人馬おびたいしく漸く相詰居諏訪部殿預り御厩前塚につき夜を明す此時腹中すき候に付おもひ出し母の給り候餅のかたくなり候を爰にて給申候西の丸下馬先外櫻田御門迄の内西の片輪燒残り唯今阿部様間部様などの

屋敷の所筋違馬場先御門の内は皆燒て西の丸下下馬邊外櫻田迄詰居申候人數十萬人も上下可有之處天道の御憐み第一東照宮の御防ぎ紅葉山西の御丸へは不思議に火移り不申上下數萬人此所にて命を助り申候上様は掃部頭殿赤坂の屋敷へ御成可被遊の所永田町邊燒切御道筋無之故山里御茶屋へ被爲成候御沙汰とり／＼相聞え驚申候今日御本丸へ火移り申候事此火事迄は田安御門の中竹橋の内半藏御門口吹上御門外まで御譜代大名または諸役人數軒さふらひ屋敷立ならび北詰橋西づめ橋紅葉山下御門際迄立込御本丸の間は御堀外六七間の道幅ばかり也殊に屋敷の方には其時地形高く御本丸へ吹來る火の粉雨のごとし御天守の二重目北面の銅窓の戸内より開き是より火吹込燒上り候由吹上御門の外に御三家様御上屋敷有之不思議に燒殘る此際に烟硝藏あり是又火入らず此御三家様御上屋敷を御借左馬頭様(後甲府様)右馬頭様(後館林様)火事後被爲入候代官町西の土手際に久世大和守殿屋敷風吹廻し能土手際故歟一軒相殘申候由風聞きこえ御厩前にて立すくみこらへ苦しく漸く夜明に外櫻田御門外へ出御堀端日比谷御門へかゝる唯

今櫻田御殿は松平陸奥守殿上屋敷これらはとく燒て火の中を飛越／＼數寄屋橋御門へかゝる御門かぶき戸ひらき燒落此所通る事ならず鍛冶橋は燒落鍋島喰違御門へ廻り土手へ上り芝の方を見候所増上寺本堂ばかり見え其外は札の辻邊迄燒潰候様に相見え申候夫より南紺屋町河岸へ廻り京橋へ出る尤橋燒落男女の死人山のごとく重り目もあてられず是非なく死人を踏川を渡り南傳馬町三丁目の内道幅一つばい皆死人なりそれより漸中橋屋敷へ歸り着見候得ば燒跡門の内に死人丸こげのもの二十人ばかりも有之候面體も見えず男女のわけも見えがたく驚入一類共か又は下人ともかとかなしみ申ばかり也屋敷中見廻し候へば近所にも人氣なく唯あきれ果御堀端に人見ゆる是に尋ね可申と行見候へば二人共に自分召仕手代也しかも一人は九兵衛と申父取立候もの也半身づゝ燒手足もきかず倒れ伏不便なる體也二人共申様御主人様方下人まで怪我は無御座候早く退せられ候故小舟町土藏まで御退にて候兩人相殘長持二掉唐物箆筒川岸迄持出御堀に打込漸助け申候是を先御堀より取上度と申下人共三ツともに取揚て兩人の際に圍ひにして

置押付小船町より迎ひ差越可申と申置下人三人残し置手負にこゝろ付候へと念頃に申付小船町へ志し参り承り候得ば自分屋敷の内死人共はみなく、外のもの共也前年の火事にて此地少々廣み有之故若助り可申哉と此廣みに入候もの也自分屋しきの近所馬一疋焼死有之候立寄見候へば鞍の紋かね故焼残有之自分紋也此馬手前の馬也背迄乗御城迄参候ものをとかなしみながら江戸橋まで参候所橋焼落しはらく見合居候處小舟一艘來る向ふの川岸迄渡し給り候へと申候へば代金一兩こし候へと申す餘り高き由申いろくして金二分遣し渡り申候此舟に乗さまも死人の上を踏越漸舟に乗向ふの岸に着石川藏に到り兩親一家縁者に逢たがひに言葉もなく不思議に二度逢候事となき悲しむばかり也去者來り申けるは今晚の沙汰西の御丸御要害不宜とて川越松平伊豆守城へ被爲成候よしさまんと風説ども申騒き不落付事計也昨朝食事給り候まゝにて粥など支度仕中橋に居申候半焼の手負二人戸板もたせ遣し乗せ石川方へ呼び療治致させ見申候中々痛申體目もあてられず不便至極也かゝる内仕合事申來る淺草橋外瓦橋に自分姉御辻村七郎

右衛門の宅有之廣く住居も能候へば明日にも是へ移り候へと申越る、悦び相極め二十日に大茶船二艘(船賃金三兩)かり上下五十人餘船にて淺草へ参る川筋死人流る、躰何ともたへがたし淺草橋際舟着く御門も焼落北の方高石垣の下の邊死人山のごとくかさなり何千人ともなく有之候是は十八日に火におはれ石垣より下へ飛候者共の由皆石垣に當り相果候躰也其内にもふしぎに助り申者も有之候由石垣下川べりに半死の人も多く見え申候自分一家辻村家廣々と住居米は石川方より相續け申内堀田上野介殿より米五拾俵被下彌以體に罷在候大方は其節米諸事高直難儀に及ぶ者計也父母納戸長持に秘藏の指料金も二千兩ほど入候長持いづれも出候時持せ出候が道つかへ火にまかれ下人共長持を拾置候により其所にて焼失申候屋備近所也焼通る跡にて手桶持出金子拾ひ取申者も有之候由後其沙汰有之候臺所枕家具など入候長持二つ淺草へ持參候尤錠もおろし不申さま、荒道具計の内臺所棚に有之戎の宮取出す戸開き見候へば財布に入り金五百兩有之候是は一昨十八日の晝御藏より請取參候初金とて惠美須大黒へ差立置候打忘

れ其儘置ふしぎに相残る金子なりとて何も悦び申なり其大火事迄は穴藏と申事人々存よりも無之候得ば人々長持類たのみにて諸道具皆々焼失せり同二十日の夜大雪降り積り下人こゝへ死するものは又多し不便至極の事共なり上様御機嫌能西丸御安座に付て御目見可被仰付候由上下へ御觸あり上下所持不申候者共は羽織立付にても苦しからず候由大目付衆より御觸にてとりくさまの装束にて登城仕候おり大雪の跡ひとしほ皆々迷惑仕候得共上様御機嫌克御事諸人恐悅の思ひをなし申候前代未聞の大火事御城をはじめ大小名の屋敷町屋迄焼失仕候所に西の御丸ふしぎに残り御厩前一通り類火無之外櫻田内にも少々残り屋敷七八軒も残り有之御老中様方是より西の御丸へ御勤なり町は淺草橋のそと觀音堂まで左右の町此度相残り江戸中の者の助け用をたし申候事也去る申の春中元祖阿部豊後守殿に急用の儀有之父久兵衛金子五百兩御用立申候所大火事以後正月二十五日に淺草宅へ池村八郎兵衛と申人御使者にて御年頭の御意父子へ色々火事御見舞の品々被下當分勝手可爲難儀と御心付去春御用立金子不殘御返濟也其

節御遣用多きみぎり忝御心付と申候惠美須須棚より出候金子と都合千兩有之候父久兵衛存寄を書付早速久世大和守殿迄申上る其大火事に付江戸近國殊の外騒ぎ落付不申様承り及申候私焼残りの金子少し御座候伊豆相模國へ手代の者遣し御用石山切出し可申付と御覽申上候所御聞合御相談にも不及尤至極の心付兩所への御證文可被下由被仰渡候同二月二日に石方手代兩人金子持參爲致伊豆相模へ差遣候へば江戸御城御取立御用初り申候由山本浦々迄落付悦申候由其節の事に付石代舟賃銀も下直に相極め申候由申來る他國にては中々江戸表氣遣仕候由なり江戸中にて焼死水に入相果候者數十萬人取のけ可申様無之候に付下總國の内本所村淺草川より一町ほど東へ入田地の内五六十間四方深さ貳間ほど大堀のごとくほりたて死人埋申候其上道心者庵をこしらへ無縁寺と申候此度の死人川筋にて果候者は潮にひかれ近國浦々へ流り候も多きよし無縁寺にて埋候節も自分罷越見申候あはれなる體目もあてられず前代未聞の事共なり淺草辻村屋敷にては御用差支候故中橋元屋敷にかや葺の小屋普請して丸太屋をおもしろく仕父子共に三月

中旬に移り申候四月上旬より伊豆相模の御用石船段段に着申候隅石脇石大梁石相廻り申候中橋小屋の内しつらい朝がほ夕がほにて茶湯仕候

同四月初此度類火諸役人御番衆中御金被下置同町中焼失の家々表口割間口一間に金五兩あてに被下置候諸人弊をあげ難有がりめいゝに普請致し悦申候然ども江戸中大名小名町中皆わらやぶき柴垣のみに有之候御本丸二の丸三の丸御普請御目論見被仰渡惣奉行久世大和守殿御作事奉行船越伊豫守殿八木但馬守殿牧野織部正殿御普請奉行永井彌左衛門殿堀半左衛門殿本郷庄三郎殿御勘定頭會根源左衛門殿組頭竹村九郎右衛門殿山中喜六殿右の外被仰渡右の衆中寄合所内櫻田御門外の大腰掛焼残りあり此内を會所に相定め毎日此所にて寄合候父久兵衛自分も相詰候

御本丸焼跡御大老御老中御見分可有之とて久世大和守殿御案内にて元祖保科肥後守殿直孝掃部頭殿大專院雅樂頭殿酒井空印讚岐守殿元祖松平伊豆守殿元祖阿部豊後守殿御作事奉行三人御勘定頭鈴木修理木原内匠御被官片山源左衛門を初大勢父久兵衛自分迄御供仕不殘焼跡御見分御廻り御本丸中仕切北の方御天

守臺近所迄の内焼死人餘程有之右御見分前に俵に仕置候當年より御普請初め被仰付可然と御相談極り先御手傳大名兩人被仰付居屋敷類火無之に付て岡部美濃守殿牧野飛騨守殿兩人と被仰渡御本丸御臺所前北の方より二の丸御堀を埋御ひろげ被成候様に前へ築出し二の丸の方へは高サ六間餘の石垣南北に兩角有南の御門有二の丸へおり口は鹽見坂と此度名を付る海手見ゆる此所と蓮池御門石垣共に岡部美濃守殿御手傳場所也牧野飛騨守殿御手傳場所は北はね橋御門臺石垣共并に西門橋御門此邊の石垣なり

西の六月上旬御本丸御普請初め二の丸へ築出しの石垣父久兵衛火事以後早速伊豆相模の切出しに遣候石ども段々着船仕専ら此時の御用に立候に付大和守殿を始め御奉行衆久兵衛心付候て右到着申候に付當年より御普請御始被成候とて御感し御褒美被仰出候右岡部殿牧野殿御手傳所西の年極月上旬に御出來御褒美迄相濟候事

御本丸二三の丸焼石垣共次戌の年御築直し御普請御手傳大名衆御天守臺石垣并御天守迄松平犬千代殿(加賀の守事)只今迄は御天守臺伊豆石なり此度角石

角脇平石迄不殘根二番石也上の分御影石に可被遊山石積り書立大坂上町に有之候石共不足の分は犬島に可被仰遣候由扱前天守臺伊豆石の分は外の石垣の處へ足石に可被成由にて大きつね小きつねともに被除申候筈に相極る此兩石は御玄關前外形見付に築申候事御本丸奥表の境中仕切石垣高さ二間長東西百五十間程兩面切合石垣中通り良下口角々切合此御手傳中川山城守殿(後入山)御臺所前肥後矢倉の邊より御玄關前御門臺此節までは中じやく門と申候竹形の内石垣築直し丹羽左京大夫殿(後王甫)被仰渡候

内下馬の橋近邊(此橋前極樂ばしと申候)くろがね御門二の丸口御門臺竹形の内富士見下喰違御門臺石垣中の御門臺大石の石垣此邊細川六丸殿(後越中守)被仰渡上梅林下梅林坂切手御門臺本多内記殿へ被仰渡候御本丸二の丸惣石垣御多門下御矢倉下ならし石大方一ツ通焼そこね候分不殘取替此築直しの分森内記殿に御一人に御手傳被仰渡右大名衆御いたはり上屋敷下屋敷共類焼の分は先御手傳不被仰付候事右の石垣御普請次の戌年中不殘御出來也御普請中西の丸より三度御成毎に御歩行にて御手傳大名并家老諸奉行

其場所々に並居申され御目見末々迄難有儀に被存自分も親子ともに御供に罷出候御手傳大名衆へは銘銘御念頃の御言葉夏中は手傳方人足へ香篝散被下置候大名御門臺平川口内櫻田御門右三箇所戌の年中築直し相成候得共御手傳大名指つかへ申候に付町中御觸築直し足石共入札に被仰渡父久兵衛自分坂本あふ四人廻り築方吟味等仕候に付出來申候西の正月十八日十九日大火事に付外かわ御門升形見付焼失仕候分御番衆組々に吟味奉行人兩人あて被仰付御普請有之候是は御手傳大名衆には不被仰付入札の所も有之候父久兵衛被仰渡候所も有之候段々出來申候西の正月大火事以後江戸所々相替申候儀先御本丸へ火筋遠き様に代官町竹橋内御本丸御堀ばた道通り百間の余元屋敷御除空地は被仰渡候吹上御門の方るん硝藏四ツ谷末に被遣候事筋違橋外只今本多信濃守殿屋敷前西の年迄は町屋にて有之少々藏地有之候場所此内より廣小路に罷成候本郷の廣小路も此時江戸橋四日市と申町家有之候も此時廣小路になり土手藏を川端に被仰付候て火除に罷成申候

鎌倉河岸御堀より馬喰町西の方迄白銀町片側北の方

町家御除被成鹽入小船通り申候程長八九町濱町堀へ堀抜出來此堀土を以て長二十五間の新土手火除に被仰付上土不足の分駿河臺より運び酉の年大火事後土手出來仕候火除の爲也

山王御社地糺町御堀近所掃部頭殿通り道を隔て北の方に前々より有之候所社地せば火事の節類火あやしく候に付赤坂溜池の上松平主殿頭殿屋敷を大火事以後山王社地に被仰付只今の山王宮地なり日本橋京橋のあひだに廣小路三箇所被仰付此中橋の廣小路ばかり只今ものこり鍛冶町桶町のあひだに長崎町と申すを御除廣小路となる只今靈巖島と申は靈巖寺の寺地にて候此時深川へ引越仰付られ候跡只今の町屋なり東門跡此大火事前迄は濱町の東横山町南の方皆寺地なり此時淺草へ取替仰付られ上寺と申は柳原土手内南寺也是より淺草深川駒込邊へ取替今以誓願寺前と唱申候筋違橋より淺草橋迄の間柳原土手の北不殘川端町屋なり是も火除に町家御除只今御用石置場なり此所前は繁昌の町家なり矢の御藏と名付濱町の東淺草川近所に米倉有之候淺草御藏御ひろげ被成此矢の倉も御除被成候は此時なり酉の年大火事に諸人退場

無之數萬人焼死候に付退場のため横山町の道筋に本所への橋一箇所被仰付兩國橋と名付申候遊女町酉の年大火事迄は只今の堺町東の町に有只今元吉原と申所なり酉の春被仰渡夏中に淺草觀音堂北の方土手の内へ引越申候江戸中々廣小路出來侍屋敷町家寺々引さらるゝに依て此節江戸遠き所々ひろかり木挽町東の海築地被仰付候御材木藏以前は濱町只今間部越前守殿牧野備後守殿屋敷になり申候所已前材木御藏なり是も本所へ引さられ候事御本丸御天守臺石垣内に高さ二間石垣四方築内前々より穴藏と唱へ御用の金銀納り大分詰有之候御天守焼失に付金銀ひとつに湯に成申候戌の年御天守臺ほぐし築直しに付御普請取掛前に此金ひとつにかたまり候をしゆらに乗せ五百六百人づゝの人にて三の丸まで挽出し申候御留守居衆四人の奉行也銀座年寄京屋與四郎と申候古手屋五郎右衛門兩人受負三の丸にて金銀吹分申候石垣裏くり石の間にながれ込候迄取出させ遣申候亥の年御本丸一の御丸御作事の下拵本所に小屋場被仰付御作事御手傳大名衆十人被仰付高十五萬石十萬石三四萬石迄の衆中棟梁分にて被仰付御威光にて亥年中に不殘

御作事御出來冬御わたまし西の御丸より三年目にて御機嫌克御移り被爲成候此次で御天守も可被仰付儀に候得ども大變の所十分も如何との御沙汰御天守は相止臺計御出來被差置候也

後見草中

鴨の菊太夫長明が方丈記に行水は絶えずしてしかも元の水にはあらず流れによどむうたかたは且結び且消ると移り行世のさまを書あらはせしも宜なり予生れしより以來二十四五年の間に重サ六七匁も有なんと思しき雹の降しこと龍の天昇せし由にて故の郡上太守金森殿の長屋を引倒しけるより外に驚く事もあらざりしに寶曆九年の夏の頃より誰云出すといふ事もなく來年は十年の辰の年なり三河萬歲の唄へる末祿十年辰の年にあたり此年は災難多かるべし此難を通れんには正月の壽きをなすにしくことなしと申觸たり是によりて或は難煮を祝ひ蓬萊をかざり都鄙一統の事とはなりぬ其年も暮れ明る十年の辰の年には將軍家右大臣に任じ給ひ御年もたけさせ給ふとて大納言殿に政務を御讓ありて其身は二丸に移らせ給ふ扱大納言殿新將軍の御祝を二月四日に定めらる在江戸の大小名の御家にて此事祝し奉るとて其前夜よりさゝめきあひたり然るに其夜巳の刻斗に赤坂

後見草上終

今井谷といふ所のあやしき神官の家より出火長坂通り一本松小山あたりへ火移り次第に風はげしくなり南は品川八ツ山邊まで焼出北は田町と云ふ所にて火は止ぬ大方ならぬ御祝なればとて輕きものこそ逃まどへ御内に仕ふまつる人々は衣冠正しげにめしなから火消裝束せし下部に與かゝれ我一にと本丸殿に候し給ふ誠にまれに怪しきさまなり同じく七日には御府内の町人に此度の御祝ひの猿樂見せ給ふとて又宵よりさゝめき合たり扱此夜いかなる時にやありけん戌刻斗に神田旅籠町に有ける五社の神の祠に一册專明といへる惡黨有て火を放ちたり折節辰巳の風はげしく吹て忽火さかんになり次第に移り行くほどに柳原佐久間町はいふに及はずさしも瓦をならべし江戸の町千町斗も一時の煽ともえあがり武藏下總の境と聞えし兩國川を越深川に飛火して神社佛閣一字も残らず一べんの烟となり洲崎木場などいへる人家なき所迄焼通り此火は爰にてしづまりたり凡此内に有ける小橋の分はいふに及はず新大橋永代橋も焼落てむなしく名而已を殘したり南は日本橋をさかひ北東は兩國を限りあくる七日の巳の刻に風と共に火は止

ぬ又此夜増上寺と云御寺より火出同時にもえ揚り其火も移り行程に先の日焼止し田町と云所迄行々て移るべき家居もなく北東は大海ゆへ火はむなく焼止ぬ八代將軍家御仁愛の餘り江戸中の家居土藏作りといふ者に作り建られしより後凡四五十年以來かゝる大火はなかりしにより四民ゆたかに侍りしが今度の災にかゝり人々の財實はいふに及ばずふるき文まで數を盡し失しこと實惜むべき事なりとも知れる人の大息し給ひぬることわりなりけれ何者か祝しかへて讀たりけん

左右よりひの出をあふぐ右大將

けるおほやけの御代ぞめでたき

實曆も申の年に改元ありて明和元年とはなりぬ今年是新將軍を祝し奉るとして朝鮮國王より遠く我國へ使して吾妻迄來聘す公の警固大方ならず殊に火事は第一なりとて辻々小路々に番屋を建少しのすきもあらざりしに此時も又いかなる家より出しけん二月二十日の夜神田あたりより火出室町邊にて焼止ぬ其使歸るさ攝津國迄罷りしに道の守護は對馬の大守宗殿なりしが其家のおとな古河大炊が下部茂市といへる

者財寶を奪はんため彼使の中官戴天宗といふ者の廢所へ忍入天宗を刺殺し其場より逃失けり其死骸のかたはらに我國の鎧の穗にて作れる懷劍の落有しより事あらはれ一旦遠く隠れすみしも尋ね出し異國人の前にて首をはねられたり是もためし少き事のよし又同年の幕武藏國秩父郡八幡山の土民公に訴へごと有とて同所の神流川といへる大河の邊りに寄集り鯨聲を揚ければ近郷近村はいふに及ず上野下野の土民共同じ様に徒黨をなし我先にと驅集る五郡の人數合せて二十餘萬人鴻巢大宮さして押來る廢の驛まで至りぬと聞えしかば御郡代伊奈備前守殿に仰て其黨人をしづめらる此事大間の兵内といへる者工み出し五郡の宮寺に高札を建て此企に組せずば村々焼拂はんと書たる由伊奈殿の德により御府内へは入ざりしが理非くらしき關東者のならひにて此折を能幸と常に腹あしく惡しと思ふ家毎に推入て踏こぼち只あれにあれけるにより此難に逢し人其數を知らず錦貫半平狐塚甚左衛門などいへる者居宅に互に折合ひ疵を蒙り即座に命を失ひし者百人に餘れるとなり扱此事も明る二年の正月十日あまり漸静りければ公より仰とし

て其張本たる者尋出し召捕へ來るべしと寄騎同心數十人を差むけ給ふ是によりて五郡の土民の長たる者或は十人二十人此所彼所にて召捕れ其數何百人と云に至り一ツ獄屋に押入らるるれも猶餘りて果は品川淺草兩所の溜といふ獄屋迄にみち／＼たり凡此度の騒動に其罪いまだ定まらざりしに其前に獄中にて死せしもの其數を知らずとなり又同三年の春の頃より御藏門徒といへる邪法の沙汰さま／＼あり其法の信者なる由にて家富榮えける人々の隠居などいへる者を初として愚智無智なる軀かゝに至る迄公に數多召捕れ獄屋の内につなげたり兼て願ひし浮世安樂に引かへて大小地獄の呵責目の前にうけ常には錦繡にまとはれ育侍りし者共の沙汰にのみ聞し獄卒の責にあひなとやたまるべき忽ち命を失ふ者又其數多しと也公にはいまだ其罪定まらずして死しける者のならひなれば骨ヶ原鈴ヶ森などいへる極重惡人を切棄給ふ所へ同じ様に棄られたり是によりて其屍は悉からすつゝ喰ひ餓たる犬腸を引出しぬ此事見聞人毎に目もくれ魂も消る斗に覺えし也漸々秋の頃に至り其罪定り住なれし家居を逐拂はれ或はあかぬ夫婦

を引分られ父子兄弟所を隔てむきくさまぐの刑
 に行はれたり此年月間も及ばぬ事なりけり此邪法の
 根元は小細工次郎兵衛とやらんに初り新吉原町の近
 江屋権兵衛といふ者に其法傳り斯は其徒ふへける由
 又同じく四年の春山縣大貳藤井右門と云る者恐れ多
 くも斯治れる御代を亂し奉らんと上もなき事ども工
 み企る由宮崎隼雷櫻井兵馬など云る者公に訴へ出
 ければ是やすからぬ事なりとて其徒に組せし沙汰あ
 る者罪あるも罪なきも時を移さず召捕給ひ様々に責
 問玉ひしかはてはあとなき事なれど時を譲り上を蔑
 にし奉るとて大貳は首を刎られ右門は鈴ヶ森にて獄
 門にさらされたり又其徒の罪ある輩或は遠流に處せ
 られ或は住馴し所を追拂はれ上州小幡の領主織田殿
 も數代の領地召止られ遙東の國出羽の山形に於て領
 地を下し給ひたり斯ることも由井正雪丸橋忠彌が後
 は聞も及ばぬ事也又同年の夏水無月十六日の夜の事
 と覺えたりはた、神夥しく鳴て竹橋といへる所の軍
 器籠置給へる寶藏へ落たりしにより是が爲に焼失ひ
 ぬ又同じ年秋の頃と覺えたり髪切といふこと時行り
 ぬいかなる故といふ事を知らず是は男女の差別なく

美しく結ひたてたる髪の元結際より剃刀以て切るや
 うに何者か切て落す事なりた、襟元ぞと寒氣立と覺
 えし迄にて別に怪しき事もなく老たる人は少くして
 若き女子にことに多かりけりすて此怪の行はれし
 は皆夕暮方の事也世の人飯綱の法修する者の所爲な
 るよし申觸侍りしより湯島大根畑に住せし大善院を
 初として名たゝる修験の數々公に捕へられ様々に尋
 問給ひしが彼等が業にもあらずとて後はゆるされた
 りもしかの黒青の類にやと申人も侍りき同じ年の夏
 の末秋の初に至り箒星とやらん怪しき星東北の方に
 あらはれ根は細うして末ひろく大きな草箒の形の
 ごとし此星次第に長くなり後は數十文に及び天の半
 にも至りぬと見ゆ二ヶ月斗も毎夜に見えたりしが北
 へへと下りて終に見えずなりぬ是も古き文に記せ
 る迄にして誰見しと云事をきかず此時何者か狂歌し
 けん

天中に怪しき物ありて繪にかける屁の如しと

云前書して

君が代はくさきもなびく箒星

天下太平ぶうん長久

とぞ詠てけり又同年八月二十六日の事なりしが未の
 刻ばかりに辻風俄に吹起り御府内の人家夥しく吹破
 り或は板庇を飛ばし垣を倒しさしも丈夫に作り建し深
 川洲崎の三十三間堂を地より高く吹上て微塵にくだ
 きはたしてけり近頃稀なる風の由扱其九月に至感胃
 盛んに行はれ初はさせる事にもあらざりしが次第に
 流行ゆく程に後は路を往來する人も絶え將軍家に仕
 へ奉る人々を初として大小名の御屋形に置宿の人も
 まれくになりしにより家々の御厨にて其藥夥しく
 煎し或は荷桶手桶などいへる物に入れ臥居ぬる者
 の枕元に持運びそれく配り興へしと也此病だん
 だんと移り行後は佐渡越後の方迄いたり極老の人な
 どは是が爲に命失ひし者數多ありし由同七年の夏季
 とやらんいへる星天中に現れ其形さだかに見えす四
 邊くまどりたる様にて大サ一尺斗も有なんと覺ゆ是
 火星にて凡地にあるほどの水氣此星の爲に吸取るな
 りさればこそ其夏より秋に至り次第に旱し雨絶て降
 らざりしにより四民是が爲に苦しみ農事のいとなみ
 ならず京にては加茂の川原に井戸を掘江戸にては毎
 日に水を争ひぬ中にも相摸國小田原にてはあまりに

水の絶けるにより一日に一人に水一升馬一疋に水
 三升と定められける由實彼星こそ火星にてやありけ
 ん是より後三年程年毎に旱してあくまで人の難儀と
 はなりたりけり此秋の事なりき日は忘れたり戌の刻
 ばかりに天俄に赤氣立終背見えたりしが京地にては
 北國方の火事なりといひ江戸にては下總常陸のあた
 り大火事にてありなんと申人も多かりき何の故とい
 ふ事をしらす惣て日本國中見えぬ國はなかりし由同
 八年は鶴龜の毛生ひたる馬を獻じ又打續きたる旱に
 て海のさま違ひたるにや東海の鯛といふ魚北海に生
 し南海の眞名鯉東海に揚り凡有べき物其地にはなく
 あるまじきもの其地に生し海魚河にて揚り中にも鰻
 鮓といふもの上總國に集り九十九里といへる所にて
 は海の色も見えずなりけるとなりかゝることも聞に
 稀なることの由又同年夏の事にて侍りき時の老職上
 州安中の太守板倉殿のおはしける櫻田の御屋敷に怪
 しき事の沙汰しけるは下部共の多く集り住ける所へ
 如何なる化生ともしらす其寐所に忍び入彼者の能寐
 入たる吭もとを一度に強くしむると覺え啞と云聲し
 て互に目覺けるとなり夜毎にかくの如きこと侍りし

が凡半月斗も不止其聲近隣の大小名の御屋形へも聞え皆人不審し侍りたり人遠き山里などにはかゝる化生もまれくには有由なれど繁花第一の所といひ殊に武夫の御家にてはいまだ其例しを聞ず明れば九年今年は明和九とて言葉の縁あしきと人々兼てより申居侍りしに二月二十九日の朝より西南の風烈しく吹出烟天を覆ひ日光さだかならず皆人火事の油断ならず杯申合たり然るに午の上刻頃目黒行人坂大圓寺といへる小寺へ長五郎坊主眞秀といへる悪黨有て火を放ちたりしに初の程は其烟り風に吹切れさせるやうにもあらざりしが無程將監殿橋と云所まで焼出是より火勢さかんに其幅十町斗に廣がり臼杵殿御屋敷へ一番に火移り其火忽四方に散し外櫻田大名小路に住給へる九國四國の大小名の御屋敷一度にとつともえ上り燦天をこがし黒烟り地を巻き日の暮るほど猶はげしく風はますます盛んになり内櫻田大手前に焼移り貴戚権門の御家形を初として平押におすほどに神田橋焼通り又町家に火移りて末は猶廣がり筋違聖堂は云に及ばず神田の臺湯島の臺下谷鳥越淺草箕輪金杉田町五丁町只焼にやけゝるが果は千住骨ヶ原

迄焼出て夜はほのくくと明たりけり又其夜の亥刻ごろ本郷菊坂より火出東北さして焼けるが晝の火と二ツに別れ谷中三崎へ移り行東叡山を取巻て家なき方迄焼出たり明れば三月朔日にぞなりぬされども火は猶止もせず其所此所と焼けるが巳の刻斗に風北に吹替り馬喰町邊へ焼もどり山伏井戸といふ所に至り又風大變りに吹かへて東風にぞ成にける是によりて難波町高砂町なんといへるあたりより西へくと焼行本町傳馬町を先として室町日本橋へ移り風次第に靜になり中橋の火除にて未の中刻斗に火はやうくんに焼止めきのふ迄は大小名の御屋形玉樓金殿瓦を連ね神社佛閣所々に聳え數ならぬ商人職人の家迄も美を盡し軒をならべ互に競ひ建たりしにけふはそれに引替て只一べんの灰燼となり悉く渺々たる原野の如く寅の門常盤橋和田倉馬場先日比谷櫻田筋違神田なんといふ御門々は焼落て只殘る物とは石垣斗巖然として見え渡りぬ勿體なくも心觀院殿の御靈屋初め奉り仁王門日吉の社大社神田明神湯島天神大寺には本願寺天徳寺其外聖堂御廐大馬建桔梗の櫓に至るまで其數計り知るべからずかゝる大火の後なれば烟に巻

れ火に焼れ男女の分ちもなくこがれ爛れし屍もあり或は命たえく生殘るものもあり又は足を傷り腕を焼臥轉ふも多かりき光明寺の御山にて同し所に死しける者百人に餘れるとなり其外土手下西久保和田倉の御門の内此處に十八彼所に五人枕を並へて死ける者時の奉行へ訴へしも四百餘人と聞えたり或は堀河に身を沈め大名の屋形内に焼焦れ果たる者其數計知るべからず又辛うじて命助りし人々も父におくれ母にはなれ子を失ひ妻を尋ね縦横に泣きけふ或は其藏此藏助けしは水ををぎ灰を除け悦び勇む人も有または内より焼出しこはいかにとなげくも有斯取亂したる中なれば盜賊は時を得て財寶を盜取足早に逃るもあり又は見付出されて打たゝかるゝもあり主は空しくなりながら調度斗は焼残り積重ねたる所も有又やんごとなき女房の一夜の臥所に迷はせ給ひあやしき寺におはすもあり常の火事のならひには互に互に訪ふならひなるにかゝる火災の後なれば尋ね訪ふ人もなく數有人はさもなけれど兼て賤しき者共は食を求むる便りなく飢へかつたる其有様淺ましかりし事どもなり漸く四五日過後繩を張板葺簾引廻し

初て道路は分れてけりされども家を失ひし人々は露にうたれ船に浮み立所に迷ふは數知れず扱二十日斗も程経て後も餘燼なほきえやらす夜毎々々に空赤く物すさまじく見えける様實に阿房の古も斯やおもひしられける凡此度の火災にかゝりし所幅一里に餘り長さ六里に足らずとなりさしにも廣き江戸の中三分の一に過たる由是によりて萬石以上をしろしめす御方斗も二百餘りまして其以下の者共は幾百萬とも計れず明暦三年の大火災と聞えしは末家居もまばらにして萬事あさまに有ける故何程も焼たるべし近き頃は土藏作りと云ものになり容易には焼ざりしにあくまで筒様に焼けること實に天災のいたす所と人々恐れおのゝきけり騒しかりける春もくれ夏も水無月に至る頃民心少しく穩に家作のいとなみ初りけりされども世上のすがた何となく故の如くにあらざれば夕涼み川の景色いつの年より物淋し是は傾城町歌舞妓芝居いまだいとなみ始めざりし故也と申人も侍りぬ只番匠左官の類おのが業のしげかる故おこがましげに見えてけり又文月二十六日武藏國茨木郡石河郡と云所の土民孫左衛門といへる者兩頭の龜をとらへ

し由是も元龜以來聞も及ばぬ事也同八月二日の早朝より雨しきりに降申の刻斗に至り南北の風強く吹起り日の暮ほど猶はげしく物すさまじく空暗く風を飛ばし軒をまくり其響のあらしき事百千の雷の落かゝるにことならず夜の更るにしたがひて風いよゝ盛んになり大木を抜垣を倒しさしも丈夫に作り建たる家藏までたやすげに吹潰せり本所深川などいふ地卑の方へは潮さし入床の上まであふれみつ其所に住人はこは如何にせんと騒動せりかゝる折しも何としてか出しけん四ツ目あたりの小家より火俄にもえ上り四五町斗りにひろがりたり雨風はますます強く辨へ知らぬ女童こはいかに天地も今や崩るゝとあはてふためき泣叫ぶ漸く夜半過る頃風雨共止にけり夜明て後人の告るを聞ぬれば沖に懸りし大船の繋ける綱を吹切て陸地の方にあげゝるよし又永代といへる大橋を眞一文字にはせ切て二十間あまりきたたり立續きたる家居だにたやすげに吹倒す程の風なればまして此春火災にかゝり新に作り出されて未造作の整はざる限り大小名の御屋形を先として賤しき者の家居迄一字も残さず倒してけりまた同じ月十七日は朝よ

り北風強く通し二日の風雨の如くいとすさまじく吹けるに其勢をくらぶれば先のあらしにはおとりしかど北よけにて助りし家居の分南の方へ倒れし也惣て兩日の嵐にて吹潰されれ家居御府内は數しれす伊奈殿の支配し給ふ關東筋の土民の家四千餘軒と聞えし也か様の事は見ぬ世の事には傳へ語り侍れど目に見る事こそ初めなれ扱も此年頃まのあたりに見たしかに聞し事毎に書盡すに餘りあり邊土遠境にて沙汰にのみ聞侍りし上野下野越前佐渡攝津是等の國々土民共の徒黨の事其外諸國の火事没水大風の類まで一ツ一ツに記しなば硯の海もかはきぬべし中にも明和八年の春より伊勢皇大神宮の難有御利生ありと申觸侍りしにより幾内近國を先として物の辨へしらぬ女童八歳九歳の小兒まで我一にと語り合主親の目を忍び扱参りといふことをなし或は乳喬子を抱き御乳めのとに至るまで其身斗か飼馴し犬猫をも率連ておとらじまけじと詣しなり後は七道の國々残る方なく雲霞の如く打群て日毎く々に参りし程に太神宮の長官より一人に劔御祓といふ物を一ツ宛分ちさづけ與へしが五月五日六日の頃は其數一日に二十四五萬に及

しと也寶永年中かゝる事ありしよしは聞傳へしが其後いまだ其沙汰を聞ずいかなる事の御利生にや覺束なし唯好事もなきにはしかしと申侍るは無爲にこそあらまほしけれ

後見草下

きのふはけふのあだしゆめ飛鳥川の淵瀬早く寶曆の辰の年より明和の辰年に至り既に十三年に及べり其間見聞し事共書記して一ツの巻とはなりぬ夫より後今年まで又十六年を経たり過來りし方の事共思ひ出侍れば若かりし時とたがひ多くは忘れがち也まいて年月も定かならずされどこれ髣髴と心に留りし事ども多し明和も九年に改元ありて安永元年とはなりぬ今年より世中あらたまりよろづ目出度なりぬべしと申侍りぬ然るにいまだ大火の後なる故させる替りも見え侍らざらしにより何者かしたりけん年號はやすくながしとかはれども

諸色高じきまに明和九

と讀出したり是は四民の心易からざる所よりおこりぬと見えたり又其年のことなりと覺ゆ日光の宮薨し給ひ幾程なく凌雲院覺應院信源院の三僧正公に召捕られ極悪人を見るが如く獄屋の中に囚れ給へり是大乘小乗とやらんいへる法儀の上の事なるよし無程ゆ

後見草中終

るされ給へども東叡山を追拂はれ無官の僧となり給ひぬ如何なる深き罪やらん刑大夫に及ばずと聞え侍るにかならせ給ふことの不審さよ其年の冬より同二年の春に至り疫癘天下に行れ就中東海道は甚しく死しける人々多しと也抑今度の疫癘は去る明和四年に行はれし感冒と異にして其毒の強きこと筆も言葉も盡し難し一度此病に染る人の助るものは聞ざりき別て遠江國日坂の宿などにては人種も盡る計に死けるよし江戸にても餘りに人の死ける故公より御救として人參といふ藥を賤しき者に給りたり此年閏二月より同五月晦日まで葬具商ひしこといか斗りありしと棺屋のかぎりよび出し時の奉行の間せ給へば凡十九萬ばかりと答へ申侍りき此病ひ中人以上は病む人少く下賤の者のみ多かりき蓋戰國の其昔耻を知り義理を辨へ國の爲主君の爲命を棄し人々のその白骨は納め葬る人もなく今に野山にすてさらし雨露にうたれ有と聞治れる世の國恩には斯ばかり死しける人たとへ賤しき屍にても皆それ〱分に應し禮をとゝのへ式をたゞし骸を晒すは一人もなし難有御代に生れ逢なりと志ある人々は申侍るもことほり也又其頃お

かしき事の侍りしは年頃疫癘除のまじないし或は其姓名を札に印し家毎の門に張たりし深川蛤町水や半助と云男あり此男今度之疫災にかゝり其身はかりか家内の者残らす煩ひ死果たり俗人の習とは云ながら腹かゝゆべき一談なり扱此病も秋に至りいつとなく止たりしなり同しく三年の冬例よりは寒氣強く所々の入口氷厚く船路絶て来る正月に松はやすべき便りもなし一と日朝巳の刻まで名にしおふ兩國川も氷閉ぢ往來の船もとだえし事の侍りき駿河國は暖國にて都て氷と云物を六七十年も見し人なし然るに此冬は御城の外堀に氷閉しと也此年頃聞も及ばぬ寒氣なり又同四年のことなりし飛驒の國の士民共公に訴へごと侍りとして數十萬人徒黨をなし高山の陣屋とやらんへ押寄強訴する由聞えしにより美濃の大垣殿同國郡上殿岩村殿越中の富山殿此四人の殿達に仰て其黨人をしづめらる中にも郡上殿の御人數一番に馳付とある森の片陰に徒黨の者共打集り朝飯くらひ居し所へ鐵炮の筒先揃へ微ぢんになれと打ける由此勢ひに胆をけし徒黨の奴原さわざ立互に押合ひ踏倒し右往左往に逃散て忽ち此事静りけりされ共又此騒動に或は

深手淺手を負死せし者も多しとぞ今の御代治りて後鐵炮を以て土民を殺し侍る事此時を初めと聞又富山殿の御領知の境に飛驒の畚渡しと云所有此渡りはあなにもこなたも數十丈の切岸にて渡すべき橋作らん様もなく常には大綱引渡竹にて作れるふごを以て其綱に貫き往來の人これに乗り手繰々々て渡る由富山殿今度の仰蒙らせ給てより數十艘の船を集め繋ぎ置給ひしと也其武備のゆゝしきを慥に見し人語りてけり又同じ頃の事なりき信濃國木島といふ所の土民ども是も同じく徒黨して其土地の陣屋へ寄集り嚴しく要訴したりしが其張本人あらはれて無程誅に伏すと也同五年の春の末より麻疹といふ病ひ流行三十以下の人々の病ざるものは稀なりし此病二十五ヶ年以前行れしが其時とくらぶれば今年は殊にはげしと也又同じ頃の事なりき御府内の人々五六月の間より正月の壽をなし豆をはやし雜煮をいはふ事實曆九年の如くせり命あればかゝるうつけしひが事を再びまで見侍りしと友達語笑し也同八年の二月二十一日に大納言家基公常の御行列にて品川へ御狩に出させ給ひたりこの日いかなる悪日にや狩し給へる所より俄に御

病ひつかせ給へる由にて早く還御まし〱たり今朝成せ給ふ迄は御勢ひ壯んにて御供に立列ぶ人々もいさみ進み參らせしが御輿も御歸りにはしとやかにかき參らせかりそめの物の音だにもせず唯しゆくせんとなしめる姿にのみ見え侍りぬときこゑし也是は扱何とならせ給へる御事にやと人々心をひやし奉りぬ同二十三日三日と申に御病ひ重らせ給ひけるとて諸寺諸山に御禱有し高僧貴僧は大法秘法を修して時に名を得し官醫のかぎり醫業を盡し肝膽をくだき參らせ共一ツとしてその御するしましまさ御定業のかぎりさせ給ひけるにや年わづか十八歳にて同二十四日に薨去せさせ給ひたり實に天下第一の儲君にわたらせ給ひ殊に賢明の聞えおはしましけるにより萬民おしみ奉ること大方ならず無程京都よりの勅使御下向有て孝恭院殿と諡を參らせらる御當家御代しらしめし給ひて後かゝる急病にて薨じ給へる事聞も及ばぬ事なり又同年日光山大嵐して其土地の御役人山口平兵衛とか申せし人父子とも中禪寺普請の小屋に居て其夜吹倒せし大木の枝に打貫れ即座に命を失れしと也いかなる神の御咎にや昔より此御山には大小

の天狗數多ありて少しも邪の心有ものは必害にあふ由也まぎれ無きことにはや覺束なし又去年の年の暮より今年の秋に至り伊豆國大島と云島のおのづからに焼出夜毎く西南の方鳴動し江戸中に響渡り其筋に當る所戸障子襖の類ひまで倒れし事多かりきまた一日空打曇り細き灰風につれ都下一面に降たり日を經て後に開ぬれば薩摩國櫻島といふ所是も同じく焼出し其國は云に及ばず近國までも鳴響き恐れぬ者はなし久しき事にて年月は忘れたり大凡此等の事と覺ゆ又同九年の夏幾日もなく大雨降り利根川荒川戸用川をさきとして關東の大河のかぎり水溢れ堤崩れ武藏下總一面に地卑の方に洪水せり誠に山を越岡にのぼるの勢ひにて田島共に見えわかず大海原の如くなり人家數多おし流せり是によりて御府内第一と聞えたる兩國川の水はやく矢をつくよりも甚しく永代橋新大橋も一時にくだき落したり公には此事はやく聞し召急ぎ窮民救へよと御郡代伊奈殿に仰せて數十艘の船を集め米錢數多積載て村々に分ち配り給ひけり然るに此水引かねてそこ此所に湛えし程に救の者共よるべなくやうくと漕廻り常には高しと見な

したる大木の上枝に彼船を繋ぎとめ十日餘りも過せしとして其役にたづさはりし卑官共の歸り來りて語し也扱も斯有し程の洪水なれば五穀一向出來ばこそ土民の難儀大方ならず若きは手を引老たるは腰をおし子を抱き孫を負ひ或は十人二十人日毎く打むれて御府内に入來り戸毎に食をこひ求め漸々飢を凌ぎし者其數さらに知るべからず人々難儀の此水を忘れまいぞや子の年だんとうと童謠にも唄し也安永も十年の春に改元有て天明元年とは成にけりそも此年號は善事も天命悪き事も天命なれば頑愚の人の言葉には悪き事のみ天命と覺えしなれば文字のひき悪かりけり申人も多かりき實に天に口なし人をして言はしむるのならひにや其年の秋の頃と覺たり公よりの御沙汰として上野國より出せる緋一匹毎に銀二分五厘目といふ運上を定めらる一國の民是を歎き大勢打群徒黨を結び要訴するよし聞えければ直に其事許されたりされどもこの事召れよと何某等が申出し侍りぬと誰いふとなく觸ければ名におふ上州者のならひにて氣あらしき者共寄集り五百三百打連立此家彼家押込て土藏をこぼち戸を破り衣類調度のゑらびなく

引裂ては投出し踏碎きては取てすて狼藉至極に振舞たり後には盗人立交り物盜て其爲に鬘をかけて童となり一番に躍入又危と見る時は引かなぐつて袖にかくし富豪の家を撰み指圖してこぼちにこぼちし由中にも同國高崎の大黒屋何某こそ連上めせとすめ申せし一人なりと罵る者の有ければ逃すな者共と六七百人寄集り一度にどつと押寄たり所の領主右京大夫輝高朝臣在江戸の留守ながら此事早く聞し召悪き賊徒の振舞かな唯一もみにもみつふせと足輕大將原田宇右衛門をさし向らる宇右衛門馬に打跨りむち鎧を合せつゝまつしぐらに馳向ひ組子共に下知をなし鐵炮をつるべ放しければ面に立たる徒黨の者即座に四人打倒されひるむ所へ馬乗入堅横に駆ちらせば元より頭取人もなく寄集りし土民なれば一足もこらえざこそ此勢ひにおち恐れ互に踏合推倒し死人怪我人數しれず唯一さんに逃出し跡方もなくなりけるよし是にて徒黨は散せしが此度の騒動に産を破り財を失ふ物又其數はしれずとぞ總て近來のならばしにて上に訴訟ある時は土民必黨を結び狼藉を振舞故領主地頭の勢ひは何となくおとろへて下に權の落るに似た

り實に季世のありさまと嘆息しぬる人もありその年もくれ明る二年の春よりは海上の波あらく何がしの浦何がしの沖船とも數多破れし事何百艘とも知れざるよし凡此年一年の間の溺死せし人數しれずわづか極月十七日の一日にさへ七百餘人死せしとなり六十二年前方かゝる覆船の難多かりしが夫より後は開傳え侍らずと老たる人の語られき吾邦ばかりか異國まで海上の波荒かりしにや漢土の船十三艘紅毛船二艘づゝ長崎之湊入兼て定め置れしが紅毛船は乘來らず漢土の船は只五艘年中に着たるよししかも其内三艘は去年の乗後れにて有けるとなり又同年春より夏に至り雨多く降けるにより所々洪水の訴しげく中には伊豫土佐の地は甚しく田島もあれ損し人馬數多魚の腹に葬られしと也又關東も日々に日和あしく空曇り暑さ強く日毎に蒸が如く文月の初めより小き地震二度づゝふるはぬ日はなかりしなり扱同月十四日の子の刻頃どろくと鳴出し物音強くゆり立たり人々の寐入込たる頃なれば驚き騒ぐ事少なからず明る十五日は殊に空打曇り残る暑さもわきて強く諸人日の暮るを待かねて涼みがてらに端居して居たる頃又俄

にゆり出し踏もとまりかね壁を振ひ瓦を落し戸障子
 などを打倒し大地ゆさ／＼動搖して古くあやしき
 家どもは見る間に倒すも多かりき翌朝見渡せば庭の
 面は氷のごとく開き裂其中にも小日向の江戸川岸三
 尺許も震り開きけり程経て後に聞ぬれば相模國小田
 原は城の橋を初として商人農人の家藏より神社佛閣
 に至るまで直に立けるはなかりし由八十年前未の年
 の大地震と聞えしは殊に勝れ侍りしが夫より後かく
 甚しき更に覺え侍らずと百年近き老翁の昔を引て語
 られたり其年も暮れ同三年今年もまた關東の國々に
 春より夏に至る迄晴る日は稀にして雨の日勝に覺え
 たりたま／＼雨なき日は雲重り空くら／＼二百十日の
 順迄に晴と曇を數れば雨の方ぞ多かりける然るによ
 り水無月の暑さも知らず年老たる人々は冬の物著て
 過されたり是により川々の水増り千住淺草小石川小
 日向などいへる所一時に洪水押し軒を浸し塀を
 越し水災にかゝれる家何程と云數しれず大川橋柳橋
 水におされて流れ落さて文月になりぬれば空更に晴
 やらずやう／＼四日五日の頃秋の暑さ身にこたへ五
 穀のみのりよかりぬべしと人々勇み申觸る然るに六

日の夜半頃西北の方鳴動し雷神かと聞ばさに非ず一
 聲／＼鳴渡れり夜は已に明けれど空の色ほのぐらし
 庭の面を打見れば吹來る風にさそはれて細き灰を降
 せたり漸く午の刻に至る頃風も止灰も止初めて夜の
 明し心地せり又其日の夕暮方より同様に鳴出し終夜
 止もせず明る七日は猶はげしく降灰も大粒にて粟黍
 などを見る如し手に取て能見れば灰にはあらで焼
 砂なり又是に交りて馬の尾の如き物同じ様に降來る
 色は白も黒も有又其砂の積ること遠はあれど深き所
 に至りては繁き霜かと怪しまる同八日の早朝は其震
 動の強きこと頃日よりもすさまじき也人々の申せし
 は過し頃薩摩國櫻島の燒ける日空曇り灰降りぬ是は
 夫より多ければ遠國にてはよもあらじ近きあたり日
 光か筑波の山にてあるべしと口々に云觸たり同十日
 の日下總國金町村と云所の勘藏といへる村長御郡代
 伊奈殿の裁斷所へ訴えしは昨九日未刻江戸川の水色
 變じ泥の如くに候故不審と詠め候うち根ながら扱し
 大木を始人家の材木調度の類皆こま／＼に打碎け又
 それに交りて手足切たる人馬の死骸數も限も知れざ
 る程川一面に流れ浮み引もきらず候ぬ背より夜半に

至る頃次第／＼にまばらになり川下へ流れ行候と注
 進したる由續いて幸手の宿よりも訴出たるは同日同
 刻權現堂中川利根川此二ツの川筋へ家藏の破れし材
 木類六七寸と覺しき柱七八尺の梁棟其外戸障子桁椽
 有とあらゆる調度の數々又は生木の太木ども四五尺
 計に打折て枝葉も碎け皮もむけ木末のわかちも知れ
 ず流れ下り候同僧俗男女の屍共手足もきれ首もなく
 子を抱き蚊帳にまかれ機物腰にまとひ付或は手に手
 を取かはしからだ半分切れ放れ生々しき死骸ども水
 の色もしれざる程浮び來る其中に上州群馬郡川島村
 と書付たる小荷駄の鞍を見付し故拾ひ取立歸り委し
 く人に尋問候へば伊香保と云へる湯治場より二十里
 ばかり彼方なる村の名にて候由語り申候也又此川の
 水筋へいかなる毒の流れ候やらん彼雜物の流れ過し
 後にあらゆるうろくづ水に酔たる狀にて活るとなく
 死ぬともなく浮み流れ候ひぬ是は定て川上に大變候
 べし餘り怪しく候故御注進申候と宿の役人文右衛門
 と云へる者同じく申上たる由御府内の人々傳え聞扱
 は此頃灰の降しは此故の事なるべしとます／＼不審
 し侍りたり無程信州佐久郡の輕井澤上州碓氷郡の板

鼻宿其外東山道の宿々より追々訴出けるが中にも輕
 井澤の者申せしは今年春より同國の淺間嶽おりお
 り焼出し烟いづもより甚しく別て去月の下旬に至次
 第／＼に繁くなり遂に今月七日亥の刻頃と覺しき時
 俄に震動雷電し其山どつと燦上り家々屋鳴強く所の
 男女驚き騒ぎ皆親族の見分もなくおもひ／＼に逃出
 しぬ斯る折しも虚空より大石小石砂交り燦々ともえ
 ながら雨より繁く降下り宿の長役又七が屋の棟へ焼
 石多く落かゝり其火四方へ散よと見えしが忽に燃付
 て宿中俄に大火となり火の粉燒石雪吹のごとく實に
 大小焦熱地獄遁れがたく候間老若男女此時に途方に
 くれて候也此中にも宿役人六右衛門と申者父子手ひ
 どく相働き水帳ばかりは持退候然れ共其者の孫や子
 は如何相成候哉行衛相知不申と是も訴出し也日を經
 て後儘に見聞し人に尋問侍りしに今年水無月二十八
 日九日頃淺間嶽鳴動厳しく日毎夜毎に止時なく文月
 六日七日に至空暗くいなびかり眼を射日中も暗夜の
 ごとく砂石の降音は雪霰より甚しく人々恐れ戸をさ
 し固め往來する人も絶てたま／＼さりがたき所用に
 て出行事の有時は松明提燈にて路を照らし侍りき同

八日未の刻鳴動殊に甚しく何やらん降來る音したり
 いかなる物と見侍れば是は則泥雨にて其熱き事湯よ
 りも熱くまた夫に交りて焼石はげしく落かゝれり是
 は淺間嶽東の方鳴動の時に當り一度にさつとさけ開
 き隣國上州吾妻郡吾妻溪へ熱湯を吹出せしにて侍り
 し也抑此吾妻溪と申は左右は峨々たる大山にて其真
 中を流れ行谷川の名なる由此故に此川を吾妻川とも
 名付ると也扱此大變に懸りしは此溪川に從ひし左右
 に續きし二十ヶ村惣て此間に立並ぶ大家小家は云に
 及ばず草木人畜に至る迄少しも形ある物は有情非情
 の差別なく皆熱湯に飛出す百間五十間の焼石にはね
 られて微塵に碎けおし流さる其勢ひをたとへなば百
 千の石火矢を一度に放つに似たる由また其熱湯の深
 きこと何程と計られず此災に懸りし村の其中に坪井
 と名付し所有其村に住居する助右衛門といへる男あ
 り此男もとより家富けんぞく多く慈悲深き聞え有扱
 助右衛門が住居といへば前は則ち吾妻川の路に臨み
 後は萬山といふ大山に續き路よりは高き事一丈ばか
 り山に傍て地を開き長サ二十間餘の酒藏二棟立並べ
 又それより石階を付一丈ばかり上の方に居室を構へ

其庭の正面に年經る松を植置たり此松の高きこと平
 地より五六丈も有し由扱此度の山拔聞とひとしく助
 右衛門が家屬共皆一統に遁れ出後の山に這上り願て
 見渡せば川より續く熱湯のさばかり高き松の木の一
 の枝まで浸せし由其深き事大凡是にてしらるべし又
 助右衛門が隠徳は天も感應まし／＼けるにや懸る災
 難に遁ながら一家合て九十餘人不殘後の山に遁れ一
 人も横死する者なかりし由其中に唯一人の下女麓の
 畑におり下り何やら摘て居たりしが件の變事と見る
 よりも一さんに遁れ出んとせし内にはや熱湯おし來
 りいかにともせんすべなくあきれ立たる折しも不思
 議に鴉臼流れ來り其前を過けるゆへ天の與へと飛乘
 て三十里計川下へ思はず流れ着けるとかや偏に助右
 衛門が餘幸と時の人々申せし也又變の急なるは山の
 裂たる所より一里計も下つ方奎の關所といへる有此
 關は同國高崎の領主右京亮輝智朝臣の預り給ふ所也
 其家子何某とか云へる男關の守して居たりしに此折
 しも其關の前に懸置たる松の橋といふ橋を修理し給
 へる時なりしに其工とも聲々に山こそ扱て候へどあ
 はたしく呼りしにより其男是を聞武具は武士の乘

べき物ならねば持退んと立上り提は提たれど夫さへ
 も叶はずしてやう／＼に遁出後の山に上りし由又此
 時に諸共に左右の峰へ遁し者皆吾妻川の岸に臨み立
 續きたる里人漸々手足達者のもの共はからうじて遁
 れしが跡に残りし妻や子は家のそとにも出る間なく
 浮つ沈つおし流され或は窓より顔さし出し又は棟木
 に取付て助てたべやと泣叫ぶ彼もの共是を見てあれ
 あれと呼ばれど如何ともせんすべなく見殺しに殺せ
 し事いとあはれげに語るもあり昔より七難とて災難
 七ツなるなかにそも是はいかなる難にて侍る聞きへ
 も猶おそろしく惣て此度の變災にかゝりし所淺間嶽
 の麓より利根川のみきはに至り凡四十里計の内皆泥
 海の如くになり人家草木一つもなく砂に埋れ泥に推
 れ死亡せし牛馬限り幾程と云數しれず老若男女僧俗
 まで合て二萬餘人也とさればこそ元利根川新利根川
 其川下の流れ／＼人馬の死骸充滿せり寶永四年亥年
 に富士山の焼けるは古今の變事と聞えしが是はそれ
 にも増りし由實に希代の天災なり凡今度の焼砂蒙り
 し所十餘ヶ國に及ぶといへども就中西は信州追分輕
 井澤を限り東は上州吾妻郡は云に及ばず高崎前橋に

至る迄を第一とす深き所は一ト坪に一石三四斗にお
 よぶ由是によりて田畑俄に荒地となり土民忽ち食を
 うしなひ其後に至りては此所に三百彼所に四百或は
 千人二千人地頭地頭の城所に詰寄此事歎き訴たり中
 にも伊勢守勝曉朝臣のしろし召す安中の城へ詰寄罵
 り歎き訴へし事惣て二度三度に及びしかど果敢く
 敷取上給はざりしにより果は大手の御門へ詰寄若救
 ひ給はずば城内へ入べき由嚴しく要訴するにいたり
 様々に扱ひて漸引せ給ひしと也此折しも近國近郷の
 あぶれもの能幸とや思ひけん東西より驅集り千人餘
 り徒黨して俄民なりと偽りて其所此所の富豪の家を
 聞出し見出してひたこわしに打潰し金銀米穀衣類ま
 で我一にと奪ひとり次々に押通り九月の末十月の
 初めの頃白井の關の向方なる小諸のあたりへ亂入り
 不日信州上田の領へも押來るべしと風説せり領主左
 衛門忠濟朝臣在江戸の留守なれば家のおとな聞傳へ
 是安からの風説なり先其虚實を糺すべしと旗の手の
 者撰み出し物聞に出したり其男立歸り昨三日午刻一
 揆と覺しき胡亂者十五六人打連立小諸領まで來りし
 が一味の人数集らざりし故なるか又は物見の爲なる

か直に夫より引返し行方しれずなりし由又其日の夜に至り人数の多少は知れざれど大勢集り一手になり村々を亂暴し其後は行方知れず候ひしと慥に聞え侍りぬと詳に述たりけり長臣等是を聞其條ならば必定當家へも来るべし先その用意仕れと家の子共を招き集め櫓を開き兵具を揃へ再び物聞を出したり其男も立歸り昨夕は追分宿の宿中迄一揆押寄候ひしが加州の御家人何某とやらん泊り合せ是を聞惡き下郎の振舞かな若此家に手向せば撫切に切殺せと嚴敷下知を傳へし由一揆ども是におち直に其場を引退き夫よりは道を替小路小田井野澤の方へ向ひし由野澤村には兼てより一揆の風説聞傳へ一支へさゝえんとその村口の橋を引多勢を備へ待かけたり一揆是を恐れけん向の河原に打聚り夜明迄屯して有し由扱また小諸の方にては其御家の家子ども士以上は火消糞東足輕已下は揃の羽織大手の御門をさし固め打守り候體見渡して候と是も細に申によりおとな共驚いて家の子共を呼集め唯今物聞立歸りしかくの由申せしなり然るにより油斷ならず若當表へ來りなば一先利害を説聞せ承引せぬと見るならば一々にからめ捕若手にあ

まる者ならば皆殺しにすべし必油斷すべからず各私宅に扣居て重ねての觸を待るべしと委しく下知を傳へし由扱其日の夕暮頃一揆はいよゝ多勢になり小諸の在々亂暴し布引山へ人数を揚夜の明るを待受て上田領へ押來るべき評議の由専ら風聞候と櫓の齒を引が如く在町より注進せり上田のおとな是を聞早々に下知をなし十三以上の家中の諸士不殘城に招き寄扱誰々は弓鐵炮又誰々は鎗長刀と各得物を授置一揆おそしと待居たり翌五日寅の刻物見の足輕馳戻り人数の程は知れども徒黨の者と覺しき者奪取たる綾綿御幣の如く切割て一手一手の印となし田中の宿の近くまで只今亂入仕るとあはたしく申すにより大目付山田平兵衛老臣の下知を受差圖をなして申せしは大手口は物頭横田地喜内小林與三右衛門馬廻り鈴木久女治中羽熊之丞是等の者を先として諸士十七人徒士二十人鐵炮足輕三十人引連れ守れと傳えたり扱酉の半刻頃根津領の内真田村洗馬村の方一陣の烟立各これを見つと見て一統に申せしはあの烟り立揚るは必定村々を燒拂ふと覺えたり鄙夫下郎の輩に御領内を亂暴させおめくながめ居るならば深き武門の

瑕瑾ならん急ぎ彼地へ走向ひ蹴散すべしと申すによりおとな共是を聞各の申條一々に至極せり然らば松井八郎兵衛を惣大將として有合人数の其内を四百五十餘人引分て向ひ給へと差圖せり松井初め惣人数直に其座を打立ば入代りて野間治太夫加藤千左衛門其外馬廻り十八徒士十人鐵炮足輕三十人藤井頼母佐治八右衛門を大將として其跡を持固む一揆此體を遠見して其備にや恐れけん此手の方へはむかはすして矢澤の方へ引退くかゝる所に伊勢山より使來り急々を注進申せしは只今一揆數百人川久保橋へ押寄來候故所之者共御領内へ入たてじと嚴敷防ぎ戰て一揆二人打殺候へども殘る人数多勢故防ぎ兼て候也早々御加勢可被下と申によりおとな共聞届物頭吉田太郎左衛門大目付大野彌太夫馬廻り木村與三郎三村久女治二木岩太郎杉浦平三郎松宮兵藏正木嘉藏加藤辨之助藤非常吉村上島之助などいふ屈強のもの共十餘人其外足輕五十人罷向へと下知したり若者ども是を聞一騎がけに馳出し得物得物を打振てわれおとらじとわたり合面に立し一揆共眞の武士に立向ひ何かは以てたまるべき或は腕首打落され横さまに倒るゝもあり

又は頭を打割られ目玉飛出で死るもあり其外深手淺手を負ひ叶はじものと逃出すをすかさず追結繩をかかけおさへて旅を奪ふも有惣て生捕三十人御幣の旗を奪ひ取る事其數四本に及ぶとなり扱も今度の一揆の沙汰も今日を限り止しと也若も爰にて追ひ平げぬものならば松本松代の方迄も亂入し如何なる珍事も出来ぬべきに能も防ぎ止たりと時の人々稱美せり近年諸國の騷動は皆土民共の徒黨して所の領主へ要訴するにて侍りしが是はそれ事替り所々の群盜の亂暴をなすなれば眞の一揆のきざし也と心あるも心なきも皆眉を懸めたり扱も此三四年氣候あしく五穀の實のりよからぬ上又此秋の大變にて米價甚騰踊し四民の困窮大方ならず來年の秋までには雜穀までも盡はてゝ人々飢に及ぶべしと浮説様々成により都下の四民怖れをなし易き心はなかりし也今年も暮同四年の春に至り米價日毎に貴くなりやがて拂底し侍るべしと申觸侍りしにより大小名の御家には家子はごくむ爲也とて多く買賄へ給ふにより小賤の者は妻子を棄て逃走り或は淵川に身を沈めあへなく死るも多かりし後は鳥目百文にしらげし米五合にたらず賣ける

故こはいかに如何なる世とやなりぬべきと道行人も
行合て外の事をば語りもせず唯此事をなげきし也或
は家富慈悲心深き者共は己が家にて食しぬる常の食
を半減せば他に半日の命助る者有べしと粥に作りか
てを加へ日毎に食ひし人も有しかばあれど御府内は
將軍家のおはします所なれば諸國より運び送る米穀
は絶る間なしされど又是を費し食ふ人も多ければ日
毎日毎に費へ行富榮ふる者迄も賤山がつもの如くして
さまざまの物を食ひ侍りたり此御代治りて後聞も及
ばぬことなりき住馴し人々さへも斯あればまして遠
國他國より入來る飢民の如何ともせんすべく大道
にさまよひ歩行侍りぬ仁心深き者其の施行を數多
しければそれも行足ざりしにや府外の辻々小路にて
倒れ死ける其數を時の歩行に訴へしも萬人に近しと
也又此春三月二十四日の事なりきいかなる怨や候ひ
けん時の老職羽州の松山酒井殿遠州掛川の太田殿勢
州八田の加納殿武州金澤の米倉殿新御番衆の詰所
の前打並んで退出有其真中に立せ給ふ相良殿の御嫡
男田沼山城守意知朝臣と申に佐野善左衛門政言と申
せし人詰所よりつゝと出粟田口一竿子忠綱がうちた

りける大脇差を抜はなし眞一文字に切かけたりあま
りの事に驚かせ給ふにや立並ぶ人々を初めとして次
の御間に扣へたる芙蓉の御間に詰給ふ諸役人一度に
どつと立上り思ひくゝに開かせ給ふ跡は意知と政言
ばかり意知其日の御脇差は貞宗の作也しが殿中を憚
りて抜放しもし給はず鞘ながら受留給へば鏝はきれ
ふくりん飛うしろ引に引ながら桔梗御間へ出させ給
ふ此方はすかさず切込て深手二ヶ所負せ參らせ已に
危く見へし所に遙隔てし所より大目付松平對馬守殿
此體を見るよりも一さんにかけて寄て政言が後より兩
小にかけてむんずと組政言は組れながら放せくゝと
あせる中御目付柳生主膳殿もの陰よりつゝと出押へ
て脇差を奪ひとる一たんひらきし人々も立歸り折重
り遂に政言を捕すくむ又意知朝臣はかたへに助け參
らせて大勢いたはり集りて御番醫師天野了順を呼出
し療治を加へらる然ども了順は殿中の故なるにや果
敢々々しき療治もせで血止計をあて、やうく疵口
おさめ療治せし由抑此山城守意知朝臣の御父と申は
主殿頭意次朝臣と申し八代目將軍家の御時龍助と申
食祿三百俵給はりし御小納戸たりしが次第に昇進し

將軍家の御代に至り厚く御旨に叶ひ一萬石の地を給
り大名にぞなされし也其後先將軍家の御時御寵恩増
増厚く領地を加へ賜ひ遂に五萬八千石に至り遠州相
良の城主にして官位四位の侍從に任じ老職の列にな
り天下の政事をあづかり給へり此殿の上座には彦根
中將濱田侍從などおはしませと其人々の事は申さで
唯此殿の御光をのみ四海の人々恐れてけり然るによ
り日毎夜毎に其門に出入し膝行頓首するもの市の如
く我おとらじと殿の御旨に叶ふべしとて珍器珍物其
價をいとほす買求め贈り參らせしにより金銀珠玉は
云に及ばずありとあらゆる異國の寶まで此家に集ら
ざるはなし一日或人意知朝臣に對し御家には昔し今
の珍寶不足し給ふものは有まじきと申されしに其席
に羽州山形の太守永朝朝臣居合せ給ひそれが中に戦
場の血付たる武具は所持し給ふまじと戯れ給ひし程
也また此頃世の人己が支干の七ツ目にあたる甲乙
の形ある者常に愛し翫ふ時ははからざる幸ひを得る
事有と申觸たり此殿子の年の御生れにて七ツ目午に
あたり給ふにより馬を愛し給ふの由人々傳へ聞太刀
かたなの金具より掛物屏風類に至るまで物の上手の

作り出せる馬の形有物は一々取て參らせしにより皆
此殿の御家に集りぬもしも世に残りある時は其價む
かしに十倍すと也亦夫より猶甚しきは唐土阿蘭陀の
商人ども日本にては七曜の摸樣附たる物こそ能價に
成ぬと心得其摸樣付たる織物著物の類積來る事多し
是は此殿の御家紋七曜なるが故なれば也又其年月忘
れたり過し頃豊州白杵の城主稻葉弘通朝臣といひし
御方神田橋御門の御守り仰蒙らせ給ひし時或夜此殿
の家士瀬田内膳といひし男の下部酒に酔狂ひ其御門
を通り過て何やらん不法の事を云募り罵り呼りたる
により番人ども腹を立強くいましめたり其仕業悪か
りしとて其日詰居たりし番頭何某とやらんいへる男
重罪を蒙りたり其威光の盛なりしこと此類ひ多かり
き意知朝臣はかゝる目出度御家の御嫡子に生れ給ひ
しかも御父子執政の重職を蒙り給ふ程の御果報に渡
らせ給ふ御身にして如何なる宿世の因縁にやかゝる
劔難に逢給ひける事の怪しさよ同二十六日の夜に至
御手疵次第に重らせ給ひ百藥その効しなく遂に空し
く成給ひぬ扱善左衛門政言は意知朝臣果給ひしによ
り其罪切腹に定り同四月三日と申に山川下總守殿檢

使に立せ給ひ揚り座敷の庭にて腹切てはてられたり
 凡士は賢不肖となく朝にあれば譏られ女は美悪とな
 く宮に入ば妬まるゝとやら意知朝臣の御事有て後も
 相良殿御勢ひかわらせ給ふ御氣色も見へさせ給はず
 一日二日も過ぎるにはや常の如くに出仕ましゝ又
 折ふしの愛を忘れ給ふためなるか猿樂など興行し給
 ふのよし人々傳聞知るも知らざるも悪み譏り奉らざ
 るはなし去年より童謡にいやさの水晶で氣はさんざ
 と云事の流れし最中なれば下賤の者共夜に入ば暗き
 にまぎれ此殿の御門前を打通りいやさの善左で血は
 さんざと諺ひはやし又二人の乞骸人一人は七曜の紋
 付たる酒樽の古き莖をかぶり怪しき姿して馳出せば
 一人は鐘旭大臣となり悪魔遁さじと追詰太刀にて切
 殺す真似して町々小路々々を白晝に廻歩行けり是を
 見聞人毎にあな心よきふるまひやと申さぬ者はなか
 りし也かく侍りける人心なりしにより政言は死して
 後ははからざる幸ひを得侍りぬ去年の頃より聞も及
 ばぬ飢饉にて四民あくまで困窮し侍りしに此人果ら
 れし翌日より五穀の價少し賤しくなりしにより頑愚
 のもの共寄集りあなたうと有難や此人は人間にては

ましまさず神にておわしましけるが我々を救んため
 かりに此世に生れ来てかゝる奇怪の事を仕出し神あ
 がらせ給ひけりと云觸て其なきがらを葬りし淺草本
 願寺の地中徳本寺といふ寺へ毎日蟻の集る如く引も
 きらずつとひ詣でひたすらに世直し大明神とあがめ
 唱へ申す由時の奉行聞し召近頃奇怪の至り也疾是を
 しづめよとその卑官さしやり給ひ門の出入を止めら
 れたり是により暫く人も聚らざりしが其後も何事祈
 るらん詣る人は絶ざりけり是も宿世の因縁にやため
 し稀なる事なりき扱此後に至り御府内は五穀の價少
 し賤しくなりしかども他國はさしてかはりなく次第
 次第に食盡て果は草木の根葉までもかてになるべき
 程の物食はずと云ふ事なし或は松の皮をはぎ餅に作
 りて喰ふの由公にも聞し召飢を凌ぐの爲なれば菓餅
 といふ物を作り喰へと觸られたり其製法は能わら
 らぬを抜き粉にはたきて一升あらば米粉三合ませ合
 せ蒸し搗て餅となし是を喰ふの事なりき其中にも出
 羽陸奥の兩國は常は豊饒の國なりしが此年はそれに
 引かへて取わけての不熟にて南部津輕に至りては餘
 所よりは甚しく錢三百文に米一升雜穀もそれに准じ

後には銀十二匁に犬一疋銀五十匁に馬一疋と價を定
 め侍りし由然ありしにより元より貧しき者どもは生
 産の手だてなく父子兄弟を見棄ては我一に他領に
 出さまよひなげきを乞ふされど行先くも同じ飢
 饉の折からなれば他郷の人には目もかけず一飯與ふ
 る人も無く日々に千人二人人流民共は餓死せし由又
 出行事のかなはずして残り留る者共は食ふべきもの
 の限りは食ひたれど後には盡果て先に死たる屍を切
 取ては食ひし由或は小兒の首を切頭面の皮を剥去り
 て焼火の中に焙り焼頭蓋のわれめに篋さし入脳味
 噌を引出し草木の根葉をませたきて喰ひし人も有し
 と也又或人の語りしは其ころ陸奥にて何がしとかい
 へる橋打通り侍りしに其下に餓たる人の死骸あり是
 を切割股の肉籃に盛行人有し故何になすぞと問侍れ
 ば是を草木の葉に交て犬の肉と欺て商ふなりと答へ
 し由かく淺ましき年なれば國々の大小名皆々心をい
 たましめ饑を救はせ給へども天災の致す所人力にて
 及がたく凡去年今年の間五畿七道にて餓死せし者何
 萬人といふ數しれずおそろしかりし年なりし此内に
 も出羽國米澤の侍從治憲朝臣と申は賢君にて渡らせ

給ひ今年飢饉と申せども御領内の民くさの一人にて
 も餓死してはふかき御身の耻なりといろく物取
 集めかてに下し給ひし上男一人に米三合女一人に米
 二合一日の食と定め新穀の出来るまで喰ふべしと觸
 たまひ御身も其升目に従ひ共にきこし召れし由御嫡
 孫直丸殿生れながら粥を嫌はせ給ふの由乳母共申上
 奉れば侍從殿聞し召人に上下の差別はあれど五臟六
 腑は同じ事ぞ喰はずば喰はずと苦々敷仰ありしと
 也御領内の土民傳え聞難有感じ奉らざるはなかりし
 由其外尾張中納言家熊本少將若狭の侍從白河の太守
 など皆美政おはしませしにより此殿原の御領地に餓
 死せし人は聞えずとぞ夏も過漸く秋にも至りぬれば
 新穀も出来り世中少し穩なりされど昔より人の云傳
 し如く飢饉の後はいつとも疫癘必ず流行とかや今
 年も又其如く此病災にかゝりては死亡する者多かり
 き遙に程過後陸奥國松前がたに罷りし人歸來りて
 語りしは南部の五戸六戸より東の方の村里は飢饉疫
 癘兩災にて人種も盡けるにや田島も皆荒はて、渺々
 たる原野の如く郷里は猶在ながら行通ふ人もなく民
 屋は立並べど更に人語の響もなく窓や戸ほそを伺へ

ば天災にかゝりし人葬り吊ふ者もなく筋肉爛れふすもあり或は白骨と成はて、煩ひ寐し其儘に夜の物著て轉ぶもあり又路々の草間には餓死せし人の骸骨とも累々と重り合幾らともなくありけるを見過侍ると申たり斯る無慙のありさまは如何に亂離の後とても及ぶまじとぞ聞えし也此體に侍ればいつの時何の年耕作むかしに立歸り五穀のみのり出来ぬべき苦々しき世のさま也とは申たり又或人の語りしは白河より東の方此一兩年の凶作にて婦人の月經廻り來らず鶏玉子を生ざるよし是も一ツの異事なるべし扱此年の秋もくれ冬の初に至る頃御府内の端々何某の寺何某の家へ刀脇差拔連て夜盜數多打連立押込物を奪ふのよし口々に云觸たり後は御廓近き小路にして誰彼が衣はがれし坏誠しやかに風説せり是を聞人毎にあなのおそろし左様のうきめに逢んはかなはじ物と喧しく夜は出歩行人もなくさしも繁花の江戸の町往來も少く侍りたり此事誠にてはなかりしにや後々は又何事なく静にぞなりたりける又此年は辰の年にていつも辰の年は必火災多しとて人々恐れ居たりしに師走も半過れども今迄其事なかりし故世の云ならはしは空

言ぞと諸人油斷し侍りき然るに下の六日の夜戌の刻と覺し頃鍛冶橋御門の内遠州横須賀の城主西尾隱岐守の御屋形より如何してか火をあやまりけん一時にさつと焼出せり折節西北の風烈しく猛火燦々と立上り忽ち阿波土佐兩殿の御屋形へ焼移り是より四方に飛散て次第くくりに押行ほどに數寄屋橋御門の西南は新橋仙臺殿の御屋形を限り北は京橋を堺にて其間に有ける人家一宇も残らず焼拂ひ東南さして廣がり行築地鐵砲洲に立並ぶ大小名の濱屋敷只一べんの烟りとなりもえうつるべき家居もなき波打際にて火は止ぬ凡前夜の戌刻より明る二十七日の午の刻迄只焼に焼ける程に家數何千といふ數しれず其間に立たりける西本願寺を先として一ツも残る物はなく空しき原とぞ成たりける凡去年の飢饉より打續たる因窮ゆへ大小名を初とし諸人今度の火災を見聞あら恐ろしの年なるぞ疾今年を暮しつゝ新玉の春を迎へたしと申さぬ人はなかりし也
明れば五年今年は世中穩かに五穀の價もや、賤しく人々もいと安く悦び勇み侍りぬ然るに春より秋に至り世に稻葉小僧といへる曲者有と沙汰したり此

曲者の振舞は並々の盜賊ならず人家の軒に飛上り飛下ること天をかける鳥よりも軽く又塀を傳ひ屋根を走る事地を走る獸よりも早しと也然るにより如何なる堅固の御屋形にても此曲者の忍び入らんとおもひし所はいり得ずといふ事なしまづ一番に御三卿の御本殿を先として薩摩中將熊才少將廣島侍従小倉侍従津侍從郡山四品其外時の老職濱田侍従相良侍従此殿原の御屋形或は御寐所御座の間近くいつの間によら忍び入太刀刀を先として衣服調度或は千金二千金の御寶數多く盗みとる今日は其所の御屋形昨日は此所の御屋形と日毎夜毎に其沙汰止時なし是を傳へ聞し人々人間にてはよもあらず必妖術修したる惡黨にてぞ侍るべきと申さぬ者はなかりし也公にも其沙汰聞え厳しく尋ね求め給へど何所に隠れ忍しにや半年餘りも知れざりしがかゝる希代の曲者も運命盡る時なるか同年九月十六日の夜一ツ橋の御屋形へ再び忍び入たりしに名もなき下部に召捕はれ公にぞ渡されたり即裁斷所へ引出され様々拷問召されしかど同類も侍らず音に聞えしと事替りさせる術なき盜賊にて元來は武藏國入間郡の生れにて今年三十四歳になる新

助といふ男也片田舎の生れ故田舎小僧と申せしを聞誤り呼ならはし稻葉小僧と唱へし由其罪已に定れば程なく首を刎られて獄門にかけられたり世亂れ國に道なき折にこそ高位高官の御座の間近く盜賊は入べけれかゝる治れる御代といひ殊に又大國を知しめす武夫の御屋形たとひ戸ざしはなかりしとも御威勢に懼れ參らせて忍び入べき道理にあらず然るに此新助の容易に忍入たるは是ぞ誠に人妖とや申べき
又同じ年八月の事なりき日は忘れたり藤枝外記殿と申食祿四千石しろし召れし御旗本如何に狂氣やし給ひけん新吉原に住居する大菱屋の遊女綾衣と云傾城と情死して果られたり公に此事聞し召其身にも似合ざる不儀なりと知行を沒收し血筋を斷じ給ひたり昔より聞も及ばぬ事也
今年も暮同じく六年とはなりぬ今年は支千丙午にして元日も亦丙午にあたり殊に皆既の日他なれば又如何なる年いかなる珍事や出来ぬらんと去年よりは是を恐れ合諸人家じ居たりしに既に元日といふに至り曆の面と事替り八分ばかりの他なりければ世の人は是を見侍りて實に目出度事なるべしさせる事も侍るまじ

と頑愚の者の習ひにて悦ぶ事も一倍せり扱風雨の程もよく火災の沙汰もなかりしかば静に春を迎たり然るに陸月の半頃より日毎日毎に風荒くもの、乾く事火を以てあぶるが如し同じ月二十二日に至朝より西北の風強く土烟り吹立空の色見えわかす午の刻と思しき頃湯島の臺より火事出来て黒煙り巻上れり人々すはやと騒ぐうち其風下に向ひ四五ヶ所飛火して平一面に焼立ればわづか一ト時ばかりにして大河を東へさし深川八幡町まで焼出たり吹風は彌はげしく段段に幅廣がり南は室町を限りとして日本橋にて焼止たり北は馬喰町を堺として山伏井戸にて火は止めぬ扱も此四十年ばかり以來堺町萱屋町といふ兩町は火災に逢事十度ばかりさるによりて此あたりに住居する人あく迄此事に馴熟したとへ隣家の火事にても家財調度を持除事他所に勝りて名譽のもの共多かりきしかりしに今度はいつもの火勢より烈しき事十倍して走る馬より猶早く忽火燄押来りさしも手練の者共も家財を除くいとまもなく火の粉を凌ぎ煙をさけ命ばかりを助かりて漸進れ退たり住吉町に住居せし關岡といふ鼓屋は少々後れ侍りし故父子並んで焼死たり

昔より火災數多ある中にもためし稀なる火勢也明る二十三日も同様に風はげしく昨日焼し灰を吹あげ空一ト入に暗かりしに又午の刻とおぼしき頃西の久保の紙屋町より出火して是も一時たらずに赤羽根橋迄焼ぬけて此所にてやう／＼焼止たり此火風に吹きられ田町あたりへ飛火して同様に焼けるが海際にてしづまりぬ凡此日の火事は幅三町に長五町と聞えたり同二十四日の夜南の方空赤く日を経て後に尋ねれば神奈川の宿の内三百餘軒焼たる由夫より後に至りても日々夜々に風荒く同二十七日の朝本町二丁目に火災あり又其日の午の刻本所四ツ目より焼出し釜屋堀まで焼通り堀の向ひへ飛火して家なき所にて焼止りぬまた其夜の事なるに雉子橋の御門の内にあたりける御藏の御搦屋より出火して御城の方風下故既に危く侍りしが幸に消留て是は此所にて焼止たり陸月も過衣更着六日午の刻又小日向の蓮花寺前より出火して同じ様に吹風に東南さして焼けるが次第／＼に廣がり行日の暮る頃に至り御茶の水迄焼抜たり今は駿河臺へも焼移るべかりしに若此所にて消得ずば行末いか程ひろがるべしとこゝろ／＼に罵れば公にも氣

遣しく思し給ひしにや定れる火消御役人の外に大手櫻田外合せて八手の大名に俄に奉書下し給ひ是を防げと有ければ各仰を蒙りて人數引連立向ひたがひに耻をあらそひて火水になりて防がせらる斯ありしによりて凡亥の刻頃に至り漸猛火をしづめ得て御茶の水際にて其火則消止たり同日駿河國久能山の脇山より野火出て明る七日も終日終夜焼けるが同八日の早朝に風とともに止しと也昨日のごとく風吹かば御宮も焼べかりしに幸に風止しは東照宮の御神靈による成べしと其土地の人申せし也同九日は下野國日光山風雪烈しく降たりしに如何して火を誤りけん御奉行天野山城守殿の厨より出火して坊敷四十一ヶ所町敷八十二町一時の灰となりける由久能といひ日光といひ共に神祖の御神廟無恙とは申せども斯驚かせ奉る事いかなる事の御告にやと恐れぬものはなかりし也扱去月の十一日より今月の半に至る迄凡三十五六日の程其風の烈しきこと日夜毎に止時なく空すさまじく吹晴て雨一滴も降ざれば今や其前より焼出すやがて此所も焼ぬべしと人心少しも静ならず又昨日もおと／＼ひもあそこの軒／＼の垣根に悪黨の火を放せ

しと浮説様々多きにより家毎に土藏を目塗し或は負葛籠引出し諸人家業を打忘れ騒しき世のさま也けり兼てより江戸のならひ年毎に冬春は火災多く侍りしが別て此春の物騒しき聞も及ばぬ事なり斯ありし程に物の價は俄に貴く家富榮へる人までも藁を集て屋根をふき葺置をもつて四方を圍ひ怪しき家を作り立所まばらに建出たり又悪黨の多ければ人々家居守り居て狼に夜行すべからずと公より觸給へば出行人もなかりし故さしも繁花の御府内も二ヶ月ばかりの其内は片田舎を見る如く淺間敷こそ見えにけれ扱衣更著も過彌生も半過る頃さすがに江戸の繁昌にて歌舞妓芝居の類まで最早再び出来まじと兼ては人の申せしが其ことに引替へて無程修理も調たり又同月二十三日相州の箱根山自から鳴動し同二十四五日の頃地震殊に甚しく凡此兩日に百度計ふるひし由是により二子山崩れ蘆湯底倉などいふ湯治の場所へ大石落人家多く破りしと也扱此鳴動に驚きてや猛獸ちまたに走り出畑湯本あたりにて往來の者にかみ付人々害を蒙る由春も過又卯月の半頃より同五月六月に至る雨しきりに降續時ならぬ冷氣行はれ夏の衣著る人も

なし是によりて島物のみのり熟せずこれは恐ろし
 今年も秋納あしく侍るべしと申さぬ人もなかりし
 なり同文月十二日の夜風雨殊に烈しくして開口より
 小日向あたり洪水軒をひたし夫より日々大雨止す勢
 ひ車軸を流すが如く水はますくいやましてこゝも
 かしこもあふれ終に十八日と云に至り昔より聞も及
 ばぬ水災とはなりにけり凡關八州の國々此災にかゝ
 らぬ地なく遠所はいざしらす近きは荒川筋にあたり
 小梅寺島須田須崎此村々に住ける者秋葉堤の上に遁
 れ三谷鳥越などに住町家の者は二階より屋の棟へ
 這出て水の落るを待居たり其外本所野川通逆井龜井
 戸小名木澤東西の葛西領江戸川に續し所一面に水開
 き小家は棟を越し大家は軒をひたし凡今度の深淺少
 しづゝのたがひはあれど堤上にて七尺餘り耕地より
 は一丈四尺有ける由去によりて小合溜井用水入樋皆
 一統におし流し堤のさけしは敷しれすこゝにては數
 十間彼所にては數百間崩れ損せざる所なし然るによ
 り松戸を始權現堂川元利根川二合半領上松伏金町の
 御關所に至り北は草加越谷粕壁幸手栗橋庄内領關宿
 の先々まで岡は變じて淵となり川瀬かはりて水勢ま

し渺々平々として海の如く唯一面に見渡りぬかゝり
 し程に此内に住せし者家を流し財を棄父子兄弟別れ
 別れ思ひくゞに逃出て神社佛閣を先として少しも小
 高き所へは遊ぎ寄流れて上り棟に跨り軒に下りから
 き命を助けりけり其中にも仕合よきは小船筏に取乗て
 水に任せて流れつく小名木澤におはしたる前の阿州
 の大守重喜朝臣の北の方兼て舟に召るゝ事嫌はせ給
 ふ故により少し後れ給ひし内水勢忽ちさかんになり
 御屋形を浸せしまゝ遁れ出させ給ふべき御便りな
 りしにより怪しき小船漕寄させ御二階より直に召し
 御次男豊前殿諸共にわづか主従四人にて漸に漕ぬけ
 て品川の海に出田町の濱邊に住居せし伊勢屋利兵衛
 と聞えたる米商人の裏口へたゞよひ著せ給ひし山利
 兵衛迎へ入奉り四國町御屋形へ直に送り入參らせし
 と也かゝるやんごとなき御方だにかく危き事に逢せ
 給ふ折からなればまして商人農人共たとひ命は悪な
 しとも其時の艱難苦勞おしはかり可知也公にも此事
 早く聞し召町御奉行御郡代皆夫々の役に應じ窮民救
 へと命じ給へば各仰を蒙りて我一にと船を仕立逆卷
 水を押切て便りよき方を撰み船を漕寄くゞて此所に

十人彼處に五人救ひとりては漕戻し兩國川の岸の此
 方又馬喰町の馬場の内藁屋大に作らせて一ツに集め
 置れたり扱堺町葺屋町の芝居座を飯を炊ぐ所と定め
 人足數多召集め飯を炊せ給ひけり人足共は手にく
 握り固めて紙に包み釣臺に載せ又は桶に盛り段々に
 持運べば是を施行にひかれし事半月計に及びたり抑
 御府内近き所の洪水と申事東照宮關東へ移り住せ給
 ひて後數多度に及ぶ内中にも寛保二年戊の年と聞え
 しは殊に勝れ侍りし由今年は大に彌増して甚し卯月
 の中頃より降續たる霖雨故大地も是にうみけるにや
 又は水脈とやらんの裂破れし事なるか青山牛込なん
 ど云地高の方の路さけて水を四方へ吹出し船にて通
 りし所も有又常には岩がねの如くにてはかり堅か
 りし路なりしも沼田の如く和らぎて往來とだえし日
 も有し又岸の崩れがけ落て是に壓れし人家もあり名
 にしおふ山の手さへ水溢れ侍ればまして本所深川あ
 たり地ひくの所に至りては寛保の水勢より四尺ばか
 りも深しと也しかありしより兩國永代新大橋又も流
 し落されたり見渡せし所さへ斯の如く侍れば其先々
 に至りては如何計と云程しれずさなきだに今年は田

畑ともに不熟なりしに今はいさゝかの物までも残ら
 ず流れ失せしにより一日二日の野菜さへ買求むべき
 所もなくあくまで人々困窮せり然も此水引兼て一二
 月もたゞえし故出羽陸奥の路絶て諸物いよゝ拂底
 しぬ實に希有の水災なりと恐怖せぬ人はなかりしな
 り又此春の初めつかたより何の故といふ事を知らず
 夜な／＼空中に怪しき音し侍りぬ此所にあるかと聞
 けばかしこに聞ゆ大名の宿直の武士又病人の介抱人
 たしかに聞人多かりき世の人は是を天鼓と號し今度の
 洪水出し後絶て其沙汰止てけり是水災の告なるべし
 と申人も侍りき明英宗皇帝天順七年癸未の年件の如
 き音せし由其時李賢と申せし臣下奏せしは上不恤下
 厥有鼓妖と申せしと也若もしかある類ひにやいぶか
 し又同月晦日の夜たしかに月の二ツ並び出しを見し
 人ありと語りたり是尤怪しき事也又其頃伊豆の國宇
 佐美久津美の海の面潮一時に眞水となり海獵暫く絶
 たる由是はさいつ頃の洪水の海へ入し故也とぞさも
 有事にや同八月將軍家此頃御不例におはしましける
 由申人も侍りきされども外様にては知る人もなかり
 し也然るに今月十五日外殿へ出御ましますまぬよし人

人傳え聞奉り扱はたしかに御病氣にておはしけりと
 初めて驚き奉りぬ同十八九日のころ御病次第に重ら
 せ給ひしよしにて日向陶庵若林敬順といへる町醫師
 二人俄に御城内に召れ其日より直宿仰渡されたり是
 を聞人毎に只ならぬ御病にてぞおはしますらんとま
 すく驚き奉れり同二十一日と申にさしも日本にて
 御勢ひ盛んに渡せ給ふ遠州相良の大守意次朝臣俄に
 出仕を留られ給へり又是とひとしく先の日召れし二
 人の醫師同く外様へ逐出され無程御暇給はりぬ是を
 聞人毎にこは如何にいかなる御事の候てと唯何とな
 く打あやしみ道行人も行逢ては互に目と目を見合て
 は物の一ツもいひ兼たり同二十七日に相良殿御役被
 召放房州館山の領主稻葉越中守正明朝臣も同じく御
 役被召放是は知行三千石を減せられ給ひたり共に一
 方ならぬ御寵臣にておはしけるが何の落度や候ひけ
 んと聞人興をさましてけり又其後に至り幾程なく相
 良殿も知行二萬石を減せられ住馴給ふ居屋敷をわづ
 か三日の間に召上られ築地の屋敷に移らせ給へり實
 に赫々たる者は必衰ふといへる古人の言葉空言なら
 ず龍蛇の勢ひ盡る時は螻蟻相集りて制すとかや昨日

までは門前に問來る人の馬駕絶る間なくさしも盛ん
 なりし御ありさまも今日はそれに引かへて翟公が官
 を止しより甚しく唯寂々寥々として人なき宿の如く
 又様々に便り求めて結びし縁の大小名四十餘家其身
 ばかりか召仕家子まで少もつながら縁ある者は皆仇
 敵の様に交りをたせ給ひたりやんごとなき御方々
 さへかゝる奇怪をなし給へばましてわきまへ知らぬ
 下部ども此所かしこに寄集りいろくにいひ罵る其
 有様の耻かはしきいかに末世とは乍申淺間敷かりし
 事ども也蓋し九代目將軍家御在任の半頃より時の執
 權たる方々に物を贈り參する事を權門と呼びはむき
 と唱へ貴賤となく其門に出入する事止時なくそれが
 中に相良殿の政にあたり給へる日ほど盛なる事はあ
 らざりし也さるによりて此殿の親族と呼べる人々皆
 一時の勢ひを得高位高官に昇らせ給ひ昔よりなりが
 たき事も自由になり官を賣位を販ぐの類多かりしに
 より我もく縁を結び又よるべなき方々は蜘蛛の巢
 の遠くつながらる便りを求め兩敬と申事に唱へなし互
 に親族の如くにもてなさる中にも此殿の御次男中務
 少輔忠往朝臣と申を豆州沼津の領主水野出羽守忠友

朝臣御養君となされしにより沼津殿もおし續たる御
 勢ひにてぞおはしけるその御家に仕ふ下部まで皆社
 によるの鼠にて何となく勢ひ有し程に世の人うらや
 み奪みて又物を贈る事も多かりき一日堀田何某とい
 へる者其家のおとななる土方縫殿助といへる男の許
 に茶事にまねかれたり其日は草の茶事とやらんにて
 先寄付の座敷の床には古法眼元信が畫る掛物をかけ
 前には黄金の米俵に白銀の鶏とまれる香爐をすえ次
 の一間には三尺餘りもありなんと覺しき白銀の花生
 を釣り時の花水際清く挿角棚には唐鳥の羽箆に光孝
 が弟の水仙の毛彫せし黄金の棗を取合せ置扱風呂に
 はいかにも大きな白銀の茶鐘をかけ傍に染付とい
 ひ形といひ上なき南京焼の水指をかざり付茶事既に
 終りて後炭流れければ通ひの男探籠を持出たり其内
 に攝津國の鴻池善右衛門が家に傳る安南黄色の龜の
 香合を後藤光孝に黄金にて寫させたるをのせたりし
 由棚にかざれる棗もいと重かりしが香合は手もたゆ
 むばかりに覺へしと語りき相良殿に縁ある家のおさ
 たるに如此の事なれば其主君主君の花美全盛おしは
 かられてしられけり昔より上を學ぶの習なれば寶曆

の下つ方より今天明に至り世の奢侈聞も及ばぬ事の
 み多し其内に一ツ二ツをいはゞ年毎の春の初に權門
 に入するひと寶合と云事をなして一年の吉凶を占
 ふ是はまづ其前方に或は花合繪合などいふ題を組
 合せ定置扱其日に至りぬれば各一種づゝ持來り夫を
 圖にして互に引合侍る事也或は是を見侍りしに其日
 の題は花合也蘭の花菊の花梅の花卯の花など一人
 一人探り得て題に合せて引たり蘭といふは大きな
 朱塗の唐様机に唐焼の筆架硯屏を飾り同じ様なる小
 き瓶に孔雀の羽根六七本立扱小蘭の鼻紙を紺染の手
 拭にて巻帙に入たる書籍の形に作り其傍に四ツ五ツ
 積重ね別に緋縮緬にて盃の形縫せたる烟草入數多く
 並べ一ツ毎に曲水の繪金泥にて畫せたり是は蘭亭曲
 水のゑんに擬すると也又菊は幅ながらの赤地の錦を
 雨除にひき四方の柱に美しく染たる縮緬を巻縹子も
 をるの女帶當世めきたるを二筋三筋もて其腰を圍り
 中には輪毎に菊花の蒔繪したる盃を付數十本立續け
 葉は皆縮緬の和巾なる由大さ九尺餘りに作り出せり
 又八幡座には金銀の火はたきをなし鉢は綾錦の烟管
 筒を集めて筋金のやうにつなぎ綴には同じ様なる烟

管入を連ね眉庇と吹返しには玳瑁の櫛を付鍬形には大なる白銀の烟管を差前立物には小き鏡をさせり扱其傍に絹にて作れる紅梅の枝に白縮緬一端ばかり旗のかはりに掛たり是は源太景季が簾の梅の意なる由次は遠州流の蘆棚に白縮緬を懸つらねたりこれぞ卯の花の雪と見まがふ垣根を學ぶと也大體其日集りし品左右おのゝ四五番も有ぬと覺ゆ凡一座のたはむれごとだに如此のゑようなれば元より花美を第一となす新吉原の遊女屋にて其家の太夫と呼るゝ傾城の部屋座敷の結構いはんかたなし先床襖は今織の笹蔓綴子の類を以て張鏡天井船底天井がふ天井をやつせしなど思ひの風流を盡し或は金泥にて寶生雲を畫しあれば又時の繪師の上手を撰み四季の花美しく畫せたるも有是等皆繪絹にて張立たり其外まいら戸床違棚の類或は高蒔繪にし或は沈金彫にす又夜の物に至りては錦に緋縮緬の裏付たるは賤しき方にして金花布狸々緋などいふ異國の織物を第一となせり髪のかざり調度の類もそれに准じ衣服は殊に美を盡し彼は是におとらじ是は彼にまけじと我一にと争ひし程に金糸にて作れる袖装を様々の模様付たる紅縮

緬の上に重ね或は羽二重を漆にて塗一面に梨子地を蒔せ所々に秋の木の葉の吹寄たるさま高蒔繪にかゝせ又其間に七寶つなぎといふ物を螺填なしたる類も有中にも扇屋の瀧川と云太夫などは鶯色の天鷲絨に牡丹に狂へる唐獅子を五色の唐糸にて縫せその上にあく迄薄く打延たる白銀を細き糸に打夫を以て織立たる西洋のうす物をかさね縫せ上衣となしたり見る人は是をうつくしと譽ればいとやすげに引裂きあたへ其破れし跡より下地の縫物あらはるゝを一時のほまれとなしたり凡如此の衣をわづか五日六日の間に著かへ又後著と唱へ改め作り總て一衣の費へ四五十金より七八十金に及ぶと也かゝる世のさまなりしにより鄙も都も古風はすたりたまゝ質素の輩あれば只ねぢけ人の様にいひなし指差笑ひ誹謗する者多きにより互に負じ劣らじと奢侈をのみ第一とはなしぬ斯ありし程に人々の營み悪く日々月々に衰へ上たる人も不足し給へば下さまのものはますます不足し今は上下困窮極れるにより奸商酷吏此時を幸と思ひさまゝの工みを企て己を利するが爲に上に向て御盆御爲と説き物毎に付て運上めせとすゝめしにより時

の奉行頭人も多くは其旨に従ひ給ひ金銀の兩替より炭薪の類に至るまで物毎に其事のあらざるはなく又少しも餘地ある所へは新地を築き新田を開き給ふ事止時なく是によりて世の風俗は次第に變じやんごとなき方々も文の往復言葉のあや位にも似ぬ事のみ多く唯巧言令色を以て人の心にさからはぬ輩あれば是なん今の世の大通人と云者也と譽稱し侍りし程に諂諂面諛を能事とおもひ尊卑の分を別ち知者なし何ものか

世になきは御無事御堅固致し候

つくばひ様に拙者其元

世の中は諸事御尤有難い

御前御機嫌さておそれ入

と狂歌して譏れりまして賤しき者に至りては耻を知り義理を知者なし此二十年ばかり以前迄は町家の裏住居せし者みめよき女子持ぬれば今様の小唄淨瑠璃を習はせ藝者と云者に仕なし月のゆふべ花のあした遊宴の席に出し折節のもてなしとなさしめたり色好める若男ども此藝者といふ者に忍びゝに云かたらひ人知れず一度も二度も契りをこめて名譽の事仕得

たりと心安き友だち誇り慰み侍る中其父なる者は是を見出し初めより工み侍りし事なるにや又は實の事なるにやことゝ敷腹立大事の娘に疵付しなどあらあら敷罵り怒り侍るにより男も耻かは敷他人に知れてはなど様々に扱ひ詫金銀を多くあたへ内々にて事を濟せ侍りしにより知る人も少かりしに近き頃は其風次第にながれ定れる遊女屋にもあらで御廊近き町家の裏々所々の新地などに地獄と云怪しき小家を拵へ己が娘を賣物にしたまた鬧しく客多き日は己が妻女も同じ様に賣侍るの由買人もげがらはしとせず己も耻かしたも思はず是を見聞人々も恬として怪しまずいかに世の末なればとてかくまで人道の亂れ侍る事是非もなき世のならばし也享保元文の頃迄は世のさまたげとなるべき事は小唄淨瑠璃の類ひ迄も深く停止したまひたり其頃豊後ふしといへる淨瑠璃の京より流行下り侍りしに風俗をやぶるはしともなりぬべきとてやがて止められたり其折しも米の價の事に交へて豊後節八斗二升に觸られてといふ狂歌有ぬ幼時にて下の句は忘れたり然るに近き頃は笑ひ繪と唱へ今様の男女の赤裸になりて尾籠至極の振舞せし姿繪を

大道に置て商ひまた博奕は重き天下の御制禁なるに
 年毎に霜月酉の日は大鳥大明神の御祭禮とて千住淺
 草兩所の社頭其路々所せくまで敷物をしき筵をはり
 丁半袴蒲一など云博奕の場所一里あまりも建連ぬ
 かゝる僻事好き給へる神の御心こそ不審なれ夫のみ
 ならず御廓近き辻々にてお花ひつかへしなど名付し
 博奕晝もはゝかる景色なく夜は燈火高く照し其所此
 所に其場所を設く往來の人此に立寄賤しからぬ者共
 迄も打交り群居る事夥し殊に盜賊は古今に通せし大
 罪なるに巾著切といへるすつはども白晝に路行人の
 後に廻りうつけ男の著したる羽織の下へ忍びより己
 が頭には是をかぶり腰に下たる巾著胴亂の類盜取した
 り顔して連立行又奪ひがたきと見る時は己が友蓬云
 かたらひいさかゝるに事を寄或は打合たゝき合其虚に
 のり何にてもあれ奪取ては逃出し往來の人と顔見合
 せ笑を含み別れ行其ありさまの傍若無人外に何かは
 侍るべき好事の者ども云語らひ今日又すり共の物盜
 むさま見ばやとて茶店などに立やすらひ打見侍も
 憚からず其事のげんせんたる如何にやゝと寄集り
 大息する人多かりきかくばかりなる僻事を卑官共の

見聞ながら知らぬ顔にて打過ぬるは怪しかりし事共
 也然ありし世の風俗故こんなつまらぬよやさのさと
 童謡に唄ひしは是も又天に口なし人をしていはしむ
 るの類ひなるべし扱も相良館山二人の殿達御役御免
 仰蒙らせ給ひて後わづか四五日過侍りて此一兩年の
 御企にて莫大の金銀を費し開かせ給ふ下總國印旛手
 加雨沼の新田去し洪水に堤崩れ土手破れし故なるか
 又別にはれ有事にや其儘普請止られたり其外和州
 金剛山の金堀事又此頃觸を出されて凡日本國中公領
 私領を初として寺社に寄附し置れたる少し斗の所迄
 小間一間に銀三匁づゝ運上召れ給はんと有し事是も
 同く止られたり何の御故なる事にや朝に令を出し夕
 にあらたむるの類ひぞと申人も侍りき同二十六日に
 は遠江國濱松の宿龍の天昇なしける由にて數多の人
 家破れし由同二十九日には辻風おびたゞしく吹侍り
 ぬ關の東の國々はさせる破損もなまじしが關より西
 は其敷豐前國中津あたり民家はいふに及ばず城の御
 門ニツ迄吹倒し侍りし由又北陸道若狹國小濱といふ
 所にては西北の風朝より烈しく雨頻りに降けるが午
 の刻過る頃空少し晴かたにて風も止よと覺しきにさ

はなくして同じ半刻又黒雲おほひ重り山鳴海荒く波
 の高さ一丈餘りに打上て俄に西風どつと吹立並ぶ家
 家の妻戸をしむる間もなく屋根をまくり垣を倒し小
 家のかぎりは吹潰し沖に繋ぎし船どもは碇を切て陸
 に吹付小き傳馬船の類ひをば屋の棟までも上たる由
 かゝる風勢なりしにより地卑の方に水おし入田畑も
 おまた損せしと也凡此一國にても二尺廻りの立木よ
 り五六尺に至る大木を十四萬本餘吹折侍りし由其外
 丹波丹後路より五畿の間の國々に吹かぬ所はなかり
 しと也同葉月六日は國々大風吹田作の害と也ける
 由近年打續ける天變地妖の其中に今年は別て止時な
 くいかなる事の御告にやと人々心易からず然るに同
 月八日と中に將軍家薨去し給ひし由を觸られたり扱
 は此程の變事共此事の御知せと始めて思ひ合たり此
 御觸有しより上下の歎き大かたならずさしも繁花の
 御府内も暗夜に燈火消し如く鳥獸の鳴音まで常に替
 りし心地しぬ
 又同月十二日いかなる者が申觸けん玉川猪の頭と云
 兩所の上水へ毒を流し入たりと云傳へ侍りし程に諸
 人一度に騒ぎ立只一日の其間に貴戚權門の御住ひを

初として町々小路小路に至るまで此水の通る所波貯
 へし其かぎり俄に傾け棄るもあり又此あたりは源へ
 程遠し毒の染る間もあるべし明日の用意になすべし
 と周章ふためき汲も有ひとへに奇怪の浮説也扱秋も
 過冬の初の四日の日雨いたく降けれど將軍家の御葬
 送御式無子細濟せ給ひ幾程なく勅使下向ましゝて
 俊明院殿と諡を參らせらる凡人の世にある貴きと賤
 きとの差別はあれど禍福吉凶に至りてはみな天の致
 す所人力の及ぶ所にあらざるにや又徳不徳に因こと
 にや此君御在位の内是ぞ御不徳と聞えさせ給ふ事も
 あらざりしに將軍宣下有りしより今年に至り二十七
 年の其間外にしては天變地妖止事なく又内にしては
 御臺所を始奉り御公達御二方御姫君御二方共に先立
 せ給ひ唯御身一人此世に残り止り給ひ朝夕の御事迄
 下の意に任せ給ひて萬事自由なる御行ひも聞え給は
 ず一生を終り給ひし御事如何なる過去の因縁にや實
 に天下の富貴をたもち給ひし御身にして果報つたな
 き御事計と心あるも心なきも皆いとおしみ奉りぬ同
 十一月には大納言殿本丸に移らせ給ひ御新政も逐々
 に仰出させ給ひ世の風俗も何となく改るべき御萌し

あらはれ給ふにより世の人未頼もしく難有御事に申
唱奉りぬ然れども三十年來の悪習なれば俄には變じ
がたく此年も暮明れば丁未の年正月十七日に至り今
日は御番頭水上美濃守殿御宅にして同じ御役勤め給
ふ小堀河内守殿小笠原播磨守殿大久保玄蕃頭殿三枝
土佐守殿酒井紀伊守殿内藤安藝守殿能瀬筑前守殿都
合七人の御方寄集り藝者寄合といふ事し給へり是は
時の名妓六七輩も呼集め大酒宴をなし給ふ事也その
時酒たけなはに及び兼て遺恨や侍りけん又は其坐の
たはむれ事にや大久保殿水上殿の膝元に摺寄り携へ
來りし菓子取揚是參らせ候と箸とつてはさまれしに
水上殿は其折しも盃ひかへ給ひし故酒半に候間後刻
頂戴仕らんとかたへに差置給ひしに大久保殿是を見
て聲あらゝげ粟饅頭にては候はぬ物をとて手を指の
べて其菓子つかみ側に居たりし妓女の顔へしたゝか
に打付給ひし由こはさいつ頃相良殿盛んなりし時淺
草馬道に住居せし生花の指南何某とか申せし者其家
子潮田尉右衛門と云男にいさゝかの怨ありて粟饅頭
といふ菓子に草烏頭と石膏と云薬を細末にして入贈
りあたへし事侍りきそれをたとへに引出給ひしなら

ん扱此大久保殿の御言葉如初として七人の御かた
がたおもひくゝに悪口し後は各立上り其日饗應に出
されし將軍家より賜りし調度など初めとし或は膳
椀皿鉢まで手にあたる物を幸に打こぼち踏潰し又は
つかんで投出し給ひし由其中に甚しきは大小便を席
上にしたゝかにたれちらし又それを箸にて狭みそこ
らあたりへ打付給ふ御方も有し由かゝる非禮の振舞
を耻かしたも思ひ給はぬ方々なれば其外の傍若無人
おしはかられて知られけり凡此御代治りてのち人の
頭となる人の鄙夫下庸にまさりたる其非法狼籍聞も
及ばぬ事共是ぞ誠に人妖とも申べし又春も過ぎ來
る四月初めには大納言殿大將軍に任じ給ふべしと兼
て觸置給ひしに折節大雨降續き海道の川々水増り勅
使を初め奉り堂上の御方々是にさゝへ止められ給ひ
漸く同月十日頃御下向ましませしにより同月十五日
宣下の大禮行れ内大臣の大將軍に轉じさせ給ひたり
今日よりは天下の御政事御手づから出ぬべき御事な
れば世の中の風俗も改り萬事穩に成行て萬民泰平の
御徳化を蒙り奉るべしと身をそばたて歡喜せり然れ
ども寒去れば暑來るの習ひ秋暑は三伏より甚しく春

寒は三冬よりも猶嚴しく御代既に改るとは申せども
去し子の年已來打續き七年の凶作にてあくまで諸民
困窮し殊に去し午の年は凡日本國中おしならし三分
一の收納なるよし是によりて今年の春に至り米價次
第に騰踊し既に五月の中旬頃淺草の御藏庭相場と申
に豊なる年は百俵を小判十七八兩に商ひし年も有し
に今年はそれに引替て貴きの極りは二百十二兩まで
に至りたり實に艱難にも馴ればなるゝ習ひとて鄙も
都も諸ともに様々の物を貯へ市町にて商へば是へ調
へ喰ひし故過し年の如く餓死する人はなかりしかど
一日限り炊き喰ふ者共は鳥目百文に三合は商はざる
により百計既に盡果て此事救ひ給はれと時の奉行所
へ訴へけり奉行も聞し召不愆の事に思し給ひ色々な
御思案あれど兼て足ざる米なれば如何にとも詮方な
く若も箇様に物の價騰踊するは奸商どもの所爲にも
やと商家の藏々一々改め少しも貯へ持たるはその錠
前に封を付私に賣らせ給はず只貧富の差別なく食を
ひとしくなすべしと男一人に米二合女一人に米一合
是を一日の食と定め伊勢町といふ所にて五日の分を
かざりとなし所々の長共の證文と引かへて賣あたへ

然るべしと町々へ觸られたりしかありしにより賣買
の道却てふさがりますゝ諸民窮困し鄙賤の者共詮
方なく今は飢死なんよりはとて遂に同月二日の夜赤
坂といふ所にて雜人原徒黨をなし同じ所に住居する
雜穀商ふ家々を打破り打こぼり是を騒ぎの始とし
て南は品川北は千住凡御府内四里四方の内誰頭取と
いふことなく此所に三百彼所に五百思ひくゝに集り
て鉦太鼓を打ならし更に晝夜の分ちなく穀物を大道
へ引出し切破り奪ひ取八方へ持退たり初の程は穀物
計奪ひしが後には盜賊加りて金銀衣服の類ひまで同
じ様に奪ひ取ぬ斯ありし事既に三日に及びしかば公
にも聞し召安からずや思しけん町御奉行盜賊奉行の
方々に仰せつゝ是しづめよとありければ各組子を召
連て馬に跨り鎧を合せ縦横に乗廻り嚴敷召捕給へど
も元來烏合の雜人なればこゝかしこに逃散て捕へら
るゝは數少しかゝる騒ぎの折からなれば様々の浮説
も破りぬべしと女童部を引連て貧者の方へ身を忍び
潜り避る人も有又大名の御米を迎へ取給ふにも警固
の薄かりしは途にて奪ひ取のよし申觸侍るによりわ

づか車一二輛に積載たる扶持米に武士四五人前後を圍ひいかめしげに引たりける或は一度こぼたれし者共は重て家藏破られては叶はじ物と寄集り一町一町手組をなし合印の鉢巻し手にく竹鍵磨すまし再び來ると身ならば拍子木を合圖となし只一勢に突に出皆殺しにしてくれんと勇み進んで待も有けり松永貞徳が戴恩記に町々小路々々に新關を構へ柵をふり鹿垣を結常の往來も自由ならずと戰國の古を見しまゝに記し置しが今ぞ又其如く木戸々々をさし行道を結び往來も自由ならざるにより工商二民業を止め戸ざしを塞て居たりしは怪しかりける形勢なりしかありしよりいよく賣買の路たえて假令千金萬金を重ね持ても砂石に同じく米穀買ふべき便りなく貴人高位の方までも四五日窮し給ひしは希代の珍事と申べし此事遂に公に聞し召急ぎ此亂しづめよと御先手の人を撰み十組に仰渡されたりさて窮民を御救ひには老少男女の隔なく一人に米五合と銀三匁目餘即時に下し賜ひたり猶是も事足すや思召けん御郡代伊奈半左衛門殿生年二十四歳なりしを従五位下攝津守に任じ假に米穀運送の惣司となしたまへり抑この伊

奈の御家と申は世々關東の御郡代として其徳八州にしき給ひ又今の伊奈殿は賢才のましますによりさばかり拂底せし米穀を如何して取集め給ひけん公より下し賜ひたる二十萬兩と云金子を以て時の價ひ小判一兩に米二斗づゝに商ひしを其儘に買求め一倍賤しき價を以て窮民に分ちあたへ其外大豆麥までも皆是に准じ買調へて分ち給へば諸人ますく此儀に感じ此殿助け參らせんと日々四方の國々より御府内に運び入是によりて五穀忽ち豐饒となる扱其時の有様は船の印に伊奈といふ文字白地に赤く染出し船毎に押立しは秋の木の葉の浮ぶが如く海河狭しと見渡りぬ又穀物分ち給ふ場所は芝柁町深川淺草此四ヶ所に定めらる此に集る窮民は偏に雲霞の如くにて何萬といふ數しれずみな大旱に雨を得しよりいさましく目出度君の御國恩とよるこびの聲巷にみつ蓋天運循環して往てかへらずと云事なく三十年來たいはいせし風俗の改りぬる時至り奥州白河の大守定信朝臣を老職第一の座に撰み同國泉の領主本多殿を少老職となし給ひ別て石川土佐守殿は御寄合より撰み擧げその外當時賢才の聞えある方々を追々に朝に擧用ぬ又奸猾

の徒は不殘外様へ追しりぞけ賄賂の路を絶ち給ひぬ此分に侍らば程なく寛永享保の化に至るべしと皆目を拭ふて待奉る昔より丙午丁未の兩年は必變事多しとて丙丁季鑑といへる書を漢土人も著し置けり實さる事も侍るにや斯御政事は改れど兼て不足の米穀なれば俄に補ひがたく在江戸の四民ども麥を搗やらかて炊ぐやら片山里の如くにて命をつなぎ侍るのみ又氣の行はるゝ所年の數によるにや肥前國長崎にては五月二十五日攝津國浪花にては同月十一十二十三日陸奥國石巻にては六月六日より八日まで雜人原黨をなし多くの人家破りし由其外紀州の和歌山和州の郡山是等の所を先として騒がぬ國は少なしと也其中に皇都はさすが宮古にて人の心もさはがしからず近郷近村の雜人ども二百三百打群て九重の御門御前に立向ひ今年豊年になし給へと祈り申奉り或は賽錢擲て伏拜むも有しとなり又今年も春より雨多く洪水せし國もありしかど本立て道行はるゝのならひにて朝に賢者をあげ給へば聞人さらに恐怖せず殊に又五穀のみのり近年の豊作と申觸侍るにより萬民泰山による心地してけり賤しきたとへに雨降て地かたまるとい

へるが如く若今度の騒動なくば御政事は改るまじきなど申人も侍りきやつがれ若かりし時より風化次第に亂れ下り此末いかなる世とやなりなんまた如何なる事や出来なんと五十年にあまる老の身にも應せぬ事のみを日夜案じ居侍りしに白河の大守老職に擧られ給ひて後わづか三月ばかりにして
世にあふは道樂ものにおごりもの
ころび藝者に山師運上
世にあはぬ武藝學文御番衆の
たゞ慇懃にりちぎなる人
といへる惡風忽ちにあたらたまり又逢かたきと思ふ世に再びあひ奉ることのうれしさに拙き筆をこゝに止む

後見草下終

後見草附録

志賀紀豊書置

淺間山自燒老人先見の事

上野國碓氷郡姥鳴村といふところ有此村に一人の老翁あり天明二年寅歳の事なりしに淺間山の麓より硫黄おびたいしく出ると云ひければ彼翁近隣の者兩三輩伴ひて彼所に至り見れば小き山に半分は残らず硫黄にして草木枯倒れたりし有さま常に變りて見えければ翁是を見て云けるは吾つら／＼思ひ見るに淺間の烟りは常よりおびたいしく此枝山も残らず硫黄と變じ草木枯槁せしは是唯事にあらず此地にあらたに火氣あつまりしと見えたり滿山の火氣強く常よりも百倍せる様子也寶永年中吾幼若の頃なりしが父なる者の云へるは何れ山近く住居なさば心得なくんばあるべからず其土地變する時は大地ゆるぎ滿山の草木枯れ雷鳴するは是其先證也富士山の燒けし時も斯の如く鳴しと云へり當山の木大小となく此時にして枯るは子細なくて叶はずいか様一二年の内に變こそあ

らんと物語して彼翁は他國へ居をうつし親しき者にも此事を云傳へけれども土民多く疑ひ信せずして是用ひず後におもひあたりしとかや

淺間山自燒の事

抑信州淺間山自ら燒出たるを考れば頃は天明三年卯七月四日の事なりしが彼地震動おびたいしく戸障子までびり／＼として郷村の人民居を移さんとせし事度々なりし所にいよ／＼震動つよく家まがり建具などゆがみける故萬一梁落て屋根崩れ怪我も有つらんなればとて人々廣き野中或は林を楯となし蕙菰など以て屋根を葺さしかけをなし又地さけん事も計がたければ竹林を切すかし住居をかまへ幼をおひ老たるを助け家財雜具など東西に持運び上を下へと混亂す村長は支配の百姓散亂せん事をうれひて是を制すれども只一統にさわぎ立て更に耳にも聞入れず村長もせん方なく後にはおのれもおなじく住居を移す事にはなりぬ心あるものは此騒動唯事にあらずと思ひ父母妻子を上州武州の知者の方へ立退せたるもあり同五日夜九時より晝夜となく大地震動して小家はひしひしと倒れたり爰に於て怪我人數多あり老若男女大

に驚き足にまかせて二三里も遊行しが中々二三十里四方は一統の事なれば何方にても同じ事にて今や天地も打かへすかと泣叫び何國に行たりとも助るべき方なしとて歎きかなしむる村々にひき渡り寔に目もあてられぬ有さまなり川付の村々には六日の朝忽然として大水押來りて窪地の民家崩れし儘にて押流さる此時に小さき砂石のふる事おびたいしく淺間の方を見れば滿山一面に黒雲黒烟りにて物のあひらも見えざる中より青く赤くほそき炎何方となく立のぼり震動ます／＼強く人々是を見るよりもこは何となりなん事ぞとあきれ果たる所に何とはしらす淺間の方だう／＼と音して黒雲覆ひ來り山谷林樹をかくし何の別ちも見へざる所に又も忽ち大水漲り出る程こそあれ人々大に泣叫びやれ今度は水にはあらで湯が流れ來りしぞあつや／＼と半死半生にて流れ來ること引も切らず是によつて小高き所へ逃るもあり又は木の上へはひあがり命を助るもあり又おそき者は湯に足を燒れ四ツばひに成て逃るも有老人子ども類は多く此湯に燒れ命を失へり其上大木大石彼はのふに燒大木は根よりぬけ二ツ三ツに折れて空中よ

り降下るに依て又此火に五體をこがして逃るもあり四方一面に眞暗となりたれども大石大木の燒下る時は白晝の如く人民鍋釜の類を頭にいたゞき此火をさけ退けども襟懷に火入りあつさにたへざる故に衣類を脱すて赤裸になり走り行けども東西一面知れざる事なればかへつて燒出る方に遊行死するもあり後には黒煙の中目にさへざるものは炎のみにて面をむくべき様もなかりき此時又一ツの難儀なるはかゝる騒動故家々にて牛馬を引出すべきいとまなければ打捨追ひ放したりし故あまたの牛馬彼燒石にうたれ死もの狂ひになりかけ廻り當るを幸ひとけちらし或は角にて觸れまはりたる故是にも又多く死するも有しかのみならず深山幽谷より熊猪狼猿鹿貉の類其外年を経たる名もしれぬ異形の獸あまた出來り煙につまされ火に打れ手負たる事なれば常にすら人を見て害をなすものなるにいはんや此時に至つてはいかり狂ひ人をけたをし或は喰付是が爲にまた死する者數を知らず人々前後に途を失ひ却て淺間の麓をさしてゆけば此所は方一丈もあらん大岩一面に火となりて降下る事夥しく是にふるゝ者は一言もなくたゞちに命

を落す斯て先達し者より聲々にやれむかふは焼るは
 取て返せと云程こそあれ上を下へと混雜し或はふみ
 倒し突ころばし死人も又多く有し逆も叶はぬ事なら
 ば一足も先へ逃よとて暗きに紛れ三四里も走りたり
 ければ漸く沓掛宿までからうじて逃のびける此所に
 てもひと一人もなく焼石は少なければ我家人の家い
 づくいかなる所もしらず泣叫ぶ聲すさまじく爰も助
 るべきにあらざれば又江戸の方へ行やくと走り出
 したれども木の根につまづき堀川へ落入り死するも
 又多かりき一門親類も手を負たるや何者が死たるか
 更にしれず子は親を呼び妻は夫をたづね平押に江戸
 の方へ赴もあり又信州へ行も有寔に目もあてられぬ
 次第なり以上三四日の間は晝夜となく人心もなく古
 今ためしなき變也猶末代にもあるまじき大變にてぞ
 ありける

村民争喰の事

爰に上州吾妻郡碓氷郡群馬郡の村々ならん人数三四
 十人或は七八十人乃至百人斗の者共手負を肩にかけ
 手を引合などして安中板鼻根木井出高崎倉賀野邊の
 村々へ充滿して押來り人家へ押入り食を乞たりされ

ど此邊とてもいかにならんも知ざれば騒々敷のみに
 て上を下へとかへし聲々に罵りうかくとして砂に
 埋られては叶ふまじ何れ立退んにはとさわざ立たる
 中へ彼ものども問屋本陣の大家を見かけて食物を乞
 けれども右のさわざの最中なれば中々耳にも聞入す
 却て非人同前に呵り付たる所に飢人等大にいかり今
 は是非なし食せざる事三四日に及ぶ此所を一足も放
 れ行事ならず餓死せんよりは此所にて食をからんに
 はと呼はりて富家へ亂入し大音にいへるは各かくの
 如く貯へある身の我々を見殺にし給ふは惜なし所詮
 食すばこゝにて死せん身なり非道とばし思ひ給ふな
 米穀のこらず借る所也足手達者の人々は先の宿にて
 借給へと云捨てつゝ理不盡に米大豆麥何に依らず殘
 りなく持出大釜をさがし出し田の中に据え飯を焚き
 集り者食せしかば次第くく人数まじ後には跡より
 來りし者も是を學び大小の家々に亂入し奪ひ取事な
 れば男女の泣聲は天地にひびき所の若者共は手に手
 に棒乳切木を持白晝に盜取こそ狼藉なれ悪き奴の振
 舞哉と數百人田の中に食せし最中追取かこんで打て
 かゝる飢人は見るよりもあら仰山なる人々かなと

ても死ぬべき命ならばと一ト足も引かず雙方に立別
 れ追つまくりつ打合へば跡より來れる飢人ども是も
 おなじく力をそへ所の者を真中に打かこんでさん
 ざんにたゞき合へば田の中畑の中一面人となり何千
 萬といふ數をしらす同志打するも多く宿中の人々數
 多く打殺され其外半死半生にて逃ちり漸く日暮に騒
 動しづまりける故にみなく明家くへ押入り食物
 をたづね小家をこわしかかりを焚て二三日ぶりにて
 心よく伏たり宿の者ども彼震動はさのみ事ならず
 此騒ぎには家々安居しがたく金銀持たるは江戸へ逃
 出其外は不殘吾家吾家を捨又宿なしとなりとも食
 を乞ふ身の上となりたるぞおかしき扱も此騒ぎ無程
 静りたる頃生のびたる民どもには其程夫々に上より
 御救下し置れければ魚の再び水邊にかへる心地して
 怡びあへりかくの如く國恩誠に天地にひとしくあり
 がたかりし事どもなり

近郷へ雨る砂石の事

板橋 巖 浦和 大宮(此所灰砂交り少しづゝふる)
 鴻巣 熊谷(砂二寸程ふる) 深谷 本庄(砂三四寸
 程ふる) 新町(砂七寸田畑一向見えす) 倉賀野(砂

一尺小砂交り) 高崎 板鼻(此所赤黒の砂其外泥小
 石ふる) 安中(砂一尺五六寸) 板本(砂二尺程ふ
 る) 輕井澤(大石火になりて降しゆへ家々焼失) 沓
 掛(輕井澤と替る事なしと云されど火石少き故焼失
 二百餘軒) 追分(砂一尺五寸程) 川原 畑村 川
 原湯村 三嶋村 岩下村 岩上村 原町村右六ヶ村
 流失し又は焼失し人家一軒もなし此外拾二ヶ村にて
 人家二百餘の内人数拾四人程助りたれども是とて
 もまんどくなるはなし残りの人々はいかになり行け
 ん知らず此餘また利根川筋萬座山此所残りなく崩れ
 落て吾妻川萬座川利根川へ押流したる故右川付の村
 村四ヶ村といへるものは人家田畑少しも不殘押流し
 其跡はびやうくたる泥の海の如く一面に野原とは
 なりたりけり淺間山自ら焼出て際二拾五里横七八里
 が間は一物もなく焼失たり
 前書泥押の場所凡長三拾五六里幅拾五六町より一里
 程有之村數百二拾三ヶ村其外流失死失等の分左の通
 り
 泥入荒高一萬二千四百八拾八石程
 流失泥入家數二千三百拾一軒

流死人別千四百拾一人
死馬六百五拾二疋

砂降りの場所砂厚く多く取除不申候ては難成分凡長
三十里横平均三里程其外荒高村數等左之通

御料

荒高九萬四千四百三十九石程

内三萬二千三百三十六斗余
畑方
御料

御料

村數二百七十二ヶ村

右者此度廻村中村々にて及見聞候所書面の外にも品
品難澁之村方も御座候得共數多之村方故先重立様子
書記候儀に御座候以上

後見草附録終

事蹟合考

目録

卷の一

- 一 當御城の事
- 一 御城内鎮守の事
- 一 紅葉山御宮の事
- 一 後藤縫殿助の事
- 一 淺草の事
- 一 江城御繩張の事
- 一 酒井家屋敷の事
- 一 奥州街道の事
- 一 常盤橋の事
- 一 卷の二
- 一 山王祭禮の事
- 一 梟首場の事
- 一 三緑山の事
- 一 佐久間ヶ事
- 一 行徳鹽路の事

卷の三

- 一 關左衛門初住居の事
- 一 道三河岸の事
- 一 猿若勘三郎の事
- 一 茅場町の事
- 一 加藤屋敷并番町の事
- 一 中橋の事
- 一 吳服物商人の事
- 一 御三家并同屋敷の事
- 一 木石獻上の事
- 一 卷の三
- 一 神君御放鷹の事
- 一 加州光高の事
- 一 加藤清正并同屋敷の事
- 一 伊達家屋敷の事
- 一 内藤家屋敷并溜池の事
- 一 湖の鮎淀の鯉溜池へ放給ふ事
- 一 白魚の事
- 一 芝愛宕下青松寺門前の事
- 一 龍土町八幡宮の事
- 一 尾張家市ヶ谷屋敷の事

- 一 紀州家屋敷の事
- 一 水戸家屋敷の事
- 一 千日谷の事
- 卷の四
- 一 堀田加賀守の事
- 一 實盛嫡流の事
- 一 龜戸柳島村庄屋の事
- 一 兩國橋并御米藏の事
- 一 新大橋永代橋の事
- 一 本庄橋の事并御船藏の事
- 一 木母寺の事
- 一 上水の事
- 一 聖堂の事
- 一 龜戸明儀の事
- 一 梅屋敷の事
- 卷の五
- 一 高繩大佛の事
- 一 布引觀音の事
- 一 五百羅漢の事
- 以上

事蹟合考卷の一

當御城の事

一 水戸家藏鎌倉大草紙云(上略)下總の國には東常縁と馬加陸奥守并岩橋輔胤と所々において合戦止時なし扱亦京都には御沙汰ありて常縁を召返さんために(人皇百三代後花園院御宇義政將軍之治世)長祿元年丁丑の六月二十二日澁川左衛門佐義鏡を大將として武藏國へ差下さるこれは公方の近臣にて代々九州探題の家なれば諸家も重き事におもひけるゆへ祖父又左衛門佐義行は久しく武藏の國司にてありその時より足立郡蔵といふところを居城して今にいたるまでこの所を知行しければかたぐし此人まかるべしとして義鏡を探題に成し給ひ御下知の通り武州上州の兵ともに申聞せ成氏(古河公方)を退治して上杉を管領として關東を治べきの趣を解渡す板倉大和守先達てまかり下りこの由を申ければ上杉方の兵ども澁川殿へ參會して京公方の御下知を承るその事長祿元年四月上杉修理太夫持朝

入道(扇谷)武州河越の城を取立らる太田備中守資清入道は(持朝の家老道灌の父)武州岩附の城を取立同左衛門大夫持資は(後號道灌)武州江戸の城を取立ける成氏も同年十月下河邊古河の城普請出來して古河へ御移り有けると云々此記文に據て考れば蔵の城の繁の爲に河越岩附江戸の三城同時に築きたるもの顯然たりまた大草紙を以て考ふるに持氏の男永壽王寶徳元年己巳
花園院義政將軍の治世寶徳は三年にて終享徳も三年にて終る康正二年にて終り長祿と改元あり九年以前なり
京都將軍義政公より亡父持氏の名をたまはり鎌倉に還住して居館を造營し同年十一月元服して左馬頭成氏と稱す然るに扇ヶ谷修理大夫持朝は持氏を滅亡させける人なるゆへ成氏かく二たび家を起されしゆへ出家して道朝と號し鎌倉の居宅を子息彈正少弼顯房に弱年なれども是をゆづり領知武州河越に隠居す故に元來河越に城號はなきなり持朝家老太田備中守資清はすなはち河越乾の側河原一つを隔たる尾越といふ所を主君よりの給領として住

し常に鎌倉の主君の居宅に參る顯房若年たるゆへ諸事をはからひたりこれも今は剃髪したりされば本文に入ぬといふなり岩附も江戸も皆扇ヶ谷の領知なりこれゆへに長祿元年主從息三人城鼻を取立たるなり畢竟江戸などは海端の汐入田島などは纔に在し土地なりされば神君江戸を御取開きなされし時田島とは凡八百石ばかりの御費の外これなしと御自慢被遊し事老輩の傳ふ既に友山が岩淵夜詰別集にも記したり神田芝四谷に在る田町といふみな御入國以來田地をならして町屋としたるよし古來より口碑に残れり

一人見又兵衛某(友元嫡子桃源と號曰傳へ云今世西の九御裏門前の古樹を諸人槐と呼ぶあれはいにしへの所に住居したる名主の門の榎なりとも云云按するに友山傳聞くごとく長祿後までもいまだ農人ども住居して侍ると知らるゝなり

一江戸御城内に八方正面の御櫓といふは富士見の御櫓と云々友山聞傳のごとくいかにも西丸は御入國以後御取立たりしも顯然たり今世西丸御休息間前の芝山古來より道灌の船見山と申傳ふ又道灌當城

在住の時の歌に

我庵はまつはら遠く海ちかく

富士の高根を軒端にぞ見る

道灌上洛の日此歌叙聞に達したりといふ事はまた古今天下の口碑に在り凡末代日本國中の城郭大石をもつて壘揚げ瓦鱗を以て屋臺とするものは豊臣太閤治世天正以來の結構なりもつともこれより先信長の安土の城に天守を擧られたるは彼城一所の一營にして諸國あまねからずその餘はみな土塀板瓦葺戸によりて藁にての塀屋根を葺たる城壘多し江戸城も天正御入國後年久しく今の下乗橋あたりにおりし大手門の簀戸にてありしよし老輩數度申傳へたり當御城道灌在住の日擧たる矢倉とても江戸町享保中以來高二丈五尺斗つゝに造りたる火見櫓とおなじ製と決すべし尤今の富士見矢倉は道灌以來城の高きにつくりおきしものゝ残りたるなり御玄關前辨慶橋櫓は慶長御造營の時京都大工の辨慶小左衛門作り立しによつてこの名ありといふ

御城内鎮守の事
一天正十八年八月御入國被遊候節神原式部太輔殿儀

者御入國一三味の御用承りにてその外下に青山藤藏殿伊奈熊藏殿板倉四郎右衛門殿その外それまでの御領知參遊駿甲へ御口被成候地方役人衆の儀は早々江戸へまかり越すべき旨被仰出候となり其節御城内には先城主遠山左衛門が居宅その儘にて相残りこれあり候へども永々籠城の中に捨置候故こゝろく破損におよびその上取ふきに仕たる屋根の上を籠城の節土にてぬり候に付そのもり半にて疊敷物等も腐り果申候をこゝろく御修覆被仰付諸役人晝夜骨を折漸く御入國の間に合候と有之儀を長崎彦兵衛とて甲州御代官衆の手代をつとめ候由の老人のものがたりなり権現様小田原表より御當城へ御移り遊被候節神原式部太輔殿を被爲召當城内に鎮守の社はこれなく候やと御尋被遊候節式部殿被申上候は定て鎮守の社にてもあり候やこれより北の方に當り御曲輪の内に少なき社立兩社相見候との義に付すなはち御覽可被遊候よしにて式部殿御案内にて被爲入候處に小坂の上に梅の木を數多植まはしその内に宮立兩社これあり候を御覽被遊候て道灌は歌人ゆへ天神の社を建立した

りと仰にて残る一つの社の額をも御覽被遊候てすなはち御拜禮遊被式部く扱も不思議なる事の有はとの仰につき式部殿御側へ被參候得は當城の鎮守のやしろこれなきにおゐては板本山王を勸請すべきと思ひつるに以前より山王のやしろ建置るはと仰ありければ式部承はられ仰のごとく奇妙なる義にて候ひとへに御城御長久御家御繁昌の御吉瑞に御座候と被申上候得は殊の外御機嫌の御様子となり(下略)古來は御本丸と二の丸の間に幅七間あまりにも相見え申から堀などこれあり候をも御埋させ被遊候よし左様の御普請の節北の御丸のうちこれあり候山王の社をば紅葉山へ引移し候様に被仰付宮なども輕々と新に御建立被遊候天神の社の義は何御沙汰もこれなくに付御普請の邪魔になり候よしにて平川口御内外の御堀端へ差置候よし兩社の跡梅の木多くこれあるよしをもつて今に梅林坂と申ふれ候となりその後秀忠公の御子様方御誕生被遊候ては紅葉山の山王へ御參詣被遊御機嫌能御成長被遊候をもつて諸大名諸旗本町方までも紅葉山へ氏神詣仕候はゞ段々と繁昌致就中秀忠公

社頭も結構に御建立被仰付只今にもつてその社は上野に相残りこれあり候となり天神のやしろは平川町の内薬師別當預り度と願ひ薬師堂の片脇に移し置候ところその町屋も御用地になり麴町邊へ引候すなはち天神の社も引移し候平川町の天神と申て今は餘程の社頭となり上野の御門主の御支配となれり古來よりの薬師堂は彼の社内にあるなり

紅葉山御宮の事

一紅葉山御宮は家光公御建立なり元和四年淺草寺内に御建立の御宮御神躰を御遷座なりこれによつて右御宮の義は只今におゐて諸事を淺草寺より相勤候由なり淺草寺にて御宮の跡と申候今程觀音堂へ參り候得は左の方の淡島大明神の社これあり候邊は竹藪のこれあり候邊まで皆もつて御宮跡のよし御宮前の義は惣廻りに橋あり御本宮へ參り候御門前に掛り候石橋只今もつて相残りこれあり候其外御宮附の護摩堂は御宮類焼の節も焼残り今程は不動堂に用ひこれあるなり

後藤縫殿助事

一 大猷公竹千代君と申奉りし時此後藤縫殿助無二の忠臣に付て御墨付被下候其文云

其方之恩を忘るゝに於ては黒本尊の御爵を蒙者也

後藤縫殿助へ

竹千代丸と被遊たるもの今に所持すと云云

道灌社の事

一 古老語に曰末代に至て紅葉山御宮後に唐銅の鳥居立たる稻荷一所鎮座なりこれ元來當御城の開基道灌をいはひたる社にて道灌の宮と往古は稱して今の下乗橋の外北の方下御勘定所二の丸あたりにこれあり候なり最初御城御普請の節則此所に御移しありてより以來鎮座し給ふと云々

淺草の事

一 淺草の雷門と俗にいふは遙か後の新造なりむかしは今の山門一町ばかり前右の方の道東北里の街道なりされば今も武士馬上にて通るなりこれによつて馬道といふ

一 今の並木町と云は大猷公の末までは松の並木にてそのなみきの間にはにふありてその窓より草履草

鞋を出していとなみ居たる躰なり

江城御繩張の事

一 慶長十九年以來江城御造營の時總御繩は台徳公の御自身に遊被候大手下乗橋西九下外櫻田半藏門に懸てはことごとく台徳公の御繩張なり平川口竹橋の邊藤堂佐渡守高虎繩張なり竹橋と平川橋との間に帶曲輪を取り事は功者の所爲のよしなり四谷門の續木戸喰遠門は小島勘兵衛昌盛繩なり先年より井伊掃部頭下館の彼後木戸門際の榎の木々共は勘兵衛逆茂木として植たるもの今に至り數株しげりあるなり

酒井家屋敷の事

一 大猷公御代まで今の大手の内下勘定所の地酒井讃岐守忠勝居館なり寛永年中蒲生家断絶によつてその屋敷龍の口東南の角にこれあり候を拜領して移住せりこれその屋敷蒲生秀行の時分台徳公御城に被遊候無雙の經營なり表門諸家のよりも高く冠木通りに高欄椽を付て羅漢二十四孝等の人形家屋岩樹などの彫物ことごとく金銀をちりばめ内の左右の柱には金をもつて藤を上より下へ這せたりもつ

とも花葉ともに金にてみな彫物したるなり諸人此門の花麗を見て歸る事を忘るゝとて日暮門と仇名をつけたるとなり酒井忠勝此屋敷に移居住せしところ明暦三丁酉正月大火に類焼したりその後酒井氏も子孫に至り屋敷替へしてよりあまた老中の移住し侍るなり

奥州街道の事

一 御入國以前奥州街道の本往遷と申は相模國馬入川上方より稻毛池上を通り今の西九下へ出て本町通りにかゝり旅籠町を北に折れて小傳馬町(むかしは號六本木と云々)を通り淺草觀音堂の門前を通り花川戸押揚より古三谷古隅田といふをかゝり往來せしよしなり

常盤橋の事

一 大猷公御代まで今の常盤橋の名を大橋と唱へたりこの名はおもしろからず改名すべしとの上意によつていかなる向寄にや町年寄の奈良屋市右衛門に命せらるまかるにそのころ市右衛門方に寄宿し居たる浪人在りし市右衛門此ものをたのみ考へさせしめ常盤橋といふ祝名を獻せしより永く彼橋の名

となれり

これは金葉集大夫典侍の歌に 橋の上の藤
色かへぬまつによそへて東路の

常盤のはしにかゝる藤なみ

といふころを取れり常盤の橋は近江にあるとな
り

事蹟合考卷の二

山王祭禮之事

一 台徳公御代元和元年初て六月十五日江戸山王産土
の町中はいふに及ばずその外も粗諸町より祭禮の
出しねりもの等御城内に懸け櫻田本宮より渡し申
へきよし被仰付によりおのゝおもひゝに申し
ねり物を相渡し候大傳馬町より太鼓の上に鶏の乗
りたる出しを渡し候台徳公五十三間の御多門より
上覽あつてすなはち上意には諫鼓若深鳥不驚とい
ふ太平の世をいはひたり此出しをもつて末代にい
たるまで一番に渡せよとありしより今にいたるま
で上意のごとし

梟首場の事

一 御入國以前までは本町四丁目梟首場にてありしよ
しこれによつて山王明神の兩祭禮ともに神輿なら
びに練物等まで今にいたり渡らざるなりといふ

三縁山方丈曆代系譜

一 當寺草創之地者貝塚今桃町之邊中頃移而于日比谷

事蹟合考卷の一終

邊後慶長初移而于芝云云(中略)

修學の餘隙愛禪和歌故與太田左金吾

道灌爲親友

増上寺長老 音譽

海上白雨

音あらし灘の汐路の波風に

かへればむかふ夕たちのそら

深山納涼

いかにせんまたもとひ來ん夏の日の

もらぬ深山のまきの下庵

連夜待戀

いつをさてかきりならまし夜なくを

月にかこちて有明のそら

右三首載會集太田攝津守資宗家に在と(中略)

天正十八年大相國家康主領關八州入御武江之時始
而謂郷爲擅越慶長三年戊戌八月移寺地芝今地也右
系譜の文不違一字寫之處如是抑此歷代譜と云書は
京都及び筑紫關東に至て淨土一宗の本山寺之檀林
等の住侶代々の事實記したる記鑑にして増上寺方
丈に納め置ところの大録なり淨土一宗の寺傳にお

ゐて天下にこの書の外また他あらん哉

慶長十己巳年本堂回廊等を御造營ありし大伽藍と
なるもの今にいたり存在するところなしこの堂の
惣柱横の木をもつてつくりたる千載に至ても不朽
なりと云々

増上寺の大鐘嚴有公の御代まで凡七度ひわれ申
候よつて鐵炮御用衆布衣井上左太夫元祖外記に被
仰付何卒この鐘の永代破れざる地合を工夫いたす
べきむね被仰付候ところとたんといへるかね入れ
候は、永く破れ申ましきと申上るよつてすなはち
御鑄物師椎名伊豫に被仰付右のかねを入れ鑄立候
ところ今に至り少しもひわれ入らず何十里にひ
びき候なり品川御殿山の脇に鐘鑄松とて有なり

佐久間の事

一 佐久間といふは御入國以前より江戸下宿の間屋に
て代々大傳馬町に住す名主平八といふものにして
且て町年寄といふものにあらず今はこの家斷絶な
り佐久間が住居は大傳馬町にてはこれなし佐久間
町今お玉が池といふ所すなはち住居の地なり寺は
増上寺中心光院なり

行徳鹽路の事

一神君天正十八年御入國被遊候不日に行徳の鹽路濱へ船路の通路早速に被仰付堀通し可申むねたちまち船路出来いたし申これ今の髙橋通りなりこれは甲州武田信玄動もすれば小田原より鹽留に逢ひて國中上下ともに難義いたし候をもつて神君迅速に行徳の鹽江戸入候よしをなさしめ給ふ

團左衛門住所の事

一穢多の頭團左衛門は御入國前今の本通り室町三四町の辻にあたり候地に代々居住仕候この所爲によつて今にいたり彼もの、手の穢多燈心をもつて彼辻に出て賣と云々

道三河岸の事

一道三河岸は御入國後材木商軒をならへてありと後年彼地武家屋敷となり候に付御城東外へ出され候もの今の本材木町なりされば本字を添へ唱ふなりと云々

猿若勘三郎の事

一新材木町に居住せし豊饒の酢造りの果内山平兵衛といふもの語りけるは私壯年のころ猿若勘三郎に

頼まれかの者の先祖書を一巻に認め候今に彷彿ながら覺る趣といふもの如左其外餘説を記す

元祖 猿若 道順

平兵衛云此者その名を猿若とのみいふゆへ外には無之候きと云々

二代 勘三郎 宗月

平兵衛云者猿若を苗字として猿若勘三郎といふ然るに豊臣太閤取立られし中村式部少輔一氏二拾萬石餘の大名たりしがその子一學早世子孫なくして永く斷絶せしゆへその一族中村次右衛門と云者江戸に流浪してこの治右衛門が娘二代目勘三郎に嫁して男女の子を産む後年猿若の苗字を改て彼治右衛門が名字を用ひて猿若勘三郎と名乗これよりして子孫悉く中村を以て苗字とすと云

三代 中村氏 明石 母中村治右衛門娘

女子 天津七郎右衛門娘 母右同斷

天津七郎右衛門は京極若狹守忠高家來彼家を出て後河原者となりしが流石なりしにや二代目中村勘三郎聳とする由申傳へり

七三郎 中村氏 母二代目中村勘三郎娘

是猿若今様無雙の名人寶永六己丑年二月六日死後法名日榮母方の苗字をもつて名乘れり

七三郎 實は日榮妻の甥

延享専ら父の猿若を繼て勤む

女子 某妻

明石

勘九郎

長太郎

勘三郎

仁左衛門

傳七

女子 吉住平右衛門妻 平右衛門 傳八

四代 家督を中村勘三郎と稱す

傳九郎 猿若不雙の上手正徳四甲午年十月廿六日死

五代 長太郎 實勘三郎長男家督の日勘三郎と稱す

六代 勘三郎 實は勘九郎次男

女子 半九郎妻

七代 傳九郎 始明石と云延享二冬改名

猿若來由かくのごとしその外はみなこの勘三郎以後のものなり

茅場町の事

一往古は神田橋外に茅あまたこれあり候繁花に及ぶに付今の茅場町といふ所へうつされ候このところ

もつともむかしは殊の外の葦しげり沼地にこれあり候漸く彼者ども地をならし住居商賣仕候ところ目を追て繁花の地となるゆへ又本庄榎木橋東南の川端に移されてより今に至て彼地の茅商存在するなり

一通町筋も大猷公の御代までは今尾張町といふ町の東側は汐入にてそふくと浪うち寄せしとなり

加藤屋敷の事

一増上寺表門東海端におゐて加藤左馬助嘉明台徳公御代寛永中奥州會津太守に被仰付四拾二万石餘被下置候家居屋敷として一万坪賜りしおびたしく入用をもつて波打際を築地に取立普請いたし罷居候是等も畢竟は濱手御しまりの爲大身役として如此かと申傳ふその子孫代々やかたとす云々
一番町の事は神君の御下知たり一四六偶目は陰なるゆへに裏町を用ひられ奇目は陽なる故その町一筋づゝなり

中橋の事

一中橋といふところは今の本材木町の川筋御城の堀まで掘通し本通りの所に橋これあり候を中橋と申

たるは御入國の後より大猷公の御代初までは彼橋を取り御城際までを平地として春日の局と同町に大猷公に御奉公申たるお彦といふ老女に御助成屋敷として町屋になされ被下置候はこれ當時大御番として勤仕する小川左兵衛先祖なり當時左兵衛屋敷は麻布長坂の下なり

吳服物商人の事

一本町二丁目家城太郎次といふ吳服の大商寛永六七年のころ京都より初めて江戸に下り常盤橋のはし詰に立て腕に吳服物を一二端づゝかけて居たりければそれを大名御旗本の家來ども買に来りたりあまりに腕もかゝるくなりあきなひもおほくなりしゆへ木馬のごとく竹にて兩足をしつらい上の方に長き竹を横たへてそれに吳服物をかけてかつぎありく製のはしめなりと云々然して彼者本町に賣店を出してより日を追ひ月を重ねて京大坂より吳服物商人本町につどひ集りて今世のごときの數百家とはなれり

一京橋立賣といふところは凡嚴有公御代寛文のころまで様々の商人おのれゝが賣物を持って立並び賣

たり四谷本郷淺草芝の端より出て買たる事ゆへ殊の外にぎやかなりし事にてありし其後夥敷端端商店出來て自由になるによりいつとなく立賣に買に来る人なく彼所の賣物絶たり立なから賣たるゆへ立賣といひたるなり

御三家の事

一大坂御征伐天下太平の日神君御次男方の御定め義直卿頼宣卿頼房卿をもつて千載の後までも三家を御本丸にそひ奉られ天下鎮護せらるべし若御本丸に御嗣子これなき日に至ては三卿その時の列次に去たがひて相續あるべしそれが中に義直頼宣兩卿は西方鎮護を專とすべし頼房卿は専ら將軍の御名代として御軍用を初四海の城地異國の征法等相知るべしとありこれは各別に江戸城の繫として水戸を領せさせらるればこのゆへに將軍の御座を代り採られて若し凶徒御征伐として將軍の御馬出んとする時はすなはち水戸家御陣せらるゝ御定めなりこれによつて光圀中納言の御代までは毎年三月十三日より八月十二日まで公儀小役人の組頭以上惣御旗本の列たる人毎日非番次第五人三人づゝを

限りて十人百人たりともその日限の中一度彼書院に參上いたし一汁三菜の料理申受たりこの時亭主人出られ一人づゝその名を呼かけ何某よく喰やれと挨拶せられしなりこれは公儀の御定小役人の組頭よりして御旗本の列たりその時の小役人の御目見するは御目見以上の列として公儀御旗本の列には非ぬなり水戸家將軍の御名代として公儀御人數扱かはるゝ時それかゝれとて御旗本の列たる面々を見知らせられ給はん爲に右のごとく椀飯行はれしなり如是の御定ゆへ水戸家元和以來江戸常詰にて御入候御應野御いとまとして毎年百日づゝ歸領せらるゝ是また第一武用のならしたり右之趣たるによつて嚴有公御幼少の間は黃門光圀卿ひしと在江戸せられ天下をひかへさせられたるなり

一御城内吹上御門の外當世月光院様御館の地尾州家上屋敷なり同扇稻荷の邊に水戸家上屋敷なり同右衛門督殿御館の地紀州家上屋敷なりこれは元和以來明暦の大火の節まで如斯大火後只今のごとし御三家おのゝ御城外へ出られしなり
一半藏御門といふはそのむかし此御門外に服部半藏

居住せしゆへなり

木石献上の事

一慶長年中江城御造營の時西國四國等の大名おのおの領知の木石を船に積で献上したりすに御本丸中の御門にむかひて右のかた多門下の角石のすぐれて大きな臺石をば肥後殿石と呼ぶこれ加藤肥後守清正肥後熊本の太守として獻するところなりその御門を入れて直にます形の向ふの石垣の中に大石に大狐石と切付たると小狐石と切付たる石と二つ餘程大なる角石ありこれも清正獻するところと申傳ふまたそのころ清正の獻する石船七艘風雨にあひて品川より四里ばかりの海上にて破損してその石こたくく水底に沈めるもの今に七ヶ所存在すこれ釣魚の人のすぐれて得物ありとて舟を漂ふるところをこれを根釣といふその所をねと呼ぶは石船の略言なりと云々

事蹟合考卷の二終

事蹟合考卷の二

神君御放鷹の事

一神君御隠居後御放鷹として御泊がけに彼城へ御入被遊候とき御自身は淺黄染の袖の御小袖小倉織の木綿の御袷羽織薰真草の御巾着黒き長門印籠に瓢箪の根付をつけたるを御下け被遊候御供の女中は花色染の立波に汐汲桶などすそにかけて白くしたるに茜染の木綿裏つけたるを打懸に着てあさき布の三尺手拭をいたゞきあごにまさかへし餘りをいたゞきにてからげて馬に乗たるがおなじ躰にて三人程づゝ御供したり

加州光高の事

一加州筑前守光高大猷公御在世の時三十一歳にて早世せられしなりこの時は正しく上屋敷常盤橋のうちにてこの亭におゐて光高卒去なり其向ふ屋敷に越前家開基秀康中納言の息參議從三位伊豫守忠昌在住せられたりこれ正しく大猷公の御從父兄弟として御懇切他にならびなく公儀より御思召深かり

しが此人殊の外の大酒にてこれあり候ゆへ光高朝臣死去の翌日大猷公より堀田加賀守正盛を上使として御内意被仰付候はその方儀格別大切に被思召候それにより昨日筑前守早世に付て其方常々大酒にてこれあり候間只これのみ御案じ被遊候向後は大酒相止られ候様にとの上意なりこの時伊豫守短冊召よせ一首の狂歌を書て御返事申上られたるなり

むかひなる加賀の筑前下戸なれば

三十一できのふ死けり

大猷公この狂歌を上覽これあり御笑ひ被遊しようこともなしとて差おかれしとなり

加藤清正の事

一外櫻田辨慶堀前井伊家の上屋敷は加藤清正が館なり表内前北堀外榎木の古木および榎木等ひと植たればこのところの小坂を土俗かしの木坂と唱ふもつともこの木樹も明暦大火後植替たるものと知るべし清正時代も然るか慶長の半のころ清正肥後國守として江戸に参向してこの館に居住の時帝釋栗毛といふその長六尺三寸に餘りたる馬に乗りて

御城下を徘徊せしにその著用の袷鯨尺にて四尺三寸ありしが脛の三里少下へかゝりたるなり備前兼光の長三尺五寸ある刀を常帶の脇指としたりさればそのころ江戸の町人のやはり小唄にも

江戸のまかりにさはりはするとよけてとをしやれたひしやくくり毛

とうたひたるなりその大兵推て知るべしまた井伊家の中屋敷四ツ谷喰違の木戸のうちの屋敷すなはち加藤清正造作したるまゝにて凡二百年に及びて今に至り類焼せずして存在すこの屋敷の表門の冠木に清正長さ三尺餘の黄金にて虎を作り置紋とせり然るにこの紋朝日に耀て品川浦魚驚きさりと獵すくなくなり漁人殊の外渡世難義のよし歎くに付彼紋を放したるといふ事古往より武家の口碑に残るところなり此屋敷まづ玄關は落椽のところ板敷たるべきを平石にて敷詰たりこれは清正すはといふ時踏段の上より直に馬を牽寄せ乗様にしたるとなりさてその玄關上使者間とおぼしき所に四方障子ありもつとも古風に腰高き障子にて惣その骨木の外の方惣鐵の筋がねを入れ外方へ一本くゝに鐵

の樞を仕廻たりこれは清正外より来る使者にてもその外の武士にても心得ざるものと見たる時先此間へ入れて挨拶の家來その口上何にても聞それに御控へ候へとて退く時其障子をはたと立るとくるるおりてその中に在るものたやすく出る事のならざるやうにしたるなり諸事かやうに武用を心得作りたるものなりと云々

一伊達家上屋敷は日比谷門の外當時櫻田御門屋敷といふものなりこの屋敷に伊達政宗一代住居なり

内藤家屋敷並溜池の事

一虎御門内内藤備後守政樹上屋敷永田馬場下の行當り内藤紀伊守信興上屋敷ともに兩屋敷溜池の上なりこれは神君の舊臣内藤右京亮藤原清長男彌次右衛門清長(是備後守家筋なり)二男甚左衛門(是紀伊守家筋なり)兄弟ともに武功忠臣拔群たるによつて神君御憐愍ふかし御入國以後此邊御廻り被遊たる時右兄弟の人に御自ら御杖をもつて賜り候居住地今にいたつておの／＼上屋敷として在住なり

溜池名所の和歌の集に

むさしなるさやまの池のみくりなは

ひけはたへはや我そたへする

とあるはこれまさしく俗に溜池と呼ぶものこれすなはち狭山の池なりと老輩申傳へ同じく名所の集に

狭山 武藏

千載集 五月やみ狭山か峰にとほす火は

雲のたえ間の星かとそ見る

これまた老輩傳へいふすなはち溜池の上櫻田山王權現の社の山正しく狭山なると云々

湖の鮎淀の鯉溜池へ放給ふ事

一台徳公近江湖の鮎山城淀の鯉を生ながら放させ給ふもの今にいたり存生すと云々湖にて鯉を獲り候てそのまゝふる芽やのほくしたる古茅にそくとまきからけて籠に入て寒冷道中六日づゝにて江戸に來るやうにいたすなり到着するとそのまゝからげをときて水に放し礮茶を吞すればたちまち活ておよぐとなり鮎も同前なりもつとも冬の日ならでは江戸までは取よせがたきとなり

白魚の事

一兩國川筋を始江戸表の白魚は神君の御指圖にて尾

州名古屋浦の白魚を御取寄せ候てまかせられしもの今に至て生成すと云々春のすゑかた白魚の子をもちたるを多く取りそのまゝに乾して納めおき冬にいたり汐のさし引する磯端を結び土砂に堰切てその中へ汐のさしひきするやうにいたし浪にとられぬやうにしてその白魚のほしたるをそのまゝ浸しおくとおのづからその孕子ほころひほうぶりの大ききさなるより漸々に長じて白魚のかたちを成したる時そのかこみをとくなり

芝愛宕下青松寺門前の事

一大猷公御代の末までは正保慶安のころまでも葦沼の汐入にて六月の炎天にも奴僕に下駄を持せて行かざれば往來なりがたかりしが見るうちに石疊の地となりし云々

龍土町八幡宮の事

一その始青山因幡守青山の屋敷園をなさしむる繩張下知するとして乗廻したる馬口してたふれたるをすなはちこの屋敷北西の際に埋めその地に八幡宮の少しきを造營したるもの今に至りて存在すこれ龍土町西はづれなり

尾張家市谷屋敷の事

一尾張家市ヶ谷の屋敷その先甲賀者の宅地なりしを牛込の地につかはされその跡のこらす被遺候この地はそのむかし平地の芝原にてこれあり候ところ御入國後小栗又市拜領して住居たりといへども小身者のすまひ纒にして口となるを土人小栗原と呼びたりし地なり産土の八幡宮も宅地繩張のうちたれども土人參詣のために宅外とせられたりしと云

紀州家屋敷の事

一紀州家は赤坂御門外下館へ明曆大火後に移られしとぞこれ三家ともに御城後西北鎮護の御奥意なりとて糺町五丁目の南本館として今に營作古代の丁寧なるものは開基安藤帶刀存生の日南龍院御歳若きころその地拜領して造作せられるなり紀州家譜代の近臣の木村高致に語曰そのはじめ南龍院此館を造營せられし時大工より始諸職人雇錢及び諸色入用の代錢に至るまで少しにてもねざる事なくその者の悦ぶほど取らせ車力士持等汗を出して苦まざるほどに休ませてつかはれし造作出來して家臣

どもを呼出し何と此度の造作にかゝる工匠その外の工ども材木以下の商人並日雇までも利潤を被りよるこぶかと問れし時近臣ども申は御屋敷邊數十町四方の土民としより子供までも土持いたし鳥目いたゞきそのうへ快にはたらし候ものは抜群の御懇惠をかうむり職人商人大に利徳をいたゞき候ゆへ手を合せ御館をおがみてのみ居候仕合せと申せばそのとき南龍院殿見よ焼まひなど申されしところはたして元文の今凡百年に及て煙も至らざりしと談せしとなり古將は亦當世浮薄の爲のごときとは日を同して語るべからず難有く大器をふくみたる事どもなり

水戸家屋敷の事

一水戸家も今の小石川御門外と下館本宅たるものなり表門裏門今世のごとくなり惣家中内外通路は大半餅指町の方の裏門を用ひられしにいつとなく農人體のもの此門外に出ると見ればまた歸ると見え農具の類或は雑具等手に持または脊に負ひなどして通るなりと或は農女と見えていなかびたる衣服にて往來するもあり右の様子番人もとむる事もせ

ざりしは凡彼屋敷拜領後十六年に及べりしかるにあるとき十八九歳斗なる農女外へ出て歸ると見え少々の雑具を手にて持て門内に入りていづくともなく往を一人の足輕數年此類の者往來不審に思ひその跡をつけて見しに今の庭に造られたる方の山手へおりつくゞりつしげみの中をゆくそのまゝにとをくつけゆきければ農家十八ばかりある小村へいたれりこれによつて此足輕稀有の事に思ひ一ツの家に入りて爰は何といふ村ぞ此所水戸殿拜領の屋敷内なるがその事は今に知らざるかといひければ其農人答て云我々どもはむかしよりこの所に代居住いたし候いかさま近年他村在所へ出候に門杯も出來候左様にも候敷外の事は不存候と申すこれによつて足輕歸り候て右の様子を上役人に申述ぶ終に頼房卿耳に入候所中納言殿その分にいたしさし置候へとこれある故そのまゝにて頼房卿逝去後その家督光圀卿代までも住居いたし候然るに明曆三年本館類焼の後光圀卿此小石川の屋敷を上屋敷とせられて庭前に山水を構へ東海道江戸より京都までの所々の風景を寫し造られ候によりて彼農

人どもを巢鴨の下屋敷に移され扶持を興へられその庭中に田舎様にせられたるやうに田を作られその稲の植蒔あるひは麥などつくり候農體を勤させられ候ひし事今に至り年々作業彼農人の男女にさせらるゝとなり

千日谷の事

一鯨ヶ橋町西の行留り信濃町に上る坂口までの谷間の町を千日谷といふは永井信濃守尙政の草履とり剃髪して浄土宗の道心者となりこの坂に庵を結びて念佛修行して侍りしが終に寺院に建立し千日不退轉の常念佛を結願したるとき千日回向の供養をつとめたりこれ江戸におゐて千日回向のはじめなりしゆへ御城下の男女參詣群集したりこれよりして千日谷と俗唱したりその寺は今にいたり念佛不退轉に勤行するなり

事蹟合考卷の四

堀田加賀守の事

一春日局上京の次手美濃大垣邊に浪人いたし居る備前宇喜多家の家老堀田勘左衛門の子留之助容儀美にして發才剛強に見立候もつとも局の甥たるにより召つれ江戸に下向して(後藤縫殿助方同居其後)大猷公へ御扈從に被召出候ところ御意に入にて終に天下の元老となり從四位下待從加賀守正盛といふこの人在世の日淺草通諏訪町の北裏にて方二町ばかりの下屋敷を拜領す子孫にいたり傳來なり大猷公度々この下屋敷に御成遊被候庭前北方の築山へ上らせられ下谷方の平原を御遠見被遊候その時の御腰かけられ候團石今に築山の上に在るもの北方塀下塀水の外より見え候なりと云々

實盛嫡流の事

一延享に大御番組長井岩次郎某は齋藤別當實盛嫡流に全くまぎれなき正統なり實盛以來代々自筆を以て自分の假名實名を書繼候系圖今に至り所持せり

事蹟合考卷の三終

岩次郎父清太夫語り告しけるは我等四百石代々傳領の地は武州の岩槻にて候實盛舊領永井の庄十八ヶ村の直に側にて候今少にて先祖舊領の地賜はらざる事残念に候又今戸に浄土宗にて法源寺といふ寺内の墓所に紀伊國石の扁青なるごとく其形圖かくの如き厚さ曲尺にて三四寸ばかり幅一尺五六寸ばかり長二尺五六寸ばかりなるものに至極古代の筆勢にて文字ありさだかならざるなり壽永二癸卯五月の字も見ゆるなりその彫刻もしほらしき躰なりこれを實盛墓所石といふこのはか所の土中より掘いだしたりといふ元來此寺は江戸表にこれあり候のところ後來この地にうつされ候と申す

龜戸柳島村庄屋の事

一龜井戸村の西の町に柳島村といふ一村ありこの庄屋は代々濫井氏にして先祖兵庫といふ者の代には天文年中里見北條鴻の臺の合戦の騷動ありしその時は村中の男女ともにこの兵庫が家内に入置候となり當亭主は治郎左衛門といふ父は一睡とて草木者にておもしろき老人なりしが享保のする身まかりぬいまだ飽のなき時に作りたる造作としてその家

の柱皆繼飽にて削たるもの今に存在すこの茅屋米六拾俵にて作りたるといふこれは古來錢乏しき時代諸色米にて交易し作りたるなり隅田川渡しの西岸沙入といふところの神明宮の神主某語て曰世俗にいふ千葉系圖に千葉介兼胤の末葉守胤の子次郎惟胤家臣園城寺と一身して本家に對し合戦して下總に入その後太田道灌を頼武州石濱の城に居住すよつて惟胤子孫を千葉家石濱の流といふと云々此石濱とはすなはち神明宮の地なり今におゐては沙入と唱へ候すなはち城主と申も宮の北の方たること語りしなりと石濱を當時はしばととなへ來りしとなり

兩國橋並御米藏の事

一御入國後御城下東流荒川筋は大橋一ヶ所もこれなき事なり明曆大火後萬治二年はじめて大橋一ヶ所かけられたるもの今の兩國橋なり延寶九年十二月廿四日類焼したる時この橋焼落たり元祿十二年戊寅年九月六日山下町より出火して三谷邊まで類焼したりこれ東叡山勅額御到着の日にして彼額通り過る跡より出火したりこの六日火事後御米藏築地西

本願寺の南東岸海端に移さる兩國橋は元の所に返しかけらるゝもの今の兩國橋なり彼築地に移されたる御米藏沙風に米ふけ候よしにて享保はじめのころ淺草御藏へ彼の米藏一所にさせられ候よしなり

新大橋永代橋の事

一元祿十年のころ新大橋懸らるゝ同十一年中永代橋かけらるゝこの時老中阿部豊後守正武河村瑞軒に申さるゝはありがたき御仁政にてはなきか萬民通路のため公儀御失却夥敷をも御厭ひなく大橋二ヶ所までかけられ候何と大水の時分などにいたみはあるまじきやと被申瑞軒答へ候はされば大水の時は川上田地四萬石ばかりは極ていたみ申べしと答へしが果して寶永元年利根川筋洪水のみきり葛西の猿股等あふれて千壽葛西領かけてこの川に四萬石餘皆無したりしなり

本庄橋の事

一本庄一目橋通りは葛西まで堀通して一二三四五の橋をかけて通路なましめられしは台徳公の御代元和寛永五六年の間の義なり

一本所御船藏は古來兩國川西岸にこれあり候を貞享中堀田筑前守正俊元老として年々御失却のよしにて安宅丸を取崩しになさるゝ時彼大船指置候川の東岸の地惣御船藏移し候となれり

木母寺の事

一木母寺の本堂は嚴有公御建立なり木母寺の額は本阿彌一族京都應ヶ峰太虚庵の開基光悦が筆なりこの本は湯殿山行人派なり伊勢物語に業平朝臣關東流浪の文章に隅田川の渡りにいたり其詠歌ありしとの趣向を取て隅田川といふ謠を作りたり是彼物語の歌に

名にしおはゝいさこと問はん都鳥

わかおもふ人はありやなしやと

といふ結句のありやなしやといふによりて子をうしなひたる母の狂人をつくりかけたりこの俗謠も延享の今にいたりては稍四百年に及ぶ事ゆへ日本國中にうたひつたへて邊土遠境に及びたる也この隅田川といふもまことの角田川にあらざるにいづれのころよりか土人彼謠によりて梅若死骸を納めたるしるしとて柳の木を植置たるもの末代にいた

りて終に一ツの古跡となりたり御作事方の町棟梁の溝口九兵衛といふもの呼名被下置筑後と號すその家督を備中といふそれを今世二代ばかり過るなりその筑後無雙の坪曲尺者彫物の上手工匠の手ききなりこのもの十三歳のとき牛若丸を木にて彫作したりその頃の嚴有公寺院御建立なし下され候時の木母寺の住僧筑後父と念頃にてときに招れてその父の許に來りその牛若丸の木像を見てしきりに懇望して筑後父子に請ふて云くさてこれに能く出來いたし候我等寺の梅若丸の像にせんといふ然らば携へ歸られよとて彼僧にあたへたるもの今にいたり彼寺の本像たり

上水の事

一江城下上水は神君御代御吟味ありて當世御菓子師の先祖大久保藤十郎に被仰付水脈考へ注進せしめ江戸御城内のこらすならびに日本橋より金杉橋を限り木挽町に及び築地に多摩川の水をかけらるゝは正保年中始るなり此節は日本橋京橋を限るなり芝口邊木挽町にかゝるはそれより後明暦元年のころなり又江城西北落合中野等の西北猪頭の辨天の

池水を引て小石川水戸家の本館にかゝり水通路の北海岸を限り兩國橋の内をひろく廻りすこれを小石川上水といふまた常憲公の御代のころ板橋の西方練馬の南の方石神の池の方より本郷および柳原筋にいけられし水流を千川上水といふこれ文照公御代以來停止せらる又本庄北のかた綾瀬川といふ水流を業平橋筋に引てまた本庄中に懸られしを白堀上水といふこれも常憲公御代被仰付て在しが文照公の御代に停止せらるその上水の川筋今も業平橋の東北の方の橋際より葛西領世繼村のかたへ通りて小川一流ありこれすなはちその白堀上水といふ水筋なりいまは樋の造作なきゆへ沙などさし引これありよのつねの川水なり

聖堂の事

一聖堂は元來東叡山中今の山王權現社の地にありしなり常憲公の御代神田明神社前麴商人どものあまたありし町家を轉してこの地にうつされて大成殿を造らるゝもの今猶存在すもつともその草創の日は元祿三年なりこの時の榜題仰高入徳杏壇三門の三扁ともに持明院從二位權大納言藤原基時卿なり

その後元祿十六年類焼したりしところにもまた常憲公御再興ありしときその三扁の榜題は基時卿の家督中納言基輔卿書れしものいまにいたりて存在す

龜戸明儀の事

一信祐在世菅神の師法性坊の阿闍梨圓意僧正を彼龜戸の本殿の東方に祭るそのはじめは纒の茅堂寶前も蒔きしておろそかなるものなり寶永以來新たに造營してきらびやかなる堂宇となれりしかるに上野國明儀山はかの法性坊を祭るよしによつて江戸の士人いつとなくこの龜戸の法性坊の堂をめう儀と唱ふとなり

梅屋敷の事

一梅屋敷の梅はむかし七歳の童實植したるものかく増長したるなりと往年藤堂家とかや大身の家に買もとめて移し植たるにこゝろよからぬ事もありて稍枯るゝ體になりしゆへもとのぬしへ返したればまた植おきしがいまかく繁茂したり月の朧なる夜時としては七歳ばかりの童子彷彿とあらはれ出ると云々

事蹟合考卷の四終

事蹟合考卷の五

高繩の大佛の事

一 台徳公の御代江城下におゐて謀反など巧し類の悪事をせし從黨都合五十七人品川におゐて磔罪せられしなり然るに穢多も兩方より一人づゝ鎗殺したるに幸にや正中の一人を突殘してもはや突終りたりとて公儀役人殘らず諸事を納めて歸られたり然るにその突殘されたる罪人夢の心地してしばりつけられながらその日もやゝ暮たり大抵夜五ツ時になるころ御家門の飛脚通り行を彼の罪人呼かけいふなるはわたくし事御覽の通り自分の罪科によつてかくのごとく磔にかゝり候然るに兩方より穢多ども突來りしが不思議にわたくしを突き殘したるをかつて御役人中も穢多ども、知らずして如斯なりわたくし工戸檜物町に居住いたし候佛師の又七と申ものにて候か様に一命助り候もひとへに佛のめくみに候この上は二たび俗にてくらす所存すこしもなし出家を遂げ申度候あいだ何とぞ此繩を

解て給はれといふその時かの飛脚聞届けさらばおろしくれんとて繩をきりはなし候とそまゝ下におり飛脚に一禮述べそれより直に宿に立歸る妻子等かなしみに沈み居候ところへ夜中ひそかに立歸り候得ば妻子とりつきて夢のゆめとなきかなしむとき又七いふやう我まつたくその方どもと暮さんとして歸りたるにはあらずか様／＼のわけにて死をのがれしあいだこれより直に出家してこの罪障を果すべしもつとも佛體を刻まんと念願起したりさるによつて細工道具をとり歸りたりとて生涯のわかれをおしみそれよりすぐに上總の天神山の山奥にいりて五智如來を刻みたり彼國に所縁ありしにや土人も殊の外に信仰してやしなひ置たり終に十數年の齡を歴て山居し彼五體の大佛を刻み立成就したりその頃は髮髭ともにをどろを亂したる如く生てもつとも山居のはじめより木の實草の實ばかり食して居たるとなり土人もその丹誠を感じその地の地頭代官も自然とその信實を感じ遂に公儀へ右の様子明白にとこともなく知れもした申上もしたるところ一度御仕置は濟たるものさやうに

不思議の死を遁れたるは格別の儀にて殊勝の事なりその如來江戸に移し安置せよとて高繩の海岸にて寺院をたまはりかの五體をうつし願ひ申たるまに寺院を建立しかの又七入道住僧となりたりこれ今の高繩の大佛といふ右の又七入道は木食但唱といふこれなりもつとも開基たり然るに寶永のころこの寺類焼してかの五智如來燼滅せりその後度度の類焼に關東無類の石一つ宛をもつて彫立たり長一丈ばかりの二王大門に立たるがいくたびか焼損して終に延享二乙丑年二月十二日ばかりの焼亡にまた焼損し今あとかたもなき體なり

増上寺中布引觀音の事

一 丹羽五郎左衛門秀長の嫡子長重奥州二本松十萬石領の城主在國の時城下を熊野道者の農人馬に乘行を見てさて／＼あの馬の駿足かな何とぞ乞請候へと家來に申付候所そのまゝ家來彼道者に子細を申ければ則長重にあたへて去りたりこれよりその馬に乗りてこゝろむるに地道乗り駈といひ云はふやうなき鎧下の名馬なり道者のあたへたる馬なればとてその名を道者と名けたり長重思ふやうはかゝ

る名馬たぐひもあるべからず將軍家に獻し申べしとて江戸に牽せ台徳公に獻上したり公この馬に召れ候ところに不雙の名馬のよし上意にて殊の外御賞愛被遊候ひき駈を追ふに布一端を後輪に懸手に兩方へ結びつけて追ふにその布一文字にすゆへに道者の名を改めて布引と名づけられたり大坂御陣の時も台徳公この馬に召れたり然るに寛永九年正月廿四日薨去し給ふ時御治世の日勝れてすぐに今の涅槃門外かけあがりの上其ころは彼境内にて芝原なりしにこのところにはなし伺にさせられてさしをかれ候彼布引ながらへ居るうちは毎月廿四日老中御名代として増上寺裏門より參詣せらるゝに極て朝七時より表門のうちへおのれと歩み行立やすらひ老中通らるゝを見かくるとそのまゝ前膝をおりうやまひ居てそのまゝ歸りたり終に一度にても違ふ事なかりしこの馬年を経て死したる時一山その名馬たる事を感じるの餘り方丈より彼馬を境内に埋めて幅尺餘堅八尺餘六七寸斗なる頭は劔形にしたる石塔を建たりしかるに彼寺行者の開基文周方丈に申請ひてかの石塔を本尊として堂を造り

馬頭観音を安置したりこれ今世にいたりて諸人参詣す涅槃門のうちの観音堂これなり

本庄五百羅漢の事

一貞享のころ京都に佛工の上手に九兵衛といふものあり殊の外逸遊に就てせんかたなく黄檗派の僧の體となり松雲と號し江戸に有り淺草観音堂のひかしのかたはら花川戸の町面に借り居し毎日彼堂の東北の通路竹門といふ所におゐて五百羅漢を江城下に建立せんと大願を起して先彼木像一體を造居て自はそのごとく常に羅漢像を刻み難波の鐵眼和尚の弟子と稱して鼠色のころもに造の葉笠にて數日經たるとき淺草御藏前豐饒の米商人の隱居老人共常にうち連立山谷の寺々の説法を聞ありく道の行手にかの松雲が勸化の所存を聞てさてく大望なり殊勝に候われくちから添へんとて俄に淺草寺の塔頭壽命院の門内に廣く地を借り羅漢安置の假屋を立松雲をもその假屋に引取り武家町人ともに羅漢一體建立の施主荒木より薄をかけ成就するまでを金子五兩づくと定めて勸めたりもつとも羅漢體に雲形の銘牌を立つそれに施主の名及びこゝ

ろざすとこの亡人の法名を漆書にしてかつ一體の羅漢の名號五百羅漢都合の數名をも漆書したりこれを見てしそのころ萬古未曾有の繁花の江戸たちまち施主出來て數か年のうちに成就したりこの時桂昌院尼公この事を聞き召され御施主とならせられ御言葉そひたるゆへ本所五橋の南におゐて寺院地三百坪ばかりも賜りてまづそのところに假屋を作り釋迦佛をはじめ惣羅漢その外護法の善神等に移し安置し不日に入佛供養の法事を修行したりこれ元祿八年八月の事なりその供養公儀より日限三十日と被仰出し所に晴天三十日と私し執り行ひしによつてたちまち閉門を被仰付候もつともはなはだ危相なる假屋の體故大門とてもなくおもてくる竹矢來にてとふぶんの圍なりしを閉られて淺ましき體なりき其後年を越えて閉門御免許なりしこの衰微のあいだ松雲も病苦にしづみて死し打續て一二代も同派の僧住持したりといへども不埒なるものどもにて最早かの假屋も追年零落し佛體及び羅漢も雨漏かゝり荒はて日をおつて凌ぎがたかりし凡此年間元祿八年より八九年を経て同十四

五年のころにいたり本寺難波の鐵眼より何とぞこの寺建立し羅漢をも末代無障安置するやうにとて住持すへき僧を一派の下にて撰ひしところ象先和尚といふ僧其撰に當れりとてこの僧に命せしところ象先とくと了簡していかにもかの地に下向して彼堂建立すべし然らば十五年があいだ寺務をゆるさるべしとありければいかやうともその方の心次第たるべしとありければこれによつて江戸に下り彼寺に入て自分のうへは微細に質扑を行ひ弟子沙彌下部等出入のものを随分憐愍を加へことくくその真心を感じさせ至極從者和融しそれより江戸町中へ毎日勸化に出てその米錢を頼母しき町人にあづけ日々の勸行勸化に努々懈怠なくその年月凡二十年あまりを歴て享保十年中本堂建立成就して入佛供養せしめたりしかるに享保のするこの邊御放鷹の節大御所様この寺に入らせ給ひて本尊をはいせられ和尚の丹誠の功を感じ給ふ近臣本堂の後のかたへ廻り見る所に住僧居住するところは三十年餘以來始て假屋に立たるまゝの廢宅まことに乞食の小屋のごとくなるを見て感心しとくくその

こゝろざしの殊勝なるをつぶやくを大御所様被聞召甚だ御感心ましとく自分の事は露ほどもおもはずひとへに堂建立したる事無雙のものなりとてつゝに寺の隣地大名の下館として半島體にてありしを三千坪くだしおかれ境内に御休所まで造作せられたりこれによつて象先和尚なをくちからを得て奥深く構へまた一廉の大梵宇となしたり象先和尚ことくく建立おわりて元文のはじめのころかこの寺の奥のかたに隱居し一切諸人の出入を禁じいくほどなく遷化したりまことに天和寛永のあいだに南都大佛殿建立せし隆松院公慶法印とこの和尚その功同日の論たるべし象先は一人として大身の壇那なくいかに一つかみの米一枚の錢を得て建立せし辛苦公慶日本を經しにもこゝろざしは讓るまじき丹誠なり

事蹟合考卷の五終

南向茶話

或日例のごとく二三の友参りつとひ古今の談に
或人問て曰抑當御地を江戸と號し候事何れを指
して申候哉

答曰仰の如く近代當所名跡等を記し候書も數多相見
へ候得ども江戸の號之事慥ならず候愚が管見仕候に
山中氏被相記候中古治亂記十五卷江戸城草創之條下
其略に扇谷上杉修理太夫定政之老臣を太田備中守資
清入道道真と云武州都筑郡太田郷之地頭なり其嫡男
鶴千代丸と云成長之後太田源六資持と號す後に受領
して任備中守政資刺髮して道灌と稱す當御城を康正
二年に普請初め繩張して長祿元年四月迄僅兩年之内
巧匠の功成就しける都五山之僧萬里和尚古詩を引て
是地を褒めたる詩に云窓含西嶺千秋雪門繫東吳萬里
船又五山より被贈たる詩の内に江戸城高不可攀我公
豪氣早東關三州富士天邊雪快作青油幕下山と云々右
之詩の句にも江戸城と有て別號なししかれば道灌城
築の時に其地名に依つて直に名付たるべし既に鎌倉

將軍之時代より江戸といふ稱號の士あり此八平氏類
葉よりして武藏の士と稱すれば江戸と云地名其所有
べし愚案に江に望める意成べし抑當御城天正年中に
御入國以前今の雉子橋の外より北之方大沼にて此よ
り西之方もちの木坂下まで入江にてよりよし小川
町も寛永年中外廓無之以前は牛込よりの流れはどん
ど橋の向へ直ぐにもちの木坂の方へ流れ行又小石川
の流れは今の土手三崎稻荷の邊より一ツ橋の御堀の川
へ流れ行き候よしなり然れば唯今御城内古へより江
戸と名付所なるべし惣名となり候事は其頃近邊の根
城たるによりて也類を以て考るに攝州大坂も元は石
山城と云享祿五年本願寺證如上人所始築也御城内雁
木坂本は大坂と號する故に城を大坂と名付られて後
惣名となれりと云も此類なるべし右道灌もとより禪
法を尊敬しける故に城内に於て一字の庵室を建られ
旅僧のやどりとす其草庵の邊りに井を掘けるに土中
より吉祥と彫れる鐵印を掘出せりゆへに其庵を直に
吉祥庵と名付られけると承りつたへ候
又問曰其吉祥庵御入國以來いづれの地に移され
候哉

答曰吉祥庵の地は大道寺氏友山記せし落穂集には只
今の二之丸邊に相見へ候愚按に内櫻田御門を唯今俗
に桔梗の御門と呼び候へども古き御城の事を相記し
候書に吉祥門と記し有之候先年見及候其上右草庵は
旅僧招請の爲として建たる故にて今の内櫻田の邊に
て候はん歟扱吉祥庵は御入國以來小石川水道橋之北
の方へ被移吉祥寺と號す仍之古江戸繪圖には此橋を
吉祥寺橋と相記し候其後明曆年中又々大火災の時水
戸侯館元は竹橋御門之内より此地へ移され候に付吉
祥寺は又々今の駒込へ移り候由右由緒に付道灌城築
之刻都五山より贈り候詩文江亭記も此寺に相傳り右
に相記し候堀出したる鐵印も相傳り候由「江戸咄」と
申書にも江亭記を此寺にて一覽致し候由相見え申候
鎌倉志に荏柄天神之神室に江亭記有之候は子細有之
傳寫して相納め候事と存被候由緒承度儀に候右吉祥
寺の一件は吉祥寺に申傳へたる趣にて方丈之物語な
り

問曰唯今の田安の事如何御聞傳へも候哉
答曰唯今の田安御門之内外天正年中御入國の刻は皆
皆田畑民家にて候由其後右之民家どもを只今の牛込

寺町白銀町邊へ移され候其子孫子若年之頃までには
まゝ有之候て物語候なりしかれども此地面田安と申
候哉其儀不慥候予先年相州箱根早雲寺にて北條家の
古き分限帳を一覽仕候ひし其中にも田安の號見えす
上平川村下平川村計有之候得ば右之平川村之中にて
も候哉その以來田安御門之内は天樹院之御居館とな
り田安御門は天樹院の御附人より勤番致され候由其
子孫之仁物語なり今の扇の稻荷と申は天樹院の御座
のうちに御勸請之稻荷にて扇の稻荷と號し候ひける
となり又雉子橋御門内外も民家にて候處御入國以來
召上られ只今の牛込御徒町の邊へ被相移寛永年中小
日向田畑築候以後又々此地へ移され候由にて改代町
と號するなり

問曰田安平川之邊其説を得たり吹上と稱し候事
如何御聞傳の儀有之候哉
答曰吹上之事曾て見當り不申候然れども落穂集に御
入國御草創之儀委く相見え申候通實説たるべく候櫻
田邊一圓の江沼にて足入之地なる由櫻川とて川流も
有之由左候は、愚按此所江河に望める高き地なれば
吹上と號するなるべし駿河富士川邊吹上武州荒川邊

吹上いづれも川に望める地なり又小石川氷川明神南之向も舊名吹上と號するも小石川に望める地なり此所只今は俗に阿房殿町と號する所なり

問曰番町の名目一より六まで有之事由來も有之候哉

答曰此地に數代居住せし古老之物語に御入國之始歴下之士に此地を下され候刻六組に分て勤仕致されし故に一より六までの名目ありて前後入込候由五番町と申所は只今少計残り候は糎町の内へ入申候由なり又彼老人の物語に六番町のかたへ市谷御門より上る坂を三年坂と呼び候事寛永十三年外廓出來之刻新に開ける坂ゆへに云來候か是に付て思ふに牛込神樂坂より北へ築土へ出る小坂をも三年坂と號する同意なるべし京都東山清水觀音門より横に北へ下る坂をも三年坂と號するは清水は大同二年に草創同三年に此坂を開る故に云爾と舊記に載之と同日の語なるべし又糎町貝坂は元は芝青松寺の舊地にて此寺青松甲斐と云人の草創なる由此處當時玉虫氏の屋敷に其跡ありゆへに甲斐坂といふよし

問曰芝邊品川筋之儀に聞及も候はれ候事も候哉

承度候

答曰芝邊之事居住不仕候故聞傳へ稀に候道之事近頃東海子平維章と申仁之編集せし不問談と云る書に云江戸斯波を芝と云は誤なり足利家の管領に斯波氏あり(下文不相見)仍て考るに昔時斯波の居住せしにや品川之號或は古老之物語に元下無川と云へり子細は此所川岸に近く川下直に海に入るゆへなりと此説慥ならず存候近頃俳人齋藤徳元寛永五年冬京都より關東下向の紀行の内に云かの川此町の中に橋の懸れる川あり水上のなき川なればとて上無川と號すかむ川なるをかのかはとは申とかや(下略)今云神奈川宿の事なれば右の説是に似たり芝の内三田郷之儀風土記には在原郡の内に有之て御田郷或は箕多と相記す古代渡邊仕最綱三代とも此處に住居せられけるより此あたりに綱坂といふ所ありて松平肥後守下屋敷内に綱が出生之節産湯の井とて有之由及承候當處の八幡は上古より有之候哉風土記にも所祭應神天皇なりと記す承平兵亂に六孫王經基も此地へ府中より出張有之麻布一本松は其舊地なりと代々申傳へたり徑基主之府中御住居之地は只今六孫山徑基寺と申候よし

予彼地に不至尋問度候

問曰青山赤坂邊之儀如何承度候

答曰赤坂之號風土記にも在原郡に載之小六天神所祭大己貴與少彦名園韓なり號小六者以古呂故岡之名なりとあれば舊地たるべし愚考に赤坂之號赤土之地なれば稱するなるべし濃州赤坂も後に山ありて山の土赤き事朱のごとし三州赤坂も山中赤土の所なり青山の號不慥候或説に此地青山氏之屋敷有之ゆへ地名とすと云へり此青山之末に恩田と號する所あり恩田と稱號しける人に參會致し候其人之物語に先祖近江源氏佐々木の末流にて此地に居住して恩田を稱號し北條家へ數代仕へられしと云へば元は恩田なれども誤りて唱ふるなり又此邊より南の方笄橋之儀此地の古老物語に舊名此處鵜ヶ谷村と云其村の橋故に鵜ヶ谷橋など云へり

問曰四ッ谷之儀田舎にて民家の家數により三軒家四ッ谷など申候へば其例に以前民家少き時の號なるべしと存候左候は、谷之字誤りにて候はんか如何

答曰仰の通り我等にも左様に相心得居候處彼地に久

しく居住せし老人物語致され候は古來此地今の糎町六七町之内之處谷あり又今の鹽町の處も谷にて坂有り其處に民家一軒有して夫婦居住せし故に俗に夫婦坂と呼びしなり寛永十三年外廓出來之刻御堀揚土を以て東西兩谷埋め候ゆへ平地となり谷なしと云とも舊名残り鹽町の入口を坂口と小名に呼び候は此故なりと云此地東西南北とも谷有ゆへに四ッ谷と號する由此處末に忍町と號する處あり此南の方御先手組屋敷邊を忍原と號する事此處之仁物語に承候は此處御先手組先祖天正十八年御入國之刻駿府より罷越相州小田原之城番を被勤其後慶長五年より武州忍城之御城番相勤られ寛永十年忍城を松平伊豆守信綱に被下候に付御當處へ來此處に居住せし故に忍衆と呼び所名を忍原と號し候と也

問曰牛込小日向筋に御聞及も候哉

答曰此地は數年居住仕候ゆへ幼年より承傳候儀も有之候先牛込之名目は風土記に相見へ不申候へども舊き名と被存候凡て當國は往古曠野の地なれば駒込馬込(目黒邊)何れも牧の名にて込は和字にて多く集る意なり小日向の名菊岡沾涼之江戸砂子に其説出たり

右に申候小田原北條分限帳之内にも小日向彌三郎と申士あれば彼人の領地ゆへに呼び候となり沾涼は字藤右衛門と申候予も知人にて篤實なる老人にて候砂子編集は八年之間江戸中往來致し候處にて承合委く書記致候也然れ共傳説相違有之候由にて又々後編を相記す是によつて當府の地名小説委しければ予も彼書に有之候分は相記さず菊岡子之功大なりといふべし牛込御殿山と稱する地は今築土明神の後禪宗萬昌院と號する之地なり此寺は市谷長圓寺之塔中にて候處明歷年中火災に付て定火消役被仰付候刻御用地になり今の左内坂火消屋敷之地より此處へ移され候よし今に此處少斗の町家を御殿山と呼候なり勿論みぎ御殿山は寛永之比までは御鷹野の刻御假屋形有之候となり小日向邊その頃までは田畑にて候處安藤對馬守奉行致され此山を崩し築立候ゆへ今に築土と號す右に依り御殿の跡も狭り其所少々相見へ申候也扱又當處八幡之地は往古上杉管領時代之塞の跡にて其城主の弓矢を以て祭之と申傳ふ此儀は予が幼年之刻或古老之物語なり其刻幼年故委しくは承置かず遺恨なり且古神樂坂之脇若宮八幡も此宮より掌れりと云へ

り築戸明神は諸記に相見へ申候通往古平川村に有之其後半込御門之處へ遷坐ありて寛永年間外廓出來之刻今の處へ又々遷坐なり或古老之説に築戸元は次戸と書す往古は江戸明神とて御城内の鎮守たる由江と次と字形近きがゆへいつの頃よりか誤れりと云々予若年の頃は築戸明神之堂上方の筆にて額も有之候處近に頃築土と書改め候なり古老之説を予も相考へ候處に風土記武藏國豐島郡之内に江戸(或は荏土)大寶二年壬寅所祭素盞鳥尊なりと云々また治亂記十五卷江戸城築の條下に載之津久戸大明神を氷川と同體之由なれば素盞鳥尊なりしかれば據なきにあらず暫く相記て後哲を待つ而已

問曰寛永年間外廓出來以前にも市ヶ谷より小石川の方も川流有之候哉只今日白下より流れ候川筋を江戸川と名付られ候へども古來は枝川の由承り候左候は、大川筋も有之候か

答曰相尋之趣尤に候予も市ヶ谷邊に久々住居せし人に承り候へば御廓外無之以前も今五段長屋下通より小流有長慶寺谷之内大沼有之候て落合流れ之由此水筋にて田地の用水に仕田町之邊は皆々田地也唯今揚

場町と稱し候處元名は船河原と申候由仍てどんと橋は俗の名にて本名は船河原橋と云よし此に依て相考候に只今の長圓寺谷の内安藤氏屋敷後の邊沼の跡少し残りて候なり一説に右船河原は只今の大阪の下(一説に逢坂と云)あたりまでにて今に此所少計之町を船河原と呼び候也此邊其刻までは民家寺院まばらに有之候處外廓出來之刻民家は町家と成寺院は只今の牛込榎町邊へ移され寺院七ヶ寺にて候故に今に七軒寺町と呼び候由此地の寺院の舊説なり扱牛込御門市ヶ谷御門外形出來以後俗に市ヶ谷を櫻御門牛込を紅葉の御門と稱し候よし是はその處に有之候樹に依て號しけるか又は何ぞ子細も候はんか其段は承傳不申候

五郎義延は關東へ被預候に付此處に居住せられける義延は叙從四位任侍從ゆへ世に豊後之小侍從と稱しけるとなり慶長五年關ヶ原亂後に此地并常州筑波郡にて都合三千五百石之地を被下領地せられけるが無程て早世なりと云々右居住の地今の濟松寺東の方也といへり天神町と稱せる所へ太宰府之宮を移されその天神今ほどは高田馬場前へ又々遷座あり大橋長右衛門奉納三十六歌仙之繪馬今になほ存候なり組屋敷有之松は庭前之由なれば何様天神町之邊居館の跡たるべきか榎町も元は大木町と號する由或説に扇町なるよし故は太宰府天神の門前民屋を扇町と號する故に大友氏故郷之稱に依て名付られし共いふ宰府一覽の人に尋度事に候

問曰高田馬場邊は古戦之由承傳へ候源頼朝卿角田川の合戦勝利の後暫く此地に屯せしめ關東之勢を集められしとも云傳へ候如何承度事に候

答曰高田馬場合戦之儀今の禪英山寶泉寺之所にしへ新田家之陣所之由申傳へ候境内に今に旗立櫻とて有之候冑懸の梅とて只今の稻荷社の前の邊に有之候由先年枯て植つぎ候はぬ由に候同夏繁高之編輯せし

問曰御尋之通大友氏之姓名等予も其説を不承候處に近年其説を得たり大友左兵衛督義統文祿年中朝鮮征伐の意り有之て領國沒收し毛利家へ被預其後又改之常州佐竹義宣へ被預彼地にて卒せらる義統の嫡子宗

問曰右榎町之邊大友屋敷は大友氏族居住致され候よし其姓名等委しく相見不申候其上居館體ならす候御問傳も候哉

兵家茶話と申書に云後村上天皇七年新田家信濃宮を
供奉して武藏野の合戦ありし

君か爲代の爲何か惜からん

捨てかひある命なりせば

と宮の詠せさせ給ひしにや其陣所は今の武城の乾徳
山法泉寺の古跡ならん天野信景説按に法泉寺は高田
穴八幡の近隣なりと云々信濃宮は後醍醐帝第三之皇
子宗長親王なり禪英山寶泉寺成べし乾徳山法泉寺は
大窪之先き中野にて高田とは場違へり殊に右之通り
舊説にも申傳へ候得ば此所たるべし又寶泉寺舊説に
此寺内に富塚と云所ありて所之名も富塚村と云ける
よし今は戸塚村と號す上杉治部大輔朝興此寺を建ら
れ稻荷社を勧請せられける由疑らくは禪英の號は朝
興の追號かと被存候又右大將家御陣立之事御尋之趣
に予承傳へ候隅田川一戦後當國東之方は池沼多候へ
ば此地に御在陣もゆへ有之聞傳へ候牛込之内牛頭山
行元寺之觀音の緣起にも頼朝卿之御所持佛にて隅田
川一戦之後此地に安置なされ給ふと申傳へたり
問曰穴八幡の地も古來より古戰場之内にて候哉
答曰穴八幡社勧請の事に付て承傳へ候儀有之候此地

は元早稻田之内に中島と小名に呼び候處に青柳津六
兵衛と申富有農民あり元は北條家へ仕へける士とい
ふ此者の持傳へたる地にて松樹生繁りたる山林にて
一木の松暗夜には折々光りありければ其松を光松と
名付し由然るに寛永年中秋之比的場を築き候とて一
ツの穴を得たり深き事七八間穴の内暗くして人々怪
しみて入らず漸く松明を點して入て見れば金像佛一
體鐘鉦一を得たり鐘鉦には文字彫て有之し由又白き
事雪の如くなるもの中に有しは沈痾の病に用るに効
あり人々乞求し由右青柳津が末の者がたりなり其
比殿有院様御誕生に付則此社を尊敬被爲成ける由又
説には御抱瘡之刻御宿願之御喜に此社を造營せられ
院主等も被仰付候よしさるによつて其刻大樹御近臣
各營作に預る裏門は内藤豊前守普賢堂は松平左近將
監御手水垣澤山兵部少輔なりと云へり又此地の古老
の説には此八幡の邊より南尾州御屋敷大窪まで近郷
秣場にて候由昌連と申富有農民ありて百八の塚を築
候其塚此八幡の地より相續き大窪まで有之候ひしと
云右昌連と申人傳記不相知候其塚は佛供養の爲に築
けると也今に尾州の御屋敷内には相残り候哉承り度

事に候按に右之塚は陣所遠見の爲に築候哉左候は
此八幡の地も陣所内と存候

問曰高田之末より向へわたり候橋を姿見橋とも

又面影之橋とも申候由説有之候やうに承り傳へ
候如何

答曰予も此所に居住せし古老の記し置たる書を見侍
りしに其略に曰明應年中之比此里に和田鞆負佐守祐
といふ男子二人守護祐親と云女一人於戸姫といふ容
色勝たる故に婚禮を求め人多けれ共免さず父守祐
事ありて他國にまかりし比近き邊に關といへる者徒
を催して彼家を襲ふ俄の事にて男子兄弟賊を討ける
其隙に關奥へ入於戸姫を奪ひ取逃去しに板橋に至り
姫絶入りて人心あらざれば彼所に打捨て關は逃去ぬ
此板橋に杉山三郎左衛門と云へる貧しき夫婦老人あ
り耕作の爲に此野へ出此女を伴ひ家に至り養育せり
程経て後此邊小川左衛門次郎義治といふ士杉山に嫁
を求る事再三なりければ彼小川を婚せしとなり然る
に村上三郎武範といふ士彼小川と親しく交りける
に妻女を奪はんとばかり小川が宅へ行對面し透間
を見て小川を差殺しける於戸姫長刀を以て村山と相

戦ひ逃んとするを村山が右の足をなぎければ從者お
り合て村山を討留む妻女悲みにたえず髪切て夜に紛
れ家を出て去ぬ此川邊に至りて
變りぬる姿見よとや行水に
うつす鏡の影に恨し
と詠じけり又月の出るを見て
限りあれば月も今宵は出にけり

昨日みし人の今はなき世に
其後此河に身を投死るよし右の詠歌の儀に付て姿見
橋と名付けると云々按るに民間之里諺にて右の記の
姓名等曾て他書に相見へす信用しがたしといへども
暫く其説を載する而已高田馬場に諏訪の社あり別當
玄國寺といふ此寺僧之説に云く俵の橋は往古在原業
平朝臣東國へ下向の比此橋にて詠歌あり依て名付る
よし其詠は予忘れたり此玄國寺往古大寺にて三世之
佛三千佛を安置しける由兵亂之比に多く紛失して今
僅に残ると云右の詠歌も所の舊地故に此寺に残りけ
るよしなり右兩説何れかはならん

問雜司ヶ谷舊地之由申傳へ候如何
答曰法明寺は舊地にて候由紀州の醫師何某の古紀行

に僧司谷と記せり判本にて候其書の名は忘れ候然れば此處は古へ法明寺より領地して司どりけるにや鬼子母神は中古より勸請せしよしにて候古老の説に鬼子母神の神像は只今護國寺より鬼子母神へ參り候中程道より左之方畑の中にて農民耕作の序に掘出し只今の別當大行院へ納めけるゆへ只今の堂之東鳥居あたりに小堂を建て安置しける後半込忠左衛門二三間ほどなる草堂を建立せられ其棟札に姓名を記され候元祿の始の比に只今の所へ移し堂を建立しけるよし右に付て只今に右掘出したる地にて大行院より僧をつかはし讀經し火を焼候よしなり又此近邊に柳下井にセイトウといふ小名あり字知れずたづね聞度事に候又法明寺の内の鐘の下廻りに升斗に十露盤を鑄付たり古く相見へ候何様所謂有之鐘に候哉承り度候

問曰小石川舊名之由舊記にても有之候哉

答曰小石川之名目舊記にも見當り不申候宗祇之廻國記に名にしあふ小石川を渡ると云々然れども廻國記は實書ならぬ様に被存候宗祇にて無之やうに沙汰有之候其外は所見なし惣名とする地廣く候南は小石川御門通りより北は大塚の大道までは小石川と號す牛

込も上水之通牛天神下までは小石川之内なり此處今金杉と稱する町やあり舊名此邊金曾木村といふ處にて古河公方の家臣豊前山城守と申仁居住の所なる由其家傳にあり宅地の處は今の新坂(俗に今井坂と云)其上なるよし申傳ふ金剛寺坂之下は舊名小石川鷹匠町と呼びし處なり明曆年中出火は此處より起れりと承り候又上水道橋に道祖神の小社あり牛天神之別當龍門寺の持なり建久年中之石碑ありて此寺に納まりと云へば此小社は舊古よりの神社と被存候其碑を尋一覽仕度儀に候

問曰丸山巢鴨之名目如何承度候

答曰丸山來由承り不傳候此處梨木坂はいにしへ大木之梨木ありしよし戸田茂睡老も此地に居住ゆへ梨本と稱せられけるとなり菊坂はむかし菊作りし畑なりといふあぶみ坂其形鏡の形に似たるゆへなりと申傳へたり富坂の儀元は齋坂なり其子細は元祿之比命有て齋鳥を捕へ候其役有之所々にて捕へて此處の坂中に小屋を懸け多く養ひ置て後遠國へ被遣しとなり其所世話に齋坂と呼び候よし後に富坂に改むるよし落穂集に載て富澤町之儀と同じと被存候なり且亦極樂

に駿河臺土手に有之候稻荷を太田稻荷と名付候

太田氏の塞跡にても候歟

答曰御尋の通り本郷の名目北條分限帳にも載之又治亂記にも出候へ共湯島は風土記に載之候得ば定て湯島の本郷にて有之べく候其處入込分ちがたし太田稻荷之儀太田之塞之儀所見なし但治亂記には太田新六本郷の宅地を立去り密に武州岩槻へ落行けるとあれば此稻荷の邊も太田宅に候歟

問曰上野下谷邊忍ぶ岡等に御聞及も候歟

答曰上野の號所見なし砂子にも其説あり併古老の説に此地昔より上野村と呼びし所なりとも云下谷は風土記にも下谷の岡と出たり左候へば舊名か忍ぶの岡は和歌名所にて其名高し本は忍びの岡と詠るよし不忍の池は南之方長井庄と申傳ふ由緒記に有之齋藤別當實盛古蹟の跡只今は湯島天神の下藤枝氏之宅地の裏にあり候由近比此土地移轉に付て紛失し候由可惜事なり長者町之儀諸記に載之此處の脇一柳氏の宅地に池ありて長者が池と呼び來れり此處は其事跡ならん

問曰淺草邊の儀承りたく候

水橋戸町東の方に鶴場と申小名あり或古老之物語に元祿年中此處の田畑へ鶴飛來り數日留り居申候事度なり其鶴の足に金の小札有頼朝卿之被放候鶴之由にて候此故に處之民に被仰付鶴の留り居候内は番小屋をかけ晝夜守り候べき由故に今に至り鶴場と呼び候由依之考るに右大將家御治世より五百有餘年に及び候得ば鶴齡千歳も空ならざるにや又巢鴨の號の事風土記に足立郡之内に見へ候は舊地にて候哉併北條家の分限帳には相見へ不申候又大塚之事諸説有之候へ共愚按に王塚か其故は武州比企郡にも同大塚村といふあり由來に鎌倉將軍守邦親王亂を去りて此地にて逝去し塚有る故に大塚と稱する由此類ひなるべし此大塚より巢鴨へ至る田間小石川に懸る小橋を猫又ばしと俗に申傳ふ此地農民の説に云昔は今より流れ細くして田畑の通路道にて木ノ根ッ子を以て橋に渡し候故之名なりと云り土民にて木の根本を根ッ子と唱ふ

(尊按橋戸町橋より南の方東側町屋の裏を今も御鶴場と云)

問曰本郷舊名に候哉但湯島の本郷にて候や或説

答曰淺草の名舊記にも相見へ候得共其由來しらす茅町瓦町民之説昔は瓦町にて瓦を造り候茅町は茅の賣買を成しけると云へり八丁堀之茅場町往古茅商賣之所なり其後明曆年中以後此處并兩國橋向へ被移其後元祿の始比に只今の本庄四ツ目へ移され候由なり是は茅問屋敷代賣買候者の物語也はし場邊の儀此地の古老物語にいにしへ此所に橋あり故に橋場と號しけると云委しく其儀尋ね候處に只今隅田川渡舟有之候處より川上一丁ほどに古の橋杭残り折節往來の船筏にかゝり候よしなり神明社あり石濱神明と云ふ古來の名は石濱といふよし右の橋何比に候哉難計事に候又説に此所往古砂尾修理太夫といふ人あり太田道灌と合戦あり石濱の合戦と云ひよし砂尾建立せし寺あり天台宗にて砂尾山不動院橋場寺と號す小院なり又此地法源寺のこと砂子に委く記せり予も彼寺に至り寺僧に見へ尋ね候ひしに答曰實盛之石碑此寺に築候事は往古其時代の住持實盛の一族なりよし外に青き生石之碑あり文字見分がたし漸々見るに四辻家の姓名三人之官位實名あれども儘に知れず勿論其由來も知れがたし又古老の説に橋場下宿の小溝を駒

洗川と呼ぶ鎌倉右大將家隅田川合戦の刻馬を洗はれし所のよし其合戦の首塚は只今總泉寺後畑の中にあるよし俗に誤りて蛇塚と呼び候よしなり葵惠北國記行に此地に暫く止宿せられ候事跡見へ候へ共今據とするに足る所なし

問曰本庄とも本所とも相記し候いづれが正字ならん梅若の來由に付て舊地と被存候如何御聞つたへも候哉

答曰本庄は舊名なるよし武州熊谷の先にも同名あり元祿年中有故て本所と相改め候と云ふ梅若跡之儀近年尾州人縁起相記し其記には上古圓融院の御治世の事跡とすといへども愚按に足利家之時代亂治之比の事跡なるべし近比猿樂傳とて謠の來由并四坐太夫家傳を相記し候事を見侍りし其内に關東御入國之後武藏國之謠初鮮く候に付梅若事跡隅田川の謠を作らせらる其比に夫婦の非人ありて梅若の有様を物真似して歩行けるとあれば久しき事とは相見へず文明の頃の五山僧横川叟景三の詩集にも梅若童子悼といへる詩あれば其比の事にや將又當所業平天神の事諸記に其説多し愚按に伊勢物語に寄りて業平の神を祀れる

地成るべし塚の名にかゝはるべからず武州川越の城内にも業平の神を祀れりといふこれも入間の里に居住のゆへ成るべし彼地の人々物語に川越の神像は朱衣なるよし是の處の神像も委しく尋ね度事に候

問曰王子村の脇に谷村と申處ありて畑道の間を鎌倉海道と申傳へ候古へ當國の往來筋之由申候如何承り度候

答曰仰の通りに予も承り候此處は谷村と呼び申候に付畑道も鎌倉海道と唱へ候哉と被存候所に古老の説に當國東の方池沼多くして足入之地成故に往古の道筋は今の青山百人町にて西之方原宿と申處を経て千駄ヶ谷八幡の前(此地今に處の小名に鎌倉道と呼ぶ)大窪へ過ぎ高田馬場より雜司ヶ谷法明寺脇通り護國寺後通り只今の中仙道の道を横切谷村瀧野川村を経て豊島村より千住の方へ古の道筋なりといへり右物語を按るに其間之道筋三ヶ所まで舊名残り候へば其據なきにあらず只今青山百人町より直に相州小田原への往來道を俗に中道と呼び東海道より二里近く日本橋より相州小田原まで十八里のよし也又豊島村に往古豊島左衛門と云士ありと六阿彌陀緣記にも見へ

たり治亂記にも豊島左衛門と申士上杉管領家へ仕へ近隣之合戦ありし事見へたり按ずるに此豊島村は元此郡之府なるべし又近所堀内村に梶原塚あり予若年之刻此處を過けるに杉の木立ありて古き石碑ありし也後年數寄者密に盜たりける故に村民又印の石碑を建改めける又々紛失しける由今は荒はて、田畑の中に少々土地残り按に此梶原は鎌倉時代の儀にあるべからず中古太田の類梶原業濃守なるか或は北條分限帳にも梶原日向守と云人見へたり此等一族たるべし此地の古老の物語に此塚之處は昔寺あり候處に川へ土地欠入候に付地狭り寺は敗壞仕候由也且又此所元木村の内に熊野權現の社あり社司は鈴木氏なり舊説にいふ此神社紀州より相移され候刻神職も紀州より來れる末葉なる由今の王子權現と同傳に相移されたるよしなり此村の内に寺あり其寺に古く傳れる木像あり束帶の形なりよし昔此處の領主にて其姓名等委しく記し傳り候所に彼寺自火ありて悉く焼失しける由可惜事右に付て按るに王子は右の熊野と同社にして後に別當と神職と相別れ候とはんじられ候

問曰武藏國俗に二十四郡と申候へども只今は十二郡に過ず此儀御聞及も候哉

答曰仰の通りに候當國二十二郡ならで無之候を二十四郡と呼び候は二十餘郡之儀を二十四郡と誤れりと被存候既に葛西郡さへ中古は誤て下總國とせる所に近比武州に相定候へば二十四郡の事不慥有之候へども餘は省之即高麗郡の名目古書にも上古高麗人五百人歸化せし故一人を武藏野に住せしめらる故に高麗と郡を名づく由此郡人の物語に所之鎮守高麗の神と號す彼國より持來れる所の兵器を以て神寶とするよし承り及び候武藏鏡の事伊勢物語の歌にも相見へ候承りつたへ候處上古鏡の製は兩方へ相續き申革の鏡の製に似たり當國より只今相用ひ候鏡を製し出せり其故に歌にも片おもひなる意ありと云ふ其鏡製作の工人代々傳はり近代尙を製作せし早乙女と申たるも此末葉にて候よし近き比までも千住邊には其末葉有之候と古老の物語なり彼地案内者に委しく尋ね極めたき事に被存候

茅屋向陽故名亭

寛延四年辛未二月初午日

此一帖瀨名真雄所藏也松本雁奴家(山田屋半右衛門住所元飯田町)借山口生筆令書寫遂一校畢
寛政二年庚戌仲冬三日

杏花園

南向茶話終

南向茶話追考

往年當府古跡の事を見聞の儘に記し侍りぬ年を経て右しるしぬる事跡にもれたるを考へ委しからざるを尋ね略せるを増して追考をなす先篇に合せて見給はん事を希ふのみ

○萬里和尚之詩

杜詩絶句に有之杜子美蜀成郡草堂作四首の内
兩箇黃鸝鳴翠柳一行白鷺上青天窓含西嶺千秋雪門泊東吳萬里船

○江亭記

相州鎌倉在柄天神寶物鎌倉志に所記文如左
但江亭記文別卷にのす

右江亭記詩之作者補庵景三撰セシ百人一首ニ載之太田左金吾へ贈ル詩文如左

凡古之人無老無少文武禮樂之暇構休息之居樂各自得之道于今源太夫公卿遊觀爲騷人墨客之會矧盡臺之上山景象遊目无隙不如九華山有仙洞前臺後臺相去及數百步松風度曲无然之有調茶烟輕颺彰山舍隱常陽之羊

如石臥而似彼仙駕華山落雁傳信於蘆花淺水邊嗚呼春花客秋實染心腑於詩歌者可不品評矣故側儲茶庵作四時之會所謂茶瑞草魁又云相知不在于盃酒一盞之清茶亦醉人焉高用常易鳳嶺之產聊鐘此產吹鳳嶺之二字依掛一首云々
彌重仙苗日月長近秋爽氣一襟涼綠茅曉酒金莖露天下看從鳳嶺香

又

悼道灌生涯三年忌之時

横川叟景三

東遊雖遠任君招冤血無瑞酒九宵借枕三年哉夢見風吹不破却芭蕉

○攝州大坂城舊名石山

三好記享祿五年居山科之本願寺證如上人を頼ませ給へば上人同心あり攝州の石山へ下向あり下略天文二年然るに堺には本願寺門徒衆上人初めこもりけるを二十九日細川晴元の責けるを門徒衆もてづよき合戦しけれども不叶して堺を落ち石山に引籠る同年五月五日より石山の城を責らる、城は攝州第一の名城なりと下畧

○小石川安房殿町といふ此所切支丹御用屋敷へ勤番

の與力同心居住所なり舊名は吹上といひし由傳云ふ
寛永年中北條安房守切支丹改之儀被仰付候に付與力
同心支配被致候に付安房守組屋敷小名に呼び來りし
よしなり

○三年坂の號虎の御門の内(舊名虎口御門)山王へ至
り候處今俗にさゝえ尻と申處の小坂をも三年坂と呼
び候も先書に見へたる道ならん

○芝の稱號の事彼地の古老云芝といふは凡此海邊の
惣名を芝浦と云子細は海岸近き處に木小枝をならべ
置きて海苔懸り候を取る木の小枝を俗に芝といふ故
に此浦所々に右のごとく海苔を取候故總名を芝浦と
呼び來ると云ふ

○府中六孫王山徑基寺の事近年予も六處明神へ參詣
の刻相尋ね候處に明神の向に神事の鎗矢馬の馬場あ
り其側に淨土宗にて稱名寺と云寺あり山號を徑基山
と號す傳へ云此處當國任之内其居住し給ひし舊地な
りし元は正明寺と號し候由なり

○箒橋の事或古老の物語に此舊名は國府方村と云ふ
によりて國府方橋といふよしなり
○大友の松大友家の傳説に云宗五郎義延旅館は今の

濟松寺の所にて大友やしきと號し大なる松ありける
後に寺となり蔭涼山濟松寺と號せられけるも此故と
云且今組屋敷の内の松は大友の家は兩人從ひ來たる
吉良傳左衛門深栖七左衛門なり右吉良傳左衛門營作
せる數寄屋の樹なり傳左衛門は關ヶ原一亂に義統へ
使に罷越て終に西國に止る又深栖七左衛門は義延へ
隨身して主君早世の後に子孫酒井讚岐守忠勝に寄食
して末葉今にかの家があり又此近處當時御持組屋敷
の内稻荷も勸請は大友のせられしよしにて元は大友
のいなりと號しける由也

○梶原堀内村梶原塚の事此地の名主に名兵衛と申者
物語のよしにて梶原塚は古來寺にてシンセツ寺と云
寺ありけるが川へ缺いりて地處狭りて没しぬ後に寺
號は他へ譲りて今は谷中邊に有之候由也

○もちの木坂今尋るに此坂の上中程青山七右衛門屋
敷裏にもちの大木あり凡古小川町邊よりも見ゆる也
依て云

○諏訪大明神別當龍池山玄國寺といふなり近年開帳
あり其刻略縁記如左當諏訪大明神を何れの時よりこ
の地に鎮座し給ふと云ふ事をしらす然るに人王五十

四代仁明天皇の御宇淳和年中在原業平卿當國流遊の
時夫妻道を失ひ一夜此森に谷を隔て、宿し終夜妻は
夫を思ひ夫は妻を戀かなしみ餘りに神力を祈りて一
首を詠す歌に云

あすはかたこゝろうつしの宮居かな

そのねきことをきくやかみかき

と心にふかく詠す時に感應のふしぎにや夢のごとく
夫婦まぐらをならべて愁の思ひをとくしるしより以
來當山に思の森戀のもりといふ事の祕書の靈地なり
爰に人王八十二代後鳥羽院の御宇文治五年の春源賴
朝公逆徒退治の爲に奥州へ發向の御幸當山御道筋に
て御社參あり惡徒退治の御願をなしやがて敵をした
がへ其後社頭御造營あり又近比人皇百九代後水尾院
御感ありて今の御神體を御寄附あり是只神德奇瑞の
威光ならんと云々武州江戸大久保諏訪別當龍池山玄
國寺右之刻字も參詣神拜神影業平像も御寄附のよし
にて新しく見ゆる三千佛の像の残れるなりとて像形あ
り境内に思の森戀の森と川を隔て、杉大木二本あり
村老の説に龍池山と號する事古は大寺にて境内廣く
南の方唯今尾州豊山屋敷内より流れ寺内へ入り北の

方土屋氏の屋敷迄一つゞきにて大きな池あるゆへ
龍池山と號する由今に寺内に小川の流あり又姿見の
橋北に樂師堂あり別當は眞言宗にて大鏡山南龍院と
いふ舊記に云此寺の前昔は大きな池あり鏡が池と
いふ故に則此寺の山號を大鏡と號しけると云ふ鏡が
池の名によりはしを姿見とは名付候よしなり

○僧司谷號紀州醫師立野春節著述

二蒙集 鎌倉口號と江府雜詠と合て二蒙集と號

寛文五己巳冬十一月梓行

江城之西北に村有曰僧司谷(下略)

○鬼子母神勸請の一説あり
只今大塚より下坂橋へ行道巢鴨本むらといふ處道よ
り左側に眞言古義瑠璃山福藏寺と云ふ寺ありて鬼子
母神の社ありて村民信仰せり然るに此寺の舊説に盜
ありて此寺へしのび入鬼子母神の像并に雜物盜取り
只今の尊像出現と申處の息中にて雜物を取分像をば
此處に捨て去ぬる故村民重右衛門喜右衛門善右衛門
と云ふ三人申談じ法明寺の寺内東陽坊へ持參しける
となり東陽坊は今大行院と改め候よしなり又境内に
千體佛堂あり其堂に相記如左

△此御堂は嵯峨天皇御宇飛驒工建し堂なり弘仁九戊戌年當山の住僧白源上人祖師日蓮を尊敬し宗を弘め高祖の尊像を此寺に安置し奉るなり又升秤曲尺有之鐘の銘に曰

寛永廿二甲申十二月武州豊島郡雜司谷威光山法明寺十一世遵成院日延雖鑄之及破損今亦廿四世本量院日達代新奉鑄之者也于時享保十七壬子歲十一月吉日隨順院法圓日悟居士爲菩提

俗名水野頼母源信久

江戶神田鍋町鑄物師太田駿河守

久兵衛 藤原 正義

(覃按瑠璃山福藏寺巢鴨本村に有十羅刹女の宮あり大なる銀杏の木二本あり石の鳥居あり鬼子母神を奪取て十羅刹女をのこせしなるべし)

○牛込上水道端道祖神之石碑建久年中にはあらず牛天神別當天台宗泉松山龍門寺に青き板石に勸請の碑とてあり左の如し

道

明徳二年十二月十九日

(考に明徳二年辛未より今明和二乙酉年に至り

凡三百七十五年)

〇〇

右の脇に道の一字左の脇に二字程の跡あり消て字正しからず又天神勸請の石碑あり銘に

延文六年辛丑二月日

左右に梵字三字あり

考に延文六年辛丑改康正元より今明和二年乙酉に至り凡四百五十八年天神鎮座舊説此邊往古は入江にて右大將頼朝卿此所に御船を寄せらる御夢想のありて勸請ありと云ふ其刻御腰を懸られしと云ふ石は裏門の外通り坂下(水野藤次郎門前)牛石と稱し有り古社は是より東のかたにあり神木松一株あり船繋松と稱しけるよし右御船を寄せられ候故のよし當時水戸侯の館になりし後に右の舊社の跡には稻荷の社を祭られしよしに候且此社裏門の外坂を網干坂と呼びしも入江の節の舊名のよし此處諏訪町諏訪社も此寺の兼帯なり傳云中古此寺の住持信州諏訪の産にて夢想のことありて此に勸請しける由小日向上水道道祖神の建久年中の石碑相尋ぬるに今は無之候

○大塚の事此處安藤對馬守屋敷東の方森川小左衛門

屋敷内に塚有之古の大塚なりと申つたへたり

○本所中の郷業平天神近年開扉あり候刻予も詣て拜し奉る黒衣にして朱衣にあらず尋常菅神の尊像の如く容貌壯年の御影なり略縁記に云元慶年中在五中將歌枕たづね給はんと此東路に下り給ひ武藏國入間郡三芳野の里に住所求めんとて五百崎島に舟遣遙し御歌に

眞土山五百崎島に舟よせて

いさこと、はん汐のたえまを

別當元は在泉寺と號しけるが今南龍院と改む又業平朝臣のかり住なりし故里人ども中將郷といひしを里諺に誤て中の郷といひならはしけるとぞ古老の村夫かたり傳ふ

○豊島村熊野權現の事

當時は紀州大明神と稱し當村の鎮守にて神主は鈴木伊賀守と云扱此村に清光寺と云眞言寺あり寺僧の云むかし豊島清光の建立せしによりて清光寺と號するよし元は豊島代々菩提寺にて元祖康家清光の衣冠像もありしに先年自火ありて焼失しけるよし清光の塚の松とて大木の松一株ありて土民豊島の大松と稱す

るなり只今權現の社左の方に康家の社清光の社とて兩末社あり又此村の庄屋大原與兵衛と云本は荒井氏にて先祖は紀州の産にて豊島氏の家臣なりと申つたふ考るに康家清光兩人何れの比の人にや東鑑治承四年庚子十月二日辛巳武衛相乗に常胤廣常等也舟揖濟大井隅田兩川精兵及三萬騎赴武藏國豊島權頭清光葛西三郎清重前に參上す(下略)とあり若此清光か

○醫王山清光寺(眞言古義)沼田村常光寺末(六あみだ)二番目

○橋場石濱神明は古來より勸請なり此邊田地の中に昔の首塚を誤りて蛇塚とて残りありけるを神明の社司支配しけるが近き比辨才天勸請せしとなり

○武州石濱千葉家の考
鎌倉大草紙云尊氏の御時千葉家二方に分れ宮方將軍方とありしが宮方は九州へ下り其後終に下總へ渡り給はず關東一統にてありけるが今度馬加成氏公と一味して原越後守胤房同筑後守胤茂(何れも千葉の近親なり)是を主として千葉へ移り千葉の跡を繼げる其後原は小金の城に居住す上杉より今度胤直と(千葉介入道常陽の子也)一所に中務入道了心の子息實

胤貞胤を取立下總の國市川の城に楯籠て千葉又二流となる同七月二十六日改元ありて年號を康正元丁亥年と改む爰に其比公方の近臣東下野守常縁といふ人あり是は昔の常胤の六男東六郎大夫胤頼の嫡流なり總州本庄を知行しながら代々公方の近臣歌人にて在京しけるが今度千葉家兩流になりて總州大に亂れければ急ぎ罷下り一家の輩を催し馬加陸奥を令退治實胤を千葉へ移し可申由御下知を蒙り御教書を帶し下向す(中略)康正二年正月十九日終に城を(總州市川なり)攻落し實胤は(新助と稱す)武州石濱へ落行自胤は(次郎と稱す)武州赤塚へ移る

私云兩人は中務入道了心が息千葉介入道常瑞が事なり太平記に有之新田義貞ともにも北國へ下りし千葉介實胤が子胤貞より五代の孫なり又千葉介孝胤は先年父陸奥守入道常輝を相伴ひ本書に據るに此陸奥守入道常輝は故千葉介次男にて馬加に居住せし故馬加と稱す故常直兄弟に腹きらせ成氏へ奉公人にて成氏より千葉一跡を賜りけるが其胤直の一跡として家胤千葉介に任じ上杉より下總へ差遣すといへども成氏より孝胤をひいきにて千葉へ居られける間實胤は千葉へ入部不叶して武州石濱葛西邊を知行して時を待て居たりしが世の中を述懐して遁世して濃州に上りて閑居す此兄の貞胤を上杉より取立實胤の跡を賜り千葉介に任じ武州の千葉と稱す

△東亂記二卷目に云總州關宿城攻の條に此城攻の時武州石濱の城に千葉次郎討死(下總千葉の庶流故有て武州に住す)首をば關宿衆菊間圖書取其跡目男子なくして北條常陸介氏繁の三男を養子にして千葉次郎と號すと云々(下略)

本書茶話或人へ見せ侍るに右の如くの舊説を記しおくらる

○本郷御弓町元和の比御城より鬼門に當る故に御弓組六組を此所に置かれ毎日的場にて弓を射せしむ其後寛永年中鬼門に東叡山御建立有て此弓組他所へ移させらる故に御弓町と稱すよし

○小石川鶴場元祿の初常憲院様上野御佛參之時(私考に小石川御殿へ御成の刻ならん上野へ御通行の道筋ならず)鶴一羽御駕籠の側へ舞來たる是を取らせられて目出度嘉瑞なりとて放し飼に被仰付此鶴早稻

田邊と此鶴場に常に遊び居たり毎日見分として御徒目付をつかはさる今日は早稲田に罷在今日は小石川に罷在候と日々見分して申上けるが多くは此鶴小石川の鶴場に居候故此處を鶴場といふ御他界以後は此鶴も何方ともなく飛さり候よし右見分に罷出候御徒目付の子物語也

私考先編の鶴の札等の儀鎌倉の舊記に相見へ申候は古老の物語有りもし相違にて候歟私に承り違ひに候歟是説是ならん

○大塚太田道灌相圖の爲に所々に狼烟を上る此塚ものろしを揚る爲めに築たる塚なるよし

私考に朋和二年春此處類焼により塚を堀穿ち平地となす節塚内より石出る文字彫刻あり此塚は同處日蓮宗法傳寺境内なりし故此石悉く法傳寺へ遣し候よし追て右の石に彫刻文字等可相記候

此處浪切不動は御入國以前には只今安藤屋敷裏の方に池あり雨天ならんと欲する時は霧立て又すがもの方よりも霧立ちこむ此所にて雙方の霧ならび合せる故に竝霧と小名に申習はし候故今波切と稱するよし此處の古老の物語なり

○牛込榎町古老云昔は大木の榎有依て號する由是木は古來鎌倉海道の由申傳ふ

○姿見橋大猷公此邊御應野の節御應をれけるを此橋の邊までは御應の姿を見ける故御應匠やうくしたひ來たり御應を得たり御祝にて以後此橋を姿見と申べしこの上意のよし早稲田の古老の物語なり

右五處の説近藤氏

右條の内榎町鎌倉街道の説只今に酒井家屋敷の内にも古老ありて右の街道と申つたふ又屋敷の處御先手組屋敷牛込寺町より二ツ目の横町に小坂あり組やしきへの入口なり此坂を昔は瀧の坂と稱し此坂より町へ處々田地を越服部坂への街道ありと申傳へ候當時此坂より見申候得ば服部坂は正面に相當り見へ候此説も故ある歟

○山吹の里の舊地は昔時太田道灌の雨具を乞はれしとき賤女の古歌を引て辭しけるときの所なり高田邊落合の内にあるよし所の小名に山吹と呼び候所ありと承りしゆへ先年所の者に承り候得共耽と不知候然るに或人の説に只今高田馬場の末より姿見橋へ參候處に百姓家有之候處也と云又或人の説に古蟹川と云

ふ川あり當時穴八幡宮前より早稻田村裏通りを流るる小川なりと云只今は古川と名に呼び候川筋なり前編に記せる鎌倉街道舊説により只今大久保百人組の木戸より西の方に大木の榎あり此木古街道の節の一里塚なりと處に申つたへ候よし

○谷中の三浦坂の上日長山鎮玄寺と云ふ寺身延山三十三世日享上人此寺に退隱す上人自裁る處の櫻樹寶曆三十酉年十一月二十二日三十三回忌之刻花咲今に至り例年花開故に享師櫻と稱す

○白鳥の池當時江戸川中の橋の下の流の處は往古は大なる池にて白鳥の池と號す埋れて其餘池南の方久永氏の宅地にのこれるよし

○目白の稱或記に此處の上下水の橋を駒塚橋と稱す只今水神の宮として氷川明神を祀る處に右は駒塚として塚あり傳に云古此處より白色の名馬出るよし則其塚有と或は右大將家の時の事なりともいふ右に依て所を目白に移しけるとかや

○市谷八幡舊地市谷古き書には市買に作る市谷御門の内當時大番所の北の方向角山木氏のやしきの隅に

大木の榎あり此所元宮殿の跡なり寛永年中遷座の由今に至り此榎を神木と稱し敬ふのよしなり

○加藤氏敬豐本所邊遊行雨のやとりと云書に

○石原濱屋敷神明社釋迦大像の所古來の本社の跡のよし

○中の郷牛島の内上宮太子寶珠山意輪寺

○法恩寺始は本住院と云ふ太田大和守資高亡父太田六郎左衛門資康法名は法恩齋日忠菩提のために武州三田村の内を此寺に寄附其時改めて法恩寺と號す此寺は平河にあり平河より谷中へ移り元祿の始當寺へうつるよし

○牛田藥師堂(此邊古の關屋の里のよし)古法眼が畫虎の水を呑みたる繪馬あり角田川邊小屋野村こやの池

本所宰府天満宮略記
正保三年丙戌筑紫太宰府社職菅原善升苗裔大鳥居信祜或夜の靈夢に
十立て榮ふる森の若枝かな
といふ發句を得て宰府に有之處飛梅をもつて新に尊像を刻奉る其後當地に下り寛文辛丑年台命有て當所

方一里の地を新に開きける節時之奉行横山氏山崎氏へ願て同二千寅年社地を給る同三癸卯年神殿新營新宮反り橋心の池宰府に順此年八月祭禮神樂の儀式は太宰府の式に則て本所の地を巡行す同十一辛亥夏信祐上京七月十八日新院上皇宮へ參内御簾近く縁起をよむ叙感ありて官女出羽局に勅して御衣を下し給ふ同月二十五日後水尾法皇より尊號の宸筆を賜ふ延寶五丁巳年二月十二日幕下御鷹狩之序に入御風景上覽御入興あり享保三丁酉年五月十一日幕下入御同五庚子年十一月五日御成御殿造營成就

神寶 天國之太刀
寶曆二壬申三月開帳之以後再興に付て也始祖信祐二代信政三代信欽四代信隆

相州箱根金陽山早雲寺什物
北條家分限帳之内に江戸廻りと稱する分

- 南 上平川 下平川 櫻田
- 國府方 阿左布 比々谷
- 大根原 目黒本村 下澁谷
- 三田 新倉 銀三田之郷
- 品川南北 馬込 世田ヶ谷

川崎	局澤	六郷
大師河原	大井	前野
泉村	大胡領	領主與津加賀守
牛込	小日向	千駄ヶ谷
落合	中新居	富塚
小石川	雜司谷	石原
原宿	市ヶ谷	志村
板橋	板橋之内	葛谷
練馬	高田	比留方
横山	高田	比留方
山中分	土志田	比留方
北	湯島	本郷
下谷	芝崎	鳥越村
駒込	芝崎	根岸
廣澤	代山	根岸
赤塚	神田	新増間
中	新堀	箕輪
守屋	西原	田端在家
三河島	石濱	豊島
瀧の川	十條	江古田
尾久	上野	金杉

千束 石神井^内 谷中在家
無戸分 阿左谷 池袋

梶原堀内
葛西と稱する分遠山彌九郎葛西在城諸役御免

金町 小岩 飯塚

奥戸 猪候 上平井

東ヶ江 西小松川 平井郷

木毛川 堀切 和木郷

堀内 在原一間 澁江

長島 高城

○淺草寺家 四拾貫九百文 淺草

王子領

二十貫八拾文 下平川ニ伏ス

三貫六百文 上平川ニ伏ス

三貫百八拾文 牛込之内ニ伏ス

以上二十八貫八百六拾文

○江戸石濱會下領 其高不見

江戸 遠山丹波守 西郡中郡 江戸廻り

知行所 比企郡 葛西

都合二千四拾八貫四百三拾五文

小日向彌三郎

二十二貫八百四拾文

小日向彈正屋敷

興津加賀守

江戸廻り知行六十四貫貳百拾六文
落合 櫻田 小日向

梶原日向守

五拾一貫文 六郷之内新井宿

右奥書

跋ニ云

金湯山早雲禪寺現住大英方代

天文五年季秋十五日

此本帳者高野山高寶院

武州豊島郡若一王子宮別當

元祿五年壬申正月日寫之 金輪寺第住宿相

大道寺友山の著述せし落穂集にもれたる事跡を記せ

る柏崎永次のあらはせし事のついでといふ書に

一岩淵夜話別集 (大道寺友山武州王子岩淵に寓居

之の比の著のよし)

神君江戸御取開なさるゝ時田畑とは凡八百石許の

御費の外無之由御自慢被遊候事老輩申傳ふ

○人見又兵衛 友元嫡子 桃源と稱す

云傳へいふ今世西の九御裏門前の古樹を諸人槐といふあれはいにしへのの處に居住したる名主の門の槐なりとぞ

○御玄關前辨慶櫓は慶長御造營之時京都大工辨慶小左衛門作りしに依て此名ありといふとの古來より申傳ふ

○古老語て云末代に紅葉山御宮の後に唐銅の鳥居立たる稻荷の社一ヶ處御鎮座なり是は元來太田道灌をいはひたる社にて今下乗橋の外北の方を勘定所と二ノ丸の間に有之候御城普請の時移され候由

○元祿三年此平川の地より赤坂に移りたる平河山源照寺淨土宗と云も尤御入國遙以前といへども此地にありしこと顯然たり

○奥州街道稻毛池上西ノ丸下に至て本町通にかゝり旅籠町を北にわかれ小傳馬町(昔六本木と號)を通り淺草堂門前より花川戸押上より古三谷古隅田川といふにかゝり往來せしなり

○常盤橋舊名は大橋といふ町年寄奈良屋市右衛門承改名しける

金葉集 大夫の典侍の歌に

色かへぬ松によそへて東路の
ときはのはしにかゝる藤波

常盤橋は近江の名所の由

江戸上宿人足問屋

吉澤 主計

本は龍の口巽の角に住す後に
今の傳馬町一丁目に移さる

下宿問屋

馬込勘解由

同斷同所

佐久間平八

此家元祿の比後斷絶

馬借問屋

宮部又四郎

小傳馬町

(覃按馬込在家寛政四年壬子斷絶す)

○加賀町名主平四郎草分の比よりの諸記とも明曆大火にも不失御觸等今に所持す

○下谷養玉院と云天台宗の寺は本は大手の向にあり三貌院といふ寶永年中に養玉院と號す二月八日涅槃像を見せる大幅にて南覺坊の讚あり右柏崎永次(芝泉岳寺に墓あり)其子柏崎三郎左衛門其太郎竹之と稱す父子記録者也

遺佚著す紫一本に

○日南窪麻布のうち六本木より下る南の谷なり南の

日うけ能坂日南と云世の人云ひよきまゝ日が窪と云
○僧司ヶ谷鐘の銘に僧司谷とあり本の寺は法明寺六
老僧の御影ある寺は東湯坊本堂より手前西に鬼子母
神の社あり其邊茶屋あり且七月十六日夜本堂の前に
毎年相撲あり近江の百姓集り角力興行するなり

○玉川爰に一説あり澁谷詳雲寺の末寺此處にあり其
地より古き銅の筒を掘出しけるに年號甚古し并多波
川と有と詳雲寺の住持申されき詳雲寺に納め置かれ
しなり見せ可申と住持被申しが日暮しまゝ歸りぬ

○江戸川の水流今の水道橋の上方より飯田町の下
眞名板橋にかゝり即今の一ツ橋今少東南に流れて白
銀町油町濱町に行水脈是則平川といひし川なり其川
の北の端に時宗藤澤の末寺神田山日輪寺といふ一字
あり只今の三ノ丸凡良外當今松平右京大夫居宅の乾
の角地に存在す神田明神も此處に鎮座古老云平河一
水を隔て今の三ノ丸は江戸の郷日輪寺の方は神田の
郷ならむ此處は神田郷芝崎村といひし處なり神田今
の社地の舊名篠崎といひしとかや

○本庄一ツ目通さかさ井まで掘通して一二三四五の
橋を掛通路なましめられしは台徳公の御代元和より

寛永五六年この間の儀なり

○八町堀といふは尤汐入の池台徳公御代寛永年中に
被仰出舟通用のため長サ八町に掘通されし也

○汐見觀音四ッ谷戒行谷眞言宗金鷄山眞成院

○赤坂圓通寺鐘銘深草元政十二支の句

鼠山流光人未驚 牛山出世振梵聲 虎狼野干氣縱橫
兎角方便誘群情 龍宮高處聲華鯨 蛇室睡彼覺心生
馬腹忽變聖胎成 羊鹿牛車休復蘇 猿啼霜降月色清
鷄人未唱客先行 狗不夜吠三舍城 猪觸金山轉崢嶸
紫一本全六卷 跋に云

此紫の一本は櫻田に住し光融入道所勞の比故有て相
集覺違もあらば加墨せよと有て某に渡し給ふを清書
す

天和三年癸亥霜月

遣任入道判

凡考るに江戸近邊の在名を稱號武士には先武州世多
ヶ谷吉良は家系に云是則義氏の末男長氏其子義繼始
て三州吉良東條に住居吉良と稱し夫より十一代の孫
成高是則將軍より武州世田ヶ谷相州蒔田を賜り其子
左兵衛佐賴康其子左兵衛氏朝に至り此地に住住する
處に天正十八年小田原陣に領地沒收神君拜賜同十九

年上總國に於て千百石地を賜はる其子頼久の代に仰

に曰吉良は一人の外不可有稱號のよし依台命始蒔田
と改左兵衛佐と號す今に子孫連綿たり是より世田ヶ
谷に吉良古憤事蹟申傳ふ由又豊島氏は平氏にて前に
記す如く豊島村の産なり板橋と稱するは豊島より別
れて武州板橋に居住して稱號せしよし家の紋は丸の
内に三ツ家を用ゆ家傳に始て板橋に移りし比家數三
軒有りけるによりて後に家紋にし候よし當時は丸の
内に山形を廻りに付るなり家三軒の略のよしなり品

川氏は今川治部大輔眞芝品川寓居之頃次男新六郎
高久出生に付て品川を以て家名にせるよし(母は北
條氏康女)牛込氏は藤原姓秀郷の流なり家傳に曰秀

郷より八代重俊上州大胡に住す大胡太郎と號す重俊
より十代の孫大胡彦四郎重治初て武州牛込に移り居
す其子宮内少輔重行其子宮内少輔勝行に至り北條家
に仕へ改之牛込を稱號す○家傳に云重行大胡宮内少
輔(法名宗參)勝行牛込宮内少輔(從五位下)屬仕北條
氏康時に賜于書勝行曾て領武州牛込并今井櫻田日尾
谷其外下總國堀切千葉居住于牛込依之天文二十四年
正月六月達于氏康以改大胡氏爲牛込且於武州牛込兼

日建立一寺號宗參寺寄附美田千石之地天正十五年七

月二十九日卒行年七十五法名清雲

○當時雲居山宗參寺碑名但一基合を記す

皆天正十五丁亥年七月二十九日

參秀院殿前牛込大守從五位下外心清雲庵主

天文十三癸卯年九月十七日

雲居院殿前大胡大守寶翁宗參大庵主

左ノ方

大胡宮内少輔藤原朝臣重行者住上州大胡城鎮守府

將軍武藏守秀郷朝臣後胤大胡重後十代嫡孫也移武

州牛込之城七十八歳卒

右ノ方

從五位下宮内少輔藤原朝臣勝行者重行嫡男也武州

住牛込之城天文十二甲辰年造雲居山宗參寺寄附美

田斛之所天文十四乙卯年改大胡氏號牛込矣八十五

右宮内少輔勝行子牛込彦三郎(後改三郎右衛門)北條

氏政直仕天正十二年九月十八日繼家督此時氏直賜家

督相續之手書同十八年北條家滅亡同十九年始奉拜謁

神君則奉仕之以後子孫綿々(相考るに碑の銘天文十

二年に非ず癸卯己同十四年は乙卯にあらず)

朱書
寬政二年庚戌十一月十九日以瀨名氏本書寫畢猶以
好本可校合也

南畝書

南向茶話追考終

墨水消夏錄叙

余居京橋東邊之租房其巷曰具足街與柳街隣因以聞諸
老翁此地以柳稱者花街之遺跡也遂尋其事跡廣求舊記
慶長以來百有餘年其蹟不詳者世人不好古觀舊記猶古
曆以為無用之物貼屋壁檢屏障是以不傳也凡物有好則
其類自集諺所謂眼之所依瞳亦倚故就好事家閱稗史暨
反古漸正其事蹟以自娛自人觀之則無用之書乃比諸古
曆然余之一癖不可針砭自好事觀之則愈乎已焉不可
以無也有則慰好事之眼凡物從不好者觀之則笑以為餘
事天下之物大抵如斯矣京橋之租房再遇回祿之出示所
輯錄之書悉為彼所奪遂移居於墨水之淺草鄉六月徂暑
酣晴如燬雖廢業不能空手引曉涼點燈火據所胸臆題曰
墨水消夏錄聊備好事之据撫庶幾與余同志者必補其漏
乎云爾

化丑夏日

西湖外史飄識

墨水消夏録卷の一

目録

日本橋
本町
屋形船
窮屈丸
蟋蟀丸
幾世餅
淺草文庫
淺草海苔
並木町
專堂坊屋舖
六地藏石燈籠
花川戸(助六考)
猪牙舟
角田川
庵崎
關屋の里

橋場
宮戸川
兩國橋
木母寺
長命寺
牛島
弘福寺
三園(其角祈雨)
慶陽寺
道徹
日本堤
吉原(新古考)
庄司甚右衛門傳
京橋柳町繪圖
二枚柿
及
鍘鈍
盆燈籠
清搔(三絃傳來)
孔雀長屋

墨水消夏録卷の一

荏戸 蘭洲東秋飄著

日本橋

古しへは舟渡なり萬治九年に初て橋をかく大都會の中央にて日本の人江戸に出るもの此はしをわたらざるものなし依て日本橋となつけり

本町四丁目

事蹟合考に云御入國以前は刑罪場本町四丁目なり御入國後は淺草御藏前旅籠町也其後今戸橋の南木戸際西方寺といふ寺の前夕し土高處明地にて十間斗長さ幅二間斗りあらん處に移されたり又其後今の小塚原に移さるかの旅籠町刑罪場ありし時は南の辻江戸の方木戸の北陰に井戸あるをその時鎗あらひ水を用ひたる井也又このごろ高砂ばしを俗に地獄と唱へり刑罪場に近き故なり

兩國橋

紫一本に云此橋は明暦三年江戸大火事の時町の者ども風下をのがれんと淺草見附へ車長持總て諸道具を

引のけたるゆへ道つかへて數多の人の焼死たるをふびんに思召若重て大火事有とも人の損せざるやうにして下總國本所へ江戸淺草より百餘間のはしをかけさせらる武藏下總兩國へかゝりたる橋なるゆへに兩國ばしと名付る也この以前は遊山船花火も三叉にてたてたれ共このはしわたされてよりこのはしの下に屋かたを掛けて遊ぶかの大火正月十八日より十九日までやけて十萬八千人焼死せるものゝ爲に回向院といふ寺此はし向にたつ

屋形船

嚴有公の御代屋形船といふもの類に時花出數百艘出來し中にもすぐれて大屋形船は熊市丸山市丸也是は座敷九間に臺所一間ありし故熊市の名あり座敷八間に臺所一間ありし故に山市の名をつけし也然に天和の頃山田彌市といふもの諸人の金銀を偽り奪取剩人をころしたるゆへ公儀人形を以搜し求めたるにやうやうとして越後新發田の城主溝口伯耆守領地に捕へ出し御詮議ありし時何として穿鑿のはじめ江戸をば徘徊したるぞと推尋られしにひるの途中は早駕籠にのり夜は川岸へ繋置たる屋形船に乗りかゝりて明し

けると答しより右兩様盗人の便りあるものとて急度
停止被仰付ゆへ大屋形船永く絶るなり町駕籠は元祿
の末ゆるされ共戸を禁制せられて戸なしかごとなり
當世の屋形船は數百艘に限る冬より春までは荷積船
に用るなり

窮窟丸

紫一本に云此船は借船にあらず或人の手船也或は自
樂丸と名づけてちいさき船なれども膝をいゝに樂
ある心を以名づく

蟋蟀舟

是は二丁立の舟にちいさきおほひしたる舟をいふ吉
原通ひの舟なりきりくすと名づくるはこぎ行とき
きりくすとなく聲あるを以きりくすと云蟋蟀の別
名をさせといふ後拾遺集に秋の蟲のさせるふしなり
と古今の歌にもついでりさせとあるもきりくすと
についでりさせとよませたる也きりくすと名づけた
るはさせといふねにてはなし舟にさせといふ詞は此
船にかざらざる也ある説に舟の覆ひ小さく乗にも出
るにも四つばひになりて出入すくらりくすとふれ動
きて今水に入なりと思へばあぶなき斗りにも面白き

事も遊山もなにもかもなくなるゆへ吉原がよひをふ
つつと思ひきりくすとといふこゝろなるべしと然れ
ども下のすの字きこえず又或人のいふ歌に
きりくすと夜寒に秋のなるまゝに
よはるゝ聲の遠きかり行
といふありそのごとく夏の涼しき時は此舟も繁昌す
れど秋風にはだ寒になれば波もあらく風まけもする
ゆへ船のかよひ遠ざかり行といふこゝろなるべしと
いへり

幾世餅

兩國幾世餅元祿十七年に小松屋喜兵衛といふもの初
て製す喜兵衛元來は橋本町にて車力頭也上野中堂ふ
しんのとき金をもうけはじめ餅やとなりて兩國に
見世をいだせりその餅を幾世といふは吉原町河岸見
世の女郎いくよと云を妻にむかへ取付の節は彼幾世
が自餅を焼て賣りぬ段々大に繁昌して名代となり喜
兵衛はもとより文盲にて國字もしらず其子ども數多
できてむすめに書を學ばせけるに其頃橋町二丁目手
習の師匠出來それを文仙といふ佐々木文山先生の門
人也是によりて唐やうをば習けり喜兵衛娘名をまつ

といひ雅名を文錦といふ三社の詫せんといふものを
眞草行にて書淺草觀音堂の側三社權現の堂へ匾額に
して懸たりその頃女子にはめづらしき能書なりと譽
れあり喜兵衛老後に禪學を好み宇治黃蘗の弟子とな
り正義居士と云處々の禪僧とひ來て問答せり江戸眞
砂に見へたり

淺草文庫

事蹟合考に云大猷公の時從四位侍從加賀守正盛とい
ふ人在世の日淺草通諏訪町の北うらにて方二町斗の
下屋敷を拜領す子孫に至る迄傳來り大猷公も度々此
屋敷に御成あり正盛繁昌此時日本異邦の書籍を數萬
卷集大なる土藏をたて納めこれを其頃淺草文庫とい
ふ是金澤の文庫に比して譽稱せり其後彼邊類焼に付
焼滅したる也

淺草海苔

淺草名物の干海苔むかしは淺草川にてこれを取りこ
こにて製したるよしいひ傳れどもいつの頃までしか
ありしや詳ならず按るに元祿の頃迄は淺草にて製た
るなり淺草庵主人に尋しにそのあたり海苔をあきの
ふ舊家中島屋某のいふ淺草川にのりをとりしは古き

事也品川より生海苔を取寄て淺草にて製したるはい
と近き事也極品ののりは二十年斗迄淺草にてすきし
といへり晋其角が焦尾集に所の名産寄て

行水やなにゝとまる海苔の味

其角

雨雲や簀にはす海苔の片明り

文士

並木町

此處いにしへは櫻の並木ありし故今古名を存して並
木町といふ芭蕉の句證とすべし

觀音の薨見やりつ花の雲

專堂坊屋敷

これは淺草並木町と材木町の間町屋敷裏に古碑二ツ
あり此地は專堂坊拜領の地なり故に專堂坊屋敷とい
ふ土人此碑を專堂坊先祖の墓なりといひ傳ふ石總高
四尺餘正面に究竟妙見(眞至)の一字あり一は總高六
丈三尺餘唯年の一字耳見ゆ

六地藏石燈籠

花川戸木戸際にあり是も其地の老人に間に近頃の回
祿後年號磨滅すその以前は應安元年といふ文字かす
かに見ゆ應安は後光嚴帝の年號也文化二年迄四百三

十七年なりうしろに兵衛の二字見ゆるを以鎌田兵衛政清立ると江戸砂子にいへる杜撰の説也

花川戸

花川戸貞享年中板本江戸繪圖に舟川戸とあり服部南郭が墨水八首に花川戸とあり舟川戸といふは筆者の誤りなるべし扱花川戸の助六といふは淺草三谷町の町抱にしてさしてことなる所行もなきものなれども是を京都の萬屋助六と同名なるを以三浦屋總角に對して其名をかり用ひたるなり延享年中板本柏庭一代記に云正徳三年三月木挽町山村長太夫座に於て柏庭(二代目團十郎)はじめて此狂言をせり時に年二十六花屋形愛護櫻と云狂言の二番目に江戸半太夫淨瑠璃にて白酒賣新兵衛實は荒木左衛門に扮するもの生嶋新五郎田畑之助後に花川戸助六に扮するもの市川團十郎傾城總角に扮するもの玉澤林彌なり是は津打半右衛門が作る狂言也此以前京都に萬屋助六傾城總角二代紙子と云淨瑠璃あり正徳の頃三浦屋總角名妓のきこえ高かりしゆへにかの淨瑠璃にもとづきて作れる也狂言中に紙子のことあるは二代紙子といふをはのめかす也彼三谷の助六身まかりしのうち同所日照山

易行院と云淨土宗の寺に葬ける易行院はその頃北馬道のかたはらやぶの内といふ所にありし時也又按ずるに江戸鹿子に北八丁堀藤屋清右衛門といふもの朝顔といふ煎餅を賣いだし其頃の名品なりゆへに朝顔せん平といふ名はもふけたる也そのうち正徳六年正月堺町中村座に於て式例和曾我の二番目に柏庭ふたたびかの狂言をなす助六の扮作ハツバの絞靴一ツ印籠みなそのころの流行せるものなり明曆寛文の頃の歌舞妓狂言の古圖を見るに若しゆがたの總踊などにすて紫のはちまきをす江戸鹿子に云むかしは美童に綾羅を身にまとはせ紫のきれを以てはちまきにしているの藝をなすと云々助六がはちまきも其遺風なるべし牡丹の紋は近衛攝政様御紋所にて一位様より右御紋付小袖江嶋へ下され候を江嶋芝居に來り團十郎助六の時右小袖を團十郎におくられしゆへなり(此頃男達夢の市兵衛といふもの常に頭痛を患て紫のきれにて鉢巻をせしとぞ花麗の風俗おもふべし)

(助六の狂言に鬚の意休といふ敵役ありこの頃の)

率頭朝雨戀奴などおなじき名あるたいこもちにして鬚を長くせし故鬚の無休といひしを意休にかへ名せりとぞ)

東都花川渡建橋記

明和七年庚寅冬啓建河橋于東都花川渡以其事鉅而民之利害未可知也於是乎未定矣九年壬辰秋啓夏令曰十月成梁民未病涉之謂越安永三年甲午夏騎吏田桃樹奉旨遂始造橋長四百七十六尺廣丈有八尺翼以扶欄如其長之數而多之岸之東北臨水而築凡六十步餘石而趾高起一丈經緯而跨空置架二十間三其柱八十一而極矣靡金錢一千五百萬委群材會衆士不費公帑大庇生民不唯邑人便焉彼都人士口悅而願出於其路矣夫每人而不履危施直萬代其功尤章焉君學問經法而通志時事轉心一刀以統理經營之職至冬十月橋成君既卒事而肅四方寮友合樂口飲受人源麟得餘會會後因紀成蹟其詞曰

維花川渡其流滄言造輿梁如虹如龍不驚不崩利涉大川大庇生民於萬斯年誰施其功肅々田桃龍勉從事不致告勞原濕既平川流既清端我國家永以維寧

猪牙舟

吉原へ通ふ二挺立早舟五郎兵衛といふ舟大工はじめて此早舟を造二挺ろの船頭は此五郎兵衛が舟ならでは用ひざりしとぞ寶永中にこの二挺ろ停止となるちよき舟といふは長吉舟の略語なり押送舟の長吉といふもの舟の形藥研のごとくにして至て早し此舟つくりを考淺草見附の勘五兵衛兩國橋のさゝや利兵衛などいふもの初て此舟を作る今これを猪牙舟といふ

角田川

千壽川の末淺草川の上なり角田川須田川といふもわけてはなし渡しといふもおなじわたし也此川に都鳥多し嘴と足と赤き鳴の大ききの鳥なり一とせ須川幸仁親王江戸へ下向の時

角田川都のでふりまねふとも

ことの葉たらしあかぬなかめは

右御自筆を懸物にして木母寺にありまた近衛殿の歌

こたへせは我出てこし都鳥

とりあつめてもことゝはましを

來て見れば武藏の國と江戸よりは

北と東のすみ田川哉

これも自筆の掛ものありまた昔若狹少將勝俊と聞えし人遁世の後長嘯子といふ此人の歌に

これそこの東路とをく思ひにし

角田川原の渡なりけり

岡本宗好が歌に

渡守もくれば見えす月ひとつ

角田川原の夜の淋しき

源光豊のうた

角田川ふかゝれとても雲置す

たゝ一なみの水くきの跡

建保百首に順徳院の御製

こよひまた誰宿るらん菴崎の

角田川原の秋の月影

菴崎

菴崎或五百崎につくる今の本所中の郷あたり也むかしは本所人海にて沙干には洲崎五百ありしゆへ五百

崎といひしと也萬葉集に廬崎と云光俊卿の歌に

いほ崎や角田川原に日は暮ぬ

關屋の里に宿やからまし

又聖光院殿の御歌に

歸るさの道に關屋のさともあれな

角田川原のあかぬ詠は

關屋の里

關屋の里は木母寺のうしろ牛田にあり此牛田に淡雪

入道といふもの引込て柴の庵をむすびし跡あり其時

の歌

ことたらぬ身とは思はず柴の戸に

月もありけり花もありけり

橋場

橋場といふはむかしこゝに兩國ばしの如きはしあり

し故なり夫木集をみるに光俊卿のうたに

角田川むかしはきかす今こそは

身を浮はしの有世なりけり

宮戸川

宮戸川は淺草川のことなり今戸川と同じ昔濱成竹成

の宮戸川にて漁せし時淺草の観音網にかゝりてあが

らせ給ふ川なりそれを今宮戸川と唱ふるは誤りなる

べし戸の字「こ」の聲ありて「と」のよみありみやと川

と二字ながらよみ續て難なしみやと川と云時は宮の

字は訓によみ戸の字を音によむ事いかなれどもか

やうによむことまた多しまかればみやと川といふなるべし夫ゆへ此川にすむ鳥みやと鳥と云とかたる人あり

木母寺

梅若本堂正面の額木母寺といふ三字本阿彌一族京都

鷹ヶ岸太靈庵の開基光悦が筆なり榎梅相通じてとも

にむめといふ字なり此故に木母とは梅といふ分字

也依之この寺は行人派なり行人派は湯殿山の下派に

て東叡山の門下ゆへ天台宗なり

(如道人いふ江戸の大匠溝口内匠といふ人余に語

りけるは其祖たま〜牛若丸の木像を造る妙工の

手に出たる故人これを所望して去れり其木像いつ

の頃よりかこの木母寺におさまりけるに梅若の像

となる故に虎の皮のまりさやかけたる太刀を佩た

るとかたれり内匠は寛政のころにて六十餘にて存

生せり)

長命寺

牛嶋にあり牛頭山といふなりむかし東照宮鷹野の時

御機嫌あしく此庵に御立よりあり樂など召あげられ

早速御快ならせ給ひ寺の名を御尋ありけるにわづか

の庵にて名もなきよし申上るそのとき目出度く長命寺となづけけるゝと紫の一本に見えたり

牛嶋

淺草川の東今戸村の向を云こゝに牛の御前の社あり

牛寶山最勝寺といふ紫一本に云此社は十七八年以前

迄は丈四方の茅屋にてかの司馬相如が住し宿もかく

やらん四壁もなく一枚の薄板の上にくわれたるほこ

らをのせて庭に草生茂り参る人もなかりしが江戸繁

昌に付今は宮居も奇麗にたち庭の前も面白くよきな

ぐさみ所也此社に古碑あり正面に釋迦の像をちりば

め背に貞觀三年千部供養のためにたつとあり今は祠

中に藏してみだりに摺ことを許さず又社の後に瘞齒

碑あり是は余が先師金峯翁の製文にて東江源鱗隸書

にて書す井上蘭臺の落齒を瘞し碑也

弘福寺

此寺に藤紀隆の墓あり蘭臺製文松久徵義書古郡公緯

の墓松崎君修銘關思恭書建凌俗の墓橋千蔭製文並書

東源林義卿の墓南宮大湫の墓紀徳民銘俳諧師龜成の

墓あり

三圍稻荷

元祿六年癸酉六月大旱して田畑一滴の濕なく田地龜背の如くさげ農民これを歎き雨乞のまつりすれども其應あることなし廿八日靈岸嶋の白雲といふ老人寶井其角をともし舟にのりいで、舟を土手につなぎ三圍に遊しにかね太鼓を打ならし農民の雨乞せるさまを見て白雲これに戯ていふは此人は日本俳諧の達人なりむかし小町能因などの雨乞せしためしあればこの人をたのみて雨乞ひせば其應あらんといふにより農民其角をとりまきせひあまごひしてたべといふに其角もやむ事を得ず手あらひ口そゝぎ神前に向ひ拜てユタカの字を折句にして

夕立や田をみめぐりの神ならば

それより夕方に向ひて筑波より雷なりいだし其雨盆を覆すがごとしといふ此句其角が眞跡今尙あり享和三年癸亥六月三井氏の徒余が文をもとめて其事を記し碑をたつ友人寐惚子の狂詩に

鳥居半出大川端遙指三團稻荷壇蘆葉刈來盛洗鯉蒲
燒食盡割長鰻葛西號掛太郎鼻晋子角其句翻百姓肝向
晚船頭呼不起屋根舟内只聞鼾

慶陽寺

此寺もと藏前にありいつの頃にか淺草川の東今戸に移さる伊丹右京舟川采女男色にて相對死せし事委しく「もくづものがたり」といふ書に見へたり伊丹右京年十六辭世のうた

春ははな秋は月にと戯れて

眺しこともゆめのまた夢

舟川采女年十八辭世のうた

もろともにいさらは我もこゆるきの

いそきて越ん死出の山路を

道 徹

菱川師宣が戀の道引に云堤のかたわらにいとやすかなる庵ありこれをいかにと問にさりし明暦の頃より道徹といひし道心者世をむづかしとや思ひけん所も多きに爰に庵をなん結びてすみしが二六時中にかねの聲たへせずねぶつかすかに聞ゆと云々紫のひともとに土手のきわに道徹が寺あり或本に淋しきものは道徹がかねのこゑとあり今はやる興作ぶしの小唄にそつちでうて道徹とうたふも此寺なりと云々按るに此時門前刑罪場也彼罪人佛果得達のために晝夜の念佛したりしが又其後刑罪場小塚原に移さる今に此寺

を西方寺とはよばずして衆人皆道徹といふかの道て

つが墓は開山念譽の墓とならびたり塔の上にかねをたゞく石像あり今寺僧に尋るに没年詳ならず此寺に高尾が遺物あり

高尾襟掛地藏 銅佛立像一寸八分高尾守袋へ入し佛也

高尾位牌 法號轉譽妙身信女

同所持羽子板

右羽子板表背ともに總金地模様上下に鶴あり中に松あり墨薄繪なり右のかたに紅葉の紋朱なり裏に樂の實あたりたる跡あり中の金具は後につけて垂撥にしたるものなり裏に春の字あるを以見れば高尾の所持にあらざるに似たり蓋春日野といひし名妓の所持なるべし

又此寺に高尾の墓あり碑面に地藏をほる上に紅葉の紋あり右に轉譽妙身信女萬治三庚子年十二月二十五日左に

寒風にもろくもくつる紅葉哉

とあり墓のうしろに紅葉の木ありそは後世に立たる墓にて高尾を葬し所にあらず故に年月も相違せり委

春慶院の處にしるす

(如道人いふ世に傳ふる仙臺侯三またの船中にて高尾を手打にし給ふといふはいつはりなり仙臺侯薄雲といへる太夫がもとに通ひ給ひしこと一兩度也そのことを張皇して放蕩の浮名をたゞせ將軍家の首尾をあしざまになさんと侯家の逆臣ども土佐座の狂言にとりくませしとぞその狂言を三世二河白道といふ足利頼兼の人形竹に雀の紋所付たる衣裳をさせ傾城を船にてさけ切にする所をせしとぞ近來高尾の首ながれよりしといふて永代橋見番町のあき地に小さきほこらをたて紅葉の木などうへ願をきくとて無心の男女參詣すわらふべき事也蒿齋ぬしのかたられき)

日本堤

明暦三年大火後遊女町を移す時此堤を築に諸大名へ被仰付速に出來けるゆへ日本諸大名の勢也とて日本堤と名付く菱川師宣が戀の道引に云上野武藏へつゞきて大ひなる堤なれば日本の諸大名へおほせ明暦年中につかせられしゆへ日本堤となんいへる又云其頃舟賃から尻の定あり

定

- 一 小石川水道橋牛込吉祥寺邊より金龍山迄舟賃
但 二丁ろは三夕五分
二丁ろは二夕
- 一 浅草橋より金龍山までは
二夕 但 二丁ろ
- 一 新ばしより同處迄
三夕五分 同所 歸は一夕
- 一 京橋木挽町くつれ橋又は靈岸ばしより同所迄
二夕五分 同所 歸は一夕
但時により三夕なるべし
- 一 兩國ばしより駒形迄一夕金龍山迄百文 二丁ろ共に
雨中のおりからは小屋形をしかけ或はとまを
ふけり雨風夜中にはのりて心有てましをやら
んにはかねて船頭きをきかせるべし
- 一 山の宿より飯田町の上まで 百文但行もどり山の手
迄は四夕なるべし
- 一 山の宿より浅草橋迄七分宛傳馬町邊まで同斷
- 一 山の宿より日本橋迄二夕
- 一 同處より京ばし迄二夕
- 一 同處より新橋迄三夕七分

駄賃の事

右大かた定りは此のごとし但風雨夜中のおりか
らはねだんちがふべし但道のり見合あるひは雨
の頃馬かたもぬれながらにおくればこゝろして
花をやるべしかくこゝろをくばればかさねて馬
子見しりて馬つなぎて定規にのするなり
むかし浅草御門外よりから尻馬に乗て吉原へ通ひし
事人の知れる處也寛文二年板本吉原はやり小唄惣ま
くりと云書にも駄賃付あり按ずるに浅草境内に馬道
といふ名のあるは吉原馬の通路のところなればしか
いへる也五元集に
朝嵐馬の目で行頭巾かな 其 角
土手の馬くわんをむけに菜摘哉 同
右の句に土手の馬といへるも吉原馬の事也今日本堤
に立て舟がくと呼舟人を土手馬といふ嫖客に付て
揚錢とりに行日雇のものを附馬といふもすべて昔の
遺言なり

孔雀長屋

に比して孔雀長屋と呼來りしより今は本名のごとく
になりぬ

吉原

北條家の浪人庄司甚右衛門といふもの慶長の始駿河
國旅店のあるじ二十五人打寄相談の上江戸御城下朝
日のごとく繁昌のよし各抱置し旅人の足あらひ女召
連下り遊女宿となりなば拔群豊饒の身となるべしと
皆々一同して女どもを召つれ江戸に下り御城下に入
ては御咎めもあらんと恐れて今の荒井宿の濱邊の出
町の地をかりて表に紺の木綿の三尺幅に仕立たる長
暖簾の端に鈴を附置客來りて暖簾を動すと鈴のなる
を合圖に女ども出たるを見たて、其宿に思ひくゝに
客上りし故此所を鈴が森と名づけたる也森とは此町
の入口に大井社の森あればなぞらへていふなり神君
品川筋御鷹野御成の節此處の濱邊に床几を置それに
ざし給ひ彼遊女どもに茶をはこばせ被召上且又栖ノ
首の盃にて御酒被召上候事あり其後右二十五人のも
のども御願申今の京ばし具足町の東葦沼の汐入を拜
領し築立その地どり丸く一方口に南の片側を角町北
の片側を柳町と名づけ中一筋の通りを中の町と名づ

く此一筋に表に釜をいだし茶釜を懸おき入來る客に
茶をうる是を茶屋といふ兩國の内又南北の道をつけ
たりその町十文字をなし丸きうちに十文字の町ある
ゆへあだ名を輿町といひ雅人はこれを十字街といふ
そのぐるりも通りにして下品の女を置てこれを河岸
傾城といふ扱その町のうちに揚屋とて客女郎を招き
遊ぶ宿あり是はもはや繁花になりての事也その頃よ
り遙後迄も町人の類中々此所に至る事決てなし委く
御家の武士諸家の陪臣也とかく武士たるものならで
は通はざる事なりし其揚屋の勝手の方に馬屋を立置
き馬五六疋づ、飼置曉の客歸時その馬に鞍置きさせ
て乗らせ送りし也按ずるに此事は至て古風の事也會
我物語に大磯の遊女虎が許より十郎祐成彼亭の馬に
て歸りし事あれば殊勝の體也然してその揚屋にたち
ばなやといふ最上の者也依之その頃正月の始猿引其
揚屋中の馬屋をはらひいたしに來る時まづ橋屋が馬
やよりさるを舞始めし也依之末代揚屋に馬は飼ざれ
ども今にいたる迄毎年正月始て猿引吉原町に至る時
はまづ揚屋町橋屋がかたより舞始る也然るに目を追
ひ年を重ねて遊女宿こゝかしこに出來桃町などにもあ

りかの庄司甚右衛門分別の上今の堺町の東に於て葦沼谷地拜領し江戸中に散在したる遊女宿一所にありたき由願處凡之通谷地被下置かの京橋柳町角町の本店をはじめ所々より集りけるものどもをよせて其町五町にとり立その名を吉原町といふ其五町は京町角町江戸町同二丁目揚屋町都合五町一方口の門を大きく作りこれを大門口といふその中通を中の町といふされば今に大門通りの古名のこれりその始駿河國より下れる二十五人の各廿四五歳三十歳を過ぬものども也その内庄司甚右衛門四十五六歳ばかりにて下りける故一列の中にて彼の甚右衛門をつねくおやじとよびける然るに此五町に作りし町の一二丁西の方殊の外葎沼の汐入にて路次あしく客人通ひかねけるゆへ甚右衛門世話をやきて水をはき橋をかけて往來せしむ親父がせわをやき懸たる橋故その名をおやじはしとよび終にはしの名となり今の古名となれり右五町に取立し吉原町に至て公儀より嚴重に被仰付御書付二通被下置其文醫院兩道の葎の外のものにて出入不可致儀一通何方にても遊女抱置もの有之候は、其女可召取候委被下置其名主年寄家主急度曲

事可被仰付旨一通被下置然處明曆三年正月大火事に其兩通も焼失いたし此焼後吉原町遠處へ可被遣と有てまづ今の本所彌勒寺の所その頃未荒地にて有し故暫くかの地に移り夫より今の淺草觀音堂後千束といふ田地へ移さる此時引料として公儀より金三千兩被下置又其後總かこひ外廻りの大溝水吐ふしん料として公儀より金百兩被下置かれ大火に焼失したる御書付二通再被下置様に願候へども不相叶今は高札二枚に右御書付を記して大門の入口堤の北方に立置然して今の處に移す頃に至て遊女も數多く成候に付町數を増し江戸町二丁目角町京町揚屋町伏見町堺町新町中の町と立伏見町新町堺町は後に割合したる也此淺草に移りてより新吉原町といふ原安適曰我若き時今の京町に昔月行事帳の表書を見よに柳町と記しあり云々御入國以後江戸中所々に追り遊女宿出來候節御年寄中御停止にも可被仰付也諸武士惰弱にも相成らはいかゞと被窺候處神君上意に日本國中の諸武士末の者に至る迄江戸に來て諸國になき樂をせんと存じいさみよるこそよけれ不苦其まゝに永く差置べしとのよしにて末代に至り遊女町御城下並に被置と云

云此事老輩の申置所なり事跡合考に見へたり

庄司甚右衛門傳

庄司甚右衛門相州小田原の産その名を甚内といふ時に高坂甚内と云大盜ありしゆへに甚右衛門と改正保元年甲申十一月十八日没六十九

子 庄司甚右衛門

子 庄司甚之丞

子 庄司又左衛門

子 庄司又右衛門

子 庄司又左衛門享保中名勝宮

洞房語園に云庄司甚右衛門は小田原の産にて又は北條家に仕へしもの也天正十八年小田原落去の砌にかの甚右衛門十五歳折節病痾にかゝりその家來の介抱により江戸に下り柳町に所縁ありて居住しけるに傾城屋になり下りこれを恥て一生父の名字をいはず別に居所を知るものありて子孫にかたり傳へしことありといへども甚右衛門本意に違ふゆへにしらすといふ甚右衛門姉はおしやうといひて氏政公の寵妾なり甚右衛門異名を君がて、又おやぢといふ故に元和の頃の小唄に

おやぢが前の竹れんじ其一ふしのなつかしや

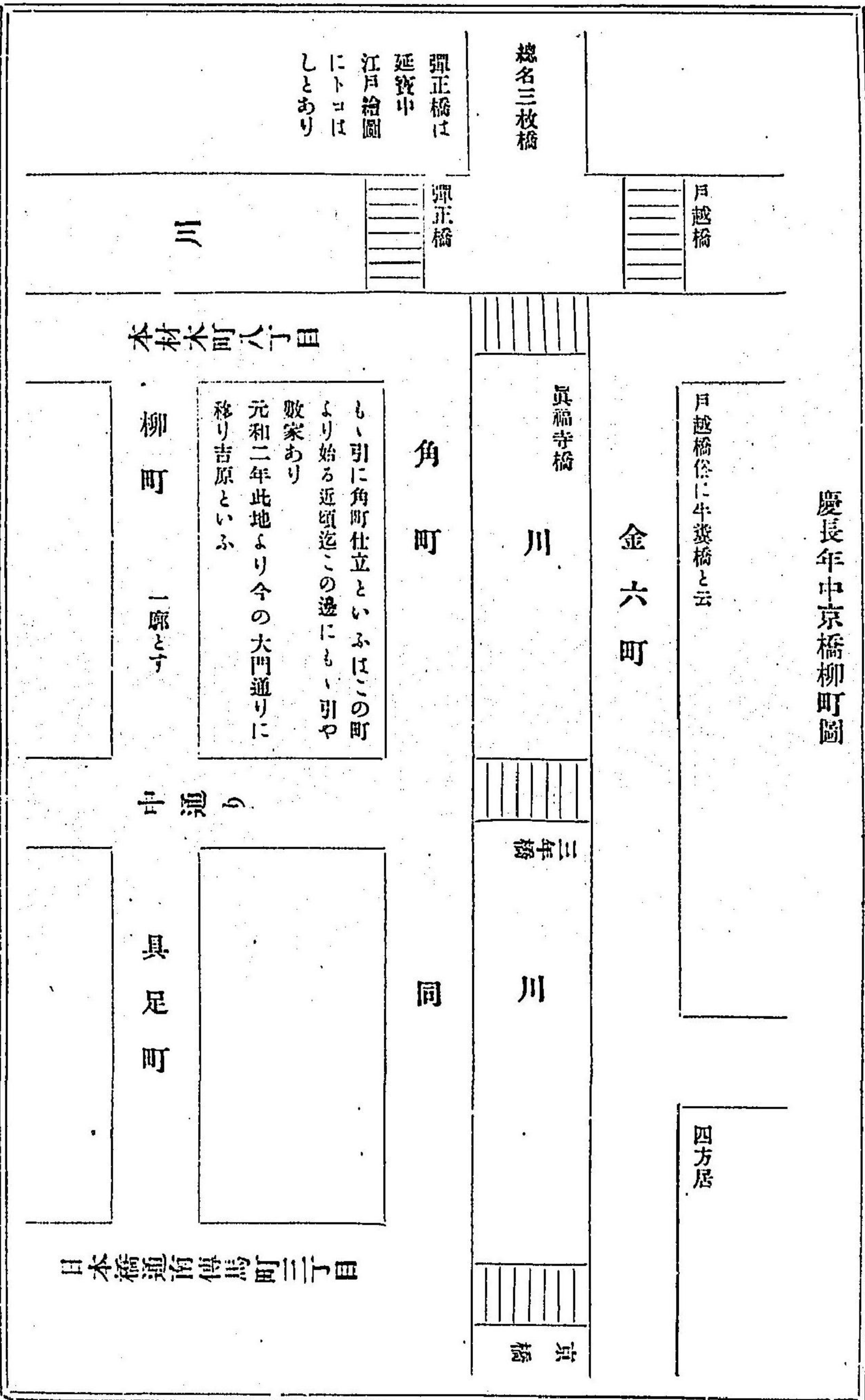
なつかしやおやぢが前の竹れんじせめて一夜はちぎらばやゝ親父が前の竹連子いくよも千代もちぎろもの千代も八千代も契ろもの按ずるにいくよ八千代ともに甚右衛門が家にて名との太夫の名をいひこめたり

寛永十五年板本あづまものがたりといふ吉原の細見記に左の如くあり

江戸町	あはち	まんこ	まんよ	おはな
おやぢ内	おまん	では	おせん	こはた
	ふしの			
	たいふ	いおり	し廿三	

庄司甚右衛門子孫代々庄司又左衛門といふその内勝富道如齋と號す享保五年に洞房語園といふ書を著す

慶長年中京橋柳町圖



二枚櫛

事蹟合考に云古老相傳ていふ總じて驛亭の類はその邊戰場となりて勝利を得たる方の大將首實檢する時は必ずその首を洗ふことをいたしたりとかや旅人を宿する縁にするものなり又其かへおく女どもは入來る旅人の足をあらひ遣る事を昔は極ていたしたるゆへこれを足あらひと呼しなりこれ皆往昔の古風亂世の様子也御代のはじめいまだ亂中の餘風残りし故人生死その決斷評定所の一日場處遊女を以て飯食茶飲等の通ひとせられしもの尤武風のなす處なり遊女の二枚櫛をさすことは一枚は首あらひの時用ゆるくし也遊女の評定所の御用にて通ひしは明曆大火前吉原町今の堺町の東にありしとき也其評定所へいづる遊女各其當番にて前夜には客をとらず評定所へいでたて茶を挽也夫よりして今客なきを茶をひくといふ也

及

承應のころ昔屋町に和泉風呂の彌兵衛といふ者あり彼が家に久助とて年久しく召遣ひし男風呂屋遊女をまわし客をあつかひしに生得せいちいさく烟草をこ

のみてのめども他人のきせるにまぎれぬように紫竹のふときを長さ一尺七八寸に切て用ひこれをくわへてみせの庭の前にこしをかけ居る姿せむしの如く長ききせるをくはへければ及の字の形によく似たりとてこれを及とあだ名せり此事ひろまりて遊女のまわしかたを皆及といふ也昔其角も禪家の十牛にならひてかの及を牛に通はせて十牛の句あり遂に人あやまりて牛の字を書は事を解せざるなり

尋牛

晉其角

闇の夜は吉原ばかり月夜かな

呼牛

よぶこ鳥あはれ聞てもきかぬかな

隨牛

夏の夜はねふに疝氣の起りけり

食牛

二朱判やとるが上にもとし男

山牛

小便も笥にあまる五月かな

迷牛

ほゝとぎす曉かさをかはせけり

無牛

きりくすまくらも床も草履哉

半牛

何となく冬夜隣を聞けけり

老牛

けふも又温鈍のはいる時雨かな

送牛

さめよとの千手陀羅尼や霜のころ

媼鈍

洞房詰園に云寛文二年寅秋中より吉原にはじまれりその頃江戸町二丁目仁右衛門といふもの温鈍蕎麥きりを一人まへの辨當にしてその價銀五分づゝに賣出しり是をはし女郎の下直なるになぞらへり媼鈍といへり媼は妍とおなじ嬋妍の妍にてかほよしなり鈍はにぶき也因之河岸女郎のやすきをいふなり後麵類なるゆへ改て鈍につくる也

盆燈籠

吉原角町中萬字屋玉菊追薦よりはじまる此玉菊其時の名妓にて大酒をこのみ途に酒のために病をひきお

こし享保十一年三月二十九日身まかりぬ光戒寺といふに葬るその七月新盆に新靈を祭るため中の町俵屋虎文揚屋町松屋八兵衛發欄（本）にしたるなり岩本乾什といふ俳諧の宗匠玉菊追薦のため淨瑠璃水調子を作りしは享保十三年三回忌の時也十寸見河東山彦源四郎二人にてふしをつけこれをうかむ瀬一名水調子と名付てかたらしむ玉菊は日頃人愛ありしものにて一廓中こそぞりてかれが死たるをおもひ盆中いひ合せて中の町の茶屋の軒端にたんだらすしと提灯をともし其開夜を照らす三回忌の節は見事のきりこ灯籠をともしけるが珍らしとて格別に賑ひけるにより段々美を盡し細工を極る事とはなれり是吉原盆燈籠の初也（如道人いふ月もとて拾ふの人紙のふとをりみをり年をへていふと言葉をかぞふればなくより外の琴の音を二十五絃の曉にくだけて消る玉菊は本來空にかへる身はとうろもいらすかきしてのありし夜見せを其まゝにと乾什が筆の跡今につたへたり玉菊は二十五歳にて身まかりし）

清搔

清搔と書てすがゝきと訓す和琴に所謂源氏物語あつ

まをすがゝきてなど見へたり清搔にて須歌なく曲をかきならすをいふか昔のめくら法師等と和琴の清搔を轉じて三絃の小事にうつしたるを又略してひきたるが吉原に残れるならん吉原大全に元吉原の頃の小唄に道のほとり二もと柳又白き馬にめしたるとのごよなどいふを新吉原に移りし頃専ら唄ひて合の手にすがゝきをひきしよし後には小唄はやみてすがゝきのみひき傳ふ昔し吉原の名物につきぶしと云小うたあり今は傳はらず京嶋原のなげぶし大坂新町のまかきぶし江戸吉原のつぎぶし是を音曲の三名物たるよし

みをつくしに見へたり按ずるに揚升庵集に三絃は元の時にはじまるといふ沈純中が詩に抱得三絃馬上彈といふ教坊記曰平人女以客選入内者教習琵琶三絃篋箏謂擲彈家永祿年中琉球より初めてわたる蛇皮を以てはる泉州堺の盲人中小路といふものにはらせたり其後虎澤といふ盲人本手破手と云術をひきはじむ三絃を手練し小唄にのすそのころは淨瑠璃節出來たりこれをのせて彈は澤角がはじめなり其のち大坂に加賀都城秀兩人其術を得て江戸に下りて加賀都は柳川檢校となり城秀は八橋檢校となり當時八橋柳川流

と稱する也三絃といふは三の線ある故也三の字をさみといふは閉口の音にてはねがなをみといふ也目論をもくろみ燈心をとうしみ御帯をおみをび御裕をおみあはせの類なり別に味の字を用ゆべからず

（道のちまたのふたもと柳風にふかれてどちらへなびこおもふとのごのかたへなびこふいとゆふをわけて柳手折は誰なるぞしろき駒にめしたる殿御よな 古老のかたりしを記得たるまゝこゝにかきつけぬ 如道人）

墨水消夏録卷の一終

墨水消夏録卷の二

目録

- 黨連坊
- 諷來
- 鏡池(采女墳)
- 道冲菴
- 福聚院
- 法眼寺
- 勝運寺
- 春慶院(高尾墓)
- 金龍山
- 茂睡碑並傳
- 觀音堂
- 奈良茶飯
- 二十軒茶屋
- 久米平内石像
- 柿本祠

- 業平墳
- 嬉の森首尾の松
- 心中石
- 東江寺(百里居士松林山人)墓碑
- 惇信墓
- 梅莊
- 吾妻森
- 大雲寺(猿若傳)

墨水消夏録卷の二

江戸 蘭洲東秋飄著

黨連坊

とうれんぼうとは元吉原の頃ぞめき地廻りのたぐひをいふ寛永十九年板本あづま物語に元吉原細見記の差繪にとうれんぼうの圖ありよこはちまきして長劍をおびたる男酒宴の席を妨ぐる體也其ころの町奴(今いふ男達)のたぐひなるべし或云長明無名抄に載し登連法師の故事によれる名なり猛雨の暮にみの笠をきて吉原に入こむ翌日をまたざるのいひならん余按するにとうれんは連黨の文字にて其黨をあつめつれゆくのこゝろなり坊の字は昔の俗語に多し意義なし登連法師の説誤なり

ぞめき

元祿二年板本吉原徒然草に諷來とはかな山言葉なり役にたぬ金の出る時をぞめきといふと云々又遊女の私夫をまぶといふもかな山ことばなり松永貞徳が

油槽にかな山のまぶと申がほれ心といふ句あり

鏡池

橋場總泉寺の脇にあり昔は池の形丸く鏡に似たるゆへなり今は蘆草茂りたる流水となれり淺茅が原といふも此あたり也相傳ふ此池に梅若の姿のうつりて見えければそのまゝ母のとび入てむなしくなりぬ遺佚が歌に

哀さは向ふ鏡か池の面に

昔をうつすかけは見えぬ!

池のわきに塚ありこれは吉原堺町雁金屋の遊女采女が塚なり彼采女は天のなせる麗質なれば紅粉の加りなる色をもちあす名妓のきこえありある僧のこれに心をはこび采女も深くこれをしたひければ主人これをきき入來る客のさわりなりとてきびしくこれを制してちかづけすことに人を忍べる出家のことなれば一身にせまりある夜采女が格子の前に來て短刀をぬき自その咽をつきて死せり住所も知れぬ僧なれば日本堤へ出してそのかばねを捨てたり今すて坊主といふはこれよりはじまる也采女はさらぬだに此世のままならぬつらさ戀しさのわりなきに人しれす袂をぬ

らし思ひわびたるに眼前にかゝるありさまを見しよ
り胸ふさがりたへ入れれどかくせしほどに息は出
たれども心は心ならず傳聞く奈良の御門につかへ奉
りし采女は恐れながらもきみをうらみ奉りさる澤の
池に身を失ふ昔と今と時こそかはれその人と我とか
たちこそちがへ思ひの切なる事采女といふ名はおな
じ事也いかで昔におとるべきと深夜に樓上をしのび
出で淺茅原に行鏡が池に身をしづめけり時に年わづ
かに十七夜明てこの池の樵客牧夫ども池のほとりの
松に小袖の掛あるを見て恠てこれを見るに小袖をか
けたる枝に短冊をさげてあり其歌に
名をそれとしらすともしれ猿澤の

跡を鏡か池に沈めは
かくありしより采女としられけり所のものも哀にお
もひ死骸をとりあげて此處に埋たる也

道冲菴

道冲はもと佐々木某なり此人風流をこのみ詩歌を嗜
嘗て吉原角町山木屋の名妓花桂といへるもの無能の
人をきらひて風流ある人を深くしたひ遂にこの人と
なれそみ嚴霜積雪の寒威をもいとはず風雨の闇を浸

して通ひければ世のつとめ自おこたりがちなるを深
く諫且古人の詠歌に

風ふけはおきつし波立田山

夜半にや君かひとりゆくらん

といふを思ひ朝夕忘るゝひまもなく遂にこゝろ鬱結
して痞といふ病に惱ふしてありけるにも來ければ花
桂いへらく若我身まかりなば早く婦人をむかへて花
街に通ふことをやめよといひ別れて後その身むなし
くなりぬ揚屋半四郎が許より此ことを佐々木につけ
ければ大に驚き慘然として暫くありて一首の詩を賦
せり

他日暮花思眷戀攀枝弄色愛花深水姿在眼枯無跡
未免六塵境裡心

かく詠畢て其もとよりをきり僧となり名を道冲とい
ふ身に麻の墨染をまとひ手には念珠をひねり遂に淺
茅原鏡池のほとりに心月庵と隣り茅屋をむすびて原
頭の松風に煩惱の夢をさまし角田の流水に愛著の垢
をあらひ佛につかへるより他事なしまかれども風流
の癖あれば勝境陳跡を尋て其珉滅せるを憐み鏡地の
芥にまつまりて草の生茂りたるを刈池中に辨天の小

社を建立す妙喜古墳のあとに一字の堂を立且一口の
鏡を鑄て其銘及び序文を自撰し古跡再興のことを誌
せり其頃まつさきの神明に詣て

烏帽子著ぬ神代もかゝる紅葉哉

萬治元年七月二十七日病にかゝりて身まかりぬ享保
中彼鐘を俗僧どもの事を解せざるにやこれをつぶし
總泉寺のかねの貫目にたしけるこそ惜むべけれ
此總泉寺に宇都宮彌三郎及千葉氏の墓あり

福聚院

橋場にあり此寺に安藤東壁の墳墓あり服部南郭の銘
碑銘考に詳なればこゝに略す以下碑銘類これになら
へ

法眼寺

同所より寒巖馬孟照の墓あり名孟照字文奎寒巖は其
號なり碑文馬道輝書平陵

勝蓮寺

千束庄今戸の後にあり長松寺と隣るこゝに徂來先生
自書隸字の碑あり其女子の墓表也又婦人の碑あり其
門人南島藤元啓の文なり

春慶院

淺草三谷町也こゝに高尾の墓あり按ずるに二代目の
高尾なりこれを萬治高尾といひ又伊達高尾ともいふ
下野國鹽原郡鹽釜村百姓長助といふものゝむすめな
り萬治の頃京町三浦屋の別莊淺草三谷町にあり高尾
病に伏して此別莊に居る其頃春慶院常念佛ありて近
く聞ゆ高尾病體にてこれをさゝもし身まかりなばこ
の寺に埋葬せよといひ置て萬治二年己亥冬十二月五
日此別莊にてむなしくなりぬ
碑面額に楓葉の紋をほり其下に法號を記し傍に辭世
の句あり

轉譽妙身 萬治二年十二月五日

辭世 寒風にもろくもくつる紅葉かな

按ずるに三浦が寺は淺草諏訪町樵寺なれど彼遺言に
よりにてこの寺に葬る此高尾を伊達公に殺されしとい
ふは甚妄説也伊達公高尾を身受の志あり其半に病て
死せり故に薄雲を身受ありこの住僧いふ高尾の墓四
方塔にて極念入たる墓なり殊に四五年以前總墓地の
地形を直すに高尾の石塔もしばらくとりのけたるに
其下は石室なりこれ葬式も伊達公よりいだされし也
貞享四年板本江戸鹿子にも二代高尾病によりて死せ

りと記す

吊高雄墓

一自佳人去苔碑幾載經唯看楓樹色今日爲誰青
高尾といふ名に一代あること別に高尾考ありこゝに
略せり

金龍山

待乳山なり又聖天山ともいふ聖天の社あり夫故下の
町を聖天町といふ日本橋より奥州迄の通なり山の東
は橋場なり淺草川流て社の後新鳥越の橋日本堤の下
まで沙さし入昔吉原にかよふもの皆この金龍山のふ
もとにて友をまちあはす元祿二年板本江戸名所ばな
しに金龍山で同道しよもどりがひもじか米饅頭と小
唄にうたひける由これは其頃聖天町に米饅頭を初て
製してあきなふ根本の鶴屋といふ菓子屋あり遺佚が
狂歌に

根本はふもとの鶴屋うみぬらん

米饅頭は玉子なりけり

貞享の頃この山に兵庫といふ神樂乙女あり山には古
木の松生茂りて仁王門の下には蓮池あり其ほとりは
皆茶屋なりこの兵庫は母子ふたりにて辨天社にて神

樂を奏すれば颯々の鈴の音妙なる聲にて神樂うたを
唄へば林木の枝も振ひ蓮池の魚もうかみ出三谷がよ
ひせる人も惘然としてこれに見とれ暫立とまりける
と江戸鹿子に見えたり又社の東に石碑あり待乳山と
して其下に戸田茂睡入道恭元と書て
あはれとは夕越て行人もみよ

待乳の山に残すことのは

其碑陰に

翁諱恭元號茂睡本姓戸田氏嘗以台命爲渡邊某所養
仍冒其姓官事江府有歲矣翁性嗜和歌天和元祿之際
告老遜世其學益聞著撰多傳後世稱古調者皆以翁爲
嚆矢焉若其隱家梨下不索橋之號皆因其所詠佳句而
世人稱之當時翁自立碑於待乳山伸懷一句遺愛千載
然而年紀邈焉碑名兩斷恐失其跡豈不惆悵乎於是脩
其古碑以別石覆之聊誌其大略永傳其志於後世而已
維時寬政九年丁巳夏五月

姪孫

櫛分規貞撰
門馬永胤書

隱家のうた

塵の世をいとふ心も積りては

身のかくれ家の山となるらん

淺草にすみけるが本郷丸山本明寺谷に移る時親族源
光豊といふ人のもとより

隱家は山もとめす世を渡る

心やかけし前のたなはし

かく讀ておこせたるに

我庵は山もとめすたな橋の

みしかくみつる世を渡はと

これより不求橋と名付けるとなり紫のひともとに云
茂睡はよき武士なり名利をはなるといふは武士の
道にはあらず儒者佛者の上にある事也武の家に名利
といふはせつなものはなるべきものにはあらず今隠遁
の身となりて一鉢の設もなきほどならば黃花青銅の
すこしなりとも身に應じては千金萬貫にもあたるべ
しそれをいやしともはなるといふは大利と見定た
る所あるべし大人の證なり庵の内につくると大きな
る印籠のあるより外はなし其印籠は丸くこしらへ朱
にて塗内に短冊を入れて提けるよし

むすふ庵を人の隱家といへりければ

人しれぬ身にまかすればおのつから

もとむともなき隱家にして

月を見てよめる

すむとも世に隱家の主から

問れぬ影に月や恨みん

春立こゝろを

塵ならぬ霞も今朝は立初て

春てふ名こそ空にしらるれ

上野へ花見にまかりて清水の櫻にむすび
付はべる

花といへはなへての色におもはまし

山の櫻のけふにあはすは

納涼

すゝしさをいかゝ岩根の松の風

いつのたか世に吹はしめけん

秋夕雲

吹残す風も高間の峯の雲

かゝるゆふへは秋にまれなる

法體せし時

身をかつてをしみし家の名をたにも

捨れは捨る世にこそ有けれ

述懐のこゝろを

よるくの夢にならては身の上の

うきにならばぬたのみなりけり

曉

思ふかな君につかふる人や今

車よそひてあくる待らん

逍遙院藤原實隆公の住吉奉納千首の題を

以て詠ておさめ奉りし歌のうち覺しは

(佃島の住よし)

此浦の入江の松にすむ月や

みなれそなれて幾秋かへん

恨絶戀

今ぞしる恨しことを恨とて

絶しやたえんかこゝとなりとも

菊蕊のこゝろをよみ侍る

夕日影残りし友もまつ原に

中ひきよせて休む草かり

人の追薦にむの字をはじめにおきて春蟲

といふことを

昔たれみけん宿の池ふりて

みくさかくれに蛙なくなり

草菴記

我聞大隱隱於市朝學有戶田氏某者卜居於相左良位
數十步之外非山非浦所謂隱於市朝者也其菴雖小而
又獨立於群家多絕景矣遠望山櫻則思荆公之吟近
見川流則感夫子之言秋月當欄而掛明鏡冬雪粘軒而
貫白玉迎朝暉送夕陽或徑路絲々持遠之口或溝渠涓
涓爲井之了且亦菴主非論道非講書終日白眼點坐箕
踞有何毀乎有何譽乎主舊居于祿有年矣故嗜兵器
凜然不膚撓可謂之丈夫宜哉隱於市朝也予問曰胡爲
如此乎主莞爾笑曰非魚不知水中樂也吾子夫待爲魚
之曰

熊にあらず虎にもあらて淺草に

おきふす我を誰か知へき

此記は岡野某とかやが書たるとぞ歌は主の入道のよ
みて書付たるなり茂睡一子あり伊右衛門といふ天和
二年壬戌十二月晦日病にかゝりむなしくなりぬこれ
を淺草金龍寺に葬り手向の碑を立

風の音昔の雫もあめつちの

絶えぬみのりの手向にはして

高野山にのぼる時相州大磯驛鳴立澤に碑を立

あはれ思へ昔の秋のそれならて

鳴立澤に残すことの葉

此碑今鳴立澤西行庵の山松林の中にあり茂睡實永三
年七十七にして身まかる其塚金龍寺にあり

観音堂

推古天皇の時濱成武成熊成といふ漁人淺草川の魚に
打ける網にかゝり観音の上らせ給ふを彼三人山の宿
のほとりにかゝりに堂をかまへ藜にて家根をふき観音
を安置せる故にこれを藜堂とよびけるを今あかん堂
といふ建暦元年に苜萱道心高野山に入し後洛外の鳥
羽村に茅屋をむすびて居これを苜萱堂といふを今か
やん堂といふの類なり梶原景季奉行して今の所に安
置せりこの堂の西の大なる柱に指のあとありこれは
鎌田又八といふ強力なるものゝ巨指にてをしたる痕
なりといふ正面施無畏の遍額は玄岱の書なり此玄岱

字は子新天猗と號す肥前長崎の人也其祖高壽覺は大
明福建漳郡の人也本朝に來りて薩州に居せり父名は
大誦年十六にして西の方齊魯燕の間に遊ぶこと十三
年にて商船にのりて東歸し長崎にいたれば父既に没

して母のみあり居ること數年長崎唐通事の老て死せ
るの目めされて通事の役となる深見を氏とするは高
氏の渤海より出るを以て也渤海の字和訓にてふかみ
といふ故なり子新は大誦か季子なり幼少より穎悟な
るゆへ其父命して書を贈獨立にならばしむ獨立は杭
州の人にて本姓は職名は曼公大明の亂を避て長崎に
來る子新文章公の初文學あるを以て徵用せらる
又内陣にある聯は白牛洞孟寬の書なり按ずるに此人
は大明の人にて文祿中朝鮮の役に援兵として大明よ
り朝鮮へ來る時我兵の爲にとらわれ日本へ來り武林
次庵といふ武林は大明にて郷里の名なる故姓とした
る也本姓は孟氏名は二寬白牛洞と號す明曆三年壽を
以て終る

武林家譜

孟二寬 稱武林 次庵

子 渡邊半右衛門 野公 仕淺

半右衛門子 林瑞 禪僧

同 武林唯七 淺野公之臣 有復讐之功

子 武林左近右衛門 仕安

弟 武林兵助 仕長州 毛利公

嶺墨 廣嶋國分 寺之住僧

同 女子 武林半六

奈良茶飯

明暦大火後淺草金龍山の門前に始て茶店に奈良茶飯豆腐汁煮染煮豆等をとのへて奈良茶飯と名づけ出せしを江戸中端々よりも金龍山の奈良茶くひにゆかんと殊の外珍らしくにぎはひしと事跡合考に見へたり奈良茶といふは和州奈良の土人朝食に茶粥をもちゆる故に茶飯を奈良茶といふ也豆腐を串につらぬくを田樂といふは田樂の伎往古盛なること太平記に見へたり今豆腐串を貫もの其形田樂の伎木に登り連飛これに類せらるとして名とする也

二十軒茶屋

昔はこれをお福の茶屋といふをいつの頃にかあやまりて吳服の茶屋といふふるき人のいふ六七十年以前まではお福の茶まいれと呼しと也今二十軒茶屋といふ

久米平内石像

平内は武士の浪人にて劍術を教ゆるを業とせしをその名の後世に残さんことをはかりて存生のうち己が像を石にきざませて觀音地内に建たるなり平内姓は兵藤なり久米とは其妻の名也今は久米の平内とて久

米を其姓とおもへる人多し平内夫婦の塚は駒込分鰻繩手の大智山海藏寺といふ禪寺にあり今此石像に縁むすびの願かけするは其故をしらす

柿本祠碑

龔惟柿本神者人丸之英靈和歌之聖宗石州高角峰播州明石浦皆有祠祭祀朝市所景仰古今所嚮應千載昭昭德輝滋彰矣石川子源年恒嗜和歌敬斯神有時近獲靈像是古祠客墳阿自刻靈像百體之一也四百年之遇增不堪幸感晉宇淺草寺新營一祠安斯靈像輝神德於永世建碣銘垂來由于不朽云銘曰南朝老和歌神詞林榮矣萬春飛影於淺草寺和光于東都人一宇祠一片石德輝灼灼麟麟

寛保四年甲子春正月

琴臺紀恭忠撰

鳳岡關思恭書

琴臺は伊藤東涯の門人名恭思字は相恕拜崎氏一の字は蕃臣本姓瀬戸東都に住し淡州戸田侯儒臣なり

業平墳

牛嶋の内にあり業平此國へ下り入間郡三吉の、里にひふはなきやそと讀しその頃は今の本所も入海にて有し故に舟遊びにこゝに來り給ふ所に俄に波風あら

同じ

心中石

心中石とは石原のかどにある石屋の前なる夫婦の石像をいふこれを其石屋に問しにふるきことにてなごなるやそのこともしらすといふ世人たゞこれを心中石といひつたふ豊後節妻重金かたらひに心中石とおとにきく萬場の町をあとになしといふ此石なり

東江寺

玉嶋山東江寺は多田藥師のある寺なりこゝに東江書則の碑あり板本となりて世に行はる又百里居士松林山人の墳墓あり

百里居士碑

居士姓高野諱勝春字文館號百里江都人以寛文六年丙午十月十二日生享保十二年丁未五月十二日病卒享年六十有二葬武州葛飾郡東江寺居士爲人恢達自幼耽好風流長俳諧體嘗師事芭蕉老人窮其奧老人沒復從雪中叟遊前後幾五十年所好如一海內好事之士知與不知想見其風流莫不欲納歎而受其術者而居士常疾世唱其術者浮薄乞古不欲與之交生平所友者獨白雲琴風二三子耳以故人每能屬龍門之望云先卒頃

くなりて船くつがへりて供人不殘溺死するに業平の立給ひたる所は陸となりて水に溺れ給はずおはしけるそれを所のもの見てたゞ人にはあらずとあがめ舟にて死たる人の死骸を求て此所につかにつきとめ業平のかたちをも寫し木にきざみ御影とすこれよりこの塚を業平塚といふ所をも業平村といふ今小梅村へ行所の橋を業平橋といふ業平村への橋故人のいひならはせるなり業平の御影を天神といはひ業平天神といふ或人の云業平の事在中將のことにはあらず上總の國になりひらといふ名のりの侍あり武藏の國へ攻よせ大に戦しが軍利を失ひ此所にて打死せしをここに塚をつきこめしより業平といふといへり江戸名所記の説この二説相違せりいづれかたしかならず

嬉の森

嬉の森は大川端の屋敷にある大木の椎なり元祿十四年榎本其角が焦尾琴に石原の椎のしげしとだに人目まれなる境に小家そむき立こめてと云々これを嬉のもりといふは吉原がよひの人舟にて歸るに此所にて曉なれば歸るに首尾もよく嬉しといふより名づけたるなり向ふの岸の松を首尾の松といふもこれに

刻懐談自若謂旁侍病惟馨等曰爾輩記之吾請以所好終之乃操筆作辭世大笑而逝惟馨等乃謀勒其詞并狀一二以追其志爾庶乎使覽者有感其爲人也

享保十二年丁未六月十六日 孝子 惟馨立

墨花堂佐文山書

松林山人は長崎の人江戸に來り書を以て世にきこゆ晩年に僧となり諸州を周流し江戸に歸り寛政四年壬子秋八月十二日没す

(如道人いふ松林山人は俗稱松林羽天次といふ沈南嶺方西園が花鳥の法を得て筆跡世に高く淺草日音院の寺内に草堂をかまへて罷在り余が友葛因是益田勤齋などしたしかりし)

平惇信墓

石原の横町本覺寺といふ日蓮宗の寺にあり姓平林名は惇信字は明儀俗に庄五郎といひ消日居と號す江戸本町の人書を細井廣澤に學び後一家をなし大に世に流行す寶曆三年癸酉五十八にて没す

梅莊

本所龜井戸の後にあり梅屋敷といふこの梅もと初代高尾幼穉のとき鉢植の梅なりしが地に移して大樹と

なる寛永の頃水府黃門公此地にあそびこれを愛し臥龍梅の名をたまふ今その主を喜右衛門といひ菴を清香菴と稱す

吾妻森

吾妻森は橘姫をまつれる所なり龜井戸村に屬す山縣昌貞が碑文ありこゝに妙海の古跡あり人これを知らず妙海は淺野公の義士堀部彌兵衛金丸のむすめ也按ずるに堀部氏もと江州佐々木家の後胤馬淵氏なりしが堀部の嫡子壯年にて出家し萬山と稱し加賀大成寺の住僧たりこれによりて母方の親族なる故備前大炊公の家より安兵衛を養子とす妙海幼名をおこうといふ八歳の時より淺野公の奥に仕十三歳のとき淺野公江戸へ參府し十四歳の時大變にあへり赤穂城没落し夫より大石氏並に父に隨ひ山科に居十七歳の十二月讐を報ゆ妙海は安兵衛にめあはずべきいひなづけのみなれども貞節ありて生涯他へ嫁せず十九歳にて剃髮し尼となり其名を妙海といふ回國の執行者となる途中旅のさわりなきために薄墨をかほにぬり前には雙といふ札をさげて回國せしとなり嘗て貞節の志見届し故大石氏より金三十兩あたへこれにて草庵をむ

すび志をとげよといはれし故此内半金斗行脚の心あてとし残り本所龜井戸にて田地を調へ或は小遣とし僅残れる金は大石より拾はりし遺物ゆへ少しばかりにても大切に致置しと世右田地より作物とて年々米六斗金二分づゝ送り候由これも滯有之極の通りは不參とも出來ることなればとて強く催促もなくさき次第に致置しと也此吾妻森の地内に草庵をむすび居る内に毎月五度づゝ芝の泉岳寺墓所へ詣でけるが年老てより道遠きゆへ遂に泉岳寺前へ引移住居せしと也安永七年二月二十五日九十三にて没す義士の墓のほとりへ葬る碑面に寶山妙海法尼と記あり

義人叢に曰大石氏久しく山科に住居して既に義士一起と聞へける故此所を立さらんと思へども永く住居の約束にて居筋なく立退ては其所のものを始他までも疑あるべし第一吉良家よりの間者に察せられんことも心もとなき故此村の地主へわざと申ぶんをしかけそれをいひ立にして立退べきと計たりこの所の法にて他所より參り居るものへ山科屋敷賣き事ならざることを地主強く買切置旨申かけしに地主より堅くならざる由心外なる顔色を

して久敷住居可致所に左様なる不自由の事故永居も安からず立去べきとて夫より八幡の郷中一色頼母殿領分に引越し暫く足をとゞめ其後伊賀の雲津に大石氏兵衛の同輩古き知音なりし故雲津へ引こし農家のあき店をかりて居此所より吉良家の様子を伺ひて義士一同に夜打の内通一決せし時は妻子等も不殘此所に殘し置一人二人づゝ夜々人知れず立退けると也妙海も山科より雲津まで父にしたがひて居けると云々

大雲寺

本所押上村にある淨土宗の寺にて猿若代々の菩提所なりこゝに猿若の寶物を預り置按ずるに浪人にて山左衛門といふものゝ家來猿若寛永元年江戸に下り美童におどらせ自分聲して唄ひて大名猿若などをして西川岸の地に芝居を立て興行す御城へ召れて狂言盡をいたし鳥目並猿若狂言の裝束袖なしの羽織のごとく表黒緋裏紅綿入表のすそに立浪背に銀杏の葉の大紋一つ付たるを頂戴す同九年安宅丸御船江戸入津の時金の鹿を給はり音頭を採らしむ又明曆火事以後萬治年中御城造營の節御矢倉揚り候時又赤き緋の猿若

装束をくだし置木遣りの音頭を探らしむ右の品々この押上村大雲寺に預り置享保八年癸卯二月中旬芝居開闢より百年の壽と名題を出して今の芝居にて彼新發意太鼓猿若の大名とむかしのごとくに興行して諸人に見せ且右の古裝束を醫者のかつがせありく薬の上箱のごときなめし皮の覆のかゝれるものに入たる中より取出して是も諸人に見せ其由来を述たりその裝束入たる黒ぬりの箱はふるくむかし様の箱なり太夫勘三郎並一座の者麻上下にて列座しその古裝束を諸人に見するは大谷廣次といふ猿若委細のわけを申述しは市川團十郎(後海老藏といふ)なり扱しんぼち太鼓の子供をどりの内勘三郎嫡子明石を團十郎諸人に披露す次に狂言の猿若をば二代目中村七三郎といふ猿若太夫勘三郎名代としてこれをつとむ猿若の裝束は紅緋の長手掛はうかぶり緋紅の股引黒緋の表紅緋の裏の袖なし羽織の上に太く丸き紅緋の帯をしめその端の長くあまりたるを右の手にてくるく廻しながら能狂言の様なるせりふを地聲のこわ色にていふ大名の裝束は濃照柿色の麻上下に小刀紺の熨斗目也

按るに古へ女舞といひしは全く白拍子のことにて末代の大頭なり笠屋三勝桐屋大藏などいふ女人水干に袴平帯にて中啓を以て猿樂の用ゆる太鼓の頭ばかりを打かけく平家物語等を唱歌にして扇を差掛まふ今様慶長の頃より一變して京にて舞子江戸にて躍子といふもの出来たり又文祿の頃出雲國よりお國といふ女京都に來り緋の黒衣(黒衣は僧の直也)を着し眞紅の唐打の長く細き紐二筋をもつて鉦を襟にかけて無常變易の世を稱名聲にてとなへ廻り舞ふこれ七條躍念佛と呼びたりことに名古屋勝兵衛といふ武士の子に同山三郎といふ男十五歳ばかりの頃蒲生飛騨守氏郷の家來にして天正十九年奥州九戸合戦のとき彼城没落の砌猩猩の振袖の羽織にて屏を乗りて功名すその後程なく浪人して文祿の頃京大坂に遊ぶ又勝兵衛は無雙の豊饒たり家督を繼て平日榮耀にくらす今は山左衛門とぞ稱すしかるに此男お國と密通し元より山左衛門美男風流にて猿樂の能の間の狂言より思ひ付て家來のおどけものに主人山左衛門と同國尾張の産猿若といふ下人をしくみて猿若大名と云今様狂

言とり立お國が躍念佛の間とし且又新發意太鼓花笠躍などいふ十二三の美童等青き戻子張り金銀の紙にて縁骨をよりはり同じ紙にて櫻の造花をあまた付たる赤き丸紐の笠をかぶらせ唐兒様の出たちにて金薄彩色の平太鼓の指渡し一尺餘なる左右の縁に振太鼓のごとく木鑾子ほどのものを糸にて付てその太鼓を打せながら舞をす其太鼓長二尺四五寸ばかりの柄をつけて持せたりその外童男女人を以て興したる今様也この時その名をお國歌舞妓と唱ふ豊臣太閤朝鮮征伐として肥前國名護屋出陣の留主はお國並山左衛門淀殿御前に出て此歌舞妓を催し御覽に入れけると也これより頻に其類あまた京大坂にとりくの風流出来たりしかるに慶長三年太閤薨去以後時移事換て寛永元年に其山左衛門が家來猿若江戸に下りしとなり

墨水消夏録卷の二

目録

- 一 蝶寺
- 一 蝶傳
- 芭蕉傳
- 丈草傳
- 富岡八幡
- 歌仙櫻
- 園女傳
- 倭文字墓
- 眞淵傳
- 本八町堀
- 釋迦嶽墳
- 間喜兵衛墓
- 伊川傳
- 茂左衛門傳
- 東叡山
- 秋色櫻

墨水消夏録卷の一終

班女塚
多宮望太郎墓
深草元清鐘銘

墨水消夏録卷の三

江戸 蘭洲東秋飄著

一蝶寺並傳

深川高橋黃龍山宣雲寺世に一蝶寺といふは一蝶島より歸る時に暫此寺に居杉戸屏風掛物等迄悉一蝶が畫なる故也一蝶本姓は多賀承應元年攝洲に生る父は多賀伯庵といふ醫師也寛文六年十五歳の時江戸に下り書を好て狩野安信を師とす名は信香といふ剃髮してより潮湖と稱す後一家をなせり書を佐々木玄龍に學び俳諧を嗜て芭蕉にしたふ翠裝翁牛丸曉雲舊草堂隣松庵隣壽庵北窓翁等の稱あり性膽勇なれども母につかへて孝あり嶋より歸りて其畫ますく世に行はる嶋に流されしは元祿六年十二月八日三宅嶋へ流さるこの時本銀町三丁目村田半兵衛本石町四丁目佛師民部三人百人女薦といふ書物一冊本屋摺出しぬこれは諸大名方輿方器量の善惡又食物の好不好其品々を明白に書たりよりて詮議の上右三人遠嶋となる寶永六年に大赦にあひ歸國せり嶋に居る間も畫を母に贈り

て衣食小遣に充しとなり一蝶母の名を妙壽といふ一蝶謫せられし後は其友人横谷宗珉檜物町の宅に養はる一蝶膽勇なることは或時兩大國の君石燈籠を争ひもとめ給ふと聞てやがて走行て數多の金を出しておのがもとめて狭き庭のうちにつしける折しも初茄子を賣ものあり價の貴をいはず需て生漬といふものにして喰ひかの燈籠に火をともし天下第一の歡樂なりといへり其磊落豪放凡此たぐひとぞ或人云嶋にありしときある朝草花に蝶のとまりしを見居ける内に赦免の船來りしかばこれより一蝶と改とぞ文雅も有し人故其遺文發句畫贊等もあり

朝清水記(嶋にありし時の作なり)

唐土に食泉あり和朝紀の路に毒水あり近江のや醒が井關の清水大原や清和井隴の清水など代々の歌人のめでたき言のはのこゝろふかしされば往昔の伶僂人も我が此嶋の浪のはなれ鶴とはなたれ來らずや灘の鹽燒蟹の衣はきても見すやのこれる歌枕もなくといまれる日記も見えずひたすらに神のみ給へる嶋のたれかまゝの名所とてまさきのかつらつたへきぬれば鳥のあとせし文字もさだかなら

す山木森々たれどもながるゝ河もなく湛たる池もすくなし一嶋水かれて只岩もる雫の雨の朝の潦濁をしのべる便となれり實や公のかしこき錠殊にかく罪あるを遷さるゝ地宜なる哉中就て我が住阿古の浦山は猶あまさがる鄙の夷中路漁樵交り隣すれども貢の鹽の跡にたぐへて朝な夕なの烟みじかく夜寒の床の明ることながし然ば致景五村に秀で朝暉の天の原富士の高根いくしま山の遠に聳へ白扇を逆にかくる東海の天は隠士丈山の詩にて聞く法顯三藏の五尺に漢朝扇を見たりし心をかよひて故郷に詠めなれし形見は此山のすがたばかりぞと潮に泪にひちまさる袂もうち覆ふ間に浪の烟立ふたがれる雲に髣髴として見へず成もて行已に夕陽浪にひたせるころ富賀今崎の釣をぶねをのがし、いとみあひて家路にかへる欸水の聲心をいたましむる媒となれり猿あらば叫つき山峽後に峙つ鶴あらば巢つき怪松門に存せり月雪の眺望あはれ罪なかくて見まほし松の木はしら竹ある垣不破にはあらぬ茅庇荒行まゝに守り捨て夏待やどのなり瓢雨に軒ふくいやすだれ庭にちかき岩壁に藤蘿をつたへ

る飛瀧を見つ是や嵇康が山澤の水に元徴之が黃州の竹をもとめて晝夜をすてぬ算をうけたり杜子美が浣花溪に謫せられて奴僕がはこぶ巫峽の水消渴の疾を安して竹竿濃々として細川流と作れるなど坐流泉喉木の曲枕に傳ふ松のあらし棘が中をくぐる水のみさほにおつる竹の滴彼に耻是を友とす予は本武陵畫工の庸人されば三日詩をいはざれば口荆棘を舎と年月の手なれ草も忘草に根をかへて朽木書の跡のごとくにきえもて行もはかなしやせめては巨勢千枝の古き跡をたづねまほしきに彩種覓むるに疎ければ丹青器に書き紙墨机に絶ぬ高然暉が重れる山季唐が野飼の牛も目前に見傍になれ行ふことの静なるにつけては捨べき時に術をも得ぬべきかそれは齡半白に向とし懶惰日にそひてまかり斧をとり鋤をもつ勢ひもなければまほし世わたることわざに鄙吝欺言の商家となりて軒一宇の庵を築きその中に陶朱公が富貴をこめて伯倫が酒陶潜が米をかさね樵夫が糶に宛て漁叟が羨に貸侍る時は徐福が船をたのみて蓬萊に不死の藥を俟つる時は孫農が一束の藁をたくはへす胡蘇臺烏阿房

狐の時に空し算の竹もくちたり水は岩根のあるじとなりて幾世經ぬべき

埋むへき浮身はいかになからへて

けふまでむすふ苦の下水

于時元祿壬午春

散人牛丸執筆於阿古邑茅舎

朝妻舟

あだしあだ波よせてはかへる波あさつま舟のあさましやあゝまたのひはたれにちぎりをかはしていろをかわしていろをまくらはづかしいつはりがちなるわがとこの山よしそれとても世の中

按ずるに隆達は破れ菅笠しめ緒のかつらながくまはりぬこれから見ればあふみのやと前書したるもあり元祿十六年板本松の葉のはうたの部に寛文十一年板本糸竹初心集に破れ菅笠やんやしめ緒がきれていのならゑいさゝにもせずゑひさんさすてもせず中院通勝入道也足軒の歌にこのねぬる朝妻舟の淺からぬ契りをたれにまたかはすらん

おなじく

うきねつらさのまつちの山の風ゆふこゑくれてささを舟あゝさだめなやとこのうら波友なれちどりちどりたへぬおもひに月日をおくるもあだ人ころよしあふまでのうつりが

おなじく

あだしあだなる身はうきまくらならぬほどのこのつゆあゝいくたびかそでにあまれる涙の色をあゝたもとのいろをみねのもみぢば飛たりこがれて枕のなみだあはれと人のとへかし

おなじく

うきをかたらん友さへなくてなぐさめかねつわが心あゝうつゝなやすぎしつたへのその水ぐきのくろみしあつとを見るにつらさのいやますなみだはたれゆへぬるゝあわれとそでもとへかし

短夜の早歌

すみなす床の一構鹿の投入ちがひ棚梨陰の硯たま手匣ふたり寐よとのヤヨヤ文枕皆紅の三ッ蒲團くもをさそひてうづ高く一爐にたぎる松の風合手本調子ことにすぐるゝさみせんの人だち歸る閨のうち折しく菫庭のかたゝ語り残せしみじかよとともね

られぬうき枕蚊屋の一重の薄月もるゝもれて淋しき終夜ともに啼るゝほとゝさす

按ずるに此歌しのゝめゝいつ夜が明たといふ前の唱歌を花都といふもの後に作り足し今はしのゝめといひ又蚊屋つり草ともいふ音曲集松の葉といふ雙紙に永唱の部にのせり

往事夢に似たりさめたるにあらず又うつつにあらず或日螺舎其角とゝもに深川なる芭蕉庵に遊びゆふべに歸る途中の吟

たがかけのたがたかかけて歸るらん

螺子句にはつんて

身をうすのめと思ひきる世に

芭蕉も破れ螺舎もくだけうせたるを我のみ残る深川の今日思へばはからざる世や

(一蝶時に六十九)

戸塚にて

この砌ひたり鎌倉筋鯉此句温故集にあり

大津繪川津侯野角力の畫に

大津繪に負なん老の流足

投節

待乳しづんでこすへのりこむ今戸橋土手の相傘片
身がわりの夕時雨首尾を思へばあはぬ昔の細布ど
ふ思ふてけふはござんしたそふいふことをきくに
この時奈良茂紀文などに付添ひ吉原へ入こむに
いつも土手を行時はこれをうたひしとなん
(投節)一蝶云〇まつち沈んで木末のりこむかぶ
ろぶねすあし自慢のかもめも寒し遠千鴻そなれ頭
巾にかわらたがやす今戸町里出の落葉ちらりと
舟路うかる、角田は浮名川がよひしてつもの眞土
のやま／＼とやせんかくやと里をしぐれのそめか
ねて浅茅がはらに風をよぐ〇右太田南畝先生ふも
との塵に見えたり)

畫軸の跋

夫大和繪はそのかみ土佐刑部大輔信光がすさみに
堂上のうや／＼しきより田家のふつ／＼か成さま岩
木のたゝすまひやり水のめいほく是に始りて末々
に流れ予が如きの拙なき迄是を元とす近頃越前の
産岩佐の某となんいふもの歌舞白拍子の時勢粧を
おのづからうつし得て世人うき世又兵衛とあだ名
す久しく世に翫ふに又房州の菱川師宣と云者江府

に出梓におこしこぞつて風流の目を喜ばしむ此
道子が學ぶ所にあらずといへども若かりし時あた
しあだ波のよるべにまよひ時雨朝がへりのまばゆ
きをいとほざる頃ほひ岩佐菱川が上に立ん事を思
ひてよしなきうき名の根ざしのこりてはづかしの
森のしげきことぐさもなれりさるが中に事にあた
りて謫居にさすらへし事十とせにあまり廿とせに
近きをありがたき御惠のめでたきもとの都に歸り
來ぬある人昔の筆の四時のたはれ繪をふたゝび予
に見す其頃は心たくましく眼すゝるに髪すぢを千
筋にわくることわざもことたらざりけらしまかし
今の世のありさまにくらぶれば髪のはどるりをこ
えずふり袖大路をすらす唯あまさがる田舎女のす
がた繪とも思ふべからん螢星うつりかはりて此一
巻を見る事浦島が七世のむま子に逢へるのためし
にひきて且は喜をそふるのこゝろにてこれが爲に
跋す
一蝶歸國の後宣雲寺の住僧へ形見にとて七十の齡に
して寺院の障壁にこと／＼と畫す惜哉大水の時損じ
其後消失して今はなし一蝶享保九年正月十三日七十

三にて没す墓は麻布二本榎承教寺塔中顯乘院にあり
碑面に英受院一蝶日意と記

(一蝶辭世〇まさらかすうき世の業の花とりもあ
りとや月の薄墨の空)

芭蕉傳

芭蕉姓は松尾名宗房平氏彌兵衛宗清の苗裔俗名は甚
七郎父名は儀左衛門母は桃池氏四子あり與左衛門半
左衛門忠左衛門次は蕉翁なり正保元年甲申伊賀柘植
郷に生る笠翁物語に云藤堂和泉公の臣にて藤堂新七
殿の料理人となる貞佐物語に云面にうすいもあり殊
勝なる人物なり蕉翁公とにも北村季吟にしたがひ
道を學ぶ寛文六年丙午公の喪にあひ隱遁の志ありて
しば／＼仕を辭すれどもゆるさず因とまり番の夜書
置し且隣家の僚友に一句を殘して亡命せり

雲となり輪となる雁の行衛哉

それより伊賀に隠れて専俳諧に志をふかうす延寶八
年庚申伊賀を去て江戸に來り其同盟なるを以て小石
川小澤下尺といふもの、許に居遂に剃髮して桃青と
稱す(或曰禪語に依てしかいふ)時に年三十七庵を深
川にむすび俳諧を業とす其門人杉風といふもの芭蕉

樹をおくるこれを庭に植て芭蕉庵と稱す天和三年其
庵延焼に及びて甲州鶴澤谷村のほとりに遊び貞享元
年芭蕉庵再なる笠翁物語に白翁の佛だんは壁を丸く
ほりぬき内に砂利を敷出山の釋迦の像を安置し其庵
中へつゝあり臺所の柱にふくべ掛て有米二升四
合ほど入べき米入なり杉風文鱗といふ弟子のみつぎ
にて米なくなればまた入て有もしその米間違ておそ
きときはふくべから／＼なりければ自もとめにも出
られし由かつ翁常に茶のつむぎの八徳のみ著けるよ
し

山口素堂

瓢銘

一瓢重泰山 自喚稱箕山
莫習首陽山 這中飯顛山

顔公のちまたにおへるかたみにもあらず惠子がつ
たふたねにしもあらず我垣根にふたば生いにいで
しより軒端はいまとはりて終に花さき實をむすぶ
大さ五升ばかり也これをたくみにつけて花入る器
にせんとすればそのゝりにあたらずさゝるに作り
て酒をもらむとすればかたち見る所なしある人の
いはく草の戸のいみじきかの入べき物なりとかし

こくもいひけんみづからよもぎのこゝろあるかな
 やがてもちゐて隠士素翁にこふてこれが銘を得さ
 しむ其ことばは右にありその句みな山をもとめて
 送らるゝがゆへに四山とよぶ中にも飯類山は老杜
 のすめる地にして李白がたはれの句有素翁李白に
 かはりて我貧をきよくせんとすかつむなしき時は
 ちりのうつはとなれ得時は一壺も千金をいたきて
 俗山もかろしとせんことしかり
 貞享三年草庵にての句

ふる池や蛙とびこむ水の音

この句尤人口に膾炙するものなり元祿元年杜園を携
 て吉野山にあそぶ翌年三月廿七日曾良を携て東奥に
 遊歴す奥の細道といふ書を著せり三年庚午粟津の草
 庵に行て歸る七年甲戌嵯峨に遊び去來が落柿舎に寓
 す冬十月十二日病にかゝりて浪花の客舎に没す年五
 十一門人其角等これを粟津の義仲寺に葬る

芭蕉遺狀

一杉風へ申入候永々御厚志死後迄も難忘御座候不慮
 なる所にて相果御暇乞も不申無是非事に候彌風雅
 御勉老後御樂可被成候

一鱗子へ申入候永々御厚志生前死後難忘御座候御内
 室様貴様にも不相替御念頃之段忝存候不慮なる所
 にて相果御暇乞も不申是非なき事に候彌風雅御進
 み老後御樂可被成候早々
 一嵐雪を始として門人等不殘御暇乞申上候俳諧は老
 後の樂と申事彌御忘有間敷候其角は此方へ參居申
 され候
 元祿七年十月 ばせを印

遺物覺

伊賀にあり

一三日月日記

同所

一發句書本

同所

一埋木

同所

一新式書入

是は杉風へ可被遣候落字等有之寫本にて無考候

一文章反古等

別考も可被寫候

右は杉風方に有之文章草稿は支考可被爲點檢候

一羽州岸本氏の發句炭俵集書入候翁と翁との違にて

有之か杉風より御尋頼入候
 一猿蓑の内座頭句引直し

一古今序傳百人一首の秘決抄是は支考へ可被遣候

元祿七年十月

ばせを印

翁の没後に丈草義仲寺の上の山に草庵をむすぶ

丈草俗姓は内藤世々尾張犬山の臣なり繼母につか
 へて孝あり弟に家をゆづりて心を慰んとばかり右
 の指を疵付て刀の柄にぎりがたしとて仕を辭し剃
 髮し禪僧となる其時の口號
 多年負屋一蝸牛化倣蜺輪得自由火宅最惶涎沫盡偶
 尋法雨入林丘

涼風にきゆるを雲のやどりかな

その庵を佛幼庵と稱す今土人これを岡野堂といふも
 と詩文をよくせしが芭蕉にしたがひ俳諧をよくす芭
 蕉没後三年こもりて一石一字の法華經を書寫し經墳
 に築けり寐轉學といふ書を著し道俗を戒この人唯俳
 諧を以て名をしられ其清操は却て隠れたること惜む
 べし元祿十七年二月廿四日其庵にて没す
 芭蕉句家碑深川森下町長慶寺にありこれは翁の自畫
 贊の遠磨を埋て家に立たる也鶴殿士寧文を作り東江
 源麟これを書す板本となりて世に傳ふ故にこゝにし
 るさす

富岡八幡

紫の一本に云此地江戸をはなれ宮居遠ければ參詣の
 人もまれにして嶋のうち繁昌すべからずとて御慈悲
 を以御法度ゆるやかなれば八幡の社より手前三三町
 が内は皆表店は茶屋にてあまたの女を置參詣の輩の
 なぐさみとす就中鳥居より内をば洲崎の茶屋といひ
 て十五六廿斗の女みめかたち勝れたるを十人ばかり
 づゝも抱置て酌をとらせ小唄をうたはせ三線を引か
 するなり今は猶盛んなりけり

深川詞

寐悟子

土橋橋下仲町通大鳥居高永代東俠客浴衣親和染女
 房柳卷本田風豫知一日山開處正是二軒茶屋金落中
 三十三間堂未建儼然弓矢八幡宮
 社前の鳥居錦江鳴鳳卿の銘あり

歌仙櫻

正徳の頃園女といふ女宗匠三十六本の櫻を八幡の社
 内に植これを歌仙櫻と稱す今はかれて唯三本のみ殘
 れり

園女は岡西一有といへるものゝ妻なり一有は後惟
 中と改む一時軒と號す宗因の門人にて俳諧を嗜醫

を業とす元祿五年八月十日浪花に没す或云園女はもと驛路のくつなりしが伊勢の山田杉本吉太夫光貞か妻となり風雅をみつ女に學ぶと按ずるに琴風園女句集跋に云伊勢屋會の何某斯波一有妻中頃難波に住て芭蕉の風にすがり俳諧に名高く今深川の園女醫は夫の術を傳筆はもろこしをひねると今其手を見るに丈夫にもまされる勢ある書也しかれども世事に心疎く袖の下の紅絹をきりて下駄のはなをいとのへ茶碗を二つ合せて花を生ん事をおもひ十あるを九つ迄穴明んとて打割張文庫のふたを水流しに用ゆるなどあどけなき業こそ風雅の奥なりけらし後佛に入其名を智鏡といひあたきを丸めけれどもまん中を十筋ばかり剃殘せしは唯一のむかしを偲れたるなるべし六十の齡に句集を著す享保十一年四月二十日没す年七十四深川靈巖寺塔中入にその墓あり辭世の句を碑面に彫

曙の空はうつつか阿彌陀佛

倭文字

深川本誓寺に其墓あり加茂眞淵碑文を書すしづ子は藤原政本といふものゝむすめなり其先伊勢の人北島

家の臣たり後退て飯野郡古泊郷に居油谷と稱せり初倭文字の祖江戸に來り京橋弓町に居を卜すそれよりして政本伊勢より來り近親のゆへを以て吟女の婿となる吟女は倭文字の母なり家豐家にして奴隸百に盈てり一女子を生むこれを倭文字と名づけり此女唯容貌の美なるのみにあらず幼より書をよむことを好む父母もこれを奇として加茂眞淵に就て學ばしむるに數年ならずして歌を詠文を綴ことを得たり伊香保記といふ冊子あり長じてその父母の國なる北村氏の弟康秘をむかへてこれにめあはす寶曆二年壬申七月十八日病にかゝりて没す終に臨て一首の歌を詠

人の世にさきたつことのなかりせば

桐の一葉もあらずやあらまし

加茂眞淵

眞淵姓加茂縣主岡部衛士と名のる初は三四といへり遠州濱松の人なり春滿にしたがひ家僕のごとくして京師に學ぶこと年あり學成て江戸に來り大に古學を唱ふ春滿は萬葉を解て功ありといへども歌は其風をよまずもとより詠歌は主とせず在滿は萬葉の頃は文華いまだ開けず歌の盛なるは新古今集の時なりとい

へり眞淵に及びて初て萬葉の風をよみけらし文章もまた古言をもてつゝり一家をなし世上の耳目を驚かす從ひ學ぶもの多し其説に契沖は新墾しつれどいまだよく植つくさぬほどに過にしこそおしけれ春滿は歌の道まだ刈收果さるるに病に伏などいひておのれこれかなりはひを遂る由なり實に古を發揮して後世をいざなふ功少からず明和五年七十二にて没すその冢品川東海寺地中少林院にあり服部南郭の墓と隣

本八町堀

本八町堀三丁目は寶永中迄紀伊國や文左衛門がすまひなり世にこれを紀文と稱す俳諧の名を千山と云其角一蝶と友たり紀文もと紀州熊野の産にて同郷の三人申合せ大都會へ出各出身せんとて譽籠とて三人ともに國をさり江戸に來る一人は本所五本松釜屋某その一人は武州程谷驛にて本陣なりき紀文は御材木御用達にて八町堀三丁目不殘すまひ此時たゝみ指定出入せるもの毎日七人づゝ入來るこれ今日の客をまねきたるたゝみは明日の客には用ひざる故なりかく富豪にて黄金を花街戲場に遣ひ紀文大じんと稱せられ其名をしらざるものなし菅吉原に遊び揚屋の和泉

屋といへる内にて節分の夜小粒を豆まきとてまきちらしたる由正徳の頃深川永代寺門前に隱居す享保十九年四月四日病によりて没法號を歸性融相信士といふ

其角一周忌に手向の句

黒ぼうや年は経れども朧月

風流をたてぬきの飛花を惜むと書て左の句あり是も其角の句

追悼

今もいま錦繡の人よぶこ鳥

二朱判吉兵衛が作吉原大盡舞に深川にかくれなき黒江町に殿の立ッ目さんこてんと名そらへて付添ふ太鼓はたれん一蝶民部に角蝶やと云々

(如道人云○紀文が事古き口碑にのこれり黄金案巨萬一代に得て一代に遣ひ盡したる人なり第一の驪頭二朱判吉兵衛といふもの大奉書の紙に小粒金をひつしりと附たるをはりたるあとの紙ばかりを終身大事にして持たるを人見たり是は紀文が深川黒江町の別荘に置ける妾の福引に出したるをとりたる也とぞ紀文老年に及貧窮してむかし親敷召遣

ひしもの本所にありける許より毎月一兩をもらひてくらしけるがある時本所へ右の金をとりにゆきかへるさに兩國橋のほとりを過けるに泥ふかくして下駄のはな緒きれををたてんとある。かみゆひ床の前に立てはな紙を出してこよりを捻りけるをこの床に居たるかみゆひ飛て出わらなど持来りはなをたて遣したり紀文其ものをよく見れども覺なければいかで見もしらぬ人のかくむさき下駄のはな緒をばたて給はるやとひければかみゆひいふあなたをしらざるもの天か下にあるべき様なしわがごとき末々のもの迄よくしれりと答ければ紀文がいふわが紀文たるをしられたるこそ慚愧なれとてかの一兩の金を出し是は些少ながら一禮のしるし也とてあてて去りしとぞ

(そも)廊のはじまりは弓削の道鏡勅をうけ始て廊を建らるゝくるわは客のくる故に廊とこそは名付けり清少納言のよまれたる春はあけぼのとはおもしろやちんくたるすかゝきにくわんくたる買手衆が花を飾て初買や入来る廊はどんどめくいづれどんどや鶯の首襟をながくしてぞめく也太

夫格子も繁昌にさんちやむめちやもにきやかにもんしくと呼子鳥たつきもしらぬ山口三浦の大ともコノつゝこむちかうのかんばやしこれは角町の名物を大盡舞を見さいなその次の大いじん〇右大盡舞一首古老に聞たるをこゝに書付はべる〇如道人)

釋迦嶽の家

深川八幡社地にあり釋迦嶽雲右衛門身のたけ七尺一寸六分雲州の産なり明和の頃三ヶ津大關になれり(手の形の書略す)右手の形彼がみづから朱を手にぬりて紙におしたるなり此手がた余が友人に藏せるものありこゝに寫て載す古來より角力關取多しといへども其高サこれに及ものなし山嵐嶽右衛門六尺六寸七分丸山權太左衛門六尺三寸七分窟林左衛門六尺一寸五分以上大男の部なれども雲右衛門には及ばず(如道山人いふ丸山權太左衛門は器量骨柄すぐれたるのみならず風流なるものにて俳諧をよくせりとぞあるとしのくれにおのが手の形を朱にて紙におし一トつかみいざ參らせん年の豆といふ句をかきて相しれる人々のもとへ遣しけるとぞ余十餘年

前人のために谷風樵之助が手形へ詩を作りたることあり因にしるし侍る〇巨柱何年新幼出朱霞長白五根晴此中疑是命高處題有齋天大聖名〇丸山がことはむかしがたりと覺へしにこの谷風も今は鬼錄に上りたり夢幻泡影の世の中慷慨の心なきにしもあらず後の人この書を讀者亦必この事に感あらんかし)

問喜兵衛墓

築地西本願寺にあり義人叢に云問喜兵衛が妹を伊川といふたらちねの親の別より悲しかりしは元祿十六年の十一月初亡君の御志をつぎし人々残なく腹きらせ給ふときしこそ更に夢ともわきがたき中に實弓箭とる身のならひなれば忠孝義の道にて世に名を残給ふこそ武士の術ならんとおもひ慰め

命をすて、名を残すらん

かく伊川が詠める同四十六人の内間光風といふ人はかり名も見へず詣の人々に尋るに此人の姉のつよくいたわり外の智識の僧をたのみて葬し故泉岳寺にはなきとかたりし穴淺まし女の心とて佛にまよひなき

魂魄外へはゆかじものと思ひて心よりも外へはゆかじなき玉の

其名も見へぬ苔の下かな

遂に光風とまきみと書付て墓前に立置歸りぬひとひたひ過てある人の許より

歎なや外へはゆかしなき玉の

むなしきからはさもあらはあれ

かく吊ひ給へる志淺からず思へども忌と何れは返しせず二七日泉岳寺へ詣で

世とゝもに曇りて月はうらめしや

入山端に影は残して三七日さばりの事ありて詣でず四七日泉岳寺にて

おもひきや其名くを書分て

ひとつ蓮の人も見んとは

光風を方丈の志にや又摸惟劍と人々と同じ所に卒都婆を立置せ給ふありがたきにおもひ彌生十日十七日さはりありてもふでず廿三日今日はての日知るも知らぬも貴賤群集夥しはやくも過る月日かなと光陰の移るもいと悲う過し事をおもへば夢幻ともわきまへがたく思ひて

夢の世にゆめを見るこそはかなけれ

ありし幻や見へし儂

あひ見し人々は墓所にむかへば其儂もうつれど及摸
惟劍は見ぬことなればゆめに見るさへ其儂さだかな
らずいつしかおとなしく吾妻へくだりなんとまぢし
かひなし

見ぬ人を見るそはかなき昔の下

それと斗の儂もなし

あふことを何祈りけん千早振

神さへ今はうらめしの世や

奈良屋茂左衛門

奈良屋茂左衛門は三代靈岸嶋に住材木問屋にて名に
おひたる富豪なり世に奈良茂といふこれなり初代茂
左衛門は幼名を成松といふ幼年の時より宇野といふ
材木問屋に奉公し二十八歳の時家を替わつた竹木
を商ひて過けるが才智人に越たれば家業次第に盛に
なり五十六歳の時剃髪し法號を安林といふ男子二人
あり是を二代目茂左衛門と名のらせ金四十萬兩ゆづ
りける由弟を安左衛門といふこれは別家せしむ安林
は六十餘歳にて没す深川靈岸寺塔中念佛堂雄松院に

葬る二代目茂左衛門は驕をこのみ常に花街戯場に遊
び紀文と富をあらそひて千金を費し殊に大酒を好み
けるが或とし江戸に名高き辯問をあまたともなひて
京大坂の遊里にいたり驕をきわむ歸國にのぞみ道中
より病を得て家にかへりて遂に年三十一にして身ま
かりぬ深川靈岸寺塔中に葬る

東叡山

紫のひともとに云黒門より二王門の並木の櫻の下に
花見る人なし(今は並木のさくらなし)御靈屋のわき
後の松山清水の後に幕をはりて見る人多し幕の多
きは三百餘ありまたなき時は二百あまり有この外に
女房のうわ着の小袖男の羽織を辨當にからげたる細
引にとうして櫻の木にゆひつけてかりの幕にして毛
氈花むしろ敷て酒宴をなせり本町通町を初めうとく
なるもさなきも町方にては女房むすめ正月の小袖
といふはしたてず花見小袖とてなるたけ手をこめて
結構に達なるものすきにこのみたるを着て出るなり
花よりも猶見事なり花の頃は空くもりて大方ひる過
より雨ふるしかれどもかさをもささすよき小袖をぬ
らして歸るを遊山にも又手柄にもするとなり

秋色櫻

上野山王清水の後にありて井戸端にのぞめりこれを
秋色櫻といふ小網町菓子屋のむすめおあきといふも
の俳諧をこのみて晋其角にまなび秋色と稱す十三歳
のとき母にしたがひて花見に來りこのさくらを見て

井のはたの櫻あぶなし酒の酔

この匂宮様の御耳に入て御ほめありしと也それより
この櫻秋色櫻と稱す後女宗匠となりて世に用ひらる
享保乙巳四月十九日没す辭世に

見し夢もさめても色のかきつばた

班女塚

しのばすの池のはた榊原式部大輔殿の下屋敷の後に
あり班女が衣かけ松といひしは近き頃迄此所に有し
なり班女といふはなに人なるや詳ならず昔江戸にて
跳はやりし時松そろへの小唄にも目黒不動の腰かけ
松三田に渡邊源吾が松扱は班女が衣掛松道灌どの、
頭巾松一本松や六本松しろかね町には町ついでいた松
原越てなど、唄ひしも其名たかかりし故なり

多宮望太郎墓

上野谷中門勸成院の後の庭にあり其碑半ば断て正面

經蓮少の三字又かたわらに年號を記したる處に和三
月五の字のみ見へて其外わからず望太郎がことは別
に記録あればつまびらかなり

深草元政鐘銘

元清十二支を句の頭に置て鐘の銘を作る赤坂圓通寺
にあり

- | | |
|---------|---------|
| 鼠山流光人未驚 | 牛王出世振梵聲 |
| 虎狼野子氣縱橫 | 兎角方便誘群情 |
| 龍宮高處聲華鯨 | 蛇室睡破覺心生 |
| 馬腹忽變聖胎成 | 羊鹿牛車休復難 |
| 猿啼霜降月色清 | 鷄人未唱客先行 |
| 狗不夜吠王舍城 | 猪觸金山轉嶮嶮 |
- 元政俗姓は菅原氏にて江州彦根の太夫石井半平とい
ふもの、弟なり射藝をよくし十九歳の時出家し寛文
八年四十六にて没す深草にて歌あり

あはれこめたるふかくさの里

この歌元政集中の秀逸なり詩文集あり世につたふ
重訪詩僧元清上人墓 鳥山輔寛

政公墳墓在傳是此棲遲更除三竿竹終無隻字碑人高

霞谷隱我愛艸山詩重過留題去祇應地下知

おしち墓

世人皆雜劇によりて其實をしれるものすくなしおしちが墓は駒込追分片町圓乗寺にあり其父は加賀能登越中三國の太守前田家の足輕にて山瀬三郎兵衛といふものなり寛文のころ浪人となり駒込追分片町願行寺門前に八百屋見世を出し八百屋太郎兵衛といひ天和元年本郷丸山本妙寺より失火し太郎兵衛も延焼に及居宅ふしん内菩提所の圓乗寺に寓居せりそのとき此寺に山田佐兵衛といふもの繼母のにくみにあひその家を出この寺にかゝりており遂におしちと情を通じけり程なく普請も出來太郎兵衛もとの所に引移りてより佐兵衛に逢ことも出來す歎する所に駒込吉祥寺門番の子に吉三郎といふわかものありこれをしりておしちをあざむきその家に火をつけ焼はらひなば又もとのごとく菩提寺へゆき佐兵衛にあふこと心のまゝなりとすゝめければおしちもこれにあざむかれ戀の切なるにより火をつけしを其騒につけこみ吉三郎は太郎兵衛が金錢衣服を盗取遁さらんとせしを火方盜賊改の中山勘解由に召捕はれ遂に吟味に及びて

おしちが火をつけし事を申立兩人とも刑に行はる南縁山圓乗寺は元日蓮宗にて今天台となる碑面に秋日妙榮天和二年三月廿九日年十五とあり

(如道人いふ今戲場にて八百屋お七がふりそでの小袖にふうじぶみをつけることこの狂言はじめて出し時嵐喜代三といへる小結の女がたきりやうよきまゝにお七の役をつとめたりこの喜代三が紋所ふうじぶみなり今の人知らずしてお七がもんと心得たるは誤也嵐喜代三此狂言をあてたりしかば紀文大盡これを受出してつかはしけるとぞ友人土井五郎作が物語也○お七刑せられ其後山田佐兵衛入道して日本廻國に出東海道嶋田の驛にて身まかりぬ其驛の僧寺にありとぞ○予お七が捨札の寫を雜記中へ抄録せしを再こゝに出す(天和三亥年三月廿九日命日△此しちと申女火を付候とがによつて町中引廻し所々にさらし火あぶりに行ふもの也)三月 日○文字如斯しるしたり)

墨水消夏録卷の三終

蜘蛛の糸巻序

此書は吾一時の漫筆なるよしは自叙にいへるが如しこのうちおもひ出したる事或は古老に聞し事など端紙にもものしおきつるがいまだ書となさず自筆の原本は知音の翁たち兩三人に示して追加を乞ひしに此書の末に深川梳藏に寓居して北氏藏すとあれど北靜庵翁へかしたる時備書せられしを誰人か轉寫したる物と見ゆ昨日潜藏ぬしよりみせられしを燈下にひらけしに傳寫の誤謬もみゆめれどうちもおきがたくて藏し玉ふぬしは知り侍らねど朱書し侍りぬるはなめげなれどあなかしこゆるし玉はれかし
ゆくりなくよその軒にもつたへしは
なかくはつる蛛の糸巻

弘化四年丁未十月十三日

七十九歳 京山人百樹書

蜘蛛の糸巻序

岩瀬百樹ぬしは其名普く大八島の外までしられたる醒齋京傳翁のはらからなる京山人にてぞ有りける年比親しくむつびかはせる學びの友にて京傳翁は過ぎし文化十二年の長月木の葉と共にちりうせられしなごり千むらの錦は色もあせずありけるおのれいさゝかいとま有りしころ若かりし代に見聞しつる事ども今はいたく替はりはてぬるがいと多かるを數々かき記して神代のなごりとしも名おほせつるを百樹老人ひと渡り見て是にもれたる事の心に思ひ出でらるゝまに心にかみぬるかぎり書きとめてやがて蜘蛛の糸巻と號けて見せられしは醒齋翁のおもかげほのくのこりていとむつまじし百樹翁と我とは同じ明和の生れとて只一年のたがひにこそあれかたみに八十近くなりぬればいとゆかしくなつかしく其世のことゝもまのあたり見るこゝちしてひとりゑみもし涙もさしぐまるゝはあはれめでたくうれしき一巻になんありける其よし書き記してよとこはるゝにすまひもせずたゞにはしぶみとなしつるは

弘化三年三年の夏

七十九翁齋藤彦麿

叙言

齋藤彦磨大人はおのれが兄なりし醒齋翁の學の窓におとづれかはしたる知音の益友なりさればおのれもまた其琴の緒をつぎておとづれを絶たず机下に間を擧ぐる事茲に五十餘年猶色かへぬ風をちぎるになん一日大人を尋ねし時一冊子を出だして閱を許したまへり其夜燈下に開き見れば神代の餘波と題して大人の若かりつる昔の今に移り換はりたる事のくさぐさを書き集め給ひし物にぞありける大人は今年七十九歳おのれにいとせの兄なれば大人の記したる事どもおのれ猶健にあり嗚呼白樂天が七年の夜雨はものならず六十年の秋の月をしのおぞ多かりけるいでやおのれも神代のなごりにもらされしをひろひつゝ忘貝の忘れしを思ひ出だして硯の海に筆をぬらしぬ其事皆見聞の實跡に據れば敢て文を飾るべきものならず草稿だになさで心に思ひ出づれば筆隨ふされば年序の前後自他の評格もいと覺つかなし此叙言も亦然なりこは例のはかなき雙子いそがれて作るひまをぬすみつゝ心開しき黄昏の軒にあみ作るふるまひなれば

蜘蛛の糸巻と題しぬ

花の雲ちらすををしみ春の夢

しはしとゝむる蜘蛛の糸巻

弘化三年丙午更衣の日

七十八翁 京山老人百樹

蜘蛛の糸巻

目録

茶番	團扇賣
さござい	女髮結の始
中洲の假宅	十八大通
黒河が知計	妓風
娼家に樓號の始	文墨の名家
白猿が質朴	鼻紙袋の始
菓子の変格	てんぶらの始
琴曲の変格	料理茶屋
隠し賣女	疫病
市中灰降る	行人坂大火
白刃仇を斬る	乞丐鐘馗に扮す
朝参り	天鼓の天
火事	打壊し
市人の數	賢臣擧らる
永代橋崩落	兒どもの遊び
天明中戯作者	馬琴略傳

草さうしの變格

鞭齋以來蕩平二百餘年枝をならさぬ松の色干とせの春を契りてきのふの淵はけふの瀬と換りて地廣より人集りて萬民鼓腹の逸樂に遇ふはかしこくもかたじけなくもうれしくもおもしろくもいふは更也けりそもくく大江戸の繁昌たるや武藏野の逝水はいづこへか逃けん堀兼の井まで跡なく玉川の流れば八衢の下を蛛手にくわりて千門萬家かくあるものと思ふめるはいとくかしこき事ぞかしさればそれを筆にのせて大江戸の移り變りたる事どもを記したる物落穂集事跡合考むかしく物語春臺獨語松下隨筆龍溪隨筆我衣の類猶あまたあれど明和以前の人たちのすさみなれば近き六十年のむかしをば今の若き人はしらしもそれ筆まめなるひとのものしたるがあるべけれど世に出ざるにやあらんそれらを思ふにつけても彦磨翁が神代の餘波の冊子は若人にひらかす浦島が玉手箱にぞありける

蜘蛛の糸巻

茶番

おのれ京山は明和六年己丑の歳の生にて天明元年辛丑は十三歳なりき（今弘化三年丙午より六十六年まへ）されば物心ありて見聞したる事ども心の底にたもちたるをおもひ出だすに天明元年の十二月ある所なる勢家にて年忘れとて茶番といふ事ありしに客は大家の留守居たち或は権家の歴々たちなり茶番の題は「鬼に鐵棒」二階から目薬「猫の尻へ木槌などいふ卑俗の諺なり此比神田邊に住したる生花の師匠門人（神田小柳町に住める生花の師匠其邊の町醫某の娘門弟なる名を松と云ひし由其比のはやり唄にいさゝか心の底にのこれり）の小娘を強淫して淫門を破りしに事起りて獄に下りし事巷説雷同の比なりければ彼の猫の尻へさいづちと云ふ題を強淫の事に趣向したるは此時に北廓のたいこもち名高かりし五町と云ひし者也是は猫の題を取りたる勢家の命じたるなり扱茶番の日の晝七つ比吉原にて勝れて美しき禿十四

五人扇屋松葉屋丁子屋玉屋などより五町が才覺にてやとひたるを家形船にて來り一石橋につけて上り茶番ある家の門より廊中の姿のまゝなる禿ども入りたるをおのれ十三の時目の前に見たり（此時おのれは此勢家に入出入する醫者の倅と同じく茶番の見物に禿ども共に門に入りし時なり）扱猫の茶番に成りし時五町坊主のかづらをかぶり猫の禿に花ををしふるさまをなし強淫におよぼんとする時十三三人の禿出で、五町を打ちたゞきなどし遂に裸になしたる時張子のさいづちを五本持ち出だすこし歳たけたる禿五町が尻をうちて餅つくさまをなす此時大小の鼓を打ち三味線にて餅つきの歌をうたふ皆廊中の歌妓なり五町は猫の身振りをして笑を取り禿どもに米粉をふりかけられ箕の中にいれられ禿どもに引きづられて樂屋に入る一坐絶倒せざるはなし扱五町かたちを改め出づれば跡より大きな三方へ蒲色びろふどにて作りたる煙草入同じきせる筒へきせるを入れうち違ひにとちつけてさいづちと見せたるを大三方へ積み上げしを前に置きて五町が口上には是は何様の茶番なりと面白く口上をのべ三方なるを總景物とて

連中へ禿にくばらせけり（猶ありし中におもしろしとおもひて今にわすられざるもあれどさのみはとて記さず）此席中の酒池肉林はさらなり其比躍り子と唱へし時島の藝者ども十四五人酌を操る鬼に鐵棒といふ題の景物は其比はやりし銀の延べのきせるに虎の皮の煙草入り茶番の連中多かりし故夜明けたれども戸を開かず燭をてらして茶番のはてしは朝五つ比なりし此一事にて天明の時勢を知るべし

うちはうり 扇賣 いかのぼり

かゝる世の中なりしかど猶古質の残りたる事もあり此比は今の如く繪店にて錦繪の團扇は稀には賣るもありけれどはしぐには繪見世さへなければ團扇を物に入れて脊負ひ竹に通したるをまたげはんしぶうちはうちは更紗うちはほごうちはとよびて賣りありく大方は若衆二さいなどなり錦繪の團扇一本十六文なり其龜末なりしをしるべし扇も二枚張四十八文繪は杉の立木に片馬居浪に日の出雲に舞鶴の羽などいかにも龜末なる繪なりこはおのれが七つ八つの時なり（安永四五年安永は九に改元）其後十二三の比（天明元年）にいたりて字鳳と唱へて龍蘭鶴の字など

雙鉤字のめぐりを藍又は紫に色どりたるを珍とし寶として喜びけるに今の字鳳は下品として子供よろこびず又扇賣といふものありけり扇の形したる箱をいくらも重ねたるを肩におきあぶぎくとよびありく其姿は染めゆかたに白き脚半じんくばしよりおほかたはなまめきたる男あみ笠をかぶり呼び入るれば地紙を見せ其座にてをりてうるなり 是正徳比の遺風なりしに寛政にいたりて絶えたり初代市川門之助と云ひし色役者扇賣の狂言をしたる事ありき

（市川門之助名辨藏）

はせうり さごさい

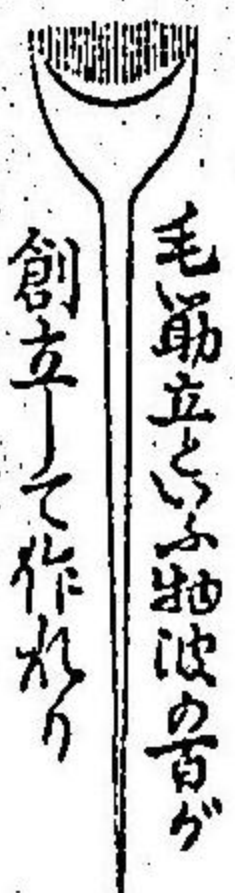
同じ頭餅米をいりてふくれたるをはせといひて是をば必年の始の逢萊には家毎にしく事なりし故大晦日の明ぼの「はせやはせ」と賣りありく聲いと春めきて心よかりしも今はきかす同じ比辻寶引とて寶引の糸を持つ物にくさぐさの手遊を入れならべ糸一筋の價手遊のよきあしきに依りて高下あり當れば隨意の品一つをとらす此寶引いくたりもこゝかしこの辻に立ちてさ來ざいゝと呼ぶ兒ども此聲をきゝつけ足のふむ所を知らず此寶引大方は松の内を盛りとし

十日比に止む新春の一つの景物なりしに寛政に禁令ありて聲なし

女髮結の起立

安永の末(山下金作實曆七年はじめて下り安永の末は二度目の下りなり)山下金作といふ女形下り深川の榮木といふ所に住む時鳴の正旦なりき此者のかつらつけ(かつらの髮結なり)仲町の妓に通じたりしに或日此妓の髪を金作がかつらの様にゆひけるを妓輩うらやみ謝物をおくりてゆはせけるに後は一度を二百錢と定めけるに結はするもの多ければかつら附を止めて妓の髪を結ぶを渡世としけり甚吉といふ若き男弟子となり一度を百づゝにて妓家の仲居どもの髪までゆひけるに百づゝ故百さんくと呼ばれつひには名となりけり此百は擧止音聲天然婦子の如く男に情をゆるすを好みけりとぞされば女の業なる女の髪を結ぶ事をも習ひしならん此者後に八丁堀大井戸といふ所に住み藝者ども或はかこひもの杯ゆひあるき女の弟子ありて弟子に髪をすかせる其跡へまはりて結ふうかれ地女など結はすれば茶屋ものなり驕りなりとて他に譏らるゝ故此惡風俗他の女には移らざり

けりこは寛政二三年の比なり是女に髮結といふ惡風起りたる起源なりけり其後百が弟子の玄孫弟子或は自立の者も多く出来る故起立の百をくづして五十となり三十二文又は二十四文の安賣もありて女髮結千筋に別れ招く物も櫛の齒を挽くが如くなれば今三代の市中の婦女は髮結ふすべを知らざるに至る是他なしかの百が妓風の毒を殘しゝなり然るに維新の御時に遇ひて此妖風一時に止まるは恭くも賢き事にぞ有りける



(百樹再按天保十五年辰大坂板に二千年櫛鑑と云ふ事物の始源の年數のみを記したる物に女髮結は明和七年より始まるとあり思ふに件の金作がかつらつけ妓の髪を後には女髮結を渡世としたるも大坂の風によりたるなるべししかりとすれば女髮結は大坂を始とすべし)

(蜀山子の街談録に安永の條に近來男子の風俗甚異にして髪は本多とて中剃を大きくして鬚を高く

結ぶ髪は下々鬢とて油を付け櫛の齒を入れ毛筋を通し後の方は油をつけて置其界を湖界と云眉は三日月とて細く抜く衣服は細袖付薄綿にて重て着に便にすこの時の諺に疫病本多かつたい眉宿なし姿と云 女は櫛計さして鉤匙を用ひす鬢指と云ものを鯨ほね或は銀にて作り鬢の横より通す髪のも筋をあらくふくらかにせん爲也名付て燈籠びんと云ふ經本の燈らふに似れば也)

かり宅 中洲

天明四年辰四月二十六日廊中水道尻秋葉常燈明より出火廊中残らず焼亡して假宅は兩國並木駒形黒船町なりき此時兩國なる今の淡雪の店橋より左の方の二階計りを吉原の若菜屋假宅にしたるに(あわ雪の隣二軒をかりて勝手としたり)何者にや世の中はさかさまにこそなりにけり上には若菜下にあわ雪同七年未の十一月九日角町より出火假宅大橋深川新地中洲深川富永町高橋此假宅は己れ十七歳の時なり抑中洲といひしは今五十代の人も名のみ聞きてしるまじきは論におよばず中洲とは大橋より南の方川岸凡三丁餘川中へは二丁ばかり安永の末に埋め立てたる新地

なり名主は二人湯屋三ヶ所人家はいか計りありしやらん覺えず行くての道は大小三四路も有りしやうに覺ゆかくし賣女の家あり岸には水茶屋鱗次として軒を並べたる中に大橋の方の岸に臨みたる所に四季庵といふ大度高臺の料理茶屋有り三夏の比は岸にのぞみたる茶見世の軒に提灯をかけ渡したるが水面に映するさま遠目には龍の都のこゝに浮み出でたるかとおもふ夜見世の見世物も多かりし中に鶴市といふ非人歌舞妓どもの身ぶりこわいろをなすに妙を得てしかも美男にてありし故婦女子にすかれ濫行もありしとぞ扱其構をなしたるさまは今の見世物芝居にかはらざれど木戸錢は一人前百銅なり是にて鶴市が藝の妙をしるべし此比市川八百藏とて婦人には殊さらひみき有りし立ものに此鶴市顔もよく似たる故顔をつくり衣裳を飾り其聲色をつかへば八百藏こゝにあるが如し是鶴市がはやりし所以なりなす所の藝はすべて相手をとらず物ぐるひ物語扇の手など其外さまざまの事を八百藏團十郎仲藏團藏菊之丞里好(女形)又は中役者迄も其こわ色はさらなり顔つき身ぶりをれかあらぬかと目をぬく計り奇々妙々なり始めは常

なみの非人手つま一つ二つなし扱鶴市出で、一藝をなし是をひと幕として打ち出だす(一まく一人前百銅)○中洲ありし比は五月節句より夜見世ありき鶴市の外見世物辻賣千燈萬照かゝる中に彼の四季庵へ五明樓(扇屋宇右衛門)をはじめ北廓の娼家こゝかしこへ假宅して夜見世の賑ひ天明中の一壯觀筆にも詞にもつくしがたし猶七八十の老人に尋ねべし(此時五明樓は高橋の大家茶屋石橋よろすと云ひしをかりて抱の遊女計はこゝにて客を迎ふ)

因にいふ花街焼亡は明暦の大火に元吉原類焼して同三百年新吉原に移り十六年経て延寶四辰年十一月七日江戸町二丁目花屋といふ遊女屋より出火一廓残らず焼亡此時假宅なし此後九十三年経て明和五子年十一月七日(延寶出火と同月同日)江戸町二丁目四つ目やと云ふ遊女屋より出火一廓焼亡假宅始めて願濟み今戸橋場山谷鳥越此のち三十年経て明和八卯年四月七日揚屋町河岸梅屋(遊女屋なり)出火假宅前に同じ一ヶ年経て同辰年二月廿九日(此年の秋安永と改元)目黒行人坂より出火南風礫を飛ばし一廓焼亡假宅兩國橋邊深川其後十年経て

天明元年巳の九月晦日伏見町家田屋(茶屋なり)より出火一町焼亡假宅なし四年経て天明四辛辰年四月十六日水道尻秋葉常燈明より出火假宅兩國並木駒形黒船町其後四年経て天明七未年十一月九日角町より出火(火元きゝもらす)假宅大橋邊深川新地同八幡前中洲高橋此後八年経て寛政六年四月二日江戸町二丁目丁子屋(大家の遊女屋)より出火假宅田町聖天町の宿瓦町七年経て寛政十二年申年二月廿三日田浦龍泉寺門前より出火假宅同所十二年経て文化十三年五月三日京町の娼家海老屋吉助より出火假宅同所此後今年まで三十一年のあいだの焼亡は今の耳目にもあればさのみはとて記さず(此時蜀山人が「見めぐりの鳥居の足がみじかくてのびあがらねば見えぬかり宅」とよみし也)

十八大通

元祿の比紀伊國文左衛門といふ材木の問屋本八丁堀一町残らず持地面にて大慶高堂を構へ片名に呼びて紀文といふ今も其名人口に膾炙す其角門人にて俳名を千山といへり其角五元集にも千山が宅にてと云ふ句二三首見えたり紀文ひとせ歳越の夜花街は遊

びて豆の中へ小粒金を交へて豆蔕をしたる事口碑にもつたへ物の本にもみゆ(委敷は己が家兄の近世奇跡考にあり)紀文かゝる奢侈に家産を破り晩年深川一の鳥居の邊に住しこゝに歿せり其後俳諧の宗匠某紀文が住みすてしを買ひけるに居間の天井紙張にてありしがいたくふるびたれば経師に張替さする時経師言ひけるやうこゝは何人の住ひし跡やらんあるじは物好みにふけりたる人にて有りけん天井を張りたる紙を見るに一つ紙にはあらず日本國中の紙なりといひけるよしある隨筆に見えたりおもふに紀文零落しても心のをぐりかくのごとし此一を以て盛なりし時を知るべし今いへば是せいたくなりせいたくは驕奢の陰病なる物なり此病ある者黄金湯を用ふればますゝ上昇して治しがたくその上途には破財亡家の死にいたる享和の比川柳點の句に唐やうで賣店と書く三代目とはよきいましめぞかし扱本編の神代になごりにもいはれしごとく天明の比花車風流を事とする者を大通又は通人通家などゝ唱へて此妖風世に行はる其中にも十八大通とて十八人の通人ありけり首長たる者は日本橋西河岸の(材木屋と聞ゆ)十曉御

藏前なる(札差大口屋治兵衛)文魚なりある日十八人の通人集會ありし時文魚銀のはりがねにて髪を結びて出でしを通者も見て譏り云ふやう文魚が銀の針がねは今日一日の晴ならんさのみ稱すべきにもあらずといひしを聞きて此後は平日も銀の針がねにて髪を結ばせしとぞ其比巷説にもいへり此文魚も紀文の如く零落して御厩川岸の格子作り間口二間ばかりの家に住ひたる比ある貴人の御隠居文魚が河東節の上手なるを聞き給ひて召されける時上るり終りて別の座しきにて酒食をたまひ文魚なりとて目録は多からず八丈縮五反給はり文魚が連れ來りし名のきこえたる河東ぶしの三絃弾にて藝を業とする者なれば目録を給はりけり時に文魚たまものゝ反物を今日はたいぎなり是は寸志なりとて一人へ三反一人へ二反其座にてとらせたるを貰ひし三味線弾昨夜かやうの事有りしとて亡兄に語りて文魚を稱したりきおのれかたはらにありて聞きぬ三味線弾は山彦源四郎なりき紀文が天井の紙文魚が八丈縮の一對の奇談と云ふべし(和中曰大通の事は田螺金魚の洒落本にあり)(ある隨筆と隠したるはいかなる意にかあらむこ

は手柄の岡持が「後は昔物語」に記したるは人皆しれるをや

墨河が智計

北廓にて娼家の富饒なりしは明和にて大土總屋なりあるしが俳名を一鷹といへり淺草三社祭禮のありし時幼き悴を大名の行列にいでたせんとて道具類残らず新に作らせ二日ねり物に出だしたる費三百金なりとぞ此一事を以て富饒を知るべし此大名の眞似したる悴をろかなりし故家次第におとろへて家亡び晩年剃髮して俳諧師となり名を百路と云ひて天明の比藏前邊に住し富家の遊び坊主となり亡兄に俳諧の上の事など度々聞きに來りしがをかきし坊主にて是が事にくさくをかきし話あれど洩しぬ此大土總屋の後世に聞えしは江戸町一丁目扇屋宇右衛門墨河と號す妻をいなくて夫婦とも歌も書も千蔭門人にて天明中の盛家なりき亡兄したしかりし故二人が短など今猶家に残り墨河が親はちいさき娼家なりしに墨河にいたりて大家になりしとぞ天明の比初代花扇東江門人なり遺墨世にちり残る中にみめぐり稻荷の額に自筆のよみ歌のこれり同じ時同家の瀧川は

千蔭門人なり千蔭も東江も天明中の名家なればこれが門人となしたるは墨河が計にて一ヶ月一度づゝおゐらしまか思ふ由は墨河が計にて一ヶ月一度づゝおゐらんと稱せらるゝ者へ客の多少により品に位を付けて褒美をとらすなり然るに瀧川が客の花扇におどりたる事多かりければ其後の時位よき品をわざと瀧川方へもたせやり(花扇は表座敷瀧川は裏座敷三間つゝきなり)ふゝたび軽き品なるをもたせやり使にわざといはするやう今のは表座敷へ參るものなりしを間違しとてよき品は花扇へもち行きたりければ瀧川心に不足して憤發の心を起し勤に精を出だしければ兩妓一雙の珠光をなしゝとぞ是亡兄が目睫の話なりおもふにかゝる才量ありし故家を起しつらん墨河一代は盛なりしに親骨折れし後今扇の風ありやなしや

妓風

天明の後廿年ばかり文化の比までおゐらんと稱せらるゝは大方は横兵庫といふ髪風の風なりしに近年此風たえむかしを失ふさしかざるかんざしは昔にまさりて大きになりしなり天明の比はいかにも細くかきなりされば今の如く馬蹄は頭にのせざりき女の髪は

結びぶりの始は唐輪其後兵庫次に島田丸鬚(一名勝山)次にしひたけ其沿革は余が歴世女装考に圖説を擧げて記しぬ近きに上梓せん

娼家に樓號の始

娼家に樓號を付けはじめしは五明樓なり(扇屋五明は扇の異名)墨河好事なりし故樓號をつけしより同時に雞舌樓(丁子屋雞舌は丁子漢名)松葉屋を松葉樓又は館といひしは今すこし違あるべしうちつけにてをかきしからず玉屋を玉樓は玉の字うごかしがたし近來はさまざまの樓號あるが中にも大黒屋を甲子樓といひしはいかゝかにや五明雞舌松葉の三軒は今絶えたれば獨り玉樓のみ光りをうしなはざるは代々主人綿服にて萬事素をつとむと聞く以茲光を失はざるならん返々も今いふせいたくは亡家の毒水なり若人たち慎むべし懼るべし(文化の比に至りては深川新築などの岡場所にて大觀樓百歩樓杯似げなきを犯せり)

文墨の名家

天明を盛に歴々たる名家は儒に曲山(北鵬の二家は少しおくる)詩は西野(市川小左衛門米庵の父)和歌

は千蔭書家は親和東江其寧淳信書家は朱紫石(唐朱)浮世繪に北尾重政(書もよし)勝川春章角力に谷風小の川遊女に花扇瀧川俳優に團十郎(白猿)中村仲藏狂歌師に四方赤良(後に蜀山人)朱羅漢江元の木阿彌大屋裏住鹿津部眞顔宿屋飯盛錢屋金持右いづれもおのれ十五六歳の時見聞の名家なり文墨の人々は亡兄の友なりし故余も又咫尺にて容貌今猶目にあり(此比三井親和は高名なれば煙草入女帯など織物にし浴衣手拭など染めものにしたり)

白猿の質朴

市川白猿ひとせ木挽町座にて春狂言に岩藤の役をなして大入をしたる時眞顔白猿より棧じきをもらひ亡兄(京傳)をさそひ余も見物をなし幕の間に三階の部屋へ禮にゆきし時白猿お初まかへしのまくの時なれば中通の女形に襟おしろいさせめたりしが役前なりとて無禮を一揖なしおしろいつけさせつゝ云ひけるやう昨日も顔におしろいつけさせながら涙をおとし候それはいかんとなれば御素人様ならば悴へ家業をゆづり隠居をもすべき歳なり然るにいやしき役者の家に生れし故歳にも耻ぢず女の眞似するはいかな

る因果ぞとしきりに誤いたし候役者としてこゝに心づきては驚にもつやなく永く舞臺はつとまらぬものなりと歎息して語りけるにはたして二三年の後寺島村(あざ名向じま)に隠居せり隠宅は人の孫店にて六盤に勝手のみにて天井張らす茅屋根の裏みゆ庭よりの上り口に雙六盤のやつれたるをすて踏段とす三尺の佛壇ありて圓窓を開き内に小石を敷き瀬戸も佛具有り正面に佛像はなく白紙一枚を張り或日亡兄眞顔おのれもしたがひ白猿を尋ねし時佛像なく白紙あるを兩人いふかり問ひけるに白猿うちゑみつ、御兩人さまよく見給へあの紙は西の内なりと答へければ兩人はさらなりおのれが若かりし心にもおもしろく覺へて今にわすれず此時天井に竹を渡しひらきたる屏風のせてありしを眞顔尋ねければ白猿曰風ふけば硯にちりおちても書くにあしきゆゑなり此屏風につけて狂歌あり先生いかゝあらんやと

天井をはれば鼠はさわぐなり
水もたまらず月も宿らず

是等の風骨元政の筋脈ありて俳優にはをしき人物な

り隠居の雜費一月に金貳歩づくと定めたるをむすめよりおくる(芝居茶屋いづみやが妻は白猿が實子)をりくは魚類をおくるゆゑ心足らずとおもふ事なし老いたる役者ども、私の様に世をすつれば隠居なるべきにをぐる心をすてざるゆゑいつまでも顔をぬり候と同じ時の咄しにいへり此白猿の名をつぎながら今の白猿罪を驕奢に得て棄市の罪に遇ひ孝心なる三升顔も見られず父子山川を隔つるはいかにぞや隠居白猿泉下に告げうたせて今の白猿をにらまざらめや事皆せいたくより出づおそるべし慎むべし

按ずるにせいたくと云ふ詞はおのれが若かりし比には聞かず今より十四五年以來市中より云はやしたる詞なりたとへば銀器の物をくすべそれとみえざらしむる是せいたくなりされど人に對しては是はせいたくなりとはほめず是は御好事といふすればせいたくは誹る詞の氣味あり好事の文字は五雜俎にも多く見えたれ共せいたくの文字な物にも見えざるはさらなりまたおもひえず卓識の人に問はん


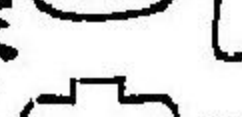
(五代目白猿始松本幸四郎六代目三升始徳藏早世

七代目白猿始新之介八代目當時)

(隠居せし時白猿上つがたならば紅裏衣裳)
(和金案白猿は始名幸藏是則五代目三升也)
(せいを云といふ事西鶴が著書に多く見ゆ是は盛の字と思はる又近頃人の自慢を云ふをたくをいふと云是は稻荷狐のつきて詫をいふといふ意歟)
(和巾曰せいたくと云俗言最ふるし古きこと洒落本にもあり)

鼻紙袋の始

按ずるに上古の人といへども他行の時は懷中に使用の紙なくんばあるべからず是を古書にはたう紙文字には疊紙ともありしかれば今の鼻紙は昔のたう紙なりさて鼻紙袋といふ物は余の父の物語に聞きは寶永の比よりの物にてはじめは絹にもあれ木綿にもあれ四角にぬひくゝるべき紐をつけ内には途中用の物を入れしを鼻紙袋とて妻などに細工させ今の如く(天明をさしていふ)鼻紙袋屋といふものなかりしといはれき扱烟草入は余の幼年(安永中)の比は今の鱒袋の形にて皆こはせがけなり表は似た山木綿裏は黒縹子鼈甲のこはせがけなるを上なきものと

して人も手に取りて見る程なり價は五匁位なりしに安永の末の比より丸角はやり出だし(今も室町に店あり)銀の櫻鉾に織部形の[↑][↑]かやうなり是今いふかな物の[○][○]又此同家にて織部形といふ烟草入をはじむ。此形今にのこる天明の比かの通人ども銀の櫻鉾に織部形の煙草入を持たざるはなし寛政に至りて淺草田原町に越川屋といふ袋物見世はやり出だし懷中ものに一層の奢侈を増長せり此店御藏前札さしどもよりはやらせはじむ名物の功をうつし織らせたるは此見世に權興す

(和金曰鼻紙袋の始は安永五年なり日記に見えたり其きぬ木綿のものは今のさいふ也)

菓子の変格

天明の修風なるも未だ菓子には移らず饅頭羊羹を最上としたるに鶯餅一名を仕切場と唱へ茶店にも用ひ通人の稱美したるものなるに今は駄菓子や物となりておつかう四文くんねへのいやしき小兒の物となりぬ然るに菓子追々奢侈にうつり寛政の始大久保主水の菓子杜氏のはて喜太郎といひし者日本橋の新道の小家の表は格子作りにて夫婦に丁稚の召仕一人のく

らして自ら上菓子少しばかりづゝ造りて賣りけるに煉羊羹といふ物を製しはじめけるに今のやうにさ折といふものもなければ口に奢る者重箱を持たせて取りにやるにけふは賣れ切れたりして空しく歸るさらばあすとて煉羊羹のために招きたる客をかへす程の稱美としたるに今は諸國にもある中に日光なるは江戸にまさり僅に六十年の變化素の侈りし事菓子に於ても此の如し

天ぶらのはじまり

天明の初年大坂にて家僕二三人も仕ふ商人の次男至情の歌妓をつれて江戸へ逃げ來り余が住みし同街の裏にすみ名を利介とて朝夕出入しけるに或る時亡兄いふやう大坂にてつけあげといふ物江戸にては胡麻揚とて辻うりあれどいまだ魚肉あげ物は見えずうまきものなれば是を夜見世の辻賣にせばやおもふ先生いかん兄曰そはよき思ひつきなりまず試むべしとて俄にてうじさせけるにいかにも美味なればはやく賣るべしとすゝめけるに利介曰是を夜見世にうらんにそのあんどんに魚の胡麻揚とするすはなにとやらん物遠し語聲もあしく先生名をつけてたまはれと云

ひけるに亡兄すこし考へ天麩羅と書きて見せければ利介ふしんの顔にててんぶらとはいかなるいはれにやといふ亡兄うちゑみつゝ足下は天竺浪人なりふらりと江戸へ來りて賣り始める物ゆゑてんぶらなりてんは天竺のてん即ち揚ぐるなりぶらに麩羅の二字を用ひたるは小麦の粉のうす物をかくるといふ義なりと戯れいひければ利介も洒落たる男ゆゑ天竺浪人のぶらつきゆゑてんぶらは面白しとよろこび見世を出だす時あんどんを持ち來りて字をこひける故亡兄余に字を書かしめ給へりこは己れ十二三頃にて今より六十年の昔なり今は天麩羅の名も文字も海内に流傳すれども亡兄京傳翁が名付親にて予が天麩羅の行燈を書きはじめ利介が賣り弘めしとは知る人あるべからずさればおのれ増修したる北越雪譜の二編越後の小千谷にて鮭のてんぶらを食したる條下にもいへりおもふに物の始源おほかたはかやうなる事にぞあらんかし

(月空云 天ぶらは天明中始りしにあらず安永十年正月豊竹東治が芝居昔唄今物語といへる上るりの内に天麩羅の事見えたり)

琴曲の變格

近古の琴曲は八つ橋檢校一變して明和に生田檢校出で、二變し世上の琴聲生田流にあらざるはなし予が姉ふたりも生田の門人なりき扱天明に山田檢校出でて寛政享和を盛りに歴て妙音なりし上に風雅もありて文墨の名家にも交り自作の琴曲或ひは名家の作もありて文句みやび且艶色もありて調の手雅俗に渡りておもしろければ生田の森は落葉して山田の稻いやさかえて琴曲の風三變して門人多かりし中に今の山登檢校出藍の聞えありて山田も我が跡をつぐべきものと慈愛せられ十三四の比より師にまがひてまばまば瓊御錦室へも館入せりとぞ是寛政の比なり按ずるに寛政の末尾上松助(今の菊五郎の父)九尾の狐の狂言に初めて中乗りといふ事をして世のなかを動しけるに松助かつて山田にまがしかりし故(松助は三味線の上手なり)是によりて山田檢校人氣をはかりて今も弾く那須野といふ新曲を作り臨機の才其餘を知べし今琴の音する所山田流にあらざるなきは山田山登二檢校の名譽といふべし(山登今年六十四歳なるよし門人いへり)

料理茶屋

百五六十以前は江戸は飯を賣る店はなかりしを天和の比始めて淺草並木に奈良茶飯の店ありしを諸人珍らしとて淺草の奈良茶飯はんとてわざゝ行きし由近古のさうしに見えたりまかるに都下繁昌につれて追々食店多くなりし中に明和の比深川洲崎に升屋祝阿彌と云ひし料理茶屋亭主は剃髮にて阿彌といふ名をつけしは京都丸山の倣ひたるなるべし此者夫婦人の機をみる才ありてまかも好事なりしゆゑ其住居二間の床高麗縁長押作り側付を廣敷とし二の間三の間に座しきをかこひ中の小亭又は數寄屋鞠場まであり庭中は推してまるべし雲州の御隠居南海殿おなじく御當主の御次男雪川殿まばゝ爰に遊び給へり此兩殿は其比の大名の通人なり雪川殿のかくし紋此の如く川といふ字の羽織名あるたいこ持は著ざるはなし升屋祝阿彌件のごとき大家ゆる諸家の留守居者の振舞といふ事みな升屋を定席とせり其繁昌今比すべきなきは廣座敷に望陀覽の三字を鐫物になし地は呂色縁は繪蒔四角の象眼のかな物長さ六尺ばかり裏書漢文にて南海君の祝阿彌へ賜ふゆるよし二百

字ばかり記しあり嗚呼盛唐の宮闕も亡ぶる時あり此額近ごろ質の流れに買ひしとて或人の家にて見しが後に開けば今の白猿に與へけるとぞいひし天明に磯せりの通人が遊ぶ料理茶屋葛西太郎(隅田川より秋葉へ往く堤の下り口今は平岩)大黒屋孫四郎(同所秋葉)甲子屋(真崎)二軒茶屋(深川八幡境内)百川(室町横町)

(升屋の額和金に見せられたるに椽は墨塗にて桐に鳳凰の蒔繪也望陀覽は上總の望陀郡を一覽するの意歟)

かくし賣女

天明中盛んなりしは娼妓の賣色○根津二朱○谷中いろは茶屋二朱○音羽二朱○赤坂二朱○氷川二朱○市ヶ谷八幡社内○麴町天神かけま○大久保まきくく谷切みせ○下谷柳の稻荷切みせ○三島門前二朱切二百○淺草朝鮮長家切みせ○同所大根畑切みせ○同所堂前切みせ○赤羽根二朱○芝神明社内二朱にかけま○高輪二朱○中町切みせ○花ぶさ町かけま○三田三角二朱○淺草馬道二朱○蕪島(靈岸嶋埋立地)二朱○八町ぼり代地(かけま出合茶屋)○蕪島(後年るぞ會所)切二百泊り二朱○上野下佛棚○同所三枚橋東側○けころ泊り二朱此けこ

ろといふ名義は此比淺草兩國橋町石町邊にてころび藝者と唱へ百疋づゝにてころびねの枕席したるものありしゆゑ此名ありけころの名は蹴轉ばしの義なり此けころ切二百泊りは客より酒食をまかなひ夜四つより二朱なり一軒に二三人づゝ晝夜見世を張り衣服は縮緬を禁じ前だれにて必半疊の上に座すなり(按ずるに水茶や茶汲女の姿なりつらん)此賣色大方佛店より軒を並べて四五軒許りありつらん是おのれが目眩をいふけころの姿繪にも團扇にも賣り出だしたるを余一柄を藏す今は珍奇なりさて賣色○蕪下○麻布市兵衛町切みせ○鮫ヶ橋切みせ○兩國回向院前銀猫二朱○同所辨天金猫一分○同所おたび○同所松井町二朱○入江町四六○深川仲町切二百○大橋二朱○橋下一切二朱○裏やぐら同○すそつき同○三十三間堂四六○直助長屋同○入船町同○網打場同○古石場一切二朱○新石場同○新地同○大橋(びく切二百下)以上三十三ヶ所此外船まん頭とて深川吉永町に軒をつらねたるもの夜に入れば船に一人づゝのりて所々川岸あるひは高瀬船に色をうる(百下なるは五十)提重(切賣女と號して色を賣地獄夜鷹)

右追々絶えて今依然たるものは北廓はさらなり品川新宿并夜鷹のみ

(蕪島は横堀を埋たるなれどありくに地ぶるぶる振ひ動く故に號たる也)

(和巾曰 源六店佛店挑灯店あり本郷丸山愛敬いなり)

疫病

安政二年夏疫病流行死亡多かりしゆゑ官より寺院へ御たづねありしに疫死十九萬人蓋し中人以上は病者稀にして下賤に多かりしと同三年の冬嚴寒にて川々水厚く通船なりがたく諸品高價同四年凶作同五年麻疹流行三十以下の人貴賤となく病まざるはなし同九年夏洪水米價貴躍す同九年五百羅漢寺螺堂建つ安永終はる

市中灰降る

天明元年田沼侯御老職御勝手同三年關東飢饉下に其略を記す

同年七月六日夕七つ半比西北の方鳴動諸人肝を冷す翌七日猶甚しく江戸中に灰ふる是淺間山の焼けたるなり此時おのれ十五歳なり六日は時ならぬ風吹き北

烈しかりしゆゑ屋根などに灰のつもりしを人々灰ともおもはず風塵とのみ見過しけるに六日の夜中積りし灰を七日の朝人々見て愕然せざるはなしおのれも硯箱の塗ふたを物干にしばし出だし置きたるを取りいれ指頭にて字を書きて試みしに霜の厚く降りたるが如し家内うちよりて是を見ていかなる天變にやといろくくに評しけるに家翁いひけるやう寶永四年不二山焼けたる時江戸に灰のふりしことあり昨日鳴動したるは西北の方なり此方に當りて江戸近き高山は淺間なり常にも焼くる山なればおそろくは淺間の大焼ならんといはれけるに人はしかりともおもはず此日は一日往來もまれなり八日は快晴無風灰も降らず諸人安堵しけるにや往來常の如し九日の夕方亡兄の友なりし伊勢町の米問屋丁子屋兵衛門が長男斐太郎とて千蔭翁の書も歌も門人なるが來り上州よりの書狀なりとて見せけるに淺間の焼けはじめて灼然たり亡兄家翁が推量の違はざるを感服せられき家翁は享保七年の生れなれば近き寶永の焼を親たちの話にも聞かれしならん

此一條を書きつゝふと心にうかむやう犬馬の老は

論するにたざれど卓識はさなり少しく事物の義理を辨へたる老人は事の實地を踏みて感服したる事多ければ一言の下にも味ひある事多しされば老人の詞は馬耳すべからず然るに若人は老人を流し行おくれとおとしむれど其流行といふは三十歳の人ならば物心を覺えて僅十五年の世を歴て六十年七十年の世を歴たる人をおしとむるは權露松霜をさらざるが如し子に霜踏すといふも松霜のよしなるべしおのれ犬馬の老にしてかくいふはおのが田へ引く水くきのやうなれど若人の爲に記す是も流し行のおくれたりとやいはん

(此頃家々の戸障子自然とひらく也)

(淺間山萬座山に有盤石悉く輕石となれり)

行人坂の大火

明曆三年丁酉正月十八日出火同十九日の夜火しづまりたる次第并に主なき焼死十萬八千人を本所に埋め常念佛の庵室を官より建て給ひし事どもは武藏鎧と云ふ物に詳なり庵室は今の回向院なり此比未だ兩國橋なし此火事の後かけぬ右大火後廿七年たちて天和元二度打ち續きて大火ありしことは天和笑委集(寫

本十卷)中に一條ありて詳なり(八百やお七天和二年春三月大罪の事あり)さて右大火の後百十六年を歴て明和九年は明和九の歳なりとて雜説さまざまありしに果して二月廿九日西南の烈風砂礫を飛ばしけるに午の上刻目黒行人坂大圓寺所化長五郎坊主と異名せられし惡漢(十八歳とぞ)師匠にいさゝかうらむ事ありて物おく所に火を放し二日二晩にて火消えたる事(目黒より吉原まで焼け千住にて止まる)今も巷説に傳ふ(焼死四百餘人焼亡の地里に量り巾一里長六里)

白刃仇を斬る

天明四年の春米價貴躍同年三月廿四日若年寄衆退出の時新御番佐野善右衛門田沼山城守殿を斬る翌日死す主殿頭長男大目付松平對馬守殿佐野を組み留む御目付柳生主膳正殿佐野が血刀を奪ふ同四月三日山河下總守殿檢使として上り座敷庭上にて切腹家斷絶父主殿頭は三日過ぎて常の如く勤仕主頭殿は事なく職に座す佐野殿は淺草本願寺内徳本寺に葬る香花を手に向くる人貴賤老若群をなせり此年おのれ十六歳柔術の師本間丈右衛門(照降町新道住)に隨ひ徳本寺にい

たりしに先門前に蕙を敷き花線香を賣る所三ヶ所門に入れば四斗樽に水をたくはへて手洗ふまうけとして錢を乞ふ墓には花を立てしさま林の如く地上線香煙り人を襲ふ群集開帳場の如くなりきかく有りつるゆゑに寺社奉行の令として參詣を禁じしゆゑ門を閉ぢけるに夜中竊にくよりより參詣せしとぞかく群をなせし由は佐野氏白刃を揮ひし翌日より高直なりし米價俄に下落せしゆゑ佐野を世直し大明神と市中にて唱へしゆゑなり是地妖ともいはいふべし

乞食鐘馗に扮出す

此比非人一人は七つ梅の酒樽の蕙を著鬼の面をかぶり(田沼の紋所七つ梅)一人は劍菱の蕙に鐘馗の面兩手に銀紙張りたる劍を持ち鬼を追ひまはし窓に佐野の眞似をなして街上をかけめぐり門々に錢を乞ふよき案じなりとて門毎に錢をあたふ是余が見たる所なり

朝参り

同五年乙酉六月嵯峨釋迦回向院にて開帳群をなし朝参りの者さまざまの好みをなしたる提灯を高く照し夜をこめて群集なし是をとて觀に行くも有りければ

茶見世辻賣畫にまされり此年例より大暑なりしゆゑなりされば新穀みのりて諸人安かりけり

天鼓の妖

明くれば天明六丙午年元日も午日他皆既(元日四つ時より日蝕闇の如し諸侯は大牟登城なし給ひしが退出なりがたく下馬の供待の士他にあたりて氣絶せし人二三人ありしとぞ)いかなる天災にやならんと諸人安き心はなかりしに初春より雷にもあらざる響天にあり北に聞くかと思へば南にあり四方所を移し晝夜定まらず物しる人は天鼓ならんといへりおもふに明の英宗が天順七年癸未の年天鼓の妖あり時に賢臣李賢凶兆なりと評したる事明史に見ゆ果して同年八月より大樹君御不例八月一日田沼侍從城を削られ滅地一萬石雁之間詰屋敷三日の間に取り拂ひ相良城御取上(城受取脇坂)同時稻葉越中守職を削られ滅地三千石九月八日薨御の普聴あり十月四日御出棺同月十二日何者の浮言にや兩水道に毒ありと流傳して市中騒動云ふべからず愚人は懼れ智者は笑へり此妖言江戸中一時なりき

此時おのれ十八歳なりよく覺えしは我家に家翁の

養ふ猫と雞とに水を吞ませてこゝろみ給ひ猶茶を煎て色香をためし給ひしに常にかはらざりしゆゑしかじかの山縁者はさらなりよしみある者はこゝろみ給へとをしへくれしかど用ひざるもありけり此比は未だ今の如く掘井戸多からざりしゆゑ水道を汲み置きたるをも捨て掘井戸へ至りみれば我より先に汲む人群集してよりつかれざればまた足を遠きにはこびてみればこゝも群集なしむなく空桶をもち歸るも多是是夜中の事なり諸人水に噪ぐ事火に騒ぐが如し清潔なる水色に高野水の浮名を流したる事一日一夜にしていづこよりともなく止みぬ地妖といふべし

火事

天明六丙午の春件の如く天鼓の妖玉川水妖あり是より先正月月中旬こゝかしこにて今年は火災ありと誰いふとなく言ひふらし(此時何となく柱壁など夏の日にあたりたる如く熱かりしを人々あやしく思ひしなり)扱毎日風烈しく物の乾く事不思議なり同月廿二日湯島臺より出火西北の風烈しく狂言兩座焼亡北は馬喰町東は濱町山伏井戸の邊にて消火す明くる廿三日西久保紙屋町より出火北風烈しく同町海岸にてき

同月廿七日午の刻本所四つ目より出火釜屋ぼりにて消ゆ其夜御搗屋より出火北風にて火の粉金城にふる依りて俄に公命ありて八手の大名并町火消にて類火なし同年四月九日日光山風雪烈き日日光奉行天野山城守臺所より出火四十一坊民家十三町焼亡江戸は四月半迄雨なく凡そ三十七八日晝夜風烈しく止む時なく諸人手を束ねて火災のそなへをなすのみ(此比町火消のまとひ銀箔にて大小二本を用ひしに寛政に禁せられ今の如くなる)同年五月半比より七月迄霖雨晴日なく道路田の如し諸人洪水をおそれしに果して七月の末稀有の洪水にて猿ヶ股の堤きれて八十餘村を流し溺死數を知らず深川の大家は軒を浸し小家は棟を越す御藏前通り船にて通行大橋東橋も追々洪水にて崩れ兩岸通路たえしゆゑ親族水災を案じ人心安からず官船數艘溺を助けあるひは屋の棟に露命餓餓を救ひ兩國廣場馬喰町馬場二箇所に小屋を作り朝夕の食を賜ふ是より先市中の童謡に親ももぐれば子ももぐるといふ事はやりしに果して此洪水あり此洪水五十餘日にして常の水路になりぬ(此春玄米一兩に八斗七月洪水に六斗十二月もち米兩に貳斗五

升(丙は火也午も火也火に火を重ねる故大火有との風説は附會也さらば洪水ありしをいかい)

うちこわし

翌年天明七丁未年五月玄米兩に二斗五升麥八斗大豆六斗同月十日比白米百文に付三合五勺豆七合同廿八日比百文に三合御藏米三十七石に金二百五兩一兩に一斗七升錢兩に五貫二百枚にいたりて米穀動かす米屋ども江戸中に閉す同月廿日の朝雜人共赤坂御門外なる米屋を打ち毀す(此時數十人の打こはしの中に美少年一人大入道一人まじりて少年は飛鳥の如く飛び回り入道は金剛力士の如くにて目も綾なしと見たる人語りきこはあらびにつれて暴神の顯形したるなるべし)同日同刻京橋南傳馬町三丁目萬屋佐兵衛萬佐とてきこえたる米穀問屋を打ち毀す此の時おのれ十九歳毀したる跡を見たるに破りたる米俵家の前に散亂し米こゝかしこに山をなす其中にひき破りたる色々の染小袖帳面の類やぶりたる金屏風こはしたる障子唐紙大家なりしに内は見えずくやうに残りなく打ちこはしけり後に聞けばはじめ十四五人なりしに追々加勢にて百人計りなりしとぞ同夜中小網町伊勢

町小船町神田内外藏前淺草邊千住本郷市ヶ谷四ッ谷同夜より翌日廿二日に至りて曉まで諸方の蜂起米屋のみならず富商人は手をくだせり然れども官令寂として聲なし廿二日午の刻町奉行出馬并御先手方十人捕へ方の命あり又竹槍御免死骸訴に及ばざるの令市中に下りしゆゑ市人勢を得て木戸くを切り相印し相言葉を作り互に加勢の約をなし柏子木をしらせとす茲に至りて蜂起も又寂として聲なし江都開發以來未だ曾て有らざる變事地妖といふべしと諸人いひけり後に聞けば大店の閉したるは大八車四五輛に大勢取り付き撞き破り打ち毀したるのち酒食をむさぼりしが同類盜を禁じたるはいはゆる江戸子なるべしされど蜂起散じたる跡には盜もありしとぞ(道路に散たる物を取りて逃げる者あれば打ちこはし人取り返し打擲して取りたる者は引き破り捨て置く事町火消の掟によく似たり)

市中の人数

同月廿日の蜂起より廿一日廿二日廿三日廿四日まで江戸中諸商人戸をとぎして業をせず依之米はさらなり諸人日用の品に困る廿五月初めて戸を開く町奉行